発達心理学研究
2006，第17巻，第1号，1-13

原　著

夫婦間葛藤への対処における譲歩の機能：新婚女性によって語られた意味づけ過程に焦点を当てて

東海林　麗香
（東京都立大学大学院人文科学研究科）

対人葛藤において一方的に譲歩することは，現実的な問題解決に結びつかないその場しのぎの対処でしかないのだろうか。本研究では，対処する個人の意味づけに注目し，特に長期的継続を望む関係においては望ましくないとされてきた譲歩的な対処の意義と働きについて検討することを目的とした。この点について明らかにするため，特に夫婦関係に焦点を当てた。具体的には21人の新婚女性を対象に，日常生活の中で経験した夫婦間葛藤についてのインタビュー調査を行った。分析1では夫婦間葛藤のきっかけの分類を行った。分析2では，報告された葛藤への対処の仕方を，主張的対処，協調的対処，譲歩的対処という3つのカテゴリーに分類した。また，対処の選択理由や自身の行った対処への評価という意味づけの側面に注目し，譲歩的な対処の日常場面における意義を探った。その結果，譲歩的対処にはその場の情緒状態が険悪になるのを避けるという情緒調整の役割があることが確認された。加えて譲歩的対処は，日常生活の制限の中で用いやすい対処であると積極的に意味づけられており，夫婦関係を維持する上で有効であると捉えられている場合があることが明らかになった。また，譲歩的な対処をポジティブなものとして用いる場合には，折り合いをつけるという意味づけの過程があり，この過程の中で，葛藤内容や自身，相手についての熟考や再解釈が行われることから，譲歩的な対処の意義が明らかになった。

【キー・ワード】 新婚女性，夫婦間葛藤，譲歩，意味づけ，結婚

問　題

私たちは他者とのコミュニケーションにおいて，意見の不一致という状況に出会ったとき，譲歩的な対処をすることがある。それは相手との関係の悪化・破綻を避けるという目的で行われ，日常的によく見られるものである。しかし，このような対処はあまり望ましくないという見方が取られてきた。譲歩的な対処は，本当に望ましくない対処なのだろうか。本研究では新婚期の女性へのインタビューから，譲歩的な対処の日常生活における意義について，自身の行った対処についての意味づけの過程に注目し，再検討する。

夫婦間葛藤に関しては多くは欧米で研究がなされているが，譲歩的な対処は親密な他者との関係維持によくない影響を与えるとされてきた。それは，現時点では対立を避けることで関係の悪化を防ぐことができるが，実質的な問題の解決にはつながらないためである。Gottman & Krokoff（1989）では，夫の意見に合わせ肯定的な言語表現の多い妻は，そのときの夫婦関係においては満足しているように見えても，3年後には不満を増やしていることを見出した。逆に，葛藤場面で意見が対立することの多い夫婦はそうでない夫婦に比べ，現在の夫婦関係は不満であると捉えていても，3年後には，お互いの関係をより満足に思っているということも見出された。このような結果から，葛藤を回避し現在の夫婦間の平和を保つような行動は，長期的に見れば葛藤が残ったままである可能性が高いという知見が導かれた。Vaillant & Vaillant（1993）においても，未解決の葛藤は夫婦間のネガティブなインタラクションを強化すると述べられている。

これらの研究では，関係の維持における問題解決の重要性が強調されており，対話をし問題に直面することの必要性が指摘されている。しかし近年では，譲歩的な対処の有用性が指摘されている。先行研究によって指摘された譲歩的な対処の有用性についての注目すべき主張に，以下の2点がある。

1つ目は，文化によっては譲歩的な対処は有効であるという主張である。個人主義的文化では主張的な葛藤解決がなされる傾向にあり，集合主義的文化では回避的な葛藤解決がなされる傾向がある（Trubisky, Ting-Toomey, & Lin, 1991）。そのような葛藤解決の仕方の違いは，文化的価値の差異という点から説明されている。Ting-Toomey（1994）は文化によって葛藤概念には違いがあり，葛藤が「争い」と考えられている東洋文化においては，葛藤をおさめるための譲歩的な対処は関係維持に有効であると考えられていると述べている。また Ohbuchi, Fukushima, & Tedeschi（1999）も，文化的価値と葛藤対処行動の関係について述べている。実際，日本人を対象

とした研究において，コミュニケーションを回避するといった欧米には見られない特徴的なストラテジーが存在することが明らかにされている（河内，2001）。また，飛田・大渕（1991）は，「我慢して対立を避ける」「だまりこむ」という方略が夫婦共に高い割合で使用されており，一般的な方略であると述べている。

2つ目は，情緒的な問題解決や問題の深刻化を避けるといった対処は，長期的に見ても関係維持に役立つという主張である。例えばGottman & Silver（1999）は，多くの夫婦が初期に持った葛藤を解決していないままで良好な関係を営んでいるということから，必ずしも問題は解決される必要はないし，問題が残ることが関係の機能不全につながるわけではないとしている。つまり良好な夫婦関係を保つために重要なのは，問題解決の程度ではなく情緒的なインタラクションの質なのである（Gottman, Coan, Carrere, & Swanson, 1998；Gottman & Levenson, 1999a；Gottman & Levenson, 1999b）。

このように譲歩的な対処の重要性についての研究は進んできているが，十分に考慮されていない点がいくつかある。1つ目は，葛藤に対処する個人が，自身が行った対処をどのように意味づけるかという問題である。これまで葛藤対処についての研究では，どのような対処によって夫婦関係が調整されるのかという問題を中心に扱ってきた。しかし近年，意味づけや解釈，意図などの，対処する個人の内的過程に関心が向けられている（Klein & Johnson, 2000）。対処の種類やその結果の検討のみでなく，どのようにして特定の対処を選択し，それをどのように評価するかといった内的過程まで含めた検討が必要である。これにより，どのような対処が関係維持に役立つのかがより明確になるのである。社会心理学の分野では譲歩的対処を行う際の内的過程，特に動機に焦点を当てた上でその働きを検討している。例えばVan Lange, Rubult, Drigotas, Arriaga, Witcher, & Cox（1997）やVan Lange, Agnew, Harinck, & Steemers（1997）においては，一方的に譲歩するような向関係的な行動による関係維持のメカニズムについて考察が進められ，相手の利益を優先する行動をとるようになる動機の変換過程についての検討が行われている。また，親密な他者との関係についての研究ではないが，吉武（1991）では，同調行動の中でも自らが進んで行うものを愛他的同調とし，その有効性について論じられている。これらの研究は対処する個人が，その対処をどのようなものとして用いているかという点を考慮に入れながらも，一般的な状況における検討にとどまっている。私たちが行う意味づけは文脈に強く関わっており，日常生活における具体的な葛藤イベントにおいてどのように対処したのか，そしてそれをどのように意味づけているのかについてまで検討してはじめて，夫婦関係における譲歩的対処の意義について述べることができるのである。そこで本研究では，具体的な夫婦間葛藤における譲歩的対処の意味づけ過程に焦点を当てることとした。

2つ目に，譲歩的対処がその後の関係やコミュニケーションにどう影響するかについての検討が十分でないことを指摘する。葛藤イベントは単独で起こるわけではない。関係の積み重ねの中で起こり，後の関係に影響を与える。このような考えから，夫婦研究の分野では縦断研究の重要が提唱され（Brudbury, 1998），夫婦関係の維持や崩壊に関わる要因の特定を目的とした予測的な研究が多く行われている。しかしそのプロセスについての考察は十分でない。そこで本研究では，この点についても検討することとした。

本研究では夫婦間葛藤への対処について検討するが，特に新婚期に焦点を当てる。2人の個人が結婚すると，ものの見方，社会的世界，友人や家族とのインタラクション，社会的ネットワークなどの根本的な変化を経験することになる（岡堂，1991）。特に新婚期は夫婦間葛藤が顕在化しやすい時期であると指摘されている（Leonard & Roberts, 1998）。そこから，この時期を本研究での研究対象とした。

このような問題から本研究では，新婚期の女性へのインタビューにおいて語られた，自身の行った対処についての意味づけ過程に注目し，譲歩的な対処の日常生活における意義及び，夫婦関係に与える影響について検討することを目的とする。

本研究では上記の目的に関して，以下の2点から検討する。

分析1では，葛藤対処の文脈である夫婦間葛藤イベントのきっかけについてまとめ，本研究の議論の範囲を明確化する。分析2では，夫婦間葛藤への対処を「主張を通すか否か」という観点から分類し，各対処の特徴を示す。その後対処への意味づけに注目し，日常生活における譲歩的対処の意義について，他の対処との比較から検討する。また，特に譲歩的な対処が夫婦関係に与える影響について検討する。

方　法

調査対象　①入籍1年以内であること，②入籍を機に共同生活を開始すること，③調査時に子どもを持たないこと，の3点を条件に募集を行い，新婚女性21名から調査協力の承諾を得た。条件①については，新婚期初期に葛藤が起きやすいというのは私たちが日常感じることであり，調査者に語ることへのためらいも少ないだろうということから設定した。条件②については，共同生活を始めることによってこれまで見えていなかった面に気づき，葛藤が顕在化しやすいのではないかということから設定した。条件③については，入籍1年以内の夫婦で

子どもを持つ場合は入籍以前の妊娠が予想され，入籍以前に妊娠していないカップルとは結婚の持つ意味が異なることも考えられるためである。

調査協力者の主な属性は以下のとおりである。平均年齢は妻28.14歳（25歳から37歳，$SD=3.37$），夫29.62歳（23歳から43歳，$SD=4.73$）であった。結婚前の交際期間は平均40ヶ月（5ヶ月から10年，$SD=36.83$）であった。妻の最終学歴は，高校3人，専門学校2人，短期大学2人，大学11人，大学院3人，夫の最終学歴は高校1人，専門学校2人，大学12人，大学院6人であった。妻の職業は，無職1人，フルタイム就業13人，パートタイム就業6人，学生1人，夫の職業は会社員15人，公務員6人であった。

募集について　募集は知人を通じて，また新聞の地方紙，夫婦関係や親子関係について扱っているインターネットのホームページに告知を出すことにより行った。募集の段階で調査の概要を説明し，協力の意志を示した者24名に対して改めて電子メール，電話，封書のいずれかで連絡し，調査への協力を依頼した。その際に，①調査の目的，②調査の内容，③プライバシー，④データの扱い方，⑤フィードバックの内容と方法，について説明した。協力の意志を示した24人のうち，同意を得られた21名がインタビュー調査に参加した。

手続き　著者が個別に半構造化面接を行った。調査期間は2001年6月後半から10月後半であり，場所は調査協力者の希望に合わせて，指定された場所に調査者が赴くか，大学の研究室で行った。面接開始前に調査協力者に対して再度調査の目的について説明し，承諾を得た。面接は十分にラポールを取った上で開始し，終始リラックスした雰囲気で行われた。面接の内容は調査協力者承諾の上，カセットテープレコーダーに録音した。面接時間は調査協力者一人あたり45分から120分であった。面接終了後逐語録を作り，分析のための資料とした。

面接の質問項目　面接項目はMackey & O'Brien（1995）で用いられた面接項目を参考に，本研究のために作成されたものである。主な内容は，結婚までの経緯，両親の夫婦生活について，夫婦に関する理想や信条，夫婦間葛藤について，であった。本研究において，夫婦間葛藤は「夫婦間における意見や主張の不一致による険悪な状態」と定義し[1]，Table 1のとおり下位質問を設けた。以下ではこの夫婦間葛藤についての質問への回答を分析の対象とする。

分析の枠組みづくり　本研究では，上記の質問内容のうち，夫婦間葛藤についての質問への回答を分析対象とした。そのため，夫婦間葛藤はないと答えた調査協力者2名は分析の対象としなかった[2]。1つの夫婦間葛藤イベントについての語りを1エピソードとし，分析の単位とした。その結果，19人の調査協力者から57個のエピソードが得られたが，具体的な夫婦間葛藤イベントの内容について触れられていない3個のエピソードを除外し，最終的に54個のエピソードを分析の対象とした。

Table 1　*面接における夫婦間葛藤に関する質問項目*

結婚してから，ご主人とものの見方や考え方，感じ方が食い違ってけんかになったことはありましたか。ありましたら具体的にお話しください。けんかといっても言い争うようなものだけでなく，お互いに嫌な気分になるようなことも含みます。

下位質問
1　きっかけはどのようなことでしたか。
2　そのときあなたはどのような対処をしましたか。
3　どうしてそのような対処をしたのですか。
4　その結果，事態はどうなりましたか。
5　自身の対処から導かれた結果について，どのように評価していますか。
6　もう一度同様の事柄が起こった場合，どのように対応しますか。

結果と考察

分析1　夫婦間葛藤イベントのきっかけの分類

葛藤対処の文脈である夫婦間葛藤イベントの原因についてまとめるため，Table 1の下位質問「きっかけはどのようなことでしたか」への回答を，KJ法に準じた方法で分類した。

その結果，「家庭内」「家庭外」「信条」という3つのカテゴリーに分類され，さらに「家庭内」は「家族」「経済」「家事」「習慣」という4つの下位カテゴリーに分類された。個人ごとの平均エピソード数は2.84個（レンジ：1から6個）であり，$SD=1.62$であった。各カテゴリーの頻度，定義，具体例はTable 2のとおりである。

結果から，本研究の調査協力者における夫婦間葛藤イベントは約半数が「家庭内」に分類され，その中でも生活習慣に関することが最も多いことが明らかになった。しかも，結果がその後の生活を左右するような重大な問題が少ないという特徴があった。これは，異なる背景を持つ個人が生活を共にし始める新婚期ならではと考えられる。このような結果から，本研究では多くの人々が新婚期に日常的に出会うと思われる，結婚を機に見えてきたものの考え方や感じ方の食い違いを夫婦間葛藤として扱い，以下ではそのような問題への対処について検討することとする。

1）本研究では，夫婦の間で生じた険悪な状況にどのように対処するかに特に焦点を当てるため，夫婦の間で表面化したもののみを扱うこととした。

2）葛藤はないと答えた協力者（ID04，ID21）については，「表面化していないが，自分だけで嫌だと思っていることはありますか」との質問を追加したが，両者共，個人内での葛藤もないと回答した。

Table 2　*分析1　葛藤イベントのきっかけの分類*

カテゴリ	カテゴリの定義	下位カテゴリ	下位カテゴリの定義	具体例
家庭内 (30)	家庭を築いたからこそ生じた葛藤	家族 (3)	互いの家族に関する葛藤	正月に夫婦だけで過ごすか，それとも自分の家族と過ごすか
		経済 (3)	家庭経済に関する葛藤	収入の中からいくら貯金するか
		家事 (7)	家事の仕方や分担に関する葛藤	夫婦の家事分担をどうするか
		習慣 (17)	生活習慣に関する葛藤	いすに座って食事をするか，それとも床に座って食事をするか
家庭外 (16)	結婚前にも起こり得ることに関する葛藤			外出時に，夫は予定通りに進めたいが，自分は寄り道をしてしまう
信　条 (8)	人間関係や人生についての信条に関する葛藤			自分の進路は自分で決めるべきか，それとも他人の意見も考慮に入れるべきか

注．（　）内は頻度。

Table 3　*予備的分析　葛藤対処の分類*

カテゴリ	定義	発話例
主張的対処 (27)	相手の主張を受け入れず，自分の意見や欲求を押し通すような対処の仕方	（夫に買い物について相談されて）*わかんない，自分の好きなの買えばいいんじゃないって言ったら，なんで真剣に考えてくれないんだとか言って，すごい怒っちゃって，それでケンカになりましたね。* （その後一般的な相談についての話になり）*オレはお前が悩んだときに，一緒に悩んでやってるだろうくらい言われて。いや，でもわかんないものはわかんないからって言って。*
協調的対処 (5)	自他双方の立場を尊重し，協力しながら事態の解決に臨む対処の仕方	（夫は壁にフックをつけて部屋を整理したいと主張するが，自分は収納をして部屋を整理したいと主張する中で）*ほんとはここに2個つけたいんだけど，じゃ，1個だけならいいよって。両方が妥協。*
譲歩的対処 (22)	自分の主張を抑え，相手の主張を受け入れる対処の仕方	（夫に相談したにもかかわらず，その指示に従わなかったことでけんかになった）*で，じゃあ，私がそうするようにするよ，って言って終わる。*

注．（　）内は頻度，斜体は実際の発話例。

分析2　夫婦間葛藤イベントへの対処：個人の意味づけに注目した譲歩的対処の意義の検討

予備的分析　夫婦間葛藤イベントへの対処の分類

分析対象とした54個のエピソードを，Table1の下位質問「そのときあなたはどのような対処をしましたか」への回答に注目して3つのカテゴリーに分類した。カテゴリーは，「パートナーとの主張や意見の食い違いという葛藤場面において自身の意見・欲求と他者の意見・欲求のどちらを優先させるか」という観点により，「主張的対処」[3]「協調的対処」「譲歩的対処」の3つを作成した。頻度，定義と調査協力者によって語られた具体的な発話の例はTable3のとおりである。

分析2-1　日常生活における譲歩的対処の意義：他の対処との比較から

ここでは自身の取った対処についての意味づけに焦点を当てることにより，譲歩的対処の日常場面における意義について検討する。本研究での意味づけの定義は「調査協力者が，自身の行った対処をどのようなものとして捉えているか」というものである。意味づけについて検討するに当たり，Table1の対処の選択理由についての質問「どうしてそのような対処をしたのですか」と，自身の取った対処の評価についての質問「自身の対処から導かれた結果について，どのように評価していますか」という2つの下位質問への回答を分析対象とした。これは，上記2つの質問への回答の中に，自身の行った対処への意味づけがよく語られていたからである。

分析の手順　評価についての質問への回答を，自分の行った対処を他の選択肢よりもよいものと捉えているかどうかに注目してポジティブ評価，ネガティブ評価，ニュートラル評価の3種に分類した。選択理由については，KJ法に準じた方法で回答の分類を行った。その結果，6つのカテゴリーが作成された。カテゴリー名と定義はTable4のとおりである。対処ごとの評価，選択理由の内訳はTable5に示した。以下ではTable5に基づき，

3）アサーション理論において「主張的（assertive）」という語は「自分も相手も大切にした自己表現（平木，1993）」という意味で用いられているが，本研究では日常用いるような，自分の意見を言い張ること，自分の意見を引かないといった意味で「主張的」という語を用いる。

Table 4　*分析2-1　自身がとった対処の評価と選択理由についてのカテゴリー*

カテゴリー名	定義
評　価	
ポジティブ評価	他の対処より，自身が行った対処の方がよかった
ニュートラル評価	結果・影響に関係なく，そのような対処をするのは当然のことである
ネガティブ評価	自身が行った対処より，他の対処の方がよかった
選択理由	
目先の問題	即時的な問題解決，あるいは情動調整のため
規範	社会的規範に照らして望ましい対処であるため
性格特性	特定の対処を選択するような性格特性であるため
受容	相手の意見を受け入れることができたため
解決困難	解決が難しい問題であるため
将来展望	長期的な関係の中での解決を意図したため

Table 5　*分析2-1　各対処における評価カテゴリー，選択理由カテゴリーの頻度*

	目先の問題	規範	性格特性	受容	解決困難	将来展望	合計
主張的対処							27
ポジティブ評価	1	2	2	0	0	0	5
ニュートラル評価	3	3	6	0	0	1	13
ネガティブ評価	3	2	3	0	0	1	9
協調的対処							5
ポジティブ評価	2	0	0	3	0	0	5
ニュートラル評価	0	0	0	0	0	0	0
ネガティブ評価	0	0	0	0	0	0	0
譲歩的対処							22
ポジティブ評価	0	0	0	2	5	4	11
ニュートラル評価	0	0	0	3	2	0	5
ネガティブ評価	1	4	0	1	0	0	6
合計	10	11	11	9	7	6	54

各対処が日常生活の中でどのように意味づけられているかについて，典型的エピソードを示しながら議論を進める。本文中に引用した具体的な発話例は斜体表記とした。そのうちかぎかっこ内は調査者の発話である。

1. 協調的対処　協調的対処は全てポジティブに評価されていたが，報告数は54エピソード中5エピソードと少なかった。多くの先行研究で望ましい対処の仕方とされ，本研究の調査協力者によってもポジティブに評価される対処であるのに報告数は少なかった。その理由は，他の対処を選択した調査協力者の語りの中に見られた。協調的対処をとらなかった者の中には，協調的対処の重要性を認識していながら，「とことん話すのは大変だ」「議論をしても実りがない」と互いの主張をすりあわせることの難しさを語った者がいた。Gottman（1998）でも述べられているように，互いの主張をすり合わせ，その中間点を見出していくことは日常生活においては重要でありつつも難しい。本研究の調査協力者は典型的に以下のように語っている。

ID16　<u>協調的対処をせずに譲歩的に対処したエピソード：中間点を見出す難しさ</u>

（正月に実家に帰るか夫婦のみで過ごすかについて意見が食い違ったエピソードにおいて）「ほんとうはこうした方がいいと思ってるんだけどっていうのはありますか？」あるんだけど最近，価値観も，どんなもんなんだろうなっていうか，私は今まで自分の家庭しか深く知らないで生きてきちゃったから，それが普通だと思ってきたけど，実際はほんとにいろんな家庭があって，いろんな常識があって（中略）自分の思うようにいかないのは，相手だから当たり前なのであって，それを自分の思うようにしてもらおうっていうのは，無理な話だと最初から思っちゃう。

ID16は理想としては協調的対処を行いたいと考えているが，違う価値観を持つ他人同士がお互いに分かり合うことはそもそもできるものではなく，一つ一つの葛藤

場面で協調的に問題を解決していくのは難しいことであると語った。また，日常生活における時間や労力の制限の中で意見をすりあわせることの大変さを語った者もいた。

ID15　協調的対処の難しさについてのエピソード：制限の中での難しさ

言い争うと，長くなっちゃうじゃないですか，っていうのもおかしいんですけど，毎日生活してて，その日の夜に言い争ったりなんかしちゃったら，あの，そういうこと考える時点で大したことないんだと思うですけど，寝る時間が遅くなっちゃうとか，明日の仕事に差し支えるとか思っちゃうと，やっぱりもう，そんなら何にも言わない方がいいって思っちゃうんですよね。

このように，意見を交換し，お互いが納得する中間点を見出していくのは難しいと捉えられていた。本研究における調査協力者はほとんどが共働きであり，平日は帰宅後は家事をして休むのみという忙しい生活を送っている。そのような者にとっては，そもそも他人同士が互いの意見を受け容れることはできないという認識と共に，時間をかけて話し合うこと自体が難しい。また，とことん話し合うことで余計に夫婦間葛藤が悪化すると語った者もおり，協調的対処を行うのはたやすいことではない。このことが，関係維持にとって望ましいとされる協調的な対処があまり行われず，以降で述べる主張的対処と譲歩的対処が主要な対処となっている理由であると考えられる。

2. 主張的対処　分類の結果，27個のエピソードがこのカテゴリーに分類された。先行研究では，葛藤場面において自身の考えや欲求を主張することは夫婦間の情緒状態を険悪にする可能性があるものの，最終的には問題解決に結びつくことから，前項で述べた協調的対処と共に望ましい対処の仕方であるとされている。このような知見から，望ましい対処であるというポジティブ評価，および対処の結果や影響とは関係なく，当然とるべき対処であるというニュートラル評価が主であると予想されるが，ネガティブな評価も27エピソード中9エピソード見られた。調査協力者は，自身の主張を通すために感情的な物言いやきつい言い方をしてしまい，結果的にコミュニケーションが険悪になるというエピソードを語った。ここでは主張的対処をネガティブに評価した者のうちID03を取り上げ，典型的なエピソードを示す。ID03は夫が体調を気にして生活のサイクルを崩さないことに違和感を抱き，臨機応変に対応するべきであると感じていた。

普通若いうちはテレビ見たりとか，夜遅くなったりとか，早く寝ちゃったりするんですけど[4]*，そういうことなくて，ちゃんとお風呂に入って寝る，ちゃんと早く寝るとか，そうしないと，体調悪くなっちゃうんですけど。それもあるんだけど，でもそういう普段の日に夜更かしして，次の日に眠くて仕事が出来ないのはバカだみたいなそういう感じ。「ご自身はどうですか？」私はどうでも平気なタイプで，だから，その日の予定に合わせてやるし，前の日もし遅くまで起きてても，眠いなって思いながら仕事もするし，っていう感じなんですけど。*

その中で，以下のような葛藤イベントがあった。

ID03　エピソード10　ネガティブに評価された主張的対処についてのエピソード

仕事で遅くなったんですよ，旦那さんが。そんで，すごいがんばった，自分ではがんばったって思ったんだけど，私が，でもそれって普通じゃないとか言っちゃって，いっつも早く出て，わりと早くに向こう出てきて，9時頃には帰ってきてるんですよ。周りの人ってわりと，朝から出たら夜中まで働いてる人多いじゃないですか，っていう話しをしちゃったら，ふてくされちゃって，っていうことがありましたね。「そういうときって，ご自身はどうですか？」余計なこと言っちゃったなって。

ID03は，夫が生活リズムを気にしすぎることに対して不満を持っていたこともあり，自分の考えを主張したが，険悪な状態になってしまったという。ID03は，*「思ってないこと言うっていうのは，嘘じゃないですか。思ったことを，思ったとおりに言った方が，あとあといいかなと。その場で言い合ってけんかみたいになっても」*と語るように，夫婦間では主張的対処を取るべきであると考えている。しかし，相手が情緒的に不快になったため，自身の対処をネガティブに評価したのである。

夫婦のような親密な関係において，率直に自身の考えを主張することは当たり前であり，親密な関係だからこそできることである。また生活を共にする上で，不満を抱え続けないことも重要であり，主張的対処は夫婦関係を営む上で必要である。しかし，実際にやってみると意外とうまくいかない。自身の意見や考えをきちんと表現し，それにより問題が解決されたとしても，相手が情緒的に不快になる可能性もある。ネガティブに評価している例では，自身の主張を通すことにはリスクがあると捉えられていた。

3. 譲歩的対処　分類の結果，22個のエピソードがこのカテゴリーに分類された。Table5のとおり，そのうちポジティブに評価されているのは半数の11エピソードであった。自身の主張が通らない，問題が残り続けるということは必ずしも不満を残すわけではなく，譲歩的対処の有効性について論じた先行研究の知見を支持している。先行研究では，主張的対処こそが望ましいとする

4) 本事例では「体調を気にして生活のサイクルを崩さないこと」が妻の不満の原因となっているため「遅く寝る」が正しい表現であると思われるが，インタビュー時には引用例のように語っていた。

それまでの研究に対して，葛藤事態において情緒調整こそが必要であること（e.g., Gottman et al., 1998）や文化的価値観に合致していること（e.g., Trubisky et al., 1991）から，譲歩的対処の有効性について論じていた。本研究において，譲歩的対処がポジティブに評価される場合もあるのはどのような点からなのだろうか。これまでの経験の中で培われた意味づけの側面が表現される「選択理由」についての語りにも焦点を当て，譲歩的対処のポジティブな働きについて検討する。

不満が残っていない場合には，どのような理由が語られていたのだろうか。ポジティブ評価に特徴的な選択理由として，「解決困難」「将来展望」があった。Table 5のとおり，この2つのカテゴリーは譲歩的対処の他の評価や，譲歩以外の対処ではほとんど見られなかった。

選択理由カテゴリー「解決困難」の内容をさらに検討したところ，自分たちが争っても解決の難しい問題に対して解決を求める際に生じる困難として，2つの側面が含まれていた。それは，a. 解決に固執することによる関係への悪影響を考慮した選択理由：「固執することの悪影響」，b. 解決に固執することによる生活への支障を考慮した選択理由：「日常生活の制限」である。以下，これら2つの下位カテゴリーと，先述した「将来展望」を合わせた3つの選択理由について典型的なエピソードを提示しながら，譲歩的対処がどのように意味づけられているかを論じる。

a.「固執することの悪影響」　主張的対処についての語りでは，無理に解決しようということがかえって関係の悪化を招く可能性があるとされていた。ここでも，解決に固執することにより相手との関係に悪影響を及ぼしてしまうという可能性を避けるために譲歩的対処を取ったというエピソードが語られた。

ID19　譲歩的対処についてのエピソード：固執することの悪影響

（夫が忙しくて一緒に過ごす時間を取れないことを不満に感じ，けんかになったエピソードにおいて）どっかに行きたいとかさあ，何かをしたいって，今言ってもしょうがないじゃない，物理的に無理なんだもの，時間がなくて。それ（言い争い）をねえ，2回くらいやったときにこんな無意味なことはやめようって思ったのよ。こんな時間がなくて，終わったらできるじゃないって思ったので，こんなことはしなくていいと。（中略）私と一緒にいて，そういうふうにされてたら，彼きっと疲れちゃうから，疲れちゃうと一緒にいたいなんて思わないと思うので。

ID19は，夫との衝突を繰り返す中で，そもそも現時点で解決できる問題ではないし，その問題に固執することで夫との関係に悪影響があると考えるようになり，譲歩的な対処を取ったと語った。ここでは，譲歩的対処は夫婦間の情緒状態を調整するものと捉えられている。

b.「日常生活の制限」　協調的対処は望ましい対処ながら，実際に行うのは難しいと語られていた。これと関連して，険悪になることや気にしすぎることで生活に支障が出る（例：疲れる，ケンカに時間を取ると寝られないなど）という日常生活の制限を鑑みた選択理由が語られた。

上記2つの選択理由に見られるように，譲歩的な対処をポジティブに評価した場合の語りでは，譲歩的対処が他の対処の欠点を補うものである，と積極的に捉えられていた。

c.「将来展望」　「将来展望」もポジティブな評価を伴う譲歩的な対処に特徴的である。以下具体例をあげ，考察する。

ID09　譲歩的対処についてのエピソード：将来展望

（親子関係のあり方について夫と意見が食い違い言い争いになったが，譲歩したというエピソードの中で）「根本的に違うことって解決していく必要があると思いますか？」うんとねえ，解決を無理にしようとするんじゃなくて，長年一緒に生活していくと，お互いに影響されて，歩み寄ってくんじゃないかなって思う。だから無理に今までの考え方を全部変えようっていうのは難しいと思うから。「じゃあ，2人が合ってなきゃだめっていう感じではない」ではない。だから今違うの分かってて，生活してるの。

ID09は，現時点で譲歩をしても，問題がそこで終わってしまうのではなく，長期的なスパンで解決していけばいいと考えている。解決といっても二者の考えの中間点を目指しているのではなく，長い時間を共に過ごすことで少しずつお互いの考え方が歩み寄るものと捉えていた。

このように譲歩的対処をポジティブに評価した場合には，a.「固執することの悪影響：固執することが関係に悪影響を及ぼす」，b.「日常生活の制限：日常生活には時間的，労力的な制限がある」，c.「将来展望：夫婦関係は長期的なものであり，その中で解決していけばいい」，といった3つの選択理由が特徴的に語られていた。

分析2-2　譲歩的対処における意味づけ：「折り合いをつける」という意味づけ過程

ところで本研究では表面化した葛藤を扱っているので，譲歩的に対処することは葛藤状況にある個人にとって必らずしも望ましい対処とはいえない。ここまでで述べてきたように本研究の協力者の中には，自分にとって決して望ましいとはいえない対処をポジティブに評価しているケースもあれば，やはりネガティブに評価しているケースもあった。このような評価の違いはどこから生じるのだろうか。

譲歩的対処についてのエピソードを多く語り，かつそ

れへの評価にバリエーションのあったID01の語りをTable6に示し，探索的に検討する。ID01は5つの譲歩的対処のエピソードを語っており，そのうち2つがポジティブ評価，3つがネガティブ評価であった。

ネガティブに評価した場合の語りの特徴として，社会的な規範にそって自分の出方を決めたという選択理由があった。具体的なエピソード例としてTable6のエピソード1がある。このエピソードにおいてID01は，家事分担について不満を抱いており，夫に不満を表明しながらも譲歩的対処を取り，結局は夫の分担を手伝ってしまうと語った。ID01は，譲歩的対処を取ったのは「*女だからしょうがない*」というジェンダー観によるものだと述べた。ID01は，女性は男性に従うべきだという伝統的なジェンダー観に反対しつつも，社会的にはそのようなジェンダー観が規範として働いていると感じており，自身もそれに従ってしまうことで，ジレンマを感じていると語った。

ID01は譲歩的対処をネガティブに評価する反面，ポジティブに評価する場合もあった。評価の違いについて，ID01自身がその原因を端的に語ったエピソードがある。Table6のエピソード2の「*彼のモチベーションのために，そういうことは必要なんだって納得させてるんです*」という語りに見られるように，自分が葛藤イベントの帰結をポジティブに評価できるか否かの分かれ目は，自分が行った対処を納得いくように意味づけることができるかどうかであると述べられていた。

これは我々が日常生活で「折り合いをつける」と呼ぶような個人内の調整の過程であるといえる。大辞林第二版では「折り合い」とは「人と人との関係」や「互いに譲り合って一致点を見つけること」とされているが，普段我々は個人内の調整に関してこの語を用いることがある。そのため以下では，思い通りにならない事態を自分なりに納得のいくように意味づけていく過程を「折り合いをつける」とし，議論を進めることとする。

ID01の語りに見られるように，夫婦間葛藤に際して，自身がどうしてそのような対処をしたのかについて自分なりに納得のいく意味づけができること，つまり折り合いをつけることが，葛藤イベントの帰結についての評価と関係していた。本研究において，調査協力者たちは自身の望まない結果について，どうしてそのようになってしまったのか，どうしてそのような結果にならなくてはいけなかったのか，自分なりに意味づけていた。このことは，ままならない現実についての言い訳とも考えられる。しかし葛藤に対処する上で重要な役割を果たすものであり（菅野，2001），自身の望むとおりにならない事柄に関して，自分が納得できる意味づけを行うことが，夫婦関係を良好に維持していく上で，有効な対処の一つといえる。

ここまでで，①日常場面においては，自身が行った譲歩的な対処がポジティブに評価されている場合が多くあると考えられること，②ポジティブなものとして評価された譲歩的対処には，納得のいくよう意味づける過程，つまり折り合いをつける過程があるということ，の2点が導かれた。そこから，意味づけ過程を考慮に入れることで，譲歩的対処の意義をより詳細に検討できることが示唆された。この結果を受けて分析2-3では，譲歩的対処を行うことが，夫婦の関係やコミュニケーションにどのような影響を与えるのかについて検討することとする。

分析2-3　変化に注目した譲歩的対処の働きの検討

以下では譲歩的対処のうち，特にポジティブに評価さ

Table 6　*分析2-2　ID01による納得のいく意味づけについての語り*

ID01　エピソード1

家事とかでも，うちは手伝ってくれるし，洗濯と掃除は彼の担当になってるんだけど，食事は私の担当で，疲れてるからやりたくないときもあるけど，やっぱり，かわいそうだからやらなきゃとか，彼がさぼっちゃっても，なんかむっとしながらも，私がなんか手伝ってあげたりとか，なんかそれってずるいなって。「ずるいなって思いながらも納得してます？」それは，私の考え方じゃなくて，私の環境とか社会みんなの考え方だと思うんですけど，女だからしょうがないっていうのがどっかにあると思うんですよ。私はその考えが好きじゃないんだけど，いつの間にかそういう考えになっちゃってるんですよ。それは摩擦を避けるためでもあるし，できるだけ摩擦を避けるために，話し合えば分かる夫を見つけたはずなんだけど，自分自身の回路にはまっちゃってることがあって，うーん，難しいですね。

ID01　エピソード2

「ご自身が譲っちゃうことってあります？」ありますよ。「そういうときはどうですか？」自分の中で理由を見つけるようにしています「そういうふうに譲ったことに対する理由を見つける。どんな理由を見つける？」例えばね，お金のことなんですけど，親戚のことってお互いの両親の考えもあるから，なかなか自分達で決めることってできないじゃないですか。でもお金のことって，自分達のことだから，結局いくら貯金するかって言うことで争いが起きるんですけど，あの，いちおう自分が働いてたから分かるんだけど，なになにが欲しいから頑張るみたいな，そういう部分もあるけど，私が思ってる額よりも彼はもっと使いたいから貯金に回すなって言われたときに，妥協することが良くあって，それは彼のモチベーションのために，そういうことは必要なんだって納得させてるんです。

注．「　」内は調査者の発話。

れたケースに焦点を当てる。

分析の手順　全ての葛藤対処についての語りから，その対処を行ったことによる変化についての自発的な語りを抽出した。変化についての語りが特によく現れるのはTable 1の葛藤イベントについての下位質問の一つである「もう一度同様の事柄が起こった場合，どのように対応しますか」という質問への回答であったため，特にその質問への回答に注目した。語りを抜き出した後，①自身の変化，②相手の変化，③相互作用の変化，の3つに分類した。以下では典型的な語りを示しながら検討する。

分析　語りに共通した内容をまとめた結果，ポジティブに評価された譲歩的な対処では，11エピソードのうち，9エピソードで「自身の変化」が語られた。これはネガティブ評価，ニュートラル評価ではほとんど語られなかった。協調的対処では変化についての語りは見られず，主張的対処では相手の行動や態度の変化が主に語られていた。ポジティブに評価された譲歩的な対処の影響としての自身の変化について内容をまとめると，①認識の変化を生み出す，②熟考を促す，の2つの影響が共通して語られていた。以下ではまず自身の変化について，Table 7に典型的なエピソードを示しながら検討する。

はじめに「認識の変化を生み出す」という影響について検討する。ID 07は日頃から，掃除の仕方について夫と意見の相違があり，自身は時間があるときにまとめて片づけを行うべきであると主張していた。その中で，急な来客があり衝突することとなった。ID 07は，毎日片づけるべきだと主張するのであれば，夫も普段家事を手伝うべきだと思ったが，夫の主張は誤ったものではないし，今回のような急な事態があったときには必要なことであると考え，受け入れた。そしてその後，実際に夫の主張どおりにしてみたところ，過ごしやすいことに気がついた。また，実は夫は主張するだけでなく譲歩してくれているのだということに気づいた。

「熟考を促す」という影響については，Table 7 ID 15のエピソードに典型的な語りを示した。ID 15は，自分の意見を主張するとなると感情的，衝動的になってしまい，自分の言葉の持つ意味や相手の主張の意図，自身がどのような考えを持っているかなどを考えることができないと述べている。しかし譲歩的な対処を行うことで，落ち着いて考えることができるという。この熟考を促すということが，先述の「認識の変化」をもたらす面もあると考えられる。

このような影響は，自身の行った対処について納得のいく意味づけができていない場合，つまり折り合いがついていない場合には語られなかった。折り合いを伴う譲歩的な対処は，①認識の変化を生み出す，②熟考を促す，といった自身の変化を促す働きがあると考えられる。またそれは，夫婦間の相互作用にも変化をもたらすと述べられた。ID 08は，Table 7のエピソードの中で，「*でもそのときに，一応一言こういう話になってごめんねっていうふうな，やっぱ，しんどい話を聞くと向こうもしんどいと思うから，ごめんねって言ってから話すと，向こうもちゃんと答えてくれて*」と語った。ID 08は，それまで不満に思っていた夫の振る舞い（深刻な話をはぐらかすこと）についての認識が変化したことにより，自身の夫に対する振る舞いを変えた。具体的には，深刻な話をする際に，一言断るようになった。そうすることで夫もはぐらかすことが少なくなったという。またID 16は，結婚当初は相手の生活習慣や仕事に関することなど，様々なことに干渉して衝突していたが，大きなケンカをしてから相手に主張するときはワンクッション置いて主張し，ケンカのときは自分から折れるようにしたという。その理由は，相手が日々仕事のストレスが多いことに加えて，自分とのケンカがあると，さらにストレスが溜まると思ったからである。つまり自分の望まない譲歩的な対処を，夫のストレスを悪化させないために必要なものと意味づけたのである。それからは「*暮らしてすぐくらいは引きずったりしてたんですけど，話を戻したりほじくり返したりしてたりはあったんですけど，最近は落ち着いてきたんで，なくなりました*」「*2人で，最近ケンカしないよねとか話すんですけど*」という語りのとおり，葛藤時にお互いに不快な気分になることもなく，自身も譲歩的な対処を行うことによって不快になることがなくなったと述べている。

このように，譲歩的対処をポジティブに意味づけることは，夫婦関係や自己，他者について熟考する機会を与え，また認識の変化を生み出すといった変化をもたらす場合があることが語りから明らかになった。これはまた，個人の変化を促すだけでなく，相互作用を変化させるものであった。つまり 譲歩的対処は，関係やコミュニケーションのあり方をより安定させ，今ここの関係を後の関係につなげる契機となるのである。ここから，譲歩的対処には夫婦関係の発達を促す働きがあると考えられる。譲歩的な対処は問題の解決に実質的に関わらないことから関係の維持には効果的でなく，現在の関係を壊さないように働くのみであるとされてきた。確かに問題解決という視点に立つならば，譲歩的な対処は事態を何も進めていないように見えるかもしれない。しかし，日常生活のインタラクションにおいてはこの小休止こそが発達的変化のきっかけとなるのである。結婚に至るまでの交際期間を経て，その間に様々なコミュニケーションを取ってきた夫婦関係にあっても，2人にとってよいコミュニケーションの形は容易には見つけられない。無理に問題を解決しようとすることは，関係を悪化させる可能性がある。夫婦間の不快な状態をあまり大きくするこ

Table 7　*分析2-3　譲歩的対処の影響についての語り*

認識の変化についてのエピソード　ID07
そうだなあ，大したことじゃないんですけど，まず一つは，家事のこと。（中略）あるとき，向こうの両親が来ることになって，私はほんとうに忙しくて，その何週間か。（中略）向こうは両親が来るんだから片づけないとっていうのがあるんだけど，私がやるからいいやるからいいって言いながら，できない状況。で，結局自分がやらなきゃいけないんやんっていう，向こうのこう，っていうのがあって。それでぶつかったかなあ。いつやるんやって（中略：夫の主張に従って，毎日できるだけ片づけをするようにした）。で実際やってみて，住み心地もやっぱりいいんですよね，例えば，ちょこっと，荷物が，ぽんぽんと置いてあるよりも中身ちゃんと出して，片づけてあった方がいいし。でも（夫は）あんまり几帳面すぎるところがある。ちょっとあるから，私はそこまではやらないという。でもそのあたりも向こうがある程度譲歩してくれてるんだなって思ったんですね。

熟考についてのエピソード　ID15
（食事の好みなど意見の相異があると，自分の方が主張的対処を取り，相手の意見を無視してしまうという語りの中で）言った後っていうのは，大体後悔しちゃうんですよね。だからやっぱり言わない方がいいのかなあと思いますけどね。「言っちゃうのと，言わないのと，っていう対応の違いでお互いが不満に思ったり思わなかったりっていう感じで」そうですね。やっぱり言わないときの方が，お互い後々気分がいいじゃないですか，やっぱり言われないんだから。言われちゃうと，別に，聞かなくてもよかったことまで聞いちゃうんで。言っちゃいけないことまで言っちゃうかもしれないから，言わない方がっていうのはありますね（中略）あとは，自分の中だけで思ってれば，言い始めちゃうと，けっこうどんどん出ちゃうと思うんですけど，言わなければ自分のことも考えられるじゃないですか，自分もいけなかったのかなとかそういうことも考えられるんで，言うのに自分も悪いけどっていうのはなかなか言えなくないですか？やっぱり，人を責めちゃうんで，どうしても，そういう意味でも，考えてるだけだったら，自分の方のことも考えられるんで，言わない方が良いのかなと思います。

譲歩的対処がコミュニケーションの変化を生む可能性についてのエピソード（1）　ID08
うん，でも，深刻に言ったら，向こうにすごいはぐらかされたりとかするっていうか，なんかねえ，それは付き合ってるときからそうなんですけど，ちょっと真面目な話とかしたら，すぐ茶化すっていうか，話を違うようにするから，それが腹が立って，1回，あの，なんか文句を言ったことが，あったんですね。（その後同様の内容でもめたときに）そのときは，私がすごい，私がこんだけ悩んでるのに，あなたは全然返してくれないから，私はイヤやって言ったら，これは俺の性格やから，なおらへんって言われて（譲歩的に対処した）（中略）まあ，それがでも反対に，私の気持ちを和ませてくれたりして，いいときもあるんですね。どうかなあ，だから最近はそういうのに，あんまりイヤやなって思ったことはなくって。でもそのときに，一応一言こういう話になってごめんねっていうふうな，やっぱ，しんどい話を聞くと向こうもしんどいと思うから，ごめんねって言ってから話すと，向こうもちゃんと答えてくれて。

譲歩的対処がコミュニケーションの変化を生む可能性についてのエピソード（2）　ID16
「ご自身が引いた方が2人の関係のためにいいと思う」うん，そうですね「とことん話し合ったりするよりは」でも，1回，話はするんですけど，意見が平行にいく場合は「意見が平行の場合は，自分が」うん（中略）「最初の頃はどうですか？」部屋がへたに，自分の部屋っていうのがあるので，閉じこもっちゃって，お互い，っていうのがありましたけど，今はそういうのを，一緒に生活してやなので，そうですね，だから7月に大きいケンカをしてからは，ほんとに，楽になりました（中略）結婚前は向こうの方が折れてたんですけど，結婚してからは私が折れることの方が多くなりました「ご自身が結婚後に折れるようになったのってどうしてだと思います？意識的にやってます？」それはもう，そうですね。「結婚前はこっちが折れてやろうっていうのはなかった」うん，わがまま放題だったんですけど，「結婚前後ではそれが違う」（中略）向こう（夫）の方が同じ会社なので，上司とかにも結婚したんだからって言われることが多くって，仕事でストレスを貯めることが多いんで，家に帰ってきてもやんややんや言うとあれかなっていうのもあって，引いてる部分はあります。

注．「　」内は調査者の発話，（　）内は筆者による注釈。

となく，折り合いをつけながら，試行錯誤していくことが，今ここの夫婦関係を次につなげていく契機としての機能をもちうることが示された。

全体考察

本研究の目的は，夫婦のような長期的関係を望む相手との間で起こる葛藤において，譲歩的な対処がどのように用いられ，どのように働くかについて検討することであった。この点について明らかにするため，新婚女性を対象としたインタビュー調査を行い，そこで語られた意味づけに注目した。分析1では夫婦間葛藤のきっかけの分類を行った。分析2では，葛藤への対処の分類を行い，譲歩的な対処と他の対処を比較しながら譲歩的な対処の日常場面における意義を探った。その結果，譲歩的対処を行うことは必ずしも不満を残すものではなく，ポジティブに評価されていることが明らかになった。また，譲歩的な対処をポジティブなものとして評価する場合には，折り合いをつけるという意味づけの過程があることが示された。協力者は，①その場の情緒状態が険悪になるのを避ける，②日常生活の制限の中で可能な対処をす

る，③相手との関係を長期的に続くものであると捉える，といった形で自分なりに納得のいくように意味づけていた。この折り合いをつけるという意味づけの過程で葛藤内容や自身，相手についての熟考や再解釈を促がされることから，譲歩的対処の発達的機能があることが明らかになった。以下で本研究の知見について考察を行う。

(1) 日常的な対処という見方

本研究では，日常的によく用いられる譲歩的な対処の有効性を指摘したことで，より我々の生活に密着した知見を提出することができた。

夫婦間葛藤への対処に関する研究で述べられてきた知見は，日常生活で行うのは難しい理想的な葛藤対処法であったという反省から，これまでの知見が実際の夫婦間コミュニケーションにおいてどこまで役立つのかについての研究が行われている（Gottman et al., 1998）。本研究では日常的な文脈における対処について記述することで，夫婦関係に不全感を抱いている人々が実生活に取り入れやすい対処の仕方を提示したといえる。

また，本研究では日常的な文脈の中での対処を記述するという手法を取った。このことは労力的・時間的な制約の中での実際的に有効な対処を描き出した。

(2) 夫婦間コミュニケーション研究への発達的視点の導入

分析2では折り合いを伴う譲歩的な対処の発達的な機能について指摘したが，それにより，夫婦のコミュニケーションが日々のインタラクションの中で成長していく可能性を提示できた。これは予測型研究でない研究の重要性の指摘につながる。つまり，長期的つながりを望む関係において，発達を視野に入れた理論づくりを行う必要性の指摘である。夫婦研究の分野では，夫婦関係の維持や崩壊に関わる要因の特定を目的とした予測的な研究が多く行われている。しかし依然として，発達的観点を持った研究は少なく，夫婦関係の形成・維持・崩壊のメカニズムについての考察は十分でない。夫婦関係を異なる背景を持つ個人同士の関係，つまり異文化関係と捉えるなら，そこでは互いの文化を認め合い，両者にとってよいあり方を見つけていくことが必要とされる（田中，1994）。それは互いが不満，負担を感じない落としどころを見つけていく過程であるともいえる。この過程は関係の発達の過程であると考えることができるのではないか。夫婦関係を発達変化する関係として捉え，夫婦間葛藤における具体的対処行動だけでなく，それについての意味づけの過程まで含めることで，より関係の維持に寄与する対処についての知見を精緻化できると考える。

(3) 今後の展望

本研究の結果から今後検討すべき新たな5つの疑問を導き出すことができた。

第一に，より広い葛藤イベントや関係のあり方について検討することである。葛藤イベントについては2点指摘できる。まず葛藤イベントの内容についてであるが，本研究では新婚期に多くの夫婦が直面するであろう問題に議論の範囲を定めてきた。しかし深刻な葛藤への対処に当たって，折り合いを伴う譲歩的な対処はどのように働くのだろうかという疑問がある。また，今回は表面化した葛藤についてのみ扱った。折り合いをつけるという内的な調整過程について検討するにあたっては，葛藤イベントの発生自体を回避するような対処の仕方も射程に入れることが必要である。その点で本研究の「折り合いをつけること」の働きについての知見は，葛藤の存在が互いに認識されている場合に限られるといえる。このことは，臨床的な観点において援助を必要とされるような夫婦において譲歩的な対処がどのように働くのか，という疑問につながる。Gottman & Levenson（1999b）においては，夫婦間の葛藤についての議論の後にポジティブな会話が続くことは，良好な夫婦関係を予測すると共に，家庭内暴力のある夫婦にも見られることが明らかになった。折り合いをつけるということが夫婦の不幸な関係を助長する可能性もあり，更なる検討が必要である。

第二に，縦断研究の必要性をあげる。本研究は一時点での調査であったため，本研究で導かれた有効性や機能についての知見は可能性にとどまった。また，本研究で得られたデータは，回顧的な語りにより得られたものであったため，特に変化についての知見には限界がある。折り合いを伴う譲歩的な対処の効果，発生・発達の機序についての詳細な調査が望まれる。

第三に，比較研究の必要性を指摘する。夫婦関係に関する研究の多くは欧米で行われている。日本における研究をさらに深めるとともに，本研究の知見を比較研究によって検討することも必要である。

第四に，夫婦以外の関係における譲歩的な対処の働きについてである。今後は，折り合いを伴う譲歩的な対処が夫婦以外の関係維持にどのような役割を果たすのかについても検討を進めていきたい。

最後に，ペアデータの必要性について指摘する。本研究では，従来の葛藤対処研究への異議として進んできた譲歩的対処の有効性についての研究において，対処する個人が自身の対処をどのように意味づけるかという内的過程についての考察が不十分であることを指摘することを目的とした。しかし譲歩的対処の働きについての理論の精緻化を目指すとき，個人の意味づけの過程と夫婦間のコミュニケーションや幸福感などのペア変数の分析も重要な課題であり，更なる検討が望まれる。

文　献

Brudbury, T. N. (1998). Introduction: The developmental course of marital dysfunction. In T. N. Bradbury (Ed.), *The developmental course of marital dysfunction* (pp.1-7). New York: Cambridge University Press.

Gottman, J. M. (1998). Psychology and the study of the marital processes. *Annual Review of Psychology*, **49**, 69-197.

Gottman, J. M., Coan, J., Carrere, S., & Swanson, C. (1998). Predicting marital happiness and stability from newlywed interaction. *Journal of Marriage and the Family*, **60**, 5-22.

Gottman, J. M., & Krokoff, L. J. (1989). Marital interaction and satisfaction: A longitudinal view. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **57**, 47-52.

Gottman, J. M., & Levenson, R. W. (1999a). What predicts change in marital interaction over time? A study of alternative medicine. *Family Process*, **38**, 143-158.

Gottman, J. M., & Levenson, R. W. (1999b) Rebound from marital conflict and divorce prediction. *Family Process*, **38**, 287-292.

Gottman, J. M., & Silver, N. (1999). *The seven principles for making marriage work*. New York: Crown Publishers.

飛田　操・大渕憲一. (1991). 夫婦の葛藤経験と葛藤解決方略について. *日本心理学会第55回大会発表論文集*, 688.

平木典子. (1993). *アサーショントレーニング ── さわやかな<自己表現>のために*. 東京：金子書房.

河内美恵. (2001). 母親における「夫婦の葛藤解決ストラテジー」構造の検討. *日本発達心理学会第12回大会発表論文集*, 275.

Klein, R. C. A., & Johnson, M. P. (2000). Strategies of couple conflict. In R. M. Milardo, & S. Duck (Eds.), *Families as relationships* (pp.469-485). Chichester: John Wiley.

Leonard, K. E., & Roberts, L. J. (1998). Marital aggression, quality, and stability in the first year of marriage: Findings from the buffalo newlywed study. In T. N. Bradbury (Ed.), *The developmental course of marital dysfunction* (pp.125-141). New York: Cambridge University Press.

Mackey, R. A., & O'Brien, B. A. (1995). *Lasting marriages: Men and women growing together*. Westport, CT: Praeger.

松村　明(編). (1995). *大辞林第二版*. 東京：三省堂.

Ohbuchi, K., Fukushima, O., & Tedeschi, J. (1999). Cultural values in conflict management: Goal orientation, goal attainment, and tactical decision. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **30**, 1-71.

岡堂哲雄. (1991). *家族心理学講義*. 東京：金子書房.

菅野幸恵. (2001). 母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ. *発達心理学研究*, **12**, 12-23.

田中一彦. (1994). 結婚と離婚の文化心理. 岡堂哲雄(編), *現代のエスプリ別冊　つれあいの心理と幸福 ── 21世紀の夫婦の関係を展望する* (pp.29-40). 東京：至文堂.

Ting-Toomey, S. (1994). Managing conflict in intimate intercultural relationships. In D. Cahn (Ed.), *Conflict in personal relationships* (pp.47-77). Hillsdale, N. J: L. Erlbaum.

Trubisky, P., Ting-Toomey, S., & Lin, S. L. (1991). The influence of individualism-collectivism and self-monitoring on conflict styles. *International Journal of Intercultural Relation*, **15**, 65-84.

Vaillant, C. O., & Vaillant,G.E. (1993). Is the U-curve of marital satisfaction an illusion? A 40-year study of marriage. *Journal of Marriage and the Family*, **55**, 230-239.

Van Lange, P. A. M., Agnew, C. R., Harinck, F., & Steemers, G. E. M. (1997). From game theory to real life: How social value orientation affects willingness to sacrifice in ongoing close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73** , 1330-1344.

Van Lange, P. A. M., Rubult, C. E., Drigotas, S. M., Arriaga, X. B., Witcher, B. S., & Cox, C. L. (1997). Willingness to sacrifice in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 1373-1395.

吉武久美子. (1991). ひくことが持つ優位性 ── 自己主張と対人関係円滑化を両立させるための対人的コミュニケーション方略. *心理学研究*, **62**, 229-234.

付記

1　本論文は2001年度東京都立大学修士論文として提出したものを，一部加筆修正したものである。

2　本論分作成にあたり首都大学東京の須田治教授に貴重なご助言ならびにご指導をいただきました。深く感謝いたします。また，調査にご協力いただきましたみなさまに心よりお礼申し上げます。

3　本研究の一部は，日本発達心理学会第13回大会，第14回大会，国際行動発達学会第16回大会において報告した。

Shoji, Reika (Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University). *Effects of Compromise on Management of Marital Conflicts: Newlywed Women's Process of Meaning-Making.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2006, Vol.17, No.1, 1-13.

The purpose of this study was to examine the meaning and functions of compromise in marital relationships, focusing on the process of making sense of conflict events and conflict management. Recently married women (N=21) were interviewed about their experiences with marital conflict since they were married. Narratives were analyzed by classifying the causes of conflict events and participants' conflict management strategies. Compromise was compared with other management strategies and examined for its meaning in daily life. Newlywed women reported positive meanings of compromise. In addition, by compromising they reinterpreted their relationships and the conflict events, and changed their conflict management strategies. These findings showed that it is important to consider the process of meaning-making of conflict management, in the study of marital relationships.

【Key Words】 Newlywed women, Marital conflict, Compromise, Meaning-making, Marriage

2003. 10. 15 受稿, 2005. 8. 11 受理

発達心理学研究
2006，第17巻，第1号，14-27

原　著

職場参加におけるアイデンティティ変容と学びの組織化の関係：新人の視点から見た学びの手がかりをめぐって

亀井　美弥子
（東京都立大学人文科学研究科）

本研究の目的は，正統的周辺参加の枠組みから，職場の新人の語りによって，職業参加におけるアイデンティティの変化と職場共同体における学びを構造化する諸資源との関連を，新人の視点から構成される「学習のカリキュラム」に焦点化し明らかにすることである。新卒の社会人23名に就職直後と5ヶ月後の2時点でインタビューを実施した。アイデンティティをとらえるための「新人としての自己の位置づけ」の変化のタイプと，職場の学習のための構造化の資源としての，1.新人への仕事の割り当て，2.教授－学習関係の安定性との関係を検討した。その結果，初期に葛藤を感じ，その後職業参加に肯定的に向かうタイプは多くが仕事の割り当てが「実践根幹型」であり，安定した教授－学習関係という職場の構造を持っていた。また，はじめから職業参加に肯定的で変化のないタイプでは新人の仕事が熟練と分けられている「新人－熟練分担型」であった。また，職業参加から離れていくタイプでは，実践の参加から疎外されているケースがあった。異なる変化をたどった3事例の語りを検討した結果，職場実践における学びを構造化する資源の多様なありかたが，新人のアイデンティティの変容過程や学習のカリキュラムの構成に相互に密接に関係すること，また，実践に参加することおよび現前の実践を意味づけるガイドの存在が学習のカリキュラムの構成に重要であることが示唆された。

【キー・ワード】 職業参加，アイデンティティの変容，ポジショニング，正統的周辺参加，学びを構造化する諸資源

問　題

Mansfield（1972）は職業参加におけるインパクトについて，状態の変化に沿って人は新しいルールを学ぶ必要があり，その中で自分自身や社会的世界についての概念を変化させるとして，これを，アイデンティティ発達の過程と位置づけている。過去の研究においても，職業選択や職業参加に関する研究は，アイデンティティの変容に深く関係する問題として位置づけられてきた（Super, 1953/1970；下山, 1986, 1992；望月, 1991；高村, 1997；杉村，2001）。また，近年の若者の職業参加をめぐっては，フリーター問題や無業問題など様々に問題化されてきている（玄田，2001；大久保，2002；小杉，2003）。しかし，実際に新たな職場で働きはじめた青年のアイデンティティ変容のプロセスが，職場の状況と相まってどのように進むのかは具体的に明らかになっていると言い難い。

従来アイデンティティの変化や発達は，自律性や個体化の次元が強調されてきたが，近年，その理論や概念が再考されつつある（杉村，1998；岡本，1999）。アイデンティティを他者との関係性に重点をおいて見る見方（杉村，1998）は，職業参加の問題においても考慮されるべき視点であり，さらに，具体的な職場参加にあたっては，他者との関係のみならず，それぞれの職場における新人を迎え入れる環境についても，広い意味での社会との関係性の問題として再考されるべきだと考えられる。特に，社会状況や職場の形態が急激に変化した現代においては，アイデンティティの変化の問題のとらえ方に見直しが必要ではないか。

そこで本研究では，職業参加におけるアイデンティティの問題と職場状況とセットでとらえるにあたり，「正統的周辺参加（Legitimate peripheral participation）」（以下LPP）（Lave & Wenger, 1991/1993）の学習とアイデンティティについての議論をとりあげたい。LPPではアイデンティティ発達を実践共同体への参加のプロセスの中で進む学習の一側面と考える。ここでは，学習は単に知識を得たり，スキルを向上させるという個人と特定の活動との関係だけではなく，人間関係を含むより広い社会的共同体における実践を通じて浮かび上がる関係の問題として全人格的にとらえられる。学習とは実践共同体への参加を通じて，周辺的参加者としての新参者から，一人前の熟練者へとポジションを変化させることであり，このような見方からは学習は「別の人格（different person）」になることを意味する。つまり，実践共同体への新参者にとって，学習とは「なにを学ぶのか」というよりも，「何になりたいのか」という問題をはらむものとして拡張される（Hodges, 1998）。

また，実践共同体のなかでの学習は，実践共同体がもつ教育のしかたによってのみ成立するわけではない。学

習は，周囲から熟練者の活動を見る機会がどれだけあるか，気軽に知識を与え合える仲間がいるか，などの学びを構造化する諸資源の配置と諸資源へのアクセス可能性の中で組織される。さらに，学習者は実践共同体への参加のポジションにもとづいて，実践全体の構図やそこでどんなことを学ぶべきかについて自分の考えを発展させることができる。このようにLPPでは，学習の成立に関して，「学習者の視点から見た日常実践における学習の資源がおかれている場」（Lave & Wenger, 1991/1993, p.73）である「学習のカリキュラム」を重視する。学習者は実践によって，自己に対する認識や自分の目指す人物像，どうしたら目指す人物像に近づけるのか，どこへ行けば学ぶことができるのかなどの知識を得，学習のカリキュラムを構成する。

つまり，LPPにおいて，アイデンティティの変化・形成は，実践共同体への参加のプロセスにおいて，だんだんと見えてくる熟練の未来像への同化と差異のなかで起こり，それは学びを構造化する諸資源の配置によって支えられる学習のカリキュラムの成立と同時に展開すると考えられる。

本研究の目的は，LPPの枠組みより，青年の職業参加におけるアイデンティティの変化と職場共同体における学びを構造化する諸資源との関連を，主体が能動的に見いだし構成する学習のカリキュラムを検討することにより明らかにすることである。

しかし，そもそも，LPPのアイデンティティという概念そのものについての記述は「人間と，実践共同体における場所およびそれへの参加との，長期にわたる生きた関係」（Lave & Wenger, 1991/1993, p.30）という抽象的なものであり，多義性を含んでいる。また，主体と比較して実践共同体に様々におかれている諸資源やその構造化に焦点があたっており（高木, 1992），個人の参加のプロセスを抽象的にしか描けていない（Linehan & McCarthy, 2001）という批判がある。Walkerdine（1997）は，談話的（discursive）実践のなかで個人が様々に意味づけられる瞬間に注目する。彼は，Laveの実践の定式化に対して，すべての実践は談話的であるのに談話を構造的な秩序の一部と見なすことで，そのような談話的営みが，個人の生きられた体験からは切り離されたものになってしまっていると批判する。また，Hodges（1998）は，自らの実践共同体への参加のプロセスにおける違和感を記述することで，実践共同体への同一化における葛藤の瞬間を描き，非同一化のアイデンティティというあり方が実践共同体との関係のなかであり得ることを示した。Hodgesの指摘通りアイデンティティは，当該の実践共同体において目指される熟練の未来展望への同一化だけではなく，そこからの解離によっても構成されるといえる。また，人は一つの実践共同体に所属するだけでなく，複数の実践共同体に所属し，その緊張の中で生きている（Wenger, 1998）ことから，それら複数の実践共同体どうしの関連における差異と同一化を通じて，社会空間的に自らのアイデンティティを確認することもある。

このように，LPPのアイデンティティに関連する議論は再検討および拡張されてきたが，これらの多義性を含んだ実践共同体の理論におけるアイデンティティのあり方をすくい取り，個人の能動性をより鮮明に描くために，ここでは，ポジショニング（Davies & Harré, 1990；Bamberg, 1997）概念に注目する。LPPとポジショニング理論は異なる問いやデータによってアプローチされてきたが，実践のなかで参加の瞬間を描く分析の道具とすることが可能であるかもしれない（Linehan & McCarthy, 2000）。

Davies & Harré（1990）はポジショニングを「会話にともなって生み出されるストーリーの流れ（story lines）の中でつじつまのあった参加者として，観察可能で主体的に自分自身を定位する談話過程（discursive process）である」と定義する。すなわち，人は会話という行為の中で，他者との関係において自分自身を位置づけ，他者や自分自身を，「社会的な存在」としてそのつど生み出している（Bamberg, 1997）。また，ひとたびそのような位置づけから自己をとらえると，人はその見方から利用できる特定の概念や話し方，自己物語を自分のものとして持つので，ポジショニングは人に主体性の中身をもたらすと考えられ，ポジショニングの枠内では，個人的変化は，新たな社会的緒言説を認識することからはじまる（Burr, 1995/1997）。

このような見方は，LPPにおける学習とアイデンティティの変化の関係において，より本質的に現れていると思われる。つまり，主体が実践共同体に対する新たな知識や深い理解を得るたびに，それらの意味を利用して，実践共同体や実践共同体に含まれる諸事物に対して自らの位置づけを新たにとりなおし，自らの意味づけを更新させる。さらに，そうした新たな自分の位置づけを他者との会話の中で提示していくことが，アイデンティティの遂行過程だと考えることができるからである。このようにポジショニングの視点は，共同体の制度や文化，物語，登場人物などが配置される新たな社会的時空間に対して，個人が自己をどのように位置づけるかについて問題にすることから，LPPの理論的視野の中で，主体の能動的な参加のプロセスにおけるアイデンティティの問題を取り扱う概念的道具となる可能性を持つ。

以上より，本研究においてアイデンティティとは，実践共同体への参加過程において談話のなかで能動的に示される自己の位置づけであると考える。それは，特定の実践共同体内での社会的関係や時間展望のなかでも位置づけられるし，個人が所属する様々な実践共同体それぞ

れの関係のなかでも浮かび上がる可能性がある。さらに，それは，従来のアイデンティティ概念のようにある時点において固定化されるのものではなく，実践共同体との交渉を通じて本質的に常に変化し続けていくものであると言える。

本研究では，以上のような見方から，青年の職業参加という問題を再考する。職場での新参者が感じる適応感や葛藤は，必ず職場共同体の実践の中で起こるものである。職場によって学びを構造化する諸資源はさまざまであり，新人はそれら諸資源へのアクセス可能性のもとで，それぞれの視点から「学習のカリキュラム」を構成するための“手がかり”を見いだす。ここでは，それぞれの新人の視点から発見された「学習のカリキュラム」を構成するための手がかりを「学びの手がかり」と呼ぶ。前述のように学習のカリキュラムの構成はアイデンティティの変化・形成と同時に展開すると考えられる。新人のアイデンティティの変化を記述すると同時に，新人がいかに主体的に「学びの手がかり」を見いだし，学習のカリキュラムを構成するかに注目することによって，学校から職場への移行過程におけるアイデンティティ変容という複雑な問題をより具体的に記述できるだろう。

本研究では，新たに職場参加する新人のアイデンティティとして，インタビューの中で新人が自ら提示する「新人としての自己」の位置づけを取り上げる。Riessman（2002）は，インタビュー場面でのインタビュイの語りをアイデンティティを達成する場としてとらえ，その遂行的な自己の位置づけを問題にする。ここでは「自分がどのような存在であるか」というアイデンティティは会話の文脈のなかでそのつど示され，遂行される（Riessman, 2002）。インタビュアーがある共同体の成員に対して，共同体の部外者の立場から，その成員の共同体の活動について何らかの問いを投げるとき，インタビュイは実践共同体の成員として自己を物語るだろう。そこでのインタビュー実践は，インタビュイのアイデンティティが遂行される場であると考えられる。本研究では，インタビュアーがある特定の職場の新人に対して，仕事の話を聞くという会話の文脈から，対象者は自らを特に職場という実践共同体の一員として職業参加にむかう新人として位置づけると考えた。ここで，対象者は，インタビュー場面で，特に，職場の新人として，仕事を覚えて一人前になるにあたっての新人自身の仕事全体への貢献度や自己の達成度への評価を語ることが予想される。これは，LPPの枠組みに沿って言えば，職場参加のなかで本人が見出す一人前へ同一化しようとする道筋のなかでの自己の位置づけである。つまり，ここで語られた「新人としての自己」の位置づけは，このような時間的展望の中での新人のアイデンティティの遂行としてとらえられる。本来会話のなかでの自己の位置づけは，時間的にも空間的にも様々になされると考えられるが，本研究の目的より，ここでは特に「新人としての自己」をどのように位置づけて語るかに注目した。

また，実践共同体での学びを構造化する諸資源に関して，本研究では，LPPの議論に基づき，新人に与えられる仕事の実践と職場における分業の形態と，人的資源へのアクセスという2つの側面に注目する。まず，ひとつめに，LPPでは共同体の活動への参加に対して，新参者に正統的なアクセスが保証される形態は，実践共同体が位置づいている社会的環境での分業の特徴に依存するとしている。Lave & Wenger（1991/1993, p.96）では，徒弟の周辺性に関して，「新参者の作業は短く，単純で，失敗に対する損害も小さく，徒弟は活動全体に対する責任が軽」く，「連なった仕事の節目の真ん中あたりであるよりも，仕事のプロセスが枝分かれした末端に位置づくものである場合も多い」とするが，現代の職場においては必ずしもそうであるとは限らない。本研究では，新人が初期に与えられる仕事が職場全体の多様な仕事のなかでどのようにベテランと共有されているのかを，職場における「新人への仕事の割り当て」としてとりあげた。また，ふたつめとして，職場における学習に際して，モデルを得るという意味でも知識を得るという意味でも，人的資源へのアクセスは重要だと考えられる。本研究では，新人が知識をすぐに得られる先輩の存在が保証されているかどうかという見方から，職場の人間関係のなかで「教授－学習関係の安定性」をとりあげた。

方　法

(1) 調査対象者

2000年度における企業・団体等の新規採用職員23名（男性10名，女性13名）を対象とした。平均年齢は23.1歳である。協力者には調査目的として「新しく仕事をはじめるときに何を学ぶのかということを知りたい」と説明し，修士論文及び，その後の研究発表を目的としたインタビューをお願いし承諾を得た。各対象者のプロフィールおよび募集の経緯は以下の通りである（Table 1）。

(2) 面接時期

面接時期は，入社約1から2ヶ月後と，ある程度仕事に慣れてくる頃だと思われる約4から5ヶ月後の時期に行った。よって，調査時期は，1回目が2000年の4月から6月中旬にかけて，2回目が2000年8月から9月後半にかけてである。

(3) 手続き

筆者が各調査対象者と個別に半構造化面接を行った。1回の面接時間は約45分から1時間半であった。面接の記録は協力者の了解のもと，テープレコーダーに録音し，逐語記録として書き起こされた。面接の質問項目は，自己の位置付けの問題とともに，学びを構造化する

Table 1　*協力者プロフィール*

ID	就職先	職業	仕事1回目の時点で覚えたと語られた主な仕事/2回目で増えたと語られた仕事	性別/年齢	募集の経緯
a	省庁技術系研究所	研究者	実験/出張	男/25	知人の紹介
b	スポーツ用品販売小売りチェーン[a]	販売員	接客・発注・清掃・日計集計/主要商品の発注	男/23	筆者の以前の勤務先
c	大手外資系メーカー	エンジニア	機器についての勉強/機器のマニュアルづくり	男/22	知人の紹介
d	スポーツ用品販売小売りチェーン[a]	販売員	接客・トイレ掃除・伝票の書き方・レジ/商品の発注	男/22	筆者の以前の勤務先
e	大手外資系メーカー	エンジニア	フィールドでの機器の修理・点検のOJT/先輩がいるときに1人での作業	男/22	知人の紹介
f	スポーツ用品販売小売りチェーン[a]	販売員	接客・清掃・レジ・在庫調べ・伝票の書き方/商品の発注・レジ締め・日計集計	男/19	筆者の以前の勤務先
g	出版社	編集者	インタビューの同行・写真の構成・校正・記事の執筆/巻頭カラーの担当	男/25	知人の紹介
h	大手信用金庫	銀行員	ドキュメント整理・雑用/外回りでの車の運転・現金の出し入れ	男/23	知人の紹介
i	オーディオメーカー	エンジニア	機器の部品の製造（ハンダづけなど）/機器全体の製造・部品の発注	男/22	知人の紹介
j	システム開発会社	SE	プログラムについての勉強/プログラム作成	男/28	知人の紹介
k	大学病院	医師	薬の手配・手術の準備・傷の縫合/簡単な縫合なら1人で任される	女/25	知人の紹介
l	大手外資系商社	事務員	自社HPの社員への情報提供ページの更新/書庫の管理	女/23	知人の紹介
m	システム開発会社	SE	ドキュメント整理・表計算ソフトによるチェック/システムのエラーチェック	女/23	筆者の直接の知人
n	大学病院[b]	看護師	陰部洗浄・点滴・注射・検査・手術の準備・記録/多数の患者を任される	女/24	大学病院からの紹介
o	大学病院[b]	看護師	注射・採血/手術の準備と後かたづけ	女/21	大学病院からの紹介
p	大学病院[b]	看護師	注射など/点滴の管理・申し送り・手術後の患者の担当	女/21	大学病院からの紹介
q	大手建設業	事務員	備品の管理・発注・社内受付・電話応対/文書作成	女/21	知人の紹介
r	大学病院[b]	看護師	一日の流れ・書類の書き方/輸血・死後の処置	女/21	大学病院からの紹介
s	職員組合系病院	看護師	一日の流れ・注射・採血/様々な患者のいる部屋の担当	女/29	知人の紹介
t	レストランチェーン	店員	接客・発注/調理	女/26	筆者の直接の知人
u	システム開発会社	SE	研修（プログラムの勉強）/システムのエラーのチェック	女/22	知人の紹介
v	大学病院[b]	看護師	採血・注射・検査/状態の重い患者を担当する	女/21	大学病院からの紹介
w	地方自治体	事務員	残業の管理/管理職の日程の管理・職員の給与・経費の計算など	女/24	知人の紹介

注1. a）勤務店舗はそれぞれ異なる，b）同じ病院だが，それぞれ勤務病棟（科）が異なる。
注2. SEはシステム・エンジニアの略。

諸資源について知るという研究の目的から，1. 最近の様子，2. 具体的な仕事を覚えた過程，3. 新しく学んだり発見したこと，4. 人間関係について，5. 仕事における自分の役割と将来的な展望や日常生活の中で仕事がどのような重みづけをもってとらえられているか，の5つのフレームを設定した。

(4) 得られたデータの整理方法

a.「新人としての自己」の位置づけの分析視点と分類手続き

職業参加における新人としての自己の位置づけの変化をとらえるため，新人としての自己の位置づけを分類することを試みた。まず，職種の異なる5名の対象者が自己について評価的に語るエピソードを逐語記録から抜きだした。そのうちの仕事に対する現在の自分の関与について語られている部分を「新人としての自己」エピソードとした。これらを本研究の目的に照らし，職業参加のポジションについて，どのように自己が語られているかという見方から，最終的に5つのカテゴリを作成した（Table2）。

b. 学びを構造化する諸資源の分析視点と分類手続き

問題で挙げた分析の視点は，1. 新人への仕事の割り当て，2. 教授－学習関係の安定性である。得られたイ

Table 2　*自己の位置づけのカテゴリ分類*

カテゴリ	定義	評定基準	例
仕事から疎外された自己「疎外」	自分でなくてもこの仕事はできる，仕事の感覚がないというような自分の役割に意味を見いだしていない自己の位置づけ方	自分の仕事に対して誰がやっても同じであると評価している，または仕事をしている感覚がない	仕事なんてしてるんでしょうか/別に誰がやっても同じことしかしない
未熟で無力な自己「無力」	自分の未熟さを語っており，主に自分の無力感に焦点がおかれ，これからの業務の遂行や熟達にと断絶する自己の位置づけ方	未熟さやそれから来る不安に焦点づけられていて，その会話についてはそれについてのフォローがない	毎日がいっぱいいっぱいで余裕がない/わたしには向いてないんじゃないか/やっていける自信がない
未熟だが向上を目指す自己「向上」	自分の未熟さについての語りではあるが，向上心や未来に焦点づけられ，自己のあり方がこれからの業務の遂行や熟練像に結びついている位置づけ方	未熟に言及しながらもそれゆえに向上を目指している/新人の雑用などの仕事に意味を見いだしている/未熟な自分を熟練者と比較し，それを目標とする/自分の将来の立場を認識して，それについての不安を語っている	こういうところはできないので，覚えたい/来年になったら自分も教えてなくてはいけない立場であるから仕事を覚える必要がある
有能な自己「有能」	自己の役割に意味を見いだしていたり，技能や効力が向上しているという有能な自己の位置づけ方	自主的にできるようになったことを語る/前に比べて明らかに仕事ができるようになった，仕事の範囲が広がったという変化/認めてもらった/自己の能力の独自性を明確に出すについての言及	この商品売れるんじゃないかと自分で考えたとき売れたらうれしいと言うことが前より変わった点/言ってる内容が理解できるようになった
責任の増加した自己「責任」	責任感を感じていたり，責任の範囲の拡大の自覚をもつようになったとされる自己の位置づけ方	責任を感じるようになったという責任の「増加」への言及	患者さんにまちがったことを言ったらいけないというプレッシャーがある

注．カテゴリの「　」は略称。

ンタビューデータより，新人への仕事の割り当てには，LPPで言及されていたような周辺的作業を担わせる職場と，ほとんどベテラン職員と同様の仕事の内容を与えている職場があった。また，教授－学習関係の安定性については，以下の手続きでカテゴリ作成を行った。筆者が一度作ったカテゴリの定義によって，第1評定者が23ケース中，11ケースについて評定したところ，新人への仕事の割り当てが2ケース，教授－学習の安定性については3ケースに，筆者との評定結果に不一致が生じた。筆者と第1評定者の2名の協議によってカテゴリの定義をより明確にし，第2の評定者によって，評定をおこなったところ，新人への仕事の割り当てが2ケース，教授－学習の安定性が1ケースに不一致が生じた。ここでさらに第2評定者と協議し，最終的な定義を確定した上で，評定されていない残り12ケースについて第2評定者と筆者が評定したところすべてのケースにおいて評定結果が一致した。最終的な定義をTable3に示す。

c. 等質性分析

調査方法で示したように本研究では5つのフレームについて質問をしている。ここでは，各調査対象者の一回の面接における各フレームを分析単位として，上で設定したようなカテゴリ（Table2）に該当する反応が出現しているかどうかを評定した[1]（出現＝1，非出現＝2）。その後，各面接回について，各調査対象者ごとにフレームをはずし，結果としてその対象者がそのカテゴリに該当する言及をしているか，いないかの行23×列5の2つのデータマトリックス（面接1，面接2）を得た。この2つのマトリックスを行にたて積みして結合した46×5のデータマトリックス[2]を対象に最適尺度法（等質性分析）による分析を行った（統計ソフトSPSS 9.0 for windows）。

分析の結果から，1回目，2回目の合計46ケースにおける語られた自己の位置づけカテゴリの回答パターンの類似性がとらえられることになる。その46ケースは23名の1回目，2回目の面接であるから，この空間上でケースの自己の位置づけカテゴリ間の関係における相対的な差異をとらえられる。

結果と考察

(1) 等質性分析の結果と解釈

最適尺度法の結果，1軸と2軸の固有値はそれぞれ.336と.246であり，2軸までの寄与率は54.67％であった。各カテゴリとケースのプロットをFigure1に示す。

1) 半数のケースについて，評定者1名にTable2の定義によって評定を求めたところ，筆者との一致率は84.3％であった。

2) Appendixとして論文末に掲載する。

Table 3　*新人への仕事の割り当てのタイプと教授－学習の安定性*

仕事の割り当てのタイプ		
新人－熟練分担型	新人の仕事とベテランのする仕事は分担されており，新人は職場の業務全体の中で比較的簡易な仕事や，先輩の仕事の末端を担っている。	例）販売員 f：値段シールの張り付け・トイレ掃除・生きたエサの管理などを担当
実践根幹型	新人であってもベテランであっても職場で担当する業務は基本的には同じものである。専門性をもっているという前提で，熟練者の監督のもと，はじめから職場の根幹に関わる業務に携わる。	例）看護師 v：あらゆる業務について一回見ておいて，と先輩に言われた後，次からは実際に患者さんに対して問診や採血などの援助（処置）を行った
実践隔離型	業務にたずさわることはなく，新人のための教育がなされている。	例）SE u：入社後業務とは別にスキルアップのための勉強だけを行うように指示される
教授－学習関係の安定性		
あり	常に対象者に仕事を教える人が決まっているかどうかに注目した。この関係は職場のもつ教育システムとして制度化されている場合と，制度化されているわけではないが，明示化されている場合があった。前者は看護職などで，看護師1年生に対して3, 4年以上の経験をもつ看護師が「お姉さん役」として指名される場合（プリセプター制度・メンター制度などと呼ばれる）。後者は，1人あるいは複数の決まった先輩が新人の教育係を任されている場合など。	

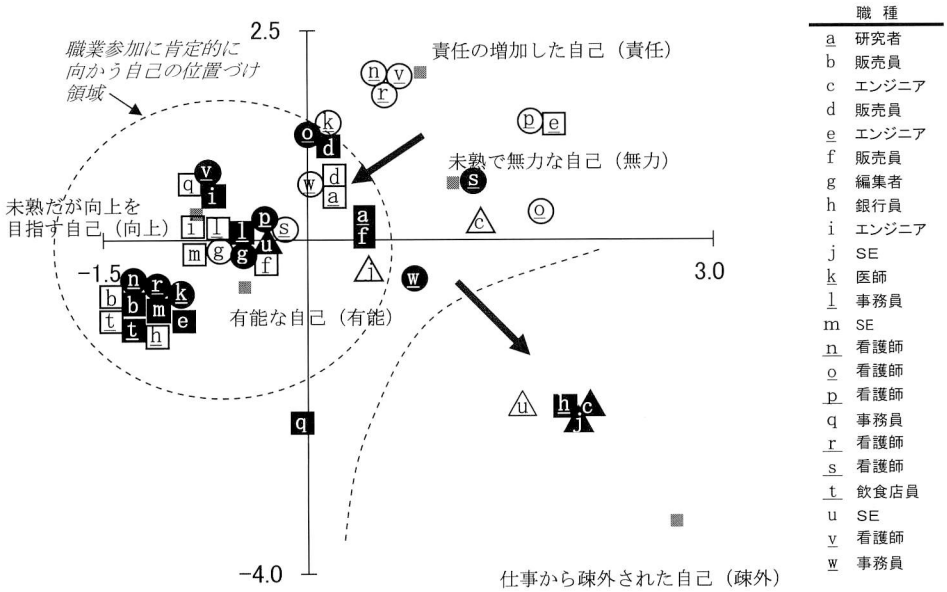


Figure 1　*自己の位置づけの変化と職場の構造化のタイプ*

（アルファベットは対象者IDを示す。プロットの色は黒字が面接1回目，白抜きが面接2回目を示す。
プロットの形は新人に与えられた仕事，○：実践根幹型　□：新人－熟練分担型　△：実践隔離型を示す。アルファベットの下線は安定した教授－学習関係があることを示す。）

なお，「疎外」カテゴリのみ際だって他のカテゴリからはずれたプロットを示していることから，「疎外」カテゴリをはずして検討したところ，空間の意味づけに大きな違いがなかったことから，本分析ではこのカテゴリを含む分析結果を採用した。また，方法の(4)のb. によって得られた学びを構造化する諸資源についての情報は，ケースのプロットの形状で表した。

1. カテゴリの空間の解釈　まず各カテゴリの付置を見ると第1象限上方に「責任」カテゴリが付置されており，そこより下方に「無力」カテゴリが付置されている。第2, 3象限には「向上」カテゴリ，「有能」カテゴリが近くに付置された。これらのカテゴリが近くに付置された

のは，自己の肯定的変化や意味づけとともに，未熟さを受容した前向きな自己が同じ対象者の同じ面接時に語られる反応パターンがあったことを示している。ここから，この領域を「職業参加に肯定的に向かう自己の位置づけ」が表れている領域だと解釈することができる。残るカテゴリである「疎外」カテゴリは，第4象限の右方に他のカテゴリから大きく離れて付置されている。このカテゴリが仕事に対して肯定的変化や意味づけを持つ自己や責任のある自己，未熟な自己など，仕事にコミットすることで語られる自己の位置づけカテゴリから離れていることから，このカテゴリの領域は仕事に対する無関係性を表していると解釈できる。

2. ケースの解釈　次に，自己の位置づけのカテゴリー得点をもとに，クラスター分析を行った。3つの領域（未熟，参加，疎外）に対応するクラスターの中心座標を算出し，各対象者の座標と中心との距離の変化（1回目と2回目との差）を算出することにより，カテゴリの付置に対して各対象者の1回目の面接と2回目の面接の差異を考察した。

その結果，面接1回目から2回目にかけて，1. 参加領域に接近している群（e, k, n, o, p, r, u, v），2. 参加領域にも，「疎外」カテゴリにも顕著な接近をしていない群（a, b, d, f, g, i, l, m, s, t），3.「疎外」カテゴリに接近している群（c, h, j, q, w）という3つのタイプの「自己の位置づけ」に対する変化パターンがあることがわかった。

「職業参加に肯定的に向かう自己の位置づけ」領域に接近している群（e, k, n, o, p, r, u, v）では，uを除いたすべてのケースが，1回目の面接では，「責任」や「無力」のカテゴリ群の付近に付置され，2回目の面接では，「職業参加に肯定的に向かう」領域に付置が移動していた。

ここで，1回目の面接の付置は，仕事へのコミットメントから来る責任の重さや，その責任の重さと見合わない自分の実力への認識が自己の無力感としてともに語られたと考えられる。その第2, 3象限のカテゴリ群への変化は，ここに付置された対象者が仕事に対する肯定感や動機づけを持つものとして自己の位置づけを変化させたことを表している。つまり，初期には自分自身の状態と熟練者およびその職業的役割との差異を中心に語られていた自己が，2回目の面接時では，実践共同体の熟練への同一化を目指すものとして変化したと考えられる。また，この群のケースは，eとuを除くすべてのケースが，実際に患者を相手に医療に携わる職業であり，仕事の割り当てが実践根幹型でなおかつ安定した教授関係を持っていた。SEのuは面接1回目の時点では研修期間が続き，仕事をしていない結果，「疎外」領域から「肯定」領域へと移動したと見られる。また，エンジニアeは，新人－熟練分担型であったが，先輩とともに病院をフィールドとして医療機器の修理にあたっていた。ここで，彼は医療機器の修理が人命に関わることから，自らの責任について語っていた。これによって，他の多くの医療関係者と同様の変化を示したと考えられる。

次に，面接1回目から2回目にかけて，参加領域にも，「疎外」カテゴリにも顕著な接近をしていない群（a, b, d, f, g, i, l, m, s, t）があった。この群では，看護師sを除くケースが「職業参加に肯定的に向かう自己の位置づけ」の領域付近に位置し，際だった移動がなかった。これらのケースは職業への参入の時点から安定して，職業参加に対して前向きな自己の位置づけを語っていたと考えられ，初期から自分自身を熟練への同一化へ向かう存在として定位していた。これらのケースの学びを構造化する諸資源を見ると，この領域に四角のプロットが多く集中しているように，仕事の割り当てが実践根幹型である編集者gと看護師sを除く8ケースで新人－熟練分担型であった。また，この8ケースのうち3名が教授－学習が安定，残り5名は不安定であった。

最後に，面接1回目から2回目にかけて，「疎外」カテゴリに接近している群（c, h, j, q, w）があった。これらの群は，仕事との無関係性へと自己の位置づけを変化させており，熟練の未来展望から解離する自己を定位していると解釈できる。これらの群では，学びを構造化する諸資源にはっきりとした特徴はなかった。しかし，特に大きく逸脱している3ケース（c, h, j）中，cとjが実践隔離型であった。だがhは実践根幹型で教授－学習関係も安定していた。

以上，今回得られた対象者についての全体像を把握した。ここでは，初期に責任や無力といった葛藤状態に自己を位置づけた後，肯定的に職業参加へ向かう自己の位置づけを示した群は，職場の学びの諸資源において，7ケース中6ケースで仕事の割り当てが実践根幹型で教授－学習の関係性が安定していた。また，1, 2回の面接を通じて安定して自己を肯定的に位置づけていた群では，10ケース中8ケースで仕事の割り当てが新人－熟練分担型だった。この結果からは，職場における学びを構造化する諸資源のあり方が，新人の自己の位置づけ，つまり，アイデンティティの変化に関連することが示された。

(2) 対象者の語りからの検討：語りの変化過程と学びの手がかり

(1) では，対象者の全体像の把握から，職場実践における学びを構造化する諸資源としての，1. 新人への仕事の割り当ておよび 2. 教授－学習関係の安定性と主体の自己の位置づけの関係が示された。職業参加へ肯定的に向かう自己の位置づけは，職場の学びを構造化する諸資源のなかに，新人が何らかの学びの手がかりを見いだして，自らのあり方を方向づけたことと関連している。

ここでは，(1) において，アイデンティティの変化と職場の学びを構造化する諸資源としての職場環境が異なったケースを対比して見ることで，学習の資源の手がかりは主体の側からどう見えるかに焦点をあて，新人がどのように「学習のカリキュラム」を構成しているのかを具体的に示す。これによって，アイデンティティ変容がそれぞれの職場環境における学びを構造化する諸資源とどのような関連があるのかを検討する。

事例は，自己の位置づけの変化の仕方の異なる群より1ケースずつ，学びの手がかりや内的変化への言及が明確なケースを選択した。なお，選択した事例は必ずしも所属する群に共通した背景をもっているわけではないが，ここでは，LPP論の見方から，職場の学びを構造化する諸資源とアイデンティティの関係をより具体性をもって描くという目的から事例の選択を行った。対象となった事例は，仕事への葛藤や自己への無力感から，肯定的に仕事へ向かう自己の位置づけへと変化した看護師o（A子），安定して職業参加に肯定的に向かう自己を位置づけていたシステム・エンジニア（SE）m（B子），最終的に仕事の中で自己を位置づけられなかったメーカー・エンジニアc（C男）の3ケースである。なお，Table4で，各事例の職場についての情報を示す。

看護師o

【初期の葛藤と他者との関係の変化による看護師としての自覚】

Table5-①は1回目の面接でのA子の語りである。看護資格を持っていることが前提となる看護師の職場であり，新人看護師といえどもいきなり現場の厳しさに直面する。この時点ではA子の語りは，責任への重圧や無力感に焦点づけられていたが，2回目の面接時にその様相が変化する。

2回目の面接で彼女は仕事の技能が向上したことを語った（Table5-②）。しかし，ここで語られている技能の向上は，いわば仕事への慣れとしてあたりまえともとれる変化であり，他者が彼女の技能の向上を一定の評価軸をもって測定しているわけではなく，彼女の看護師としての技能の向上が著しいものであるのかどうかは明らかではない。しかし，Table5-③でみられるように，常に患者の出入りの激しい病院の環境と人的配置の変化によって，彼女に対する患者からの見方が変化したことは，彼女にとっては自分の看護師としての評価の変化である。

以前のように彼女に常時先輩がついており，さらに病室で叱咤されることがあるという事態は，新人の看護師であることを，周囲に可視化（上野，1999）させていた。しかし，1人で患者に対応する彼女は，今新しく入ってきた入院患者の目には‘新人’ではないただの看護師と映る。このように，初期の段階で常に先輩看護師が新人看護師に付くという人的配置は，逆にその配置が見えなくなったとき，患者にとって彼女を少なくとも「新人」ではないと示すための資源となっていたと考えられる。また，その患者からの見え方やそれに伴う彼女への反応を手がかりにして，彼女は「1人の看護師」として患者の家族からたよりにされる自身について語ることができている。

【先輩との関係の変化と学びの手がかり】

Table5-④で先輩への苦手意識を語っていたA子だが，Table5-⑤では看護師の徒弟的で，安定した関係の中で，学びと人間関係の深化が切り離せないことを見いだしている。この中で彼女は「勉強」によって患者やその疾患へのより深い理解を得ることで，その理解そのものが「上の先輩」と話すための手がかりとなり，その手がかりの利用が先輩からの「情報提供」によってより一層の理解を得る糧になると説明していた。

ここで，もう一度Figure1に戻って解釈すると，まず，「責任」「未熟」領域から，職業参加へ肯定的に向かう自己の位置づけへと変化したケースでは全員が仕事の割り当てが実践根幹型であり，1名（e）を除く全員が教授－学習関係が安定した職場だった。新人は責任感を強く感じるとともに，熟練者と同じ業務に携わることで，自分の未熟さが明確化され，仕事への未熟さに焦点づけられた自己の位置づけが語られていたと考えられる。しかし，2回目の面接時で職業参加へ肯定的に向かう領域にプロットされているのは，個々人の技術の向上もさるこ

Table 4　*3事例の職場の情報*

看護師A子
30名ほどの看護師が所属する混合科病棟。その年の新人は7名。科で割り振られたチーム看護と1人の患者を1人の看護師が継続して受け持つプライマリー看護を混ぜた形の体制をとっている。彼女を受け持つお姉さん看護師「プリセプター」が仕事上の面談や病院側から課せられた技術のチェックを担当している。仕事については勤務日が重なる他の先輩からもその都度教わっている。
システム・エンジニアB子
取引先のシステム開発会社にシステム・エンジニアを派遣する会社から，1人で大手システム開発会社に派遣された。大きなフロアに柱を隔てて2チームが机を構えるオフィス。彼女のチームは8名で，他の派遣会社から派遣されてきた者も本社（働いている取引先の会社）の社員も混在している。初期は書類のファイリングやシステムのチェックなどの作業を任された。
メーカー・エンジニアC男
採用された職種は取引先などに機器の説明をする講師。配属部署に同じ職種の人は13名いるが，ほとんど外回りでオフィスにはいない。パーテーションで仕切られているだけのフロアに，部署全体の責任者，営業，他種類の技術者，総務，秘書，契約社員などが所属している。講師としての業務がはじまる10月までの毎日，自分のデスクで教科書による「勉強」をするように言われていた。

Table 5　*看護師 o の語り*

① 職場参加時点での葛藤（1回目）
《「社会人になってまずはじめに感じたことは？」という質問の中で》
1 面接者：どの辺がきつかったの？
2 A子：うーん，なんだろう，すごい責任をずっしり感じた…(中略)…でも結局，その看護がいいことなのかとか，果たしてその行動がいいことなのかっていうのが，全然自信がない状態で働き始めるんで，…(中略)…なんかそういう状態で，責任とれるのかなーっていう気持ち。

② スキルの向上（2回目）
《「以前に比べてできるようになったことはありますか？」と言う質問に対して》
1 A子：…(前略)…〔以前は〕もうみんな一年生泣きながらやってた。それが，〔今は〕手術終わった患者さん，この手術をやるから，そろそろ帰ってくるんじゃないかって時間を見て，だから，今のうちに，これとこれとこれを，ベットサイドに用意しておいて，で，帰ってきたらすぐこういう風にできるようにセッティングしてこうっていう。

③ 患者からの見え方の変化（2回目）
《仕事を覚えたことで何か変わったことはあったかという質問の中で》
1 A子：何か，患者さんから見て，よっぽど話し込まない限り，一年だって言うのがわからないような感じになってきてるみたいで，最近は。…(中略)…でも，そういうの〔怒鳴られたり，先輩が常に付いていること〕が無くなって，注射にしても何にしても一人でやるようになったりすると，入院してきたばっかりの患者さんってわかんないじゃないですか，したら，何か，精神的な不安を家族の方から言われたりとか，

④ 先輩との関係の難しさ（1回目）
《「今の時点で仕事のなかでやりにくいと思うことはなんですか」という質問のなかで》
1 A子：えー，なんかどうだろう。うーん。先輩との関係でも，うん，ほんとはこんなんじゃないけど，先輩はこう思ってるのかなーっていうのもあったり。

⑤ 学習と他者との関係性の変化（2回目）
（他に見えるようになったり，わかるようになったことは？という質問に対して）
1 A子：見えるようになってきたこと。うーん。勉強をすればするだけその患者さんのことがわかるようになるじゃないですか。…(中略)…そういう今の状況がわかるようになると，その話を，リーダー，上の先輩と話せるようになってくるんですよ。普通に，この人，今この薬飲んでるから，便秘だとは思うんですけど，でもこうなんですよねーとか，そういうこと，言えるようになってくると，先輩の方も，はあ，私もよくわかんないんだけど，え，でも今とりあえずこういう感じになってるんだーとか，そういう情報を提供してくれる。

注1.〔　〕は著者が意味を補った部分。
注2. 下線は本文中で説明している部分。

となながら，事例のように業務上の人的編成の変化や，周囲の人との関係性の変化によって，主体が自己の立場やその役割をより明確に推し量ったり，その関係の中で学びの手がかりを見いだす可能性が考えられる。

また，今回の協力者における医療従事者のなかでは，sのみが異なる変化を示した。これに関しては，勤務病院の違いや経歴が他の看護師と著しく異なるなどの説明が可能であるが，別途より深い検討を必要とするだろう。

システム・エンジニア（SE）m

【単純作業からの参加】

B子は1回目の面接の時点で，看護師のA子とは対照的に，仕事に対して「頼まれたのをやってるだけ」「すごい単純」な仕事をあたえられているとたんたんと語る（Table6-①）。これは，Lave & Wenger（1991/1993）で描かれたように，新人に周辺的な単純作業を与えるという仕事の割り当て方を当然と受け止めているように見える。さらに，Table6-②で示すように彼女の職場の人間関係は希薄であり，教授－学習の関係をみると，人的な資源が期待されるものとはいえない。むしろ，職場の上司が彼女に忠告したようにマニュアルなどから「自分で勉強」することが学びの正統な方法だと，彼女自身が言及する。

また，この語りの中で彼女は初日の所在なさを語っている。この様子を聞く限りでは彼女の配属された職場は新人に対しては無関心な，人的な資源を利用できない居心地の悪い会社であるように思われる。しかし，それに対して彼女の語り口はそれほど深刻とも思えない。彼女は「前からいわれていたから」「誰かが教えてくれるわけじゃないから，自分で勉強してください」などの自社の人間の言葉を引用してその状況に対して自ら説明付けを行っていた。これは，新人である彼女に対して，自社の熟練者が派遣先の職場での振る舞い方の構えのようなものを与えて，彼女の職場への見え方をガイドし，このガイドによって彼女は学びの手がかりを自ら方向付けている。

【標準化された学習の資源】

2回目の面接では，「仕事らしい仕事」をするようになっていると，彼女の自己の仕事役割が以前よりも重要なものになってきた自負が語られる（Table6-③）。そのスキルの向上の源について彼女がどのように語っている

Table 6　*システム・エンジニア m の語り*

① 単純作業と責任の軽さ（1回目）
1 面接者：責任とか感じてないって最初に言ったんですけど，それはどういう意味でですか？
2 B子：例えばなんか与えられた仕事があって，何かそれを自分の責任でこなしてくって言うのが仕事なんだけれども，今はまだ，総務的な雑用とか先輩がやってきてこれ文章に間違えがないかとかチェックしてとか，…（中略）…って頼まれたのをやってるだけだから，自分ではこれがどう動いてるって言うのが全く分かんないまま笑，一行一行チェックしてくんだ，すごい単純だけど，時間かかるような仕事しかしてないから。

② 学びの手がかり（「自分で勉強」）（1回目）
1 面接者：略…まず初めに実際の職場に配属されて，まず思った感想みたいのってある？
2 何か自分の居場所がないっていう。…（中略）…
3 面接者：へー，じゃ，何にもすることがない時どうしてんの？
4 B子：え，勉強。
5 面接者：はあ，そっかそっか。
6 B子：（前略）…最初の初日は，ホントにね，机じゃあそこ座って，っていわれて，その時はパソコンも何にもなくて，一日中何にもすることがなくて，話しかけられることもなく，でも前から言われてたから，一人で行く場合は絶対そうなるからーって。…（中略）…
7 面接者：あー他に心得って教わってくるわけ？
8 B子：うーん，なんだろう。忙しい職場だから，誰かが教えてくれるわけじゃないから，自分で勉強してください。

③ 標準化された学び（2回目）
1 面接者：略…最近どうですか？
2 B子：最近。うーん。慣れたかな…（中略）…仕事も前よりは，仕事らしくなっては，来てます。
3 面接者：仕事らしくって言うと？
4 B子：前はホントに書類整理とか，人が作ったワードの文章とかを，直したりとか，だったんだけど，…（中略）…
5 面接者：こういうのとかっていうのは，教えてもらったりとかっていうのはするんですか？
6 B子：う――ん，ある程度は。

④ 標準化された学びとアイデンティティ（2回目）
1 面接者：今の時点で，次にできるようになりたいこととかって。仕事の内容的に。
2 B子：うーん，次にできるようになりたい。なんだろう。でも10月に，大きな資格の試験が，あるので，それに受かりたいなーっておもってて。…（中略）…
3 面接者：試験に受かるとどういうかんじになるの？
4 B子：実質的なところで行くと給料が少し上がるっていうのと，あとなんだろう，やっとなんだろう，一人前じゃないけど，まあまあかな，って認められるぐらい。

⑤ 自分の役割は「チェックマン」（2回目）
1 面接者：じゃあ，今の時点で，B子さんが他の人じゃなくて自分だからできるって思うようなことってある？
2 B子：自分だからできる？意外に，他の人のものをチェックするのは，几帳面と思われるほどするから，A型だね，ってよくいわれるんだけど，そういうところがあるから，ある程度何時間でも同じスピードでやっていける？…（中略）…
3 面接者：じゃ，今の時点で自分の職場での役割って言ったら，何って言えると思う？
4 B子：役割？うーん。チェックマン。

かを見てみると，面接者の「教えてもらったり」することはあるのか，との問いに，「う――ん」と答えに窮し，「ある程度は」と否定的に答えた。1回目の面接時に「自分で勉強」することを言われている職場であると語っていたとおり，雑用しか仕事がなかったときに読んでいた書類を「ちゃかちゃか読んでいたり」することで知識が増え，その当時も，基本的には「マニュアル」を読むなど標準化されたものに基づいて学習をしていると語られている。

【"一人前"の語られ方の看護師A子との相違】

Table6-④では，面接者が"次にできるようになりたいこと"について「仕事の内容的に」と質問したのにもかかわらず，B子は資格の試験について触れ，その試験に合格することが「一人前じゃないけど，まあまあ」として「認められる」と語った。ここでB子は自己の職業的"能力"を向上させるための手段として資格の取得を目指していると同時に，「資格」を取るということが，職場での自己を「一人前」に近づくために必要だという考えを示す。前出の看護師のA子は，「一人前」について患者との信頼関係や病院の人的な配置との関係において語った。それに対してB子では資格試験という標準化されたものから語った。これは，学びの手がかりとして，A子が先輩との関係性に言及したのに対して，B子が「マニュアル」を志向していたことと対応をなしているように考えられる。最終的に彼女は2回目の面接でも「単純作業」とは言いながら，自らの役割を「チェックマン」と位置づけて語り，その業務内容を自分の得意とするところであると語っていた（Table6-⑤）。

Figure1で1回目も2回目も職業参加に肯定的に向かう自己の位置づけ領域に安定してプロットされていたケースでは，多くが新人－熟練分担型であった。事例では，はじめに与えられた仕事は，「単純な」「責任のない」仕事であると，新人自身が特に葛藤を感じずにいた。このような新人と熟練との分業による職場の業務の構成は，新人にとって次に何ができることが，次のステップに進むことなのか，そのために，何をすることが自分の

職業的な資質を高めることにつながるのかが見えやすいと考えられる。このために，学習のカリキュラムの構成が容易で，自己の位置づけを常に安定して職業参加へ向けることができたのではないかと推測できる。

またB子の事例では，仕事の覚え方やスキルアップの指標も標準化されていた。ここでは，これらの標準化されたマニュアルや資格試験が，仕事のやり方や一人前かどうかを可視化する「道具」（上野，1999）として機能する。人間関係の比較的希薄な職場であっても，自己の評価をこのように明示化する「道具」の役割が，ここでのB子の安定した自己の位置づけを支えていたことも推測される[3)]。

メーカー・エンジニアc

【実践からの疎外と不安】

この職場ではC男が「孤独」というように，彼にとって業務上の知識につながる橋渡しとなる人物が存在しない。また，B子の場合と異なり，本来の業務には全く関わっていない。また，その状況をあらかじめ知らせるガイドもおらず，彼は「分からないことあったら聞いてね，とか，そんなもんない」と不満を語った。さらに，これから近い将来する仕事（メーカーの器機の使用方法の解説・指導）で独り立ちするために，今行っている「勉強」が正しい方略なのかどうかの疑問を表明している（Table7-①）。また，同時に1回目の面接で彼は自分の職種の先輩が新人と情報を「全部は」共有しないことについて否定的に述べている（Table7-②）。この語りからは彼にとって職場での業務をより効果的に進めるための知識の少なくとも一部は「先輩」の中にあると見えていることが示されている。

結局彼は2回目の面接の時点でも「仕事をしていないんで」というように，仕事の中での自分の役割を同定できなかった（Table7-③）。

この事例では，C男の中には最終的に自分が着任するはずの講師になるためには「職場の人」から得られる知識が大きいはずだと見えているのに，実際には現場実践から隔離された環境のなかで「勉強」という課題を与えられているというズレが生じているように見える。また，仕事の実践に参加できず，誰も話しかけてこないことや，仕事の実践から隔離された状況について，B子の事例のように，「それがあたりまえである」ということを示してくれるガイド役も周囲にはいない。「講師」の実践から隔離されることは，その仕事の全体像を見えにくくしていると同時に，自分が学びの手がかりと考える人的資源へのアクセスも妨げ，さらに，B子のように学びの方向性をガイドする他者にもアクセスできていないといえる。このことが，彼を2回目の面接で「仕事をしていない」という仕事からの隔離状況に陥らせてしまっている可能性がある。

以上，新人のアイデンティティの変化と職場実践における学びを構造化する諸資源との関係を明らかにするために，新人がどのように学びの手がかりを発見し，学習のカリキュラムの構成を行うのか，という見方から，自己の位置づけ（アイデンティティ）の変化のタイプの異

Table 7　*メーカー・エンジニアcの語り*

① 職場コミュニティからの疎外感（1回目）
1 面接者：実際に配属されて，まず感じた印象ってありました？
2 C男：孤独って（笑）。一言で言うとね，孤独。うちのオフィス特有だと思うんですけど，こっちがこう，しゃべりかけるまで絶対向こうからしゃべりかけてこないんですよ。
3 面接者：新人なのに
4 C男：新人なのに。分からないことあったら聞いてね，とか，そんなもんないんですよ。
《職場でのやりにくいことは？という質問の中で》
5 C男：…（中略）…朝行ってPC立ち上げてメールチェックして，メールチェックが終わると，もう，そそくさと勉強。こんなんでほんまに，10月になって独り立ちできんのかなーって言う感じですね。最近かなりこう，鬱病？（笑）。
6 C男：だから，みんな何もいうてくれないんで，ほんとに今やってることは正しいの？だんだんこわくなってくるんですよね。どうしようみたいな感じがあるんで。

② 情報は共有しちゃだめ（1回目）
《新しく覚えた業務についての話題で》
1 C男：お前，そんなんも知らんのか？みたいな。そういう返答がかえってくる人とかいるんですよ，やっぱり。それくらい自分で調べろよ，みたいな。…（中略）…ここは，逆に情報は共有しちゃだめなんです。
2 面接者：なんでなんですか？
3 C男：いや，俺はこんなこと知ってるぞ，みたいな。そういうのがあるらしくて，教えてくれないんですよね。全部は。全部は教えてくれないんですよ。

③ 仕事していない（2回目）
1 面接者：じゃ，今の時点でC男さんが他の人じゃなくて，自分だからできるようなことってありますか？
2 C男：な，ない。
3 面接者：それはなんで？
4 C男：いや，仕事してないんで。全部そこに行き着くんですけど。やっぱぜんぜんしてないですもんね。

3）なお，新人が常にこのような標準化の示すステップに沿って学びのカリキュラムを構成するとは限らない。たとえば，飲食チェーン勤務のtの会社は，多くがマニュアル化されているが，必ずしも社員がそれを遵守しているわけではないという。しかし，マニュアルに比較した自身の勤務店の評価などが語られるなど，標準化は少なからず自身や周囲を位置づける道具として利用され，安定した人間関係の中でより柔軟性を持った道具として機能しているようだった。

なる対象者の語りを検討をした。これより以下の点が明らかになった。

一つ，学びのカリキュラムが構成されるためには，職場に参加した新人自ら，職場の新人への仕事の割り当て方，業務上の人的編成，および職場に特有に利用される「道具」といった学びを構造化する諸資源の中に学びの手がかりを見いだすことが重要であることが示された。しかし，看護師oとシステム・エンジニアmの違いからわかるように，その諸資源のあり方は職場によって異なる。そのために，アイデンティティの変容過程は一様ではなかった。医療の現場のように，人的構成や人との関係のなかで学びのカリキュラムやアイデンティティが構成される職場では，初期に強い葛藤が体験された後，今度は逆にその人的関係が職業参加への学びや動機づけの基盤となっている可能性が示唆される。

二つ，システム・エンジニアmとメーカー・エンジニアcの事例の対比から，人間関係が希薄で，直接人的資源を利用できずとも，学習のカリキュラムの構成は可能であったが，そのためには実践に参加すること，および現前の実践を意味づけるガイドの存在が重要であった。新人が職場の学びを構造化する諸資源のなかで，何を学びの手がかりとして見いだすかは主体の能動的な作業であり，実践への参加がその能動的な作業に確信を与える。メーカー・エンジニアcの事例では，主体の視点から見た学びの手がかりと実践共同体が提供する学びの諸資源とのズレが主体の学習のカリキュラムの構成を妨げていた。現前の資源や実践を自己の未来像へとつながる意味を持ったものとして見えるためには，職場の先輩や同僚なども，次のステップへ進むためにその実践を乗り越えたのだというコミュニティに共有された「学びのストーリー」（有元，2001）にアクセスすることが必要なのではないか。

結　　語

本研究では，LPPの枠組みから，新人の自己をどのように語るかという「自己の位置づけ」としてのアイデンティティと職場の学びを構造化する諸資源との関連を示した。その中で，LPPでは提示されていない多様な新人の参加の形態を新たに示した。例えば，看護師は，新人が責任の軽い比較的簡単な仕事をするというよりは，職場実践の最前線に投げ込まれる形で職場参加がはじまっていた。また，本研究では，自己を位置づける過程と職場の学びを構造化する諸資源との関係を明らかにするにあたって，「学習のカリキュラム」という概念によって，新人が職業参加の中でどのように自らの学びの手がかりを見いだすのかという点に焦点化し，事例を提示した。これより，動機づけやアイデンティティの問題がどのように職場のもつ特徴と関連するのかが具体的に示された。今後職業スキルの援助や職場でのメンタルヘルスなどの分野においても，自己評価や動機づけ，アイデンティティの問題について，個人の内面だけでなく，周囲の人的・物理的資源の配置によって，新人の学習のカリキュラムをどのようにサポートするのかという視点を取り込むことは重要だろう。

最後に，今回は多様な職業現場における職業参加を扱ったが，それらの職業形態には分野の偏りがあり，さらにそれぞれの企業や団体の規模にばらつきがあった。また，対象者のほとんどが大卒以上の教育歴を持つという特徴もあった。LPPの分析の視座を利用することで，職業参加における主体の視点と職場環境との関連について，大枠を描くことはできた。しかし，今後，若者の就業支援により役立つ知見の提供のためには，職業や対象者の特徴をしぼった観察や調査を行い，その対象ごとに丁寧に検討をすることが必要だと思われる。また，そのために，詳細なフィールドワークを行うことが有効であろう。

文　　献

有元典文．(2001)．社会的達成としての学習）．上野直樹（編），*状況論的アプローチ：1　状況のインターフェース*（pp.84-102）．東京：金子書房．

Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, **7** (1-4), 335-342.

Burr, V. (1997). *社会的構築主義への招待：言説分析とは何か*（田中一彦，訳）．東京：川島書店．(Burr, V. (1995). *An introduction to social constructionism*. London: Routledge.)

Davies, B., & Harré, R. (1990). Positioning : The discursive production of selves. *Journal for Theory of Social Behaviour*, **20**, 43-63.

玄田有史．(2001)．*仕事の中の曖昧な不安：揺れる若年の現在*．東京：中央公論新社．

Hodges, D. C. (1998). Participation as dis-identification with/in a community of practice. *Culture, Mind and Activity*, **5**, 272-290.

小杉礼子．(2003)．*フリーターという生き方*．東京：勁草書房．

Lave, J., & Wenger, E. (1993). *状況に埋め込まれた学習:正統的周辺参加*（佐伯　胖，訳）．東京：産業図書．(Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. New York: Cambridge University Press.)

Linehan, C., & McCarthy, J. (2000). Positioning in practice: Understanding participation in the social world. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, **30** (4), 435-

453.

Linehan, C., & McCarthy, J. (2001). Revieling the "Community of Practice" Metaphor: An Analysis of Control Relation in a Primary School Classroom. *Mind, Culture, and Activity,* **8** (12), 129-147.

Mansfield, R. (1972). The initiation of graduates in industry: The resolution of identity-stress as a determinant of job satisfaction in the early months at work. *Human Relation*, **25**, 77-86.

望月葉子. (1991). 職業的発達過程の類型化の試み：仕事への志向性と心理・社会的発達との関連から. *教育心理学研究*, **39**, 57-66.

岡本祐子. (1999). アイデンティティ. 橋口英俊・佐々木正人・内田伸子・高橋恵子・湯川隆子・稲垣佳世子(編), *児童心理学の進歩：1999年版* (pp.197-211). 東京：金子書房.

大久保幸夫. (2002). *新卒無業：なぜ, 彼らは就職しないのか*. 東京：東洋経済新報社.

Riessman, K. C. (2002). Analysis of personal narratives. In F. J. Gubrium, & A.J. Holstein (Eds.), *Handbook of interview research: Context & method* (pp.695-710). California: Sage Publications.

下山晴彦. (1986). 大学生の職業未決定の研究. *教育心理学研究*, **34**, 20-30.

下山晴彦. (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究：アイデンティティの発達との関連で. *教育心理学研究*, **40**, 121-129.

杉村和美. (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し. *発達心理学研究*, **9**, 45-55.

杉村和美. (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因. *発達心理学研究*, **12**, 87-98.

Super, D. E. (1970). *職業生活の心理学：職業経歴と職業的発達* (日本職業指導学会, 訳). 東京：誠信書房. (Super, D. E. (1953). *The psychology of careers*. New York: Haper & Brothers.)

高木光太郎. (1992). 「状況論的アプローチ」における学習概念の検討：正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation) 概念を中心として. *東京大学教育学部紀要第32巻*, 東京大学, 東京, 265-273.

高村和代. (1997). 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて. *教育心理学研究*, **45**, 243-253.

上野直樹. (1999). *シリーズ人間の発達：9 仕事の中での学習：状況論的アプローチ*. 東京：東京大学出版会.

Walkerdine, V. (1997). Re-definiting the subject in situated cognition theory. In D. Kirshner, & J. A. Whitson (Eds.), *Situated cognition: Social, semiotic, and psychological perspective* (pp.57-70). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Wenger, E. (1998). *Community of practice: Learning meaning and identity*. New York: Cambridge University Press.

付記

本論文は2000年度東京都立大学人文科学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。修士論文および本論文作成にあたり首都大学東京須田治教授のご指導を頂きました。また白百合女子大学田島信元教授, 湘北短期大学岡本依子講師, 首都大学東京文野洋助手には貴重なご助言を頂きました。ありがとうございました。最後に, お忙しい中ご協力くださった社会人1年生のみなさまに心より感謝申し上げますとともに, よりいっそうのご発展をお祈り申し上げます。

Kamei, Miyako (Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University). *The Relation Between New Employees' Identity Change at Work and the Structuring of Learning.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2006, Vol.17, No.1, 14-27.

This study investigated the relation between changes in identity in a work context and the structuring of learning resources in the work community. Based on interviews with new employees, the research was conducted within the framework of Legitimate Peripheral Participation (LPP). New employees (n=23) took part in interviews just after they started work and again 5 months later. The results indicated that many new employees who had a "conflict-positive" pattern of identity were classified into "practical-basic type" job assignments and had stable teaching-learning work relationships. Newcomers displaying a "positive-positive" pattern were classified as a "newcomer-skilled type" in their job assignments. In contrast, among new employees who stopped work there was a case of a worker who became alienated from practical participation. Based on the comparison of these three types of cases, it was apparent that various structural learning resources for practical work have a close connection to the process of identity change in new employees. Further, the existence of a guide that gives meaning to existing practices and practical participation is important in constructing a learning curriculum.

【Key Words】 Work participation, Identity change, Occupational development, Legitimate Peripheral Participation, Structure of resources for learning

2003. 3. 20 受稿, 2005. 9. 6 受理

Appendix：*「新人としての自己」データマトリックス（46×5の行列を入れ替えて表示）*

ID	a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w	a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w
インタビュー	1回目	2回目
仕事から疎外された自己	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 0 0 0 0 0 1 0 0	0 0 1 0 0 0 0 1 0 1 0 0 0 0 0 0 1 0 0 0 0 0 0
未熟で無力な自己	1 0 1 1 1 1 0 0 0 0 1 0 0 1 1 1 0 1 1 0 0 1 1	0 0 1 1 0 0 1 1 0 1 0 1 0 0 1 1 0 0 1 0 1 0 1
未熟だが向上を目指す自己	1 1 0 1 0 1 1 1 1 0 1 1 1 1 1 0 1 1 1 1 0 1 1	0 1 0 1 1 0 1 0 1 0 1 1 1 1 1 1 1 1 0 1 1 1 0
有能な自己	0 1 0 0 0 1 0 1 0 0 1 0 0 0 0 0 1 0 1 1 0 0 0	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
責任の増加した自己	0 0 0 0 1 0 0 0 0 0 1 0 0 1 1 1 1 1 0 0 0 1 0	1 0 0 1 0 1 0 0 1 0 0 0 0 0 1 0 0 0 1 0 0 1 0

発達心理学研究
2006, 第17巻, 第1号, 28-38

原　著

広汎性発達障害児に対する「心の理解」の発達支援：「宝さがしゲーム」による「見ることは知ることを導く」という原理の理解への事例的検討

西原　数馬（千葉県立我孫子養護学校）
吉井　勘人（筑波大学大学院人間総合科学研究科[1)]）
長崎　勤（筑波大学人間総合科学研究科）

広汎性発達障害児A児の発達評価より，「心の理解」における発達課題が「信念」理解における他者の「見ることが知ることを導く」という原理（Pratt & Bryant, 1990）の理解であると評価されたため，これを指導目標とした。指導方法としては，親しい他者との相互交渉を利用した指導である「宝さがしゲーム」共同行為ルーティンを用いた。指導の結果，最初は指導場面内で変化が見られた。まず「宝さがしゲーム」内の直接援助を行った要素（例えば「隠した場所を教えない」行動など）が徐々に，自発によって遂行可能になった。「違う場所を教える」行動など直接援助を行わなかった要素についても徐々に遂行可能になっていった。指導場面以外でも，一切援助を行わなかった硬貨隠しゲームにおいて「見ることが知ることを導く」という原理を意識する様子がみられた。また，行動観察において他者の叙述的な心的状態に関する発話数が増加した。さらに，日常生活場面においても他者の「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指標となるエピソードが報告・観察された。以上より，ゲーム共同行為ルーティンによって，「見ることが知ることを導く」という原理の理解が促進された可能性が考えられるが，指導後も，誤信念課題を通過できなかった。これはA児における物語理解の困難性と関連があると考察された。

【キー・ワード】 広汎性発達障害，心の理解，「見ることが知ることを導く」という原理，共同行為ルーティン

問　題

広汎性発達障害児では，「他者の心的状態（思考，信念，欲求，意図等）を推測したり，この推測に基づいて他者が言ったことを解釈したり，他者の行動を理解したり，予測したりする能力」（Howlin, Baron-Cohen, & Hadwin, 1999）と定義される，他者の「心の理解」の獲得の困難性が指摘されており（Baron-Cohen, 1995），その発達支援が課題になっている。従来このような能力については「心の理論」という用語でも言及されるが，「心の理論」という用語は，限定的に，通常4歳後半以降に可能になる誤信念理解（他者の誤った「思い込み」の理解）を意味することも多い。本研究では，様々な段階の心的状態の理解を広く意味するために「心の理解」という用語を用いる。また，本研究では「心の理解」と言う場合，他者の「心の理解」を意味することとし，自己の「心の理解」についての検討は行わない。

健常乳幼児の「心の理解」の研究は，1980年代では誤信念理解をめぐる研究が主で，1990年代には誤信念理解以前に獲得される様々な他者の「欲求」（欲する・望む等）や「信念」（信じる・考える等）の理解について研究が多くなされた（Baron-Cohen, 1995）。現在では，「欲求」理解が高次の「信念」理解の前提となること（Wellman & Woolley, 1990）が示された。また，「信念」理解が乳幼児において以下のようなプロセスで進むことも明らかになりつつある。

まず0歳後半～1歳前半に乳幼児は共同注意（joint attention）や提示行為（showing）が可能になる。これは「『他者の関心』への関心」が高まることを示しており，他者の心的状態認知の第一歩となる（長崎, 2001）。次に，1歳半前後以降に幼児はコミュニケーションでの行き違いの際に，コミュニケーションを繰り返したり，伝達手段を変えたりする修正方略（repair strategy）を行うことから，他者の意図を想定できるようになることが示されている（Wetherby, Alexander, & Prizant, 1998）。更に幼児は1歳半頃から，他者が何か（絵や物など）を見ることで，それについての視覚的な経験を持つことを理解するようになり，2歳半頃までに，他者の視覚的経験が自己の視覚的経験とは異なることを理解するようになることが示されている（Perner, 1991）。

このような他者意図理解の発達の後，4歳頃には幼児は「見ることが知ることを導く」（"Seeing-Leads-to-Knowing"）という原理（Pratt & Bryant, 1990）が理解できるようになる。この原理は，「知る」という認識的な状態が「見る」ことを中心とした知覚経験（「聞く」「感じる」「読む」等も含む）の産物であるということの理解，

1）現所属：筑波大学附属大塚養護学校/筑波大学人間総合科学研究科

すなわち他者の知覚経験と認識状態の因果関係の理解を意味する。例えば「見られるとわかってしまう」「見えるとばれてしまう」ことの理解である。Baron-Cohen (1992) は「見ることが知ることを導く」という原理の理解の発達について「Gratchの技法」(Gratch, 1964) と呼ばれる方法を用いて実験を行った。「Gratchの技法」とは，実験者と対象児が向き合い，一方が隠し役，一方が探し役を担い，隠し役は硬貨等の小さな物を左右の拳のどちらかに隠し，探し役が当てるゲームである。Baron-Cohen (1992) は「Gratchの技法」における隠し手としての行動が，健常児で以下の順序で発達することを示した。①「物隠し」行動ができる段階（硬貨の入った手を握って，相手から見えないようにする行動）→②「情報隠し」行動ができる段階（対戦相手に見えない場所で隠すなど，相手が見て答えを知ってしまうような情報を隠す行動）→③「誤った情報を与える」行動ができる段階（相手が見て，誤った拳に入っていると思い込むような情報を故意に与える行動）。ここからBaron-Cohen (1992) は「情報隠し」行動および「誤った情報を与える」行動が「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指標であることを示した。

そして，幼児は4歳半頃に「他者の誤信念理解」(Baron-Cohen, 1995) ができるようになっていく。誤信念理解とは，他者が真実の事柄を考える（真実の信念を持つ）だけでなく，明らかに誤った事柄を考える（誤った信念を持つ）こともあることの理解である。

以上のような「心の理解」の発達プロセスについての知見は，広汎性発達障害児における他者の「心の理解」の困難性の評価の視点や枠組みとして重要であると考えられるため，本研究においても対象児の「心の理解」の評価の視点・枠組みとしたい。

では，このような「心の理解」の発達はどのようなメカニズムによって起こるのであろうか。どのような発達メカニズムを想定するかは，発達支援の方法論の検討に深くかかわっている。「心の理解」の発達メカニズムの説明に関しては，内的な表象システムの役割を重視する立場と，他者の役割を重視する立場があり，議論が行われてきた。まず，内的な表象システムを重視する見解として，Baron-Cohen (1995) の「心の理論機構」(TOMM: Theory of mind Mechanism) という内的なモジュールの役割を重視した立場がある。一方，Bruner & Feldman (1993) やNelson (2003) らは，「心の理解」の発達における大人の援助，他者との共同行為，他者との言語的交流といった人とのやりとりの役割を重視する。内的な表象システムを重視する立場と，他者の役割を重視する立場は，一見対立的に見える。しかし遠藤 (1997) が指摘するように，コンピテンスについては内的な表象システムが関わるが，運用については他者との関係やそこで生じる情動が大きく関係していると考えられ，双方への関与が重要であると言える。したがって，広汎性発達障害児における他者の「心の理解」の発達支援においても，内的な表象システムの発達を支援する際に，他者との関係を重視した支援を行うなど，双方が関与する形で支援することが必要であると考えられる。

この双方に配慮した指導として，長崎・山田・亀山 (2000) の共同行為ルーティンを用いた「心の理解」の発達支援がある。共同行為ルーティンによる指導とは，日常生活やゲームにおける時系列化された行為を分析し，再構成し場面設定を行いそこでのやりとりや言語の獲得を指導する方法である（長崎・吉村・土屋, 1991)。この指導ではまず，大人の援助，他者との共同行為，他者との言語的交流といったやりとりが生起しやすい。また大人の援助や限定された文脈という手がかりにより，子どもは他者の意図の推論がより容易にできる。つまりこの指導は，他者とのかかわりを重視した「心の理解」の発達支援に適した方法である。また共同行為ルーティンによる指導では，指導に先立ってルーティン構造の分析を行うため，指導場面の流れを各要素に分解してとらえることができ，指導のポイントを整理することができるというメリットもある。長崎ほか (2000) は7歳のダウン症児を対象に，簡単なおもちゃを作る共同行為ルーティンを設定し，指導者や母親の欲求意図を尋ねる行為（「赤と青，どっちがいい？」など）の促進を目的とした指導を行った。その結果，指導開始時は指導者や母親に好みの色や材料を尋ねる時に，自分の好きな方を選んで相手に尋ねずに与えてしまっていたが，指導者からの段階的援助により，他者の欲求意図を尋ねる行為が可能になり，指導場面以外でも般化した。しかし，広汎性発達障害児の「心の理解」の発達支援に共同行為ルーティンを適用した指導研究はまだなく，その適用の可能性の検討が必要である。

Howlin et al. (1999) は，広汎性発達障害児に対し誤信念課題などを訓練することで「心の理解」を促進する試みを行っている。この試みでは机上で図版などを用い，質問－応答形式によって指導者が対象児に「心の理論」に関する知識を教える形式が中心であるが，指導場面以外への般化の困難性が指摘されている。その原因の1つとして，これらの試みにおいて他者の役割（他者との相互交渉や大人の援助など）が軽視されていることが考えられる。他者の役割は健常乳幼児の「心の理解」発達において重要な役割を果たす。したがって，内的な表象システムだけでなく，他者との関係も重視した支援が必要であろう。

一方，Reinecke, Newman, Kurtz, Ryan, & Hemmes (1997) や奥田・井上 (2002) は応用行動分析の立場から研究を行った。これらの研究では，広汎性発達障害児

に対して「心の理解」の指標となる行動（例えば，「Gratchの技法」における「情報隠し」行動および「誤った情報を与える」行動）を標的行動とし，訓練を行い，標的行動の形成に成功した。しかし，対象児が「心の理解」とは無関係に，標的行動の型をステレオタイプ的に学習し，機械的に遂行するようになっただけである可能性はないであろうか。機械的な遂行となる傾向があるとすれば，これらの研究では，応用行動分析の技法による標的行動の形成が重視され，対象児が自ら他者の「心」に気づいていくプロセスが軽視されていることが関係しているかもしれない。

子安（1997）は，子どもは「ほかの子と友達になったりけんかをしたり，協力し合ったり妨害し合ったりするなかで，子どもは目には見えない『心』というものを感ずるようになり，また人の『心』の内容が少しずつ読めるようになってくる」と述べ，子どもが他者との相互交渉の中で他者の「心」に自ら気づいていく過程を強調した。したがって「心の理解」の発達支援においても，対象児の内的な「気づき（awareness）」を促す配慮が必要であろう。

以上より，本研究では生活年齢6歳11ヶ月の広汎性発達障害児を対象児とし「心の理解」の発達支援を試みる。まず，「見ることが知ることを導く」という原理の理解をはじめとした「心の理解」を促す指導を次の点に配慮しながら実施する。(1) 他者との相互交渉を利用した指導である共同行為ルーティンを用いる。(2) 指導に際しては，指導者の働きかけ等を通じて対象児が他者の心的状態に気づく機会を多く与える。そして，この指導の効果を事前事後の比較と指導時の変化から検討する。また，広汎性発達障害児における「見ることが知ることを導く」という原理の理解と誤信念課題の通過との関係についても検討する。

方　　法

対象児　児童相談所で診断を受けた，生活年齢6歳11ヶ月の広汎性発達障害児1名（男児，以下A児とする）。小学校特殊学級1年に在籍し，1日に1～2時間は特殊学級で国語・算数の個別指導および集団指導を受け，3～4時間は通常学級で教育を受けていた。新版K式発達検査を行った結果，姿勢・運動3:6（上限），認知・適応5:8，言語・社会3:8，全領域4:6であった。三語文程度の発話が可能で，5W1Hの質問が可能であった。

生態学的評価　家庭での様子として，A児の会話や報告がわかりにくい場合があるなど，言語的交流の困難が保護者から報告された。保護者からは「A児が他人とのやりとりをもっと楽しめるようになってほしい」という要望が出された。また幼稚園での行動観察では，A児は他児に興味を示し進んでかかわろうとしていたが，言語的交流の困難性から，他児から誤解されることや，やりとりを楽しむことができない場面がみられた。また家庭や幼稚園では，絵本や紙芝居には興味を示さず，絵本を見ることすら嫌がる傾向が見られた。

以上の評価から，A児には言語的交流の遅れが顕著であり，保護者のニーズも強く，幼稚園での行動観察でも他児との相互交渉上問題があった。したがって，様々な場面を通して言語的交流の発達を支援する必要があり，その一環として言語的交流の発達の基盤といえる（Bruner & Feldman, 1993；Nelson, 2003）他者の「心の理解」の指導を行うことは妥当であると考えられる。まず，次の事前評価を実施し，A児において他者の「心の理解」のどの段階に困難が見られるのかを特定した上で，それに応じた目標を設定し指導を行う。

事前評価の手続きと結果

標準検査　「心の理解」の評価として「TOM心の理論課題検査」（森永・黛・柿沼・紺野，2002）を実施した。結果は「心の理解」の相当年齢が3歳後半で，判定結果は「問題あり」であった。

「欲求」理解の発達評価　「信念」理解の前提として「欲求」理解の評価を行った。幼児における「欲求」理解の1つの到達点として，他者の欲求意図の自律性（autonomy）の理解があり，その指標となるのが選択欲求質問（相手の欲求を自発的に尋ねる行動）である（長崎・松浦，1999）。A児は他者に贈物をあげる時も，他児に好きな食べ物を尋ねる時も，選択欲求質問を行っていた。つまりA児は他者の欲求の自律性を理解でき，長崎・松浦（1999）による健常児の発達研究に照らせば「欲求」理解については健常児の4歳以上のレベルにあると考えられ，「信念」理解の前提としての「欲求」理解の発達は十分な状態であると評価された。

「信念」理解の発達評価　健常乳幼児においては0歳後半から1歳前半にかけて発達する「『他者の関心』への関心」について，A児にはこの行動指標となる提示行為が見られた。例えばA児には，玩具を見せる時に「みてみて」と言って玩具を差し出す行動が見られた。次に1歳半前後に発達する「他者の意図の想定」については，A児にはこの行動指標となる修正方略が見られた。例えばA児には，指さしで伝えた要求が相手に伝わらない時に，相手の表情を確認してからそれに応じ，ジェスチャー・言語等の伝達手段を付加し，指さし・発声から単語・文へとより高次な手段に伝達手段を変えるなど，伝達を修正して再要求する行動が見られた。2～3歳台の幼児において発達する他者の知覚経験についての理解については，A児は行動観察において，指導者や他児の「見せて」に応じ，シール等を裏表・上下正しく向けて

提示する行動が，複数場面で観察された。また4歳頃に発達する「見ることが知ることを導く」という原理の理解については「Gratchの技法」を実施したところ，A児では「情報隠し」行動および「誤った情報を与える」行動が見られなかった。かくれんぼ等の「見ることが知ることを導く」という原理の理解を必要とする遊びに参加することもなかった。したがって，この原理の理解はできていないと評価された。最後に，4歳半頃に発達する他者の誤信念理解については，すでに述べた「TOM心の理論課題検査」（森永ほか，2002）を実施した際，これに含まれる「スマーティーズ課題」型課題と「サリー・アン課題」型課題に不通過であった。

以上の「信念」理解の発達評価から，A児には他者の「信念」理解に困難があり，現在の発達課題が「見ることが知ることを導く」という原理の理解であることが示された。

心的状態発話による評価　心的状態発話とは，「心の理解」の発達指標の1つであり，健常幼児において2歳までに出現し，3歳以降に増加することが知られている「欲しい」「好き」「思う」「信じる」等の心的状態を表す単語や，明確な単語は使用していないものの機能的に上記のような心的状態に言及している発話（「気をつけてね」「どっちがいい？」等）である。評価を実施した際，A児の動機づけが高く，発話量の増加が期待できる紙粘土遊び場面（15分間）を用いた。この場面では，A児と大人が机を挟んで座り，互いに1袋の紙粘土を使用して粘土作品を制作した。作品については制約がなかった。A児と大人は，製作過程において，互いの作品について自由に会話を行った。この紙粘土遊び場面において生起した心的状態発話を，佐藤・長崎・小野里（2000）のカテゴリーを参考にして作成した心的状態発話のカテゴリーにより分類した。その結果A児においては自己の欲求に関する発話（「～したい」等）は7，他者の欲求に関する発話（「ママ（が），欲しい」等）が1，自己の心的状態の叙述に関する発話（「これ（は），おいしい」等）は2の発話がみられたが，他者の心的状態の叙述に関する発話（「ママ（が），痛い」等）については0であった。他者の心的状態の叙述に関する発話の産出と他者の「信念」理解は，下位の認知能力において関連があると考えられているため（Bartsch & Wellman, 1995），A児においては（「欲求」理解や自己の「信念」理解に比して）他者の「信念」理解に特に困難があることが推察された。

以上の事前評価から，A児においては他者の「心の理解」のうち他者の「信念」理解，特に「見ることが知ることを導く」という原理の理解に困難があることが推察された。したがって本研究では，クリニックにおける個別指導でA児の他者の「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指導を中心に行うこととした。なお，本指導に先立ち，指導の目的と内容を保護者に説明し了承を得た。

指導の手続きと結果

指導の手続き

1）指導場面：本児が他者との相互交渉を通じて様々な情動を経験することができる場面として，「宝さがしゲーム」共同行為ルーティンを設定した。ゲームのルーティン構造の分析をTable 1に示した。A児と対戦相手の大人は，宝さがしゲームのセット（3個の逆さまに置かれた紙コップとその台）が置かれた机を挟んで向き合い座った。3個のコップのいずれかの下に隠し手は玩具を隠し，探し手は1回のみコップを開けることができ，当たれば探し手の勝ち，外れれば隠し手の勝ちとなっていた。本指導はT大学内のクリニックにおいて，原則的に月2回，1回2時間（個別指導40分，A児とA児以外の広汎性発達障害児1名とダウン症児1名の計3名によるおやつ場面を用いた小集団指導20分，母親面接30分）の指導の一部である。個別指導では，「見て！聞いて！活動」（show and tell；A児が家庭から持ってきたおみやげなどを手がかりにして，自分の経験を指導者などに伝える），工作，文字指導などの指導を通して，言語・コミュニケーションの発達支援を行った。

2）指導計画：セッション（以下Sとする）1をベースラインとし援助を一切行わなかった。指導期（S2～S6）では援助を行った。指導目標となる行為が安定して生起するようになった後，対人般化測定のため，指導に参加していた男性指導者と指導に参加していなかった女性指導者と1Sずつ，援助なしでゲームを行った（7・8S）。1セッション3試行で，1試行はA児と対戦相手とが交互に隠し手になることで構成され，A児が先に隠し手になった。

3）「宝さがしゲーム」場面における指導目標：Table 1の要素のうち「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指標となる，③[対戦相手注視]，④[対戦相手に見えないようにする]，⑥[隠し場所を不規則にする]，⑩[隠した場所を教えない]，⑪[違う場所を教える]において，Table 1のそれぞれの要素の「要素において目標となる行動」を遂行できることを指導目標とした。

4）指導手続き：A児が他者の「見ることが知ることを導く」という原理に気づく機会を与える援助を行った。すなわち要素④[対戦相手に見えないようにする]において，まず「相手が見ていることを強調するために，相手が顔をコップに近づける」という援助を行った。この援助によっても相手に見えないように隠すことができない場合，次に「『相手が隠すところを見た時には，相手は隠し場所がわかってしまう（=「見ることが知ることを導く」という原理）』ことを強調するため，指導者が相

Table 1　*「宝さがしゲーム」のルーティン構造の分析(A児が隠し手の番)*

成分	要素名と要素において目標となる行動	
設定	①着席・説明：椅子に座り，司会によるルールの説明を聞く	
実行	(隠し手としてのA児の行動)	(探し手としての相手の行動)
	②司会から玩具を受け取る	
	③対戦相手注視：隠す前に，対戦相手が見ているかを確認する。つまり，対戦相手に隠すところが見えて，対戦相手は隠す場所を知ってしまう状態か(対戦相手に見えないようにする必要がある状態か)，または，対戦相手がちゃんと見ていない状態になっていて，隠す場所を知らない状態かを確認する。	
	④対戦相手に見えないようにする：隠す前に，相手に「後ろを向いて」「目をつむって」「見ないで」等と言い，後ろを向かせたり，目をつぶらせる。つまり，相手が隠すところを見てしまい，隠す場所を知ってしまわないようにする。	
		⑤自分が見えないようにする：「後ろを向く」「目をつぶる」等して，隠し場所が見えないようにする。
	⑥隠し場所を不規則にする：毎回隠す場所を不規則に変える。つまり相手が毎回同じ場所にあることを見て，隠す場所を知ってしまわないようにする。	
	⑦隠す：コップの下に，はみ出さないように玩具を入れる。	
	⑧隠したことを伝える：「どっちだ？」「もういいよ」等と言うなどし，対戦相手に隠し終わったことを伝える。	
		⑨前を向いて考える
	⑩隠した場所を教えない：隠した後，相手が隠した場所を考えている時，玩具のある場所を「ここだよ」と言って指さしたり，玩具のない場所を「ここにはないよ」と言ったり指さしたりし，隠した場所を教えない。つまり相手が隠した場所を見たり聞いたりして，隠した場所を知ってしまわないようにする。	
	⑪違う場所を教える：隠した後，対戦相手が隠した場所を考えている時，玩具のない場所を「ここだよ」と言って指さしたり，玩具のある場所を「ここにはないよ」と言ったり指さしたりして，間違った場所を教える。つまり，対戦相手が間違った場所を見たり聞いたりして，間違った場所を知るようにする。	
		⑫コップを開ける
	⑬勝敗確認：「当り」「外れ」等と言ったり，玩具を，勝った場合には得たり，負けた場合には相手に渡したりして，勝敗を確認する。	
確認	⑭役割交代：順番を守る(A児が探し手時には，次はA児が隠す番なので，A児は対戦相手に玩具を渡さない。A児が隠し手時には，次は対戦相手が隠す番なので，A児は自分で隠してしまおうとしない)	

手の顔を指さし『ああ，わかっちゃう』と言う」等の援助を行った。また要素⑩[隠した場所を教えない]においては「『A児によって相手が隠し場所を示された時は，相手は隠し場所がわかってしまう(＝「見ることが知ることを導く」という原理)』ことを強調するため，指導者が相手を指さし『先生は，わかっちゃうけど，いいの？』と言う」という援助を行った。要素④[対戦相手に見えないようにする]，⑩[隠した場所を教えない]に関する援助手続きをTable2に示した。要素③[対戦相手注視]，⑥[隠し場所を不規則にする]，⑪[違う場所を教える]に対しては，援助を行わず指導の効果を観察した。これらの要素に援助を行わなかったのは，指導の効果を観察する狙いの他，A児が自ら「気づく」ことを重視するため，援助を行う要素を少なくする狙いや，多くの要素で援助を行うことでゲームが途切れ，自然な流れが失われることを避ける狙いがあった。

5）分析方法：「宝さがしゲーム」場面における変化について，要素④[対戦相手に見えないようにする]，⑩[隠した場所を教えない]についてはFigure 1, 2に示した，援助水準による遂行状況についての4段階評価および行為の遂行に至る過程のプロトコルにより評価した。要素③[対戦相手注視]，⑥[隠し場所を不規則にする]，⑪[違う場所を教える]については目標となった行動の生起の有無で評価を行った。「宝さがしゲーム」場面以外における変化については，指導前に「心の理解」の発達評価として行った「Gratchの技法」(Gratch, 1964)や誤信念課題，心的状態発話の生起数の測定を指導後(対人般化2の後)に再び行った。さらに「宝さがしゲーム」指導場面以外の個別指導場面でのエピソード，指導後の母子面接の際に収集したエピソード，学校での様子についてのエピソード(対人般化2以降，指導者が週に1回特殊学級，通常学級を訪問し収集した)も評価した。

Table 2　*A児が「見ることは知ること」を理解するための，要素④および⑩に関する援助手続き*

要素④［対戦相手に見えないようにする］での行動	要素④での指導者・対戦相手による援助（直接的な援助）	要素④での援助後の行動	要素⑨［前を向いて考える］での対戦相手による援助（間接的な援助）］
対戦相手に見えないようにした場合（「後ろを向いて」等と言うなど）	（援助なし）	（援助なし）	「相手が隠すところを見ていない時は，相手は隠し場所を知らない（＝見ないことは知らないこと）」ことを強調するため，相手は困惑した表情で「わからないな，どこかな」等と言いながら大げさな身振りで迷い，できる限り答えを外しA児の勝利となるようにする。
対戦相手が前を向いて見ているのに隠そうとした場合（「後ろを向いて」等と言わない）	［1］対戦相手が見ていることを強調するために，対戦相手が顔をコップに近づける（段階的援助［2］へ） ［2］「相手が隠すところを見ると，相手は隠し場所を知る（＝見ることは知ること）」ことを強調するために，指導者が相手の顔を指さし「あ！わかっちゃう」と言う	対戦相手に見えないようにする	対戦相手は困惑した表情で「わからないなあ，どこかなあ？」等と言いながら大げさな身振りで迷い，できる限り答えを外す（できる限りA児の勝利となるようにする）。
		対戦相手に見えないようにすることができない	「対戦相手が隠すところを見ると，対戦相手は隠し場所を知る（＝見ることは知ること）」ということを強調するために，対戦相手は迷わずに答えを当てる（A児の敗北となる）

要素④［対戦相手に見えないようにする］に関する援助手続き

要素⑩［隠した場所を教えない］での行動	要素⑩での指導者による援助（直接的な援助）	要素⑩での援助後の行動	要素⑫［コップを開ける］での対戦相手による援助（間接的な援助）
対戦相手に隠し場所を教えずに待つことができた場合	（援助なし）	（援助なし）	対戦相手は困惑した表情で「どこかなあ？」等と言いながら大げさな身振りで迷い，答えを外す（A児の勝利となる）
対戦相手に隠し場所を教えてしまった場合	「相手は隠し場所を示されると，相手は隠し場所を知る（＝見ることは知ること）」ことを強調するため，指導者が相手を指さし「先生は，わかっちゃうけど，いいの？」と言う	対戦相手に隠し場所を教えてしまった場合	対戦相手は迷わずに答えを当てる（A児の敗北となる）
		対戦相手に隠し場所を教えることをやめた場合	対戦相手は困惑した表情で「わからないなあ，どこかなあ？」等と言いながら大げさな身振りで迷い，できる限り答えを外す（できる限りA児の勝利となるようにする）。

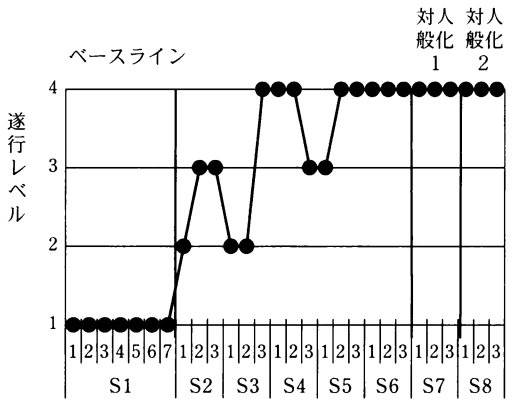
要素⑩［隠した場所を教えない］に関する援助手続き

6）信頼性：「宝さがしゲーム」の全24試行中8試行，「Gratchの技法」の全16試行中5試行における要素の遂行状況について，2名の観察者による一致率をA/(A+D)×100の算式（Aは観察者間の一致数，Dは観察者間の不一致数）により算出し，それぞれ97％，90％の一致率を得た。また，「紙粘土遊び」場面の全心的状態発話について，2名の観察者が各カテゴリーに分類し，分類された語の一致率を求めた。その結果100％の一致率を得た。

指導の結果

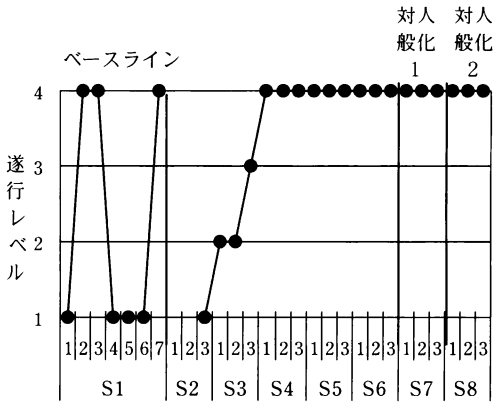
1）援助を行った要素の遂行：要素④［対戦相手に見えないようにする］の遂行状況をFigure1に示した。S1（ベースライン）では対戦相手に見えないように隠す行動が生起しなかった。しかし援助を導入すると，S2の1試行目からS3の2試行目までは援助により生起した。さらにS3の3試行目からS4の2試行目までは自発で生起し，S4の3試行目とS5の1試行目では援助が必要であったが，S5の2試行目からは再び自発で生起するようになり，以後S6，S7（対人般化1），S8（対人般化2）においても自発で安定して生起した。

次に，要素⑩［隠した場所を教えない］の遂行状況をFigure2に示した。S1では隠した場所を教えない行動が7試行中4試行で生起がない状態，つまり隠した場所を教えてしまう状態であった。援助を導入しても，S2の3試行目では同様の状態であった（S2の1・2試行目では，指導者がA児の側に玩具を放置したことで，A児が



(Y軸はレベル1：対戦相手が前を向いて見ているのに隠してしまう→レベル2：「指導者が対戦相手の顔を指さし『ああっ，わかっちゃう！』と言う」という援助で対戦相手に後ろを向かせるなどし，対戦相手に隠すところを見えないようにする→レベル3：「対戦相手が顔をコップに近づける」という援助で対戦相手に後ろを向かせるなどし，対戦相手に隠すところを見えないようにする→レベル4：自発で，隠す前に対戦相手に後ろを向かせるなどし，対戦相手に隠すところを見えないようにする)

Figure 1　*ルーティン要素④の遂行状況の4段階評価，および遂行状況*



(Y軸はレベル1：対戦相手に隠し場所を教える→レベル2：対戦相手に隠し場所を教え，「指導者が対戦相手を指さし『先生は，わかっちゃうけど，いいの？』と言う」という援助で，一旦教えることをやめるが，また教える→レベル3：対戦相手に隠し場所を教えるが，「指導者が対戦相手を指さし『先生は，わかっちゃうけど，いいの？』と言う」という援助で，対戦相手に隠し場所を教えることをやめる→レベル4：対戦相手に隠し場所を教えずに待つ)

Figure 2　*ルーティン要素⑩の遂行状況の4段階評価，および遂行状況*

玩具で遊んでしまい，評価ができなかった)。しかし，S3の1・2試行目では，援助によって，一旦は教えることをやめる行動が生起するようになった。さらにS3の3試行目では，援助によって，教えることを完全にやめ，再び教えないようになった。そして，S4の1試行からは，援助がなくても，隠した場所を教えずに待つ行動が生起するようになり，以後，S4，S5，S6，S7(対人般化1)，S8(対人般化2)においても，援助がなくても，隠した場所を教えずに待つことができた。

2) 直接援助を行わなかった要素の遂行：要素③[対戦相手注視]では，S1では対戦相手注視が生起せず，指導期に入ってもS3の2試行目まで生起がなかった。しかし，S3の3試行目以降は全試行において対戦相手注視が生起した。

要素⑥[隠し場所を不規則にする]では，S1では，全7試行において玩具を真ん中のコップに隠し，指導期に入っても，S2では真ん中のコップに隠し続け，S3でも，隠し場所はすべて右で，隠し場所を不規則にすることはできなかった。しかしS4の2試行目からは全試行において，隠す時に毎回，隠し場所を不規則に変えるようになった。

要素⑪[違う場所を教える]では，S1では違う場所を教える行動が生起せず，指導期に入っても，S3の3試行目まで生起がなかった。しかし，S4の1，3試行目およびS5の1試行目において「相手に対し，玩具のないところを『ここだよ』等と言って指さす」行動が，S5の2，3試行目において「相手に後ろを向かせる前に，隠す場所をわざと見せておいて，実は別の場所に隠す」行動が，S6の1試行目において「対戦相手が当たりのコップを開けようとすると，当たりでも『違うよ』と言う」行動，S6の3試行目およびS7の2試行目において「対戦相手に対し，玩具のないところを『ここだよ』等と言って指さす」行動が生起した。

以上のように，「宝さがしゲーム」場面では，A児はまず④[対戦相手に見えないようにする]，⑩[隠した場所を教えない]が，S2～S3に援助によって遂行が可能になり，S4～S5以降では自発によって可能になった。その後徐々に，直接援助を行わなかった③[対戦相手注視]，⑥[隠し場所を不規則にする]，⑪[違う場所を教える]も，遂行可能になっていった。

3) 指導場面のプロトコル：要素④[対戦相手に見えないようにする]の遂行に至る過程のプロトコルをTable3に示した。S1ではA児は相手の見ている前で隠していた。そして「どこに隠したでしょう？」と言い，相手に対して探すことを促していた。指導期では，最初は相手の前で玩具を隠そうとしてコップを持ち上げるなどしていた(S3)。しかし，指導者が相手の顔を指さし「ああっ，わかっちゃう」と言うと，A児は相手を注視した

後，驚きとともに「うわあ，後ろを向いてよお」と言った。そして要素④の遂行レベルがレベル4で安定した指導期S5の2試行目以降では，S6のような，自発で（微笑みながら）「じゃあ，後ろ見て」などと言うことが，安定して生起した。

事後評価の手続きと結果

1）誤信念課題：指導後に誤信念課題を実施したが，指導前と同様に不通過であった。

2）「Gratchの技法」：対戦相手を注視する，対戦相手に見えない場所で隠す，隠す拳を不規則にする，隠した拳を教えない，間違った拳を教えるといった行動が指導前には全10試行において遂行できなかったが，指導後には，対戦相手に見えない場所で隠すこと以外は全6試行において遂行できた。対戦相手に見えない場所で隠す行動が見られたのは1試行のみであったが，残りの5試行においても，隠す際に対戦相手を絶えず注視しており，終始相手の見えを意識しながらゲームを遂行するようになっていた。また，対戦相手に見えない場所で隠すことは，両手を後ろ手に回して隠すというモデルを指導者が1度示すと，A児はその後新たに行った6試行では全試行において遂行できるようになった。

3）心的状態発話の生起数の変化：事前評価と同場面を設定し，自由な会話の中での心的状態発話の生起数を測定した。自己の欲求に関する発話は指導前の7から2に，他者の欲求に関する発話は2から0に減少したが，自己の心的状態の叙述に関する発話は2から4に，他者の心的状態の叙述に関する発話は0から6に増加が見られた。つまり，他者の心的状態の叙述に関する発話数が著しく増加していた。なお，他者の心的状態に関する発話は，具体的には，「（紙粘土で作った魚が）怒ってる」，「（魚が）ビックリしてる」，「（紙粘土で作った動物を自ら横たえて）これ，眠くなっちゃったの」，「（動物が）目がみえないの」，「R（A児の姉）に怒られちゃうよ」，「それじゃあ，Rに怒られるぞ」の6発話であった。

4）指導場面以外でのエピソード：S4の指導後より，指導場面以外で，他者に答えを教えないという「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指標となる行動がみられた。例えばA児は，小学校で，他児に対し「では問題です！」と言ってクイズを出し始め，「1番…，2番…」とヒント（選択肢）も出し，全員が選択肢を選ぶまで答えを教えなかった。すなわち，A児は他児に対しクイズを出し，全員が答えを考えるまで待つという，答えを教えない行動がみられた。同様の行動は，クリニックの指導場面でも複数回みられた。またクリニックや家庭で，かくれんぼ等のゲームをするという「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指標となる行動がみられた。さらに，クリニックで，A児が他者をだまそうとして楽しむ行動，つまり「誤った情報を与える」行動もみられた。S8以降では，クリニックでの自由遊びの間に，指導者とかくれんぼ遊びをした時，鬼役のA児が指導者を見つけたので他の指導者が「A君，よく見つけたね」と言うと，A児は「だって見えてたもん」と答えるという，「見る」ことと「知る」ことを因果的に結び付けた発話がみられた。またS8以降に，クリニックでの工作場面では，母親が工作の作り方を見ていなかった時，母親に作り方を詳しく説明するという，相手の知覚

Table 3　*要素④［対戦相手に見えないように隠す］のプロトコル*

S1（ベースライン）の1試行目

指導者	A児	対戦相手
	対戦相手が見ている前で隠す	
	隠した後，両手を広げて「どこに隠したでしょう？」と言い，対戦相手を注視	
		「『どこに隠したでしょう』かあ」

S3（指導期）の1試行目

指導者	A児	対戦相手
	玩具を隠そうとしてコップを持ち上げ，玩具を下に置く	
		コップに顔を近づける（対戦相手が見ていることを強調）
	コップを下に下ろしかける	
対戦相手の顔を指さし「あっ，わかっちゃう」と言う（「対戦相手が隠すところを見ると，対戦相手は隠し場所を知ることを強調）		
	対戦相手を注視し，驚き，手を横に振って「うわあ！後ろを向いてよお！」と言う	
		後ろを向く
	（微笑みながら）「どこに置こっかなあ･･･」と言いながら隠す	

S6（指導期）の1試行目

指導者	A児	対戦相手
	（微笑みながら）「じゃあ，後ろ見て」	
		後ろを向く
	玩具を隠し，「いいよー」と言う	
		「うーん，わかんないけど，ここ」

体験から知識の有無を理解して，それに応じた情報伝達をするという，「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指標となる行動がみられた。

考　　察

「見ることが知ることを導く」という原理の理解を促す指導方法について

「宝さがしゲーム」場面におけるA児の「見ることが知ることを導く」という原理の理解　A児は，ベースライン期においては，対戦相手の見ている前で玩具を隠したり，対戦相手が探す前に玩具の場所を教えてしまうなど，「対戦相手の見えが対戦相手の推測の判断材料になる」ことが理解できなかった。しかし指導期に入り，④[対戦相手に見えないようにする]，⑩[隠した場所を教えない] に援助を行ったところ，徐々に自発的にこれらの要素を遂行できるようになっていった。そして，援助を行わなかった③[対戦相手注視]，⑥[隠し場所を不規則にする]，⑪[違う場所を教える] も遂行可能になっていった。

すなわちA児においては，対戦相手との相互交渉や，指導者や対戦相手の援助を通じて，徐々に「見ることが知ることを導く」という原理の理解が可能になっていったと言えよう。

援助を行ってきた要素だけではなく，直接援助を行わなかった要素についてもA児が遂行可能になったという事実は，「見ることは知ることを導く」という原理が特定の場面をこえたある程度一般的な知識となっていった可能性を示すと言える。すなわち，直接援助を行った要素のみでこの原理の理解の指標となる行動が生起したのであれば，A児のこの原理の理解は特定の場面に限定したものであり，単なる「対戦相手に『後ろを向いて』と言う」等のゲームスキルの学習と変わらない面もある。しかし本指導においては，直接援助を行っていない要素でも生起がみられた。すなわち，A児が援助によって獲得したのは，個々のゲームスキルを越えて，より一般性のある理解であったと考えられる。ただし，直接援助を行わなかった要素も遂行可能となった要因として，A児と相手が交互に役割を交代したため，A児が相手の行動から様々な要素や言動を学習したことも考えられる。また「宝さがしゲーム」のルーティンが理解できるようになったことも影響していた可能性もある。

「宝さがしゲーム」場面以外でのA児の「見ることが知ることを導く」という原理の理解　A児は「Gratchの技法」で，指導前に「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指標となった行動ができなかったが，指導後はほとんどが遂行可能になった。相手に見えない場所で隠すことができたのは6試行中1試行であったが，指導者が一度モデルを示すと遂行可能になったことから，これは「両手を後ろ手に回して隠す」というスキルを自発的に思いつくことが困難だったためと考えられる。「Gratchの技法」と宝さがしゲームは，「見ることは知ることを導く」という原理をゲーム遂行の原理としている点では類似しているが，外見上の場面設定や手続きは異なっている。それでも「Gratchの技法」において，援助していないにもかかわらず相手の見えを意識しながら隠し，間違った拳を教えるようになったことは，A児が「見ることが知ることを導く」という原理をある程度理解できていたことを示す。

次に，心的状態発話に関して事前評価と同場面において事後評価を行ったが，指導前には観察されなかった「他者叙述」のカテゴリーに分類される心的状態発話が，指導後において6発話観察された。他者の「信念」理解と，「他者叙述」に関する心的状態発話の産出は下位の認知能力において関連があると考えられている（Bartsch & Wellman, 1995）。この6発話も，うち3発話が「怒る」に関するものであるという内容的な偏りがあるものの，すべて，怒る・驚く・眠くなる・見えるといった，他者の内的な状態に関するものである。このため，他者の「見ることが知ることを導く」という原理の理解がみられ始めたことと，「他者叙述」の心的状態発話が増加したことの間には一定の関係性があった可能性があり，この原理の理解が「他者叙述」の心的状態発話の増加の一要因として働いていた可能性がある。

エピソード記録に関しては，S4の指導後より，「他者に答えを教えない」「かくれんぼ等のゲームをする」といった，他者の「見ることが知ることを導く」という原理の理解の指標となるエピソードが報告・観察された。つまり，日常生活においても，場面によっては，A児はこの原理を理解できるようになったと考えられる。

こうした変化から，「宝さがしゲーム」場面での他者との相互交渉により，A児の個体内に，他者視点への「気づき」が促され，一定度の一般性のある「見ることが知ることを導く」という知識が構成されはじめ，複数の場面においてA児はこの知識を使用することができるようになったと考えることができよう。しかし，一方，「宝さがしゲーム」という特定のゲーム・スキルの学習をしたという見方も否定できないであろう。今後，誤信念課題の達成経過や日常生活での生態学的な「心の理解」の発達も合わせ考えながら，本児における「見ることは知ることを導く」ことの知識の獲得の水準を検討してゆく必要があろう。

本指導の妥当性の検討

本指導において効果的であったと考えられる第一点は，A児の現在の発達課題に働きかけたことであろう。本指導では指導開始前に，A児の「心の理解」の発達評価を詳細に行い，現在の発達課題が「見ることが知るこ

とを導く」という原理の理解であることを見いだし，指導目標とした。このように，A児にとって課題となっている機能を目標として指導を行ったことが，指導効果をもたらした要因であったと考えられる。

第二点は，相手との相互交渉や，指導者や相手の援助によるやりとりを重視した点であろう。「心の理解」の発達においては，個人間のやりとりが重要な役割を果たすことが指摘されている（Bruner & Feldman,1993）。本指導においても，やりとりを通じ，A児は「相手が隠すところを見ると，相手は隠し場所を知る」等ということに気づいてゆき，徐々にA児の中に，「見ることが知ることを導く」という知識が構成されはじめたと考えられる。

第三点は，A児が「見ることが知ることを導く」という原理に自ら気づくよう，一見すると指導方法としては曖昧な援助（「『相手が隠すところを見ると，相手は隠し場所を知る』ことを強調するために，指導者が相手の顔を指さし『ああっ，わかっちゃう！』と言う」等の援助）を行った点である。この援助は，Reinecke et al.（1997）が行った訓練における「標的行動が生起した場合社会的賞賛や食物により強化する」といった援助と比べ曖昧かもしれない。しかし本指導の目的は，他者の「見ることが知ることを導く」という原理へのA児の内的な気づきを促すことであった。したがって，指導者がA児に他者の知識と見えの関係について気づくきっかけを与えるような促しをする方法を行った。その結果，A児においては「見ることが知ることを導く」ことについて内的な気づきが促されたと考えられる。

「見ることが知ることを導く」という原理の理解の発達と誤信念課題の関係について

A児は以上のように「見ることが知ることを導く」という原理を理解できはじめたと考えられるが，指導後においても誤信念課題は不通過であった。このことの要因について考えてみたい。Bloom & German（2000）は，物語の形式をとるサリー・アン課題の通過には，「心の理解」以外に様々な要素が必要であると論じる。様々な要素とは（1）物語への興味，（2）物語から含意を引き出すこと，（3）物語中の出来事を正確に記憶すること等である。A児は物語に興味を示さず，物語理解に困難を示していた。また本指導と並行して行われていた「見て！聞いて！活動」においても，時系列的に自己経験を構成することに困難があり，ナラティブ理解・表出の発達に困難を示していた。つまりA児は「見ることが知ることを導く」という原理に関する「心の理解」は可能になってきたが，物語理解の困難性によって誤信念課題の遂行が困難であったことが一つの要因として考えられる。また，もう一方，前述したBloom & German（2000）の指摘の3点目のように，記憶の問題，更には，語彙や構文力などの問題の可能性も考えられ，今後，A児の発達と誤信念課題の獲得経過とをあわせて分析しながら，誤信念課題の困難性の要因が検討される必要がある。

結　論

本研究では「見ることが知ることを導く」という原理の理解の達成過程と，それに関連した行動を中心に「心の理解」の発達過程を検討してきた。A児に対しては他の指導も並行して行っており，また家庭や学校では「心の理解」に関連する様々な経験があったであろう。またA児自身が生物学的に成長したこともある。これらが包括的にA児の「心の理解」を促したといえるであろう。しかしその中で，「宝さがしゲーム」の指導が「見ることが知ることを導く」という原理の理解を促し，「心の理解」の発達のための重要な足場を構成したと考えてよいであろう。プレイフルな相互交渉によりこの原理の理解が促され，それが対人関係の中で実践的に活用されることで，より一般的な理解となったと考えられる。つまり，「心の理解」の発達支援では，こうした原理への気づきを促す指導だけでなく，それを日常的な対人関係の中で実践的に活用させることも重要といえるであろう。

文　献

Baron-Cohen, S. (1992). Out of sight or out of mind? Another look at deception in autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **33**, 1141-1155.

Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. Cambridg, MA: MIT Press.

Bartsch, K., & Wellman, H. M. (1995). *Children talk about the mind*. New York: Oxford University Press.

Bloom, P., & German, T. P. (2000). Two reasons to abandon the false belief task as a test of theory of mind. *Cognition*, **77**, 25-31.

Bruner, J. S., & Feldman, C. (1993). Theories of mind and the problem of autism. In S. Baron-Cohen, H. Tager-Flusberg, & D. J. Cohen (Eds.), *Understanding other minds: Perspectives from autism* (pp.267-291). New York: Oxford University Press.

遠藤利彦．(1997)．乳幼児期における自己と他者，そして心：関係性，自他の理解，および心の理論の関連性を探る．*心理学評論*，**40**，57-77.

Gratch, G. (1964). Response alteration in children: A developmental study of orientations to uncertainty. *Vita Humana*, **7**, 49-60.

Howlin, P., Baron-Cohen, S., & Hadwin, J. (1999). *Teaching children with autism to mind-read: A practical guide*. Hauppauge, NY: John Wiley & Sons.

子安増生．(1997)．*子どもが心を理解するとき*．東京：金子書房.

森永良子・黛　雅子・柿沼美紀・紺野道子. (2002). *TOM心の理論課題検査*. 東京：文教資料協会.

長崎　勤. (2001).「心の理解」とコミュニケーションの発達. 秦野悦子（編）, *ことばの発達入門*. (pp.146-172), 東京：大修館書店.

長崎　勤・松浦千春. (1999). 幼児は他者の欲求意図をどのように理解するか？ *日本発達心理学会第10回大会発表論文集*, 433.

長崎　勤・山田明子・亀山千春. (2000). ダウン症児における「心の理解」の学習可能性の検討 ──「他者の欲求意図を尋ねる」ことの指導を通して. *特殊教育学研究*, **38** (3), 13-22.

長崎　勤・吉村由紀子・土屋恵美. (1991). ダウン症幼児に対する共同行為ルーティンによる言語指導 ──「トースト作り」ルーティンでの語彙・構文, コミュニケーション指導. *特殊教育学研究*, **28** (4), 15-24.

Nelson, K. (2003). Entering the community of minds. Presented prints in International Workshop by Japan Society of Developmental Psychology, Tokyo.

奥田健次・井上雅彦. (2002). 自閉症児における自己/他者知識に関する状況弁別の獲得と般化. *発達心理学研究*, **13**, 51-62.

Perner, J. (1991). *Understanding the representational mind*. Cambridge, MA: MIT Press.

Pratt, C., & Bryant, P. (1990). Young children understand that looking leads to knowing (so long as they are looking into single barrel). *Child Development*, **61**, 973-982.

Reinecke, D. R., Newman, B., Kurtz, A. L., Ryan, C. S., & Hemmes, N. S. (1997). Teaching deception skills in a game-play context to three adolescents with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, **27** (2), 127-137.

佐藤裕里子・長崎　勤・小野里美帆. (2000). 2, 3歳児の心的状態に関する言及の発達 ── 健常児とダウン症児における＜自己－他者＞＜欲求－叙述＞軸による分析. *日本発達心理学会第11回大会発表論文集*, 2.

Wellman, H. M., & Woolley, J. D. (1990). From simple desires to ordinary beliefs: The early development of everyday psychology. *Cognition*, **35**, 245-275.

Wetherby, A. M., Alexander, D. G., & Prizant, B. M. (1998). *The ontogeny role of repair strategies: Vol. 7. Transitions in prelinguistic communication* (Chapter 7). Baltimore, MD: Paul, H. Brookes.

付記

本研究にご協力いただいたA児とそのご家族の方々, 筑波大学心身障害学系長崎研究室水曜臨床の都丸和好さん, 山口博司さん, 坂本泰之さん, 野本有紀さん, 大畠薫さん, 三矢歩さん, およびA児の情緒学級と通常学級の先生方に御礼を申し上げます。なお, 本研究は平成12-15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)（課題番号12410033）「健常乳幼児と発達障害児における『心の理解』の発達と援助プログラムの開発」（代表者：長崎勤）の補助を受けて行われました。

Nishihara, Kazuma (Abiko School for the Mentally Challenged), Yoshii, Sadahito (University of Tsukuba Graduate School of Comprehensive Human Sciences) & Nagasaki, Tsutomu (University of Tsukuba Institute of Comprehensive Human Sciences). *Development of the Ability to Understand the Other's Mind in a Child with Pervasive Developmental Disorders: An Intervention Case Study.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2006, Vol.17, No.1, 28-38.

This experimental intervention assessed the level of understanding of the other's mind, in a 6 year old child with a pervasive developmental disorder. It showed that the principle of "seeing-leads-to-knowing" needed to be taught using a joint action routine called a "treasure hunt." The results were as follows. First, the child gradually became able to conceal information as to the whereabouts of a toy he had hidden. Second, the child became able to deceive his peers by such acts as emphasizing the wrong cup. Third, the child became able to use the principle of "seeing-leads-to-knowing" interacting with other children and adults. Fourth, the number of the utterances referring to others' mental states increased. However, the child could not pass the false belief task. The preceding results were discussed in terms of the efficacy of the intervention using a joint action routine.

【Key Words】 Pervasive developmental disorders, Understand other's mind, The principle of "seeing-leads-to-knowing", Joint action routine, Cognitive development

2004. 8. 31 受稿, 2005. 9. 6 受理

発達心理学研究
2006，第17巻，第1号，39-49

原　　著

幼児に対する母親の分離意識：構成要素と影響要因

塩崎　尚美　　無藤　　隆
（相模女子大学学芸学部）　（白梅学園大学子ども学部）

日本における母親の幼児に対する分離意識の構成要素を検討し，否定的，肯定的両面を見いだすことを目的とした。その結果，＜子どもに対する不安・心配＞＜母親の存在の大きさ＞＜子どもと離れる寂しさ＞＜分離肯定感＞4つの要素が見いだされた。また，それらの要素に影響する要因を検討したところ，【伝統的育児観】と【父親の分離意識】，【子どもの対人的慣れにくさ】が影響しているが，【子どもの対人的慣れにくさ】よりも【伝統的育児観】の影響が強く，子どもの特性よりも，社会的な影響を強く受けていることが示唆された。さらに，母親の分離意識と育児ストレスとの関連を検討したところ，分離意識の中の＜子どもに対する不安・心配＞は育児ストレスに強い正の影響を及ぼすが，＜母親の存在の大きさ＞は負の影響を及ぼしていることが示されたことから，分離意識の中の肯定的な側面であることが示唆された。これらの結果は，母親がケア役割に圧倒されることなく，個として発達していくことに，どのような要因が影響を及ぼしているのかに関しても重要な示唆を与えていると思われる。

【キー・ワード】 母親の分離意識，父親の母子分離意識，子どもの対人的慣れにくさ，伝統的育児観，育児ストレス

問題と目的

少子高齢化に伴って女性のライフコースが多様化したことで，選択の可能性の拡がりと同時にあらたな不安や葛藤が生じている。伝統的な母親役割だけでは，自己のアイデンティティを支えることは困難にもかかわらず，伝統的な価値観は，母親自身にも関わりを持つ周囲の人々にも依然として強い影響を及ぼしている。母親自身のアイデンティティの発達には，自己犠牲的に子育てに専念するのではなく，自分らしさを確認できるような時間の確保や活動の実践も必要であることが指摘されている（岡本，2003）が，その実現は必ずしも容易ではない。母親たちにとって，自分らしさを確認する時間や実践と，子育てとのバランスを取ることを困難にしている要因は，どのようなものであろうか。その要因を実証的に検討することが，より具体的な子育て支援の方策を考える上で重要ではないだろうか。

母親が，自分らしく過ごす時間や活動に目を向け始めるのは，幼児期であると考えられる。幼児期は，子どもの関わりを持つ対象が，親から同世代の子どもへと拡がり始める時期であり，基本的な生活習慣が身につき，親としての物理的な養育の責任が軽減するためである。ケアの次元という視点から見れば，現実に手を掛けて世話をする行為から，子どもの成長・発達を見守るという心理的ケアに比重が移り始める時期であると考えられる。そうした時期に，母親が自分らしさを確認できる時間や活動が徐々に増えることは，子どもとの相互的関係を築くことにもつながり，母親の「個としてのアイデンティティ」と「関係性」双方の発達（岡本，2003）にとって重要であろう。

これまで，成人期女性の生涯発達に関する実証研究によって，親となること（柏木・若松，1994）による発達やケアすることによる発達（岡本，2003；平山，2003）が明らかにされてきた。しかし，幼児期以降の母子の分離が，母親自身の発達にどのように関与しているのかに焦点を当てた実証研究は少ない。母子の分離はケアの質に変化をもたらし，母親が自分らしさ，個としての自分を意識し始めることと関わりが深いと考えられるが，そのような時期として，幼児期の母親に注目しているものはない。子どもとの分離に関する生涯発達の研究は，子どもの巣立ちの時期である中年期に焦点が当てられている（Ellett, 1982；Gonzalez, 1990）。しかし，中年期までに子どもとの関係性は徐々に変化していくものであり，母親自身のアイデンティティも徐々に質的な変化を遂げていくと考えられる。その過程を明らかにすることは重要である。

そこで，本研究では，幼児期の母親の心理的発達を，母子の分離による変化に注目して検討する。そのためのひとつの手がかりとして，母親が自分らしさを確認できるような，趣味や勉強のための時間を持つ場合に，子どもに対して感じる分離意識に焦点を当てる。幼児期の子どもに対する分離意識は，子どもとの関係性の変化を母親がどのように捉えているのかを反映し，母親が個としてアイデンティティを築いていくことと密接なつながり

があると考えるからである。それは物理的な分離に伴う感情体験というよりはむしろ，日々の生活の中でイメージとして母親が抱いているものであり，子どもとの関係と自分らしさを実感する時間との兼ね合いの中で生じてくる感覚である。子どもとどのように分離し，どのように個としてのアイデンティティを発達させていくのか，そのことがスムーズに進むのか，滞っている感じがあるのかなどについての母親の意識が現れていると考える。

母親の分離意識に関しての研究には，母親の分離不安を測定する尺度（Hock, McBride, & Gnezda, 1989；Maternal Separation Anxiety Scale, 以下MSASと略す）を用いた調査がある。それによると，母親の分離不安は子どもが乳児の時には高いが，6歳近くになると徐々に低くなること，また子どもが6歳の時の分離不安と抑うつ得点との間に相関があることが見いだされている（Hock & DeMeis, 1990；Hock & Schirtzinger, 1992；Hock, Schirtzinger, & Lutz, 1992）。しかし，日本において母親の子どもとの分離を検討するには，「分離不安」という枠組みだけではその本質を捉えることが困難であると思われる。その理由は，日本と米国との親子関係の発達のプロセスの違い（Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, & Weisz, 2000）が指摘されているように，共生的な調和関係の中で子どもが発達していく日本の母親にとって，子どもとの分離体験が明確に捉えにくいことである。このような文化の違いを考慮すると，Hock & Schirtzinger（1992）が指摘するような，母親の分離不安が抑うつや育児ストレスに影響するということが，日本においてそのまま適用できるとはいいがたい。Stifter, Coulehan, & Fish（1993）は母親の分離不安と過干渉との関連を見いだしているが，伊崎（2000）が指摘しているように，「分離不安が子どもに関わる頻度を増やし，子どもの発達が促進される」ことも考えられる。日本における母親の分離不安は，その構成要因そのものに米国のそれとは異なる要素があり，MSAS（Hock et al.,1989）として1次元で扱われているものを，日本の幼児を持つ母親を対象にした場合には，そのまま適用するのは妥当ではないのではなかろうか。柏木・蓮香（2000）が指摘するように，母子分離に伴う母親の感情を「分離不安」として問題とする欧米の研究の在り方を，そのまま日本の母子分離に適用することは無理があると考えられる。このような点を考慮して，本研究では分離不安という狭い捉え方ではなく，母親の分離意識としてその構成要素を探索的に検討することを第一の目的とする。

第二の目的は，分離意識に影響を及ぼす要因の検討である。本研究では，①伝統的育児観，②父親の母子分離に対する意識，③子どもの対人的慣れにくさの3要因を取り上げる。その理由は，次の通りである。

①伝統的育児観：これまでの調査研究では，伝統的母親役割観，養育態度の影響が明らかにされてきている（Deater, Scarr, McCartney, & Eisenberg, 1994；Fein, Gariboldi, & Boni, 1993；柏木・蓮香, 2000；水野, 1998, 2002）。これらの要因は，本研究の対象である幼児期の親についても同様の影響が予測される。ただし，日本においては母性神話が母子分離に影響を及ぼし（大日向, 2002），「母性観が現実の母子関係を離れて，イメージとして機能している」（大日向, 1990）ことを考慮すれば，個人的な価値観としての養育態度よりも，社会的なシンボルとしての母性神話の影響を検討する必要があると考えられる。そこで本研究では伝統的母親役割観ではなく，日本の母性神話に象徴されているような『伝統的育児観』に限定し，その影響を検討する。ここでの伝統的育児観とは，「3歳までは母親と一緒に過ごすことが必要」「子どもの健全な発達にとっては母親とできるだけ多くの時間を共に過ごすことが重要」「子どもの発達に一番影響を持つのは母親」「自分の楽しみよりも子どもとの関わりを優先すべき」など，母親が子どもに対して抱える育児責任の重さを反映している社会的な通念としての育児観である。

②父親の母子分離に対する意識：社会的要因としては，欧米の研究において社会的サポートの影響が指摘されている（Deater et al., 1994；Fein et al., 1993）。しかし，保育園に子どもを預けることには否定的であったり（柏木・蓮香, 2000），ベビーシッターの利用には消極的である（水野, 1998）という社会的背景を持つ我が国において，社会的サポートを積極的に得ている母親は必ずしも多くないと考えられる。特に本研究の主な対象である専業主婦の母親にとっては，趣味や勉強のために外出する場合には身近な援助者を頼ることが多いと考えられる。中でも父親は，母親にとって最も身近な援助者であり，父親の育児参加やケアへの関わりが，妻の育児感情に影響することも指摘されており（柏木・若松, 1994；平山, 2003），物理的な母子分離にも母親の分離意識に対しても影響が強いことが予測される。祖父母の影響もありうるが，被験者によるばらつきが大きい要因であるため，本研究では，父親の分離意識に限定する。

これまで，母親と比べて父親の分離不安は低く，分離の効果を認める傾向が強いこと（Wille, 1998）や，父親から見た母親の分離不安は，母親自身の分離不安よりも高いこと（Deater et al., 1994）が報告されている。しかしこれらはいずれも，デイケアセンターなどに子どもを預ける場合の父親の分離意識であり，父親自身が子どもの世話をして母親が外出するという状況においては，父親の意識は異なると考えられる。特に日本においては，育児は母親がするという意識が伝統的に根強く，就労以外の理由での母子分離は否定的に捉えられる傾向が強い（大日向, 2002）。まして，その間の育児が自らの負担と

なる可能性が高い父親が，母子分離に対してどのような意識を持っているかは，母親の母子分離意識に対して，物理的にも精神的にも影響は強いと予測される。そこで本研究では，『父親の母子分離に対する意識』を要因として取り上げ検討する。

③子どもの対人傾向：水野（1998, 2002）は，乳児期の母親の分離不安と幼児期の育児ストレスとの間に関連があることや，乳児期の子どもの行動抑制傾向と母親の分離不安との関連が，専業主婦群において見られることを明らかにしている。また，Fein et al.（1993）は子どもの気質を否定的に捉えている母親の方が，分離不安が高いことを見いだしている。ただし，その関連は乳児期では認められず，22ヶ月から40ヶ月の子どもの母親のみに見られる特徴である。これらのことを考慮すると，幼児期の子どもに対する母親の分離意識は，子どもの気質の影響を受けていると考えられる。また，子どもの気質の中でも対人的恐れは独立の因子として抽出されることが指摘されており（菅原, 1996），母親の幼児期の子どもに対する分離意識への影響は，子どもの対人的な不安の影響が特に大きいと考えられる。子どもが他者に慣れにくければ，託児相手とうまくやれるかという不安を母親にもたらし，分離が制限される可能性もある。このことを踏まえ，ここでは特に子どもの対人的慣れにくさに限定して，分離意識への影響を探ることとする。

これらの3つの要因を検討することにより，『社会的な要因』『身近な援助者の要因』『子どもの要因』という異なる側面からの影響を考慮することができる。母親の学歴や年齢などの影響もこれまでに指摘されているが（Fein et al., 1993；柏木・蓮香, 2000），本研究では特に，母親の個としてのアイデンティティ発達を援助するために，何が必要なのかを検討することを主な目的とするため，本稿では要因には加えないものとする。

また，本研究では構成要素の探索の結果を踏まえて，母親の分離意識のどのような要素にどのような要因が影響を及ぼしているのかを明らかにしたい。特に，分離意識の肯定的側面と否定的側面には，異なる要因が影響を及ぼすのではないかと考え，両者に影響する要因の相違を検討する。

さらに，これらの要因の影響を受けた母親の分離意識の諸要素が，育児ストレスといかに関連をもつのかを検討する。水野（1998）は，乳児期に分離不安が高い母親は，幼児期の育児ストレスが高いことを見出しており，母親の分離意識は育児ストレスと関連があると考えられるが，幼児期の分離意識と育児ストレスの直接的な関連は検討されていない。しかし，子どもに対する分離意識と母親の心理的発達や危機との関連を明らかにする上で，育児をストレスと感じる母親とそうではない母親の間に，どのような分離意識の相違があるのかを検討することが重要である。それは，ケア役割の拘束感に圧倒されているか，あるいは，「個としてのアイデンティティ」とのバランスがとれているのかについての示唆を与え，「関係性」と「個」の発達双方から親の発達を検討する一助となるのではないかと考える。そこで本研究では，幼児期の母親にとって，分離意識の中のいかなる要素が育児ストレスと関連するのかを明らかにしたい。このことを踏まえて，分離意識の構成要素各々と育児ストレスの関連を探ることを本研究の第三の目的とする。

以上のことから，次のような仮説を立て，その検証を試みる。

(1) 日本の幼児期の子どもを持つ母親の分離意識の構成要素は，欧米の分離不安として1次元的に扱われているものとは異なり，否定的な側面のものと，肯定的な側面のものとがあるだろう。
(2) 伝統的育児観，父親の母子分離否定，子どもの対人的慣れにくさは，母親の分離意識の中の，分離に際しての不安と正の関連があるだろう。
(3) 分離意識の中で，否定的な要素は育児ストレスに影響があり，肯定的な要素は影響が弱いだろう。

方　法

調査対象・実施方法

神奈川県内の幼稚園2園・静岡県内の幼稚園3園に通う子どもの親を対象にした。幼稚園に調査を依頼し，幼稚園にて配布・回収してもらった。回答はすべて無記名で，回収の有無や内容については園の方には分からないようにした。1714組に配布し，1097組の回答が得られた（有効回収率64％）。調査実施期間は，2001年3月から6月の間であった。

質問紙の内容

母親の分離意識を測定する尺度を作成するにあたって，Hock et al.（1989）のMSASの35の質問項目の中から，＜分離不安＞に関する下位尺度21項目と，＜子どもにとっての分離の効果の知覚＞に関する下位尺度7項目に基づき，3名の母親に対するインタビューを行った。その結果，MSASの内容にはおおむね共通の体験が聴取されたためその28項目と，3名の母親が共通して語った2項目を追加し，30項目からなる分離不安尺度を作成した。この分離意識尺度を神奈川県内の幼稚園1園と保育園2園にて，園を通して配布・回収した。回収された145名の結果を基に，因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行い，共通性の低い2項目と，尺度全体の信頼性係数を低くしている2項目を除外し，最終的に26項目からなる分離意識尺度とした。その尺度について「お子さんを自分自身の趣味や勉強などのために預けた時の気持ちについて（経験がない場合は想像して）」回答してもらった。それは，母親が自分らしさを確認できる

ような時間の確保や活動の実践と子どもに対する分離意識との関連を検討するためである。

伝統的育児観に関しては，いわゆる『母性神話』についてイメージすることをインタビューによって聴取したものと，育児書の記述，大日向（2002），水野（1998）を参考に7項目を作成した。また，父親の母子分離に関する意識について，3名の父親へのインタビューを基に14項目からなる尺度を作成した。育児ストレスに関しては，母親が日々の育児で感じるストレスを反映する内容にすることを考慮して，佐藤・菅原・戸田・島・北村（1994）の育児ストレスの項目の“母親関連育児ストレス”を参考に，10項目からなる尺度を作成した。子どもの対人的慣れにくさについては，水野（1998）を参考に，子どもの気質的特徴の中から母親の分離意識と関連が強いと考えられる“対人的慣れやすさ，慣れにくさ”を評定する5項目を作成した。その他に，父親と母親の年齢，職業，最終学歴，子どもの年齢，性別，祖父母の同居の有無，託児経験とその場所，母親の就労状況，育児援助者と援助者の分離に対する意識，育児情報源，子どもの慢性疾患の有無を尋ねた。

調査対象者の属性

母親の年齢は平均34.18歳（range, 20－48；SD＝4.08），父親の年齢は平均36.73歳（range, 24－57；SD＝5.05）。母親の最終学歴は，中学・高校35.6％，専門学校・短期大学36.7％，大学以上19.5％で，専業主婦が79.5％であった。父親の職業は，会社員（公務員を含む）が77.7％，父親の学歴は中学・高校34.8％，専門学校・短大10.0％，大学以上55.2％であった。対象となった子どもの年齢は，第1子の平均4.51歳，第2子以降の平均4.71歳。子どもの性別は，第1子が男50.7％，女49.3％，第2子が男55.3％，女44.7％と，若干男児が多い傾向があるものの，男女の比率に大きな差は認められなかった。なお，本調査では，現在幼稚園に入園している子どもについて回答してもらった。

結　　果[1)]

1. 尺度作成

1.1 母親の分離意識の構成要素　母親の分離意識の構成要素を検討するために，主因子法による因子分析を行った。回転はそれぞれの要素に相関が想定されるため，プロマックス回転を行った。固有値と解釈可能性を考慮して4因子を抽出した。その結果から，共通性の低い1項目を削除して再度因子分析を行い，最終的に25項目を採用した。4因子による因子寄与率は，40.10％である。各因子における項目ごとの負荷量と因子間相関をTable1に示した。

1）本研究における因子分析，パス解析にはSPSS ver.11.0を使用した。

第Ⅰ因子は「託児相手が子どもの世話ができるか」「子どもが寂しがって泣いているのではないか」など子どもに対する心配と「他の誰かが世話をしている時には子どものことが心配になる」「子どもと離れていると楽しめない」など母親としての不安を反映していると考えられたため，＜子どもに対する不安，心配＞の因子とした。第Ⅱ因子は「子どもは他の人よりも母親と一緒にいるほうがいいと思う」「子どもは他の人といるよりも自分といる方が幸せだと思う」など，母親が子どもにとって一番であることに関連する因子であると解釈し，＜母親の存在の大きさ＞の因子とした。第Ⅲ因子は，「子どもと半日以上離れていると，抱いたりしてやれないことを寂しく思う」「子どもと半日以上離れていると，たいへん寂しく，子どもが恋しくなる」など，すべて子どもと離れる時の母親の寂しさに関連しているため，＜子どもと離れる寂しさ＞の因子とした。第Ⅳ因子は，「子どもにとって母親と離れて過ごすことは，新しいできごとにうまく対処できるようになるために良いことである」「多くの異なる人と接することが子どもには必要である」など，分離を肯定的に捉え，その効果に対する認識であると解釈し，＜分離肯定感＞の因子とした。各因子に属する負荷量が.35以上の変数の項目得点の加算平均値を算出し尺度得点とした。各因子の得点は，その傾向の高さを示し，第Ⅳ因子の得点が高いことは，分離を肯定する傾向が強いことを表す。

1.2 父親の母子分離に対する意識尺度　父親の母子分離に対する意識の14項目について，主因子法，プロマックス回転による因子分析を行い，固有値と解釈可能性を考慮して3因子を抽出した。その結果から，共通性の低い2項目と因子負荷量が.35に達しない1項目を削除し，最終的に11項目を採用した。その結果をTable2に示した。3因子の累積寄与率は31.82％であった。第Ⅰ因子は，「母親が子どもを置いて外出するのはかわいそう」「母親がいないと子どもが不安になる」など，母子の分離を否定する内容であると解釈し【父親の母子分離否定】因子とした。第Ⅱ因子は，「母親が子どもを預けて外で働くことは，母親にとってよい」「子育てのベテランに預けることは子どもにとって良い経験になる」という内容が中心となっており，母と子双方にとっての母子分離の肯定的意味づけであると解釈し【父親の母子分離肯定】因子とした。第3因子は「子どもの気持ちは母親が一番よく分かっている」「子どもは母親と一緒にいるときが一番安心できる」のように，母が一番であるという内容であるため，【父親の母重視】因子とした。各因子に属する負荷量が.35以上の変数の項目得点の加算平均値を算出し，合成尺度得点とした。

1.3 各尺度の信頼性　【伝統的育児観】7項目は，逆転項目の得点を反転させて，得点が高いほど伝統的育児観

Table 1 *母親の分離不安の因子分析結果*

	項　　目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
25	子どもが母親から離れて遊んでいると，友達とうまくやれているか気になる	.77	-.12	-.08	.16
23	子どもと離れている時に，子どもの機嫌が悪くなったら子どもの世話をしてくれる人がなだめることができるかどうか心配になる	.65	.10	-.07	.04
24	子どもが失敗したり，うまくいかないことがあると不安になる	.61	-.07	-.16	.07
21	他の誰かが子どもの世話をしているときは，子どものことが心配になる	.58	.06	.11	-.01
26	子どもを他人に預けて外出するときに，子どもがかわいそうで済まないという気持ちになる	.56	-.07	.21	-.05
17	子どもと離れていると，子どもが私がいなくて寂しがり，泣いているのではないかと気になる	.52	.10	.15	-.08
18	子どもと離れていると，楽しめない	.46	-.02	.24	-.11
16	子どもを他人に預けて外出し，帰宅した時に，子どもが怒っているのではないかと感じたことがある	.41	.03	.00	-.09
11	他の人に預けると，子どもの安全に十分に目が行き届かないのではないかと思う	.37	.29	-.01	.06
14	子どもは他の人よりも母親と一緒にいる方がいいと思う	-.17	.74	.02	-.13
2	子どもは他の人といるよりも自分といる方が幸せだと思う	-.20	.62	.22	.01
5	自分の子どもの安全を十分に気づかうことができるのは，母親であると思う	-.05	.61	-.02	.20
15	子どもは私が一緒にいないと，怖がったり寂しがったりするだろう	.16	.60	-.06	-.03
8	機嫌が悪い子どもをなだめる方法は，母親だけが知っている	.03	.57	-.13	.10
12	子どもの世話をしばらくの間，他の誰かに頼んだら，子どもは私がいないことを寂しいと感じるに違いない	.14	.55	.01	.05
6	子どもは他の人が世話をしてくれても，なかなか慣れないと思う	.06	.49	-.04	-.11
9	ベビーシッター等，他人に預けて子どもを置いていったら，子どもは動揺するだろう	.31	.41	-.08	-.04
19	母親がいない慣れない状況では，子どもは完全に心が安らぐことはないのではないかと心配になる	.30	.35	-.00	-.10
1	子どもと半日以上離れていると，抱いたりしてやれないことを寂しく思う	-.04	-.08	.91	.05
7	子どもと半日以上離れていると，たいへん寂しく，子どもが恋しくなる	.02	.01	.84	-.01
4	子どもを抱っこするととても心地よいので，子どもと離れていると，からだのふれあいができないことを寂しく感じる	-.10	.15	.65	.09
10	子どもにとって，母親と離れて過ごすことは，新しいできごとにうまく対処できるようになるために良いことである	.10	.08	-.04	.66
20	多くの異なる人と接することが子どもには必要である	.03	.11	.08	.62
22	幼い子どもにとって，母親よりも他の人と接したい時があると思う	.11	-.11	.10	.47
13	子どもが私と離れるときに泣いてしまったとしても，私の姿がみえなくなってしばらくすれば，大丈夫であると分かっている	-.12	.10	.01	.40
	累積寄与率（%）	27.11	32.28	36.55	40.10

因子間相関	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
因子Ⅰ	.68	.57	-.32
因子Ⅱ		.55	-.36
因子Ⅲ			-.24

を強く持つことを表すようにした。ただし，1項目は尺度の信頼性を低めているため除外し，6項目とした。【育児ストレス】10項目は得点が高いほどストレスを強く感じていることを表し，【子どもの対人的慣れにくさ】5項目は，逆転項目を反転させて，得点が高いほど新しい人との関係に慣れにくいことを表すようにした。【伝統的育児観】【育児ストレス】【子どもの対人的慣れにくさ】についてそれぞれ因子分析を行ったが，いずれも1因子から構成されていることが確認されている。各尺度の信頼性係数（Standarized Cronbach's α）は，＜子どもに対する不安・心配＞.83，＜母親の存在の大きさ＞.83，＜子どもと離れる寂しさ＞.83，＜分離肯定感＞.58，＜父親の母子分離否定＞.71，＜父親の母子分離肯定＞.52，＜父親の母重視＞.56，＜伝統的育児観＞.61，＜育児ストレス＞

Table 2　*父親の母子分離に対する意識の因子分析結果*

	項　　目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ
4	母親が子どもを置いて外出するのは，子どもがかわいそうだと思う	.80	-.03	-.06
5	母親がいないときは，子どもは不安になると思う	.69	.19	.13
1	母親が子どもを置いて買い物や習い事に行くことは好ましいことではない	.59	-.15	-.09
2	母親が子どもを預けて外で働くことは，母親にとって良いことだと思う	.00	.56	-.05
8	妻も，子育てだけではなく自分自身のために仕事をしたり，何かに打ち込んでいた方がいいと思う	-.02	.49	.07
14	ベビーシッターや保育士のような子育てのベテランに子どもを預けることは，子どもにとって良い経験になると思う	.07	.42	-.05
13	子どもを誰かに預けて夫婦だけで出かけたいと思う	-.01	.41	.05
6	子どもの気持ちは母親が一番よく分かっていると思う	-.06	.09	.60
12	子どもは母親と一緒にいるときが一番安心できると思う	-.00	.08	.57
9	子どもは母親以外の人に預けられると，泣き続けたり，機嫌が悪くなると思う	.15	-.17	.37
10	母親以外の人には子どもに十分な関わりができないと思う	.03	-.24	.37
	累積寄与率（%）	19.71	27.19	31.82

因子間相関	因子Ⅱ	因子Ⅲ
因子Ⅰ	-.48	.47
因子Ⅱ		-.21

.87，＜子どもの対人的慣れにくさ＞.87であった。おおむね高い信頼性が得られているが，＜母親の分離肯定感＞と＜父親の母子分離肯定＞，＜伝統的育児観＞については若干低い信頼性となっている。しかし，それぞれ主要な要素を反映している項目であることから，結果の解釈を慎重にすることで分析に加えることとする。

各尺度の尺度得点の平均値は次の通りである。＜子どもに対する不安・心配＞2.28，＜母親の存在の大きさ＞3.15，＜子どもと離れる寂しさ＞2.80，＜分離肯定感＞3.85，＜父親の母子分離否定＞2.63，＜父親の母子分離肯定＞2.60，＜父親の母重視＞2.51，＜伝統的育児観＞3.22，＜育児ストレス＞2.48，＜子どもの対人的慣れにくさ＞2.11。

2. 母親の分離意識に影響を及ぼす要因と育児ストレスとの関連

母親の年齢，学歴，対象となった子どもの出生順位（第1子，第2子以降，および一人のみの3群）による差を検討するために，母親の分離意識4要素，伝統的育児観，育児ストレスについて3要因の分散分析を行ったところ，いずれの属性の主効果および交互作用も有意ではなかった。しかし，対象となる子どもが第1子の場合と第2子以降の場合とでは，分離意識に影響を及ぼす要因や育児ストレスとの関連が異なると予想されるため，対象児が第1子（子どもが一人のみと下のきょうだいがいる場合の両方：N=703）群と，第2子以降の群（N=346）とにわけて，母親の分離意識と関連する要因の単純相関を比較した（Table 3）。その結果，【伝統的育児観】と＜子どもに対する不安・心配＞，＜子どもと離れる寂しさ＞，＜母親の存在の大きさ＞との間に高い相関（第1子r=.30，r=.22，r=.30；第2子r=.24，r=.19，r=.32）が示され，【父親の母重視】と【子どもの対人的慣れにくさ】が＜子どもに対する不安・心配＞（第1子r=.23，r=.18；第2子r=.16，r=.17），＜母親の存在の大きさ＞（第1子r=.31；r=.22 第2子r=.19，r=.20）との間に相関が認められている。また，父親の母子分離に対する意識との間の相関は第1子よりも第2子の方が弱くなる傾向がある。これらの結果を踏まえ，本研究の目的である『社会的要因』『身近な援助者の要因』『子どもの要因』からの影響を検討することを考慮して，【伝統的育児観】【父親の母子分離否定】【父親の母子分離肯定】【父親の母重視】【子どもの対人的慣れにくさ】が母親の分離意識に及ぼす影響と，それらが育児ストレスに与える影響を検討するためにパス解析を行った。母親の分離意識に関しては，＜子どもに対する不安・心配＞と＜母親の存在の大きさ＞との間に高い相関（第1子r=.66，；第2子r=.60）が認められているが，育児ストレスを従属変数とした重回帰分析を行ったところ，いずれの変数も許容度は小さくはなく（.54，.55），VIF（variance inflation factor）が大きくないこと（1.86, 1.83），条件指標の大きい次元における分散の比率も小さい（.01，.15）ことから，多重共線性の問題はないと判断され，＜母親の存在の大きさ＞は因果関係を検討することにより妥当な解釈を見いだすことができる抑制変数となっていることが予想されたため投入した。＜子どもと離れる寂しさ＞に関

Table 3　*母親の分離不安と他の要因の単純相関*

		子どもに対する不安・心配	寂しさ	母親の存在の大きさ	分離肯定	伝統的育児観	父の分離否定	父の母重視	父の分離肯定	子どもの対人的慣れにくさ
寂しさ	第1子	.50***								
	第2子以降	.47***								
母親の存在の大きさ	第1子	.66***	.48***							
	第2子以降	.60***	.48***							
分離肯定	第1子	-.17***	-.07	-.22***						
	第2子以降	-.11*	-.03	-.17**						
伝統的育児観	第1子	.30***	.22***	.30***	.04					
	第2子以降	.24***	.19**	.32***	.00					
父の分離否定	第1子	.14***	.07	.14***	-.06	.17***				
	第2子以降	.14**	.08	.14*	-.06	.06				
父の母重視	第1子	.23***	.15***	.31***	-.06	.15***	.35***			
	第2子以降	.16**	.02	.19**	.04	.13*	.32***			
父の分離肯定	第1子	-.18***	-.06	-.13**	.16***	-.16***	-.25***	-.17***		
	第2子以降	-.08	-.11	-.14*	.11	.01	-.33***	-.11		
子どもの対人的慣れにくさ	第1子	.18***	.05*	.22***	-.17***	-.00	.05	.12**	-.04	
	第2子以降	.17**	-.02	.20***	-.06	-.02	.03	.09	-.04	
育児ストレス	第1子	.26***	-.03	.08*	-.04	-.01	.05	.05	.01	.15***
	第2子以降	.19**	.00	-.01	.02	-.08	.05	.08	-.01	.15**

注．第1子 $N=703$　第2子 $N=346$
$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$　$^{***}p<.001$

しては，＜母親の存在の大きさ＞＜子どもに対する不安・心配＞との相関が高く，Hock et al.（1989）では一因子としてまとめられていることから，それがどのような要素を反映しているのかについての検討が必要であると思われたため，ここでは投入しなかった。また，＜分離肯定感＞に関しては，相関が認められている【父親の母子分離肯定】【子どもの対人的慣れにくさ】からの影響のみを検討した。さらに母親の分離意識の育児ストレスへの影響に関しては，母親の分離意識各要素からのパスと，【子どもの対人的慣れにくさ】から直接パスを引き，パス解析を行った（Figure 1，Figure 2）。

第1子群では，＜子どもに対する不安・心配＞と＜母親の存在の大きさ＞は【伝統的育児観】（β=.27，β=.27）【父親の母重視】（β=.17，β=.25）【子どもの対人的慣れにくさ】（β=.18，β=.20）から有意な正の影響を受けている。母親の＜分離肯定感＞は【父親の母子分離肯定】から有意な正の影響を受け（β=.17），【子どもの対人的慣れにくさ】から負の影響を受けている（β=−.21）。父親の分離意識の中で，【父親の母子分離否定】は母親の分離意識のどちらの要素にも影響がない（β=.03，β=.00）ことが示された。また，【育児ストレス】は母親の分離意識の中の＜子どもに対する不安・心配＞から強い正の影響を受け（β=.39），＜母親の存在の大きさ＞からは負の影響を受けている（β=−.20）ことが示された。この結果は分離に際しての＜子どもに対する不安・心配＞が高い場合には，育児ストレスを感じやすいが，＜母親の存在の大きさ＞を感じている場合には，育児ストレスを感じにくいことを示唆している。さらに，【子どもの対人的慣れにくさ】は【育児ストレス】には直接の影響は少ないが（β=.11），＜子どもに対する不安・心配＞を介すると正の影響を及ぼし，＜母親の存在の大きさ＞を介すると負の影響を持つことが示された。

一方，第2子群では，＜子どもに対する不安・心配＞＜母親の存在の大きさ＞が【伝統的育児観】（β=.24，β=.32）と【子どもの対人的慣れにくさ】（β=.17，β=.20）から正の影響を受けていることは，第1子群と同様であるが，【父親の母重視】から＜母の存在の大きさ＞への影響が弱まり（β=.25→.11），【父親の母子分離肯定】から母親の＜分離肯定感＞への影響は有意ではなくなっている。また，＜子どもに対する不安・心配＞から【育児ストレス】への影響も弱くなっている（β=.39→.28）。

考　　察

1．母親の分離意識の構成要素

母親の分離意識尺度の因子分析の結果から＜子どもに

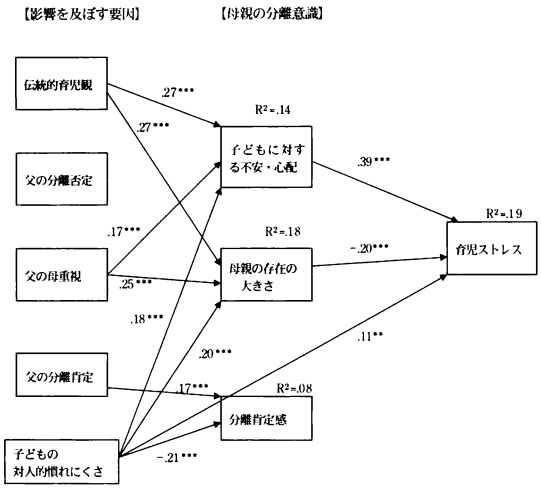


Figure 1　*母親の分離意識各要素に影響を及ぼす要因と育児ストレスとの関連：対象児第1子*（5％水準で有意差が認められたパスのみ示した *p<.05 **p<.01 ***p<.001）

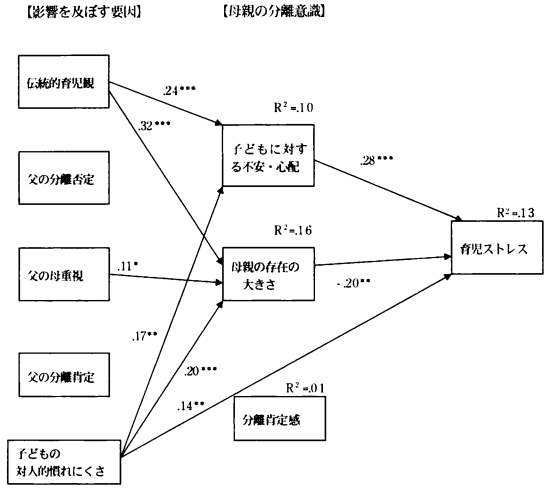


Figure 2　*母親の分離意識各要素に影響を及ぼす要因と育児ストレスとの関連：対象児第2子*（5％水準で有意差が認められたパスのみ示した *p<.05 **p<.01 ***p<.001）

対する不安・心配＞＜母親の存在の大きさ＞＜子どもと離れる寂しさ＞＜分離肯定感＞の4つの因子が抽出された。これらの要素のうち，第II因子の＜母親の存在の大きさ＞は，Hock et al.（1989）の研究では，不安・心配・罪悪感の中に含まれている項目と同じ内容であるにもかかわらず，日本の幼児期の子どもを持つ母親を対象とした場合には，別の因子として抽出されていることは注目に値する。育児ストレスに負の影響を及ぼす（β=−.20），つまりストレスを弱くするという結果を考慮すると，日本の母親にとって，『子どもにとって自分が一番である』という意識は，子どもとの分離は促進されないが，母親の精神的安定にとっては肯定的な意味を持つと考えられる。これは，明確な境界を築かずに共生的調和関係を発達させる（Rothbaum et al., 2000）日本の子どもに対する母親の分離意識を理解する上で重要ではないだろうか。日本の母親にとって，母親として自分の存在意義が大きく感じられれば，子どもとの関わりは親密な関係でもストレスにはなりにくく，むしろ喜びと感じられる。一方，存在意義が感じられないにもかかわらず，分離に際しての不安・心配だけが大きくなれば，分離をしないことが否定的な影響をもたらし，育児ストレスも強くなることが推測される。

河村・尾崎（1999）は，「母親が子どもと密着していることを望み，自立を促すような働きかけをしなかったために，子どもの側の母子分離が困難であった」事例を報告していることから，子どもへの直接的な影響は今後検討しなくてはならない課題であるが，少なくとも，＜母親の存在の大きさ＞の要素は，母子分離を積極的にしないにもかかわらず，育児ストレスを感じず，さらに子どもの発達に対しても発達促進的となりうる（伊崎，2000）一つの要因ではないかと考えられる。

＜子どもに対する不安・心配＞の因子は，Hock et al.（1989）のMSASに相当するいわゆる「分離不安」の因子であると考えられる。＜子どもと離れる寂しさ＞は，父親の分離意識との相関が弱い（分離否定r=.07，母重視r=.15，分離肯定r=−.06）ことから，周囲の人との関係の影響を受けにくいことが推測されるが，＜子どもに対する不安・心配＞＜母親の存在の大きさ＞との間に高い相関（r=.50，r=.48）が認められており，MSAS（Hock et al., 1989）では1因子にまとめられている内容であることから，どのような要素の分離意識を反映しているのかについてはより詳細な検討が必要であると思われるため今後の課題としたい。＜分離肯定感＞に関しては，MSASのScale2「子どもにとっての分離の効果」の内容とほぼ一致しており，分離の効果，分離を肯定する意識に関しては，日本においても欧米と同様の意識があることが確認された。

以上のことから，純粋な分離不安と分離肯定に関しては，MSASの内容とほぼ一致しているが，欧米の研究においては分離不安として一括りにされているものの中に，＜母親の存在の大きさ＞という肯定的に捉えられる側面があることが示されたことは，分離意識というより広い概念で捉えることの意義を示唆しているといえよう。

2. 母親の分離意識に影響を及ぼす要因と育児ストレスとの関連

母親の分離意識に影響を及ぼす要因は，子育てには母親の役割が重要であり，母親が子育てをするべきであるという【伝統的育児観】の影響が大きく，＜子どもに対する不安・心配＞（β=.27；β=.24）＜母親の存在の大きさ＞（β=.27；β=.32）には強い正の影響を及ぼしていることが明らかになった。これは，柏木・蓮香（2000）や水野（1998）の伝統的性役割観や母親役割観との関連で見いだされた結果と一致している。また【父親の母子分離否定】は影響を持たず，【父親の母重視】が＜子どもに対する不安・心配＞（β=.17），＜母親の存在の大きさ＞（β=.25；β=.11）に正の影響を及ぼしていることが示された。【父親の母重視】は，「子どもにとっては母親が一番である」というような，子育ての責任を母親一人に負わせることにつながる意識であり，母親の「個としてのアイデンティティ」の発達を妨げる要因になっているのではないかと考えられる。また，第1子に関しては，【父親の母子分離肯定】が，＜分離肯定感＞に影響（β=.17）していることも示された。つまり，父親が母子分離の効果を認めていると，母親は分離を肯定する意識が強くなるということである。以上のことから，母親が子どもとの分離に不安を抱き，子どもにとって自分の存在が大きいと思うことには，伝統的育児観や父親の母子分離に対する意識が影響していることが示唆される。これらの結果からは，日本の母親の分離意識には，社会的な価値観や，身近な援助者である父親の分離に対する意識が影響を持つことがわかる。こうした傾向は，特に第1子の場合に顕著であることも注目される。第1子に関しては，父親の母子分離意識に働きかけることが，子育て支援において重要であることを示唆しているといえるだろう。また，第2子以降は，父親の分離意識の影響を受けにくくなるということは，母親の個としての発達の一つの側面を反映しているとも考えられる。また，父親以外のサポートを得られるようになっていくことの現れでもあるだろう。この点を今後さらに検討していくことで，第1子の親に対するサポートに役立つ知見が得られるだろう。

【子どもの対人的慣れにくさ】は，＜子どもに対する不安・心配＞（β=.18；β=.17）＜母親の存在の大きさ＞（β=.20 β=.20）に対して正の影響を持つ。つまり，子どもが他者に慣れにくいと母親は自分と一緒でなければならないと思い，他者に預ける不安・心配からその機会が少なくなると考えられる。また【伝統的育児観】（β=.27；.24，β=.27；.32）に比べると【子どもの対人的慣れにくさ】の影響は弱い。これは，子どもの気質の影響の大きさが指摘されている米国の調査（Fein et al., 1993；Mayseless & Scher, 2000）とは異なる点である。日本の母子分離に関しては，子ども自身の対人的な傾向よりも，社会的な要因の方が母親の分離意識への影響が強い傾向があることを示唆しているといえよう。つまり，子ども自身の特徴を理解し，その上で母親が判断をして分離を決めるよりも，伝統的な育児観に左右されやすいということであり，こうした現象が母子分離における問題や母親の個としてのアイデンティティ発達に影響を及ぼしているのではないかと思われる。

また，分離意識と育児ストレスとの関連を検討したところ，＜子どもに対する不安・心配＞は育児ストレスへの強い正の影響を持つことが示され（β=.39；β=.28），子どもを預けることに不安を抱きやすい母親は育児ストレスを強める傾向があることが示唆される。これに対して＜母親の存在の大きさ＞という肯定的な側面は育児ストレスに負の影響をもつ（β=−.20；β=−.20）。これは，日本の母親にとって『子どもにとって自分が一番である』という意識がもてるのであれば，積極的に分離を促進しなくても，親にとっては精神的負担にはなりにくいという一面があることを示していると考えられる。それが，子どもに対してどのような影響があるかについては，今後検討しなくてはならないが，少なくとも，母子分離の意義を考える上で，分離が良いか悪いかという一面的な捉え方をしてしまうと，日本の母子にとってストレスを感じなかったり，子どもとの関わりを楽しめるといった肯定的に作用している側面を見落としてしまう可能性があることを，本研究の結果は示唆している。それは，単に自己犠牲的に子育てに専念するのとは異なるより成熟したケアの一側面の可能性もある。自分らしさを認められている母親が持てる意識かもしれない。このような視点で今後母親の分離意識と母としての発達との関連をさらに検討していく必要があるだろう。

3. まとめと今後の課題

本研究では，これまで欧米において母子双方に否定的な影響を持つとされてきた“母親の分離不安”をより広く分離意識として捉え直してその構成要素を検討し，日本の母親の分離意識の中に，育児ストレスを弱めると考えられる，＜母親の存在の大きさ＞という要素が見いだされた。このことから，母子の分離を一方的に促進するのではなく，日本の母子分離に特徴的な，分離をしないことに含まれる肯定的要素を検討しながら，分離の在り方を考えていく必要が示唆される。

分離意識に影響を及ぼす要因には，伝統的育児観が，子どもの対人的慣れにくさよりも強いことが示された。子どもとの関係の中で分離が考えられるよりも，社会的要因の影響を強く受けていることは，母子の分離を母親が子どもとの関わりの中で自分で判断している部分が少ないことを示唆しており，それが母子分離における母親の葛藤を生み，母親自身の発達を阻んでいる一因ではな

いかと考えられる。しかし，＜母親の存在の大きさ＞も，母と子どもとの関係の中で生じるものか，周囲の影響を受けているのかでその意味は異なるが，本研究ではその違いを明確にすることはできていない。さらに，子どもにとってどのような意味を持つかについての検討も必要であり，今後の課題としなければならない。

文　献

Deater, D. K., Scarr, S., McCartney, K., & Eisenberg, M. (1994). Paternal separetion anxiety: Relationships with parenting stress, child-rearing attitudes, and maternal anxieties. *Psychological Science*, **5**, 341-346.

Ellett, S. C. (1982) An investigation of identity and self-esteem in traditional married woman during their middle-years, and the impact of the Life Planning Seminar. *Dissertation Abstracts International*, **42**, 2969-2970.

Fein, G. G., Gariboldi, A., & Boni, R. (1993). Antecedents of maternal separation anxiety. *Merrill Palmer Quarterly*, **39**, 481-495.

Gonzalez, P. C. (1990). Ego development and ego identity in mothers at mid-life. *Dissertation Abstracts International*, **56**, 2643.

平山順子. (2003). 家族を「ケア」するということ：ケアの喜怒哀楽を左右するもの. 柏木惠子・高橋惠子（編），*心理学とジェンダー：学習と研究のために* (pp.24-30). 東京：有斐閣.

Hock, E., & DeMeis, D. K. (1990). Depression in mothers of infants: The role of maternal employment. *Developmental Psychology*, **26**, 285-291.

Hock, E., McBride, S., & Gnezda, M. T. (1989). Maternal separation anxiety : Mother-infant separation from the maternal perspective. *Child Development*, **60**, 793-802.

Hock, E., & Schirtzinger, M. B. (1992). Maternal separation anxiety : Its developmental course and relation to maternal mental health. *Child Development*, **63**, 93-102.

Hock, E., Schirtzinger, M. B., & Lutz, W. (1992). Dimentions of family relationships associated with depressive symptomatology in mothers of young children. *Psychology of Women Quaterly*, **16**, 229-241.

伊崎純子. (2000). 母親の子供に対する分離不安. *第3回マーラー国際シンポジウム発表要旨集.*

柏木惠子・蓮香　園. (2000). 母子分離＜保育園に子どもを預ける＞についての母親の感情・認知：分離経験および職業の有無との関連で. *家族心理学研究*, **14**, 61-74.

柏木惠子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, **5**, 72-83.

河村由紀・尾崎康子. (1999). 親子教室における3歳児の母子分離に関する研究 (2). *家庭教育研究所紀要第21号*, 家庭教育研究所, 神奈川, 115-122.

Mayseless, O., & Scher, A. (2000). Mother's attachment concerns regarding spouse and infant's temperament as modulatours of Maternal Separation Anxiety. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **41**, 917-925.

水野里恵. (1998). 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究. *発達心理学研究*, **9**, 56-65.

水野里恵. (2002). *母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質*. 東京：風間書房.

大日向雅美. (1990). 日本社会の変遷と母性. *こころの科学*, **30**, 85-91. 東京：日本評論社.

大日向雅美. (2002). *母性愛神話とのたたかい*. 東京：草土文化.

岡本祐子. (2003). ケアすることとアイデンティティの発達. 岡本祐子（編著），*女性の生涯発達とアイデンティティ：個としての発達・かかわりの中での成熟* (pp.143-178). 京都：北大路書房.

Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J. (2000). The development of close relationships in Japan and the United States: Paths of symbiotic harmony and generative tension. *Child Development*, **71**, 1121-1142.

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島　悟・北村俊則. (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, **64**, 409-416.

Stifter, C. A., Coulehan, C. M., & Fish, M. (1993). Linking employment to attachment: The mediating effects of maternal separation anxiety and interactive behavior. *Child Development*, **64**, 451-460.

菅原ますみ. (1996). 気質. 青柳　肇・杉山憲司（編著），*パーソナリティ形成の心理学* (pp.22-34). 東京：福村出版.

Wille, D. E. (1998). Longitudinal analysis of mothers' and fathers' responses on the maternal separation anxiety scale. *Merrill-Palmer Quarterly*, **44**, 216-233.

付記

本研究をまとめるにあたり，調査にご協力下さいました幼稚園の保護者の方々，先生方に心より感謝申し上げます。

Shiozaki, Naomi (Sagami Woman's University) & Muto, Takashi (Shiraume Gakuen University). *Mother's Sense of Separation from Children: An Examination of Components and Effective Factors.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2006, Vol.17, No.1, 39-49.

This study was concerned with both positive and negative elements of Japanese mothers' sense of separation from their children. Four elements relevant to the separation were identified: anxiety about the child, acknowledgment of mother's importance, loneliness, and acceptance of separation. Influences on these elements included the traditional concepts of child-rearing, the father's awareness of mother-child separation, and the child's shyness. A traditional concept of child rearing proved to be more influential than the child's shyness, suggesting that social factors can have a greater impact than the individual characteristics of a child. The association between the mother's sense of separation and stress about child rearing was also discussed. Anxiety about the child had strong and positive effects on child rearing stress, whereas acknowledgment of the mother's importance has an inverse relationship to stress, which suggests that acknowledgment of the mother's importance is a positive aspect of maternal sense of separation. These results also indicate that there are essential factors for the independent development of mothers if they are not to be overwhelmed by the role of caregiver.

【Key Words】 Mother-child separation, Father's awareness of mother-child separation, Child's shyness, Traditional child rearing, Child rearing stress

2004. 6. 29 受稿, 2005. 11. 7 受理

発達心理学研究
2006，第17巻，第1号，50-61

原　著

幼児の数的発達に対する幼稚園教師の支援と役割：保育活動の自然観察にもとづく検討

榊原　知美
（日本学術振興会・放送大学教養学部）

東アジアの幼児の数的能力は国際的に優れていることが報告されている。本研究は幼児が数的学習を行う重要な場の1つである幼稚園に注目し，幼稚園教師の数的支援の実態とその役割について検討することを目的とした。研究1では，私立幼稚園7園14クラスを対象に1年間の保育活動の自然観察調査を実施することで，幼稚園で行われている数的活動の種類と頻度，およびそのような活動における教師の支援の具体的な方法について検討した。その結果，日本の幼稚園における教師の数的支援は，歌，製作，出欠の確認などの数的学習を目的としない教師主導の保育活動に埋め込まれる形で，特に数領域に関係したものが頻繁に行われていることが示された。さらに研究2では，研究1で観察対象となったクラスを数的支援の推定量にもとづき3群にわけ，それらのクラスに在籍する幼児の数的能力を比較することで，幼児の数的発達に対する教師の支援の効果について検討した。その結果，幼稚園で多くの数的支援を与えられている幼児は，数的支援が中程度や少ないクラスの幼児に比べて，数領域の能力が優れている傾向が示された。日本の幼稚園教師は，体系だった指導に頼らずに，幼児の数能力を効果的に促進していることが示された。

【キー・ワード】 幼児，数発達，幼稚園教師，保育活動，自然観察

問　題

幼児の数的発達に関する従来の研究では，環境から切り離された個人に焦点をあてた研究が数多く行われ，その年齢依存的発達が取り上げられてきた（Piaget & Szeminska, 1952/1962）。近年では，例えば新生児がすでに少数集合の弁別能力を持っていることを明らかにしたAntell & Keating（1983）の研究や，5～6ヶ月の乳児でも加減算が出来ることを示したWynn（1992）の研究など，人が生得的に数能力を獲得していることを示唆する多くの知見が得られている。しかし，幼児早期の計数が不完全である（e.g., Wynn, 1990）ことなどからも示唆されるように，幼児は生得的な数能力獲得の基盤をもとに，自らの経験を通してより高度な技能や理解を獲得する。そのような幼児の経験にもとづく知識は，文化とのやりとりの中で，文化的実践としての数的活動に参加することを通して獲得されるため（Saxe, 1991; Goodnow, Miller, & Kessel, 1995），個人の数的発達についての十分な理解をその学習が行われている社会文化的文脈から切り離して得ることは難しい。

社会文化的文脈の影響は，近年数多く行われている国際比較研究からも強く示唆される。それらの結果は主に日本を含む東アジアの幼児の数的能力が欧米の同年齢の幼児に比べて優れているというものである。例えば，Ginsburg, Choi, Lopez, Netley, & Chi（1997）は日本と米国を含む5カ国の4歳児のインフォーマル算数の知識について，誕生日会ごっこ場面を用いて個別に評定した。その結果，東アジアの幼児（中国，日本，韓国）は，米国やコロンビアの幼児に比べて全問正答した課題が有意に多く，日本の幼児についてはインフォーマルな加算と減算を含む7課題において米国の幼児よりも多くの問いに正答した。Stevenson, Lee, & Stigler（1986）もまた，日本，台湾，米国の5歳児288名を対象に基礎的な算数概念と操作について検討した結果，日本の幼児の数能力は台湾と米国の幼児よりも高く，また台湾と米国の幼児の数能力に差はみられなかったと報告している。

これらの国際比較研究では，国ないしは地域間で幼児の数的能力に差があることは明らかにされたが，差を生み出した要因については十分に検討されておらず，それぞれの文化において幼児が他者との関わりのなかで数的知識を獲得する文脈を明らかにする必要がある。幼児の数的学習を促す重要な要因の1つである幼稚園での教師の支援に注目した場合，例えば，東アジアの中でも中国では，数，量，形，空間，時間に関する初歩的な知識を習得させることが，幼稚園における数学教育の目標の1つとして設定されており，年齢別の指導内容に沿った数学指導が週に2～4回（1回20～30分程度），多くの場合小学校のような授業形式で実施されている（曹・田中，2001）。中国の幼稚園におけるこのような体系だった指導は，中国の幼児の数的能力を効果的に高めていることが指摘されている（Ginsburg et al., 1997）。日本の幼稚園についてはどうなのだろうか。やはり，中国と同様に保

育活動において体系だった数的指導がなされているのだろうか。

日本の幼稚園は保育活動での数的指導には否定的なようである。日本の文部科学省の幼稚園教育要領（文部省，1999）では，数量は「身近な事象を見たり，考えたり，扱ったり」（p.9）する環境とのかかわりのもとに「感覚を豊かにする」（p.9）ことがねらいとされ，数学習を目的とした指導は奨励されていない。また，実際に日本の保育者に質問しても，大半の保育者は自分が主導して意図的に数量指導をすることはないと答えており，課題や教材を行っていると答えたのはごく少数であった（榊原・波多野，2004）。

しかし，日本の幼稚園においても，保育活動で数量が全く扱われていない訳ではない。保育活動での数的支援にまつわる事例は，むしろ多数報告されている（中沢，1981；山内，1994）。例えば，中沢（1981）は主に幼稚園での保育活動を観察し，幼児が縄跳びを跳べた回数，紅白玉入れでの玉の数，ブランコを交代する回数などを保育者が一緒に数える，幼児が背比べに興味を持った際に1人1人の身長にあわせた紙テープを作る，などの方法で保育者が幼児の数的支援を行っている事例を数多く報告している。山内（1994）は幼稚園6園の教師を対象に質問紙調査を実施した。教師は，幼児の数，数詞，計算，長さ，量，重さ，形態，空間，時間の感覚を育てるような環境構成および援助について，「鬼遊びなどで20まで数えたら探しにいこうと提案していく」（p.199），「片付けのときに積み木をうまく組み合わせてしまうようにアドバイスする」（p.205）などの多様な例を挙げている。

先行研究で報告されている豊富な事例は，日本の幼稚園教師が，中国が行っているような体系だった指導に頼らずに，日常の保育活動の様々な側面において幼児の数的発達を促していることを示唆するものである（Hatano & Inagaki, 1999；Sakakibara, Hatano, & Inagaki, 2001）。しかし，日本の幼稚園において，実際にどのような数的支援が行われているかについて実証的に検討した研究は榊原（2002）などを除き，ほとんど行われていない。榊原（2002）でも観察の対象は1学期の保育活動に限られているため，残念ながら幼稚園教師の支援の全体像を描きだすには至っていない。幼稚園の保育活動では年中行事や季節に関連した活動が数多く取り入れられるため，1年間を通して総合的に検討する必要がある。また，幼児の数的発達に対する幼稚園教師の支援の効果について検討した研究もない。そこで本研究では，次の2点を検討することを目的とする。第1に，幼稚園での自然観察調査を1年間にわたり実施することで，日本の幼稚園で行われている数的支援についての総合的理解を深める（研究1）。第2に，観察対象のクラスに通う幼児の数的能力を評価し，幼稚園で与えられている数的支援の程度が異なる幼児の能力を比較することで，幼児の数的発達に対する教師の支援の役割についての示唆を得る（研究2）。なお，本研究のデータ収集は幼児の数的発達についての日米中の国際比較研究（Starkey, 2003）の一環として行われた[1)]。

研　究　1

研究1では，日本の幼稚園における数的支援の実態について，数的な保育活動の種類と頻度に焦点をあてて検討し，そのような活動における教師の支援の内容についても具体的に明らかにする。本研究では，保育活動のなかでも教師の計画・指導のもとにクラスの幼児全員が特定の課題に関与する教師主導の活動について検討する。また，検討の対象とする数的領域は，数，算術，空間幾何，測定，パターンの5領域とし，これらに関わる活動を数的活動とする。

方　法

対象　東京都・神奈川県の私立幼稚園7園14クラス（年少169名，年中182名）を観察の対象とした。日本の幼稚園で行われている数的支援を総合的にとらえるため，対象園の選択に際しては所在地域（都市部から近郊部まで）や保育構成などにおいて特徴が異なる園を幅広く選択した。保育構成については，教師主導の学習活動に多くの時間を割り当てる園から，幼児の自由遊び活動が中心の園までを含むよう選択した。観察対象クラスは1園につき年少（3歳児）と年中（4歳児）の2クラスであり[2)]，観察開始時の1クラスあたりの在籍数は，年少では平均24名（レンジ23-34名），年中では平均26名（レンジ24-29名）であった。ただし，対象園のうち1園では，夏休み後にクラス替えが行われたため，この園については夏休み前と後では異なるクラスを観察し，それらを合計したものを1クラス分のデータとして扱った。クラス担任の教師は各クラス1～2名で，クラスにより補助教師1名が不定期に在籍した。

観察時期　2001年5月上旬～6月上旬（時期Ⅰ），6月下旬～7月中旬（時期Ⅱ），9月中旬～10月中旬（時期Ⅲ），10月下旬～12月中旬（時期Ⅳ），2002年1月中旬～2月中旬（時期Ⅴ）の5期にわたり，1クラスにつき各期1回ずつ，合計70回の観察を行った。

手続き　事前に訓練を受けた観察者2名が幼稚園において保育活動の自然観察を行った。観察者1名は保育活動の流れをフィールドノートに記録した。その際，教師および幼児の数的行動とその文脈については特に詳細に記録した。もう1名の観察者は補助としてビデオカメラ

1）このうち1学期の保育活動に関するデータは榊原（2002）でも使用されたものであるが，本研究では2, 3学期のデータとあわせ新たに分析を行う。

2）本研究のデータ収集が行われた日米中の国際比較研究では2年間の縦断研究を目指していた。本研究はそのうち1年目のデータについて分析したため，年少児・年中児が対象とされた。

による移動撮影をした。また，教室全体を見渡せる位置にビデオカメラを1台設置し，保育活動の全体像を撮影した。本研究の全ての対象園では，通常午前9時30分から11時30分までの一部の時間に教師主導の活動が行われていたため，ここを観察時間帯とした。なお本研究のデータ収集と利用については園の責任者や保護者などから許諾を得た。

分析方法　本研究では，教師主導の活動における数的支援を分析の対象とした。分析は次の方法で行われた。はじめにフィールドノートに記録された保育の流れを，教師の目的が変化した箇所で区切り，分析の単位となる活動とした。次段落にフィールドノートの記述例を提示し，それを用いて活動への区切りの方法を例示する。

「(教師に欠席人数を聞かれ，子どもが一斉に)『男の子，ゼロ人。女の子，2人。合わせて，2人。えーん，えーん。』お休みの子がいるのは悲しいので，お休みの人数だけ泣くお約束になっている。その後，先生が床に青いビニールシートを広げ…(中略)…『昨日のトンネル(途中までお絵描きしたダンボール)の続きをやりたい人』と言う。」

この記述の場合，「その後」の前後で，教師の目的が出欠の確認から製作へと変化しているため，「その後」の前で区切った。活動の区切りについては，全観察の10％について独立した評定者との一致率を求めたところ，93％であった。次に，各活動について教師主導の活動か自由遊びかを識別して，自由遊びを除外した。その結果，921(年少476，年中445)の教師主導の活動が抽出された。

教師主導の活動については，数的活動か非数的活動かを識別した。活動が数的かどうかは，活動の長さに関わらず，教師もしくは幼児の数的行動が1回以上生じたかについて判定した。数的活動については，数的指導を目的とした焦点型の活動か，他の活動に数的支援が埋め込まれた埋め込み型の活動かについても識別した。また，各活動における教師や幼児の数的行動は，日米中の国際比較研究の一環として作成されたChild Math Assessment (CMA) (Starkey, 2002) による数的領域の分類に従い，数，算術，空間幾何，測定，パターンのいずれか1領域以上に分類された(各領域で用いられた課題については資料を参照)。数的領域の判定については，全数的活動の10％について独立した評定者との一致率を領域別に求めたところ86-100％であった。さらに，教師主導の保育活動の種類を識別したところ，教師の保育計画に沿って選択される設定活動27種類と，教師の指導のもとに年間を通して繰り返し行われる日課活動17種類の合計44種類の活動が見出された(Table 1)。

結　果

数的活動の頻度　数的活動の頻度について分析したところ，観察された921の教師主導の活動中，数的活動は367活動であった。これは，教師主導の全活動の約40％にも及ぶものである。同様の傾向は，年齢段階別(年少39％，年中41％)，幼稚園別(レンジ33-49％)，クラス別(レンジ34-46％)に分析した場合もみられた。

数的活動について，数的指導に的を絞った「焦点型」の活動か，数的支援が他の様々な活動に埋め込まれた「埋め込み型」の活動かの観点から分析したところ，全数的活動367活動中358活動(98％)が「埋め込み型」の活動であった。数的指導を目的とした「焦点型」の活動は9活動(2％)とごく僅かであり，殆ど行われていなかった。

活動の数的領域については，数領域に関係した活動が最も多く316活動(86％)で認められた。観察された数的活動の大多数は数領域に関係したものであることが示された。空間幾何領域は76活動(21％)，測定領域は57活動(16％)，算術領域は36活動(10％)でみられた。パターン領域に関係した活動は少なく，3活動(1％)ほどであった。

数的活動の種類　数的活動が行われた保育活動の種類について分析したところ，全数的活動367活動のうち，213活動(58％)が設定活動，154活動(42％)が日課活動であった。幼稚園別(レンジ43-71％)，クラス別(レンジ42-79％)に全数的活動中の設定活動の割合を分析したところ大きな差はみられなかった。以下，設定活動と日課活動それぞれについて，数的活動が観察された保育活動の種類と頻度，活動に含まれた数的領域を分析した。

(a) 設定活動：設定活動でみられた活動総数，数的活動数，数的領域の内訳をTable 2に示す。設定活動でみられた407の保育活動のうち，数的活動は213活動(52％)であった。数的活動が最も頻繁に観察された活動は「歌」(43活動)の活動であり，続いて「製作」(36活動)，「運動・器械体操」(22活動)，「ダンス・リズム体操」(19活動)であった。これらの活動のなかで，保育活動に数的活動が含まれる割合が高かったのは「製作」であり，全製作活動の84％で数的活動が観察された。その他，「運動・器械体操」には59％，「ダンス・リズム体操」は53％，「歌」は41％の割合で数的活動がみられた。活動の数的領域としては，数領域に関係した活動が180活動と最も多く，設定活動でみられた数的活動の85％で観察された。算術領域(8％)とパターン領域(1％)の活動はごく少数であった。

(b) 日課活動：日課活動でみられた活動総数，数的活動数，数的領域の内訳をTable 3に示す。日課活動でみられた514の保育活動のうち，数的活動は154活動(30％)であった。数的活動が最も頻繁に観察された活動は，「出欠の確認」(44活動)の活動であり，続いて

Table 1　*教師主導の活動の種類と観察された数的行動の例*

活動の種類	活動内容	数的行動の例
I　設定活動		
歌	歌を歌う	数え歌/数・大きさ・形の身体表現
楽器練習・音楽鑑賞	楽器の練習，音楽鑑賞をする	—
製作	作品を作る	材料の数・大きさ・形の確認
製作準備	製作の準備をする	グループの人数調整/準備終了の順位
製作物で遊ぶ	製作した玩具などで遊ぶ	ダンボールの風呂に入れる人数を制限
運動・器械体操	音楽なしで身体を動かす	数の掛け声
ダンス・リズム体操	音楽に合わせて身体を動かす	人数でグループ分け/数の掛け声
プール	プールで泳ぐ	使っている遊具の数を確認する
飼育	動物に餌をあげる，観察する	動物を数える/動物の大きさを比較する
栽培	植物の種まき，水やり，観察をする	種を埋める穴を数える/成長を比較
読み聞かせ	教師が絵本・紙芝居を読み聞かせる	挿絵の図形に注目/セリフに合わせ数唱
絵本	絵本を眺める，読む	数合わせの絵本を読む
国語	国語の学習をする	数を含む諺（雀百まで…）や単語を読む
算数	算数の学習をする	算盤の玉を数える/図形の名称を答える
英語	英語の学習をする	英語で数唱をする/英語で年齢を言う
地理	地理の学習をする（例：都市の名前）	—
筆圧の練習	筆圧調整のためにノートに線を書く	1，2と数えながら線で数字を結ぶ
ゲーム	特定のルールに従ってゲームをする	サイコロを使う/カルタの枚数を数える
ごっこ遊び	ごっこ遊びをする	買い物ごっこで残金や購入物を数える
遊びの披露	教師が得意な遊びを見せる（例：駒回し）	—
誕生日	誕生日・月のお祝いをする	年齢を質問する/蝋燭を数えながら消す
発表会の練習	発表会で上演する演劇の練習をする	登場順の確認/数で合図をする
他クラスの見学	他のクラスの活動を見学する	—
身体測定	教師が幼児の身長，体重を測る	教師が測定値を読み上げる
避難訓練	避難訓練をする	—
施設の使用説明	施設・遊具の使用について指導を受ける	竹馬と保管場所の番号を一致させる
整列の練習	整列の練習をする	身長の比較/整列順の番号を帽子に書く
II　日課活動		
出席ノート	出席ノートにシールを貼る	出席ノートのカレンダーにシールを貼る
出欠の確認	出欠の確認をする	欠席数の確認/男女の欠席数を加算する
集合	教師の指示のもとに一ヶ所に集合する	カウントダウンで集合を促す/人数確認
挨拶	教師/当番に導かれて挨拶をする	—
当番の紹介	教師が当番にインタビューをする	当番が好きな色（虹色）の色数を数える
日付の確認	当日の日付を確認する	日付を全員で読み上げる/日付を尋ねる
活動予定の確認	活動の日時，内容の確認	遊びの開始時間を時計で説明する
活動内容の話し合い	活動内容を計画する	店屋ごっこの店の種類を多数決で決定
活動の振り返り	活動を振り返る	劇に登場した役の数を数える
持ち帰り物の配布	持ち帰る文書やタオルを配布する	配布物の数を確認/子どもの人数を確認
表彰	ご褒美カードを貰う	ご褒美カードの数を確認する
生活上の話題・注意	教師が気候，服装，生活習慣について確認	—
保健・衛生習慣	トイレ，手洗い，水分補給，乾布摩擦をする	数の掛け声をかけながら乾布摩擦をする
片付け・掃除	使用した遊具を片付ける，掃除をする	ブロックを容器の形状にあわせて収納
お祈り・瞑想	お祈り，瞑想をする	—
衣服の着脱	服を着替える，帽子の着脱をする	笛が3回なった時に帽子をかぶる
場所移動	教師の指示で教室や場所の移動をする	数の掛け声にあわせ駆け足で移動

Table 2　*設定活動にみられた活動の総数，数的活動数，数的領域の内訳*

設定活動の種類	活動総数	(数的活動)	数的活動の数的領域				
			数	算術	空間幾何	測定	パターン
歌	105	(43)	31	2	9	13	
楽器練習・音楽鑑賞	8	(−)					
製　作	43	(36)	31	3	26	13	2
製作準備	17	(8)	6	1	3	1	
製作物で遊ぶ	3	(3)	3				
運動・器械体操	37	(22)	19	1	4	2	
ダンス・リズム体操	36	(19)	17	1	9	3	1
プール	2	(2)	1		1		
飼　育	3	(2)	1			1	
栽　培	6	(5)	4			3	
読み聞かせ	19	(11)	8	2	4	1	
絵　本	7	(2)	2				
国　語	38	(11)	11		1	1	
算　数	9	(9)	8	1	2		
英　語	12	(3)	3				
地　理	4	(−)					
筆圧の練習	2	(2)	2				
ゲーム	9	(7)	7		2		
ごっこ遊び	6	(5)	4	3	1		
遊びの披露	2	(−)					
誕生日	13	(8)	8	1		2	
発表会の練習	9	(5)	4	1	1	3	
他クラスの見学	4	(−)					
身体測定	2	(1)	1				
避難訓練	1	(−)					
施設の使用説明	5	(4)	4			1	
整列の練習	5	(5)	5			1	
計	407	(213)	180	16	63	45	3

Table 3　*日課活動にみられた活動の総数，数的活動数，数的領域の内訳*

日課活動の種類	活動総数	(数的活動)	数的活動の数的領域				
			数	算術	空間幾何	測定	パターン
出席ノート	17	(14)	14				
出欠の確認	53	(44)	44	19			
集　合	77	(25)	23		4	2	
挨　拶	66	(−)					
当番の紹介	6	(1)	1				
日付の確認	18	(18)	18				
活動予定の確認	34	(12)	10		2	1	
活動内容の話し合い	3	(2)	2	1	1		
活動の振り返り	5	(1)	1				
持ち帰り物の配布	8	(3)	2			1	
表　彰	5	(1)	1				
生活上の話題・注意	13	(−)					
保健・衛生習慣	67	(3)	3				
片付け・掃除	69	(19)	8		6	6	
お祈り・瞑想	7	(−)					
衣服の着脱	24	(5)	4			1	
場所移動	42	(6)	5			1	
計	514	(154)	136	20	13	12	0

「集合」(25活動),「片付け・掃除」(19活動),「日付の確認」(18活動)の順であった。これらの活動のなかで,保育活動に数的活動が含まれる割合が高かったのは「日付の確認」と「出欠の確認」であり,それぞれ全活動の100%と83%の活動で数的活動が観察された。「集合」には32%,「片付け・掃除」は28%の割合で数的活動がみられた。活動の数的領域としては,数領域に関係した活動が136活動と最も頻繁に,日課活動で観察された数的活動の88%でみられた。パターン領域に関係した活動は観察されなかった。

数的活動における支援 数的活動が頻繁に観察された「歌」,「製作」,「運動・器械体操」,「出欠の確認」,「集合」の5種類の活動を対象に,それらの活動における教師の数的支援の方法について,フィールドノートの記録をもとに以下詳細に分析した。

(a)歌(43活動):教師は29活動において,歌詞に数的要素が含まれる歌を選択し,それを活動に取り入れた。歌詞中の数的要素は,数,空間幾何,測定のいずれかの領域に関係し,そのような歌は25種類以上観察された。また,歌を歌う時,教師は数,大きさ,形を身体で表現するように頻繁に幼児に促した(22活動)。以下,数領域の行動が促された例,測定領域と空間幾何領域の行動が観察された例を,それぞれ活動から抜粋して示す。

(活動番号018-01:N幼稚園,年中,時期I)皆で歌をうたう。「キャベツ畑で青虫がキャベツを1枚食べてこんなに大きくなりました」先生がキャベツの枚数を指で,青虫の大きさを手で示す。多くの子どもがそれを真似している。2枚まで歌ったとき,先生が「さあ,次は何枚だろう」と聞き,子どもが一斉に「3枚!」と答える。[質問しながら5枚まで歌う]

(活動番号051-04:T幼稚園,年少,時期V)「リスさんがマスクした小さい小さいマスクした,ハハハハックション…ブーちゃんがマスクしたまあるいまあるい…カバさんがマスクした大きい大きい…」の歌を歌う。先生①は歌いながら画用紙で作った動物に動物の鼻の形に合ったマスクをはめてみせる。先生②は子ども達の前で歌の振り付けを見せている。

(b)製作(36活動):教師の数的支援は,製作の材料を配布する過程で最も頻繁に見られた(13活動)。教師は配布する材料について,材料の数,大きさ,形に言及して説明し,それらを幼児に質問することで幼児の関与を促した。必要な場合は合計数も確認した。材料の配布中もしくは配布後には,教師は幼児に受け取った材料の数,形,大きさを確認するように促した。以下に,数と算術領域の行動が促された例を示す。

(活動番号065-06:H幼稚園,年中,時期V)[これから友達の顔を描くと説明した後]先生が水色の画用紙を持って「今日は水色があります。水色が…」というと,1人の子どもが「1枚」といい,皆で続けて5枚まで数える。…最後に,薄いピンクの画用紙が4枚あった。先生が濃いピンクを持ち上げて「さっきここに何枚あった?」と聞くと,子どもが「4枚」と答えた。先生が「4枚と4枚で合わせてみましょう。合わせると?」と聞くと,子どもが一斉に「8枚!」と答え,先生が「ピンクが8枚になりました」と答える。

また,教師はクラス全員に作品の作り方を説明する過程で,頻繁に数,形,大きさに言及した(12活動)。以下に,空間幾何領域の行動が観察された例を示す。

(活動番号062-10:D幼稚園,年中,時期V)鬼のお面を新聞紙で作る(実際に作っているのは兜)。先生が「皆の家の新聞紙を四角く折りました。三角になっています」と説明しながら,黒板に三角形に折った新聞紙を貼る。「三角のお山のところを上において,横じゃなくて端っこ(下)を押さえて上まで持ち上げてください」と黒板の新聞紙を用いて子どもに折り方を説明していく。子どもは口々に「四角になった」「ダイヤじゃん」などと言い,また折り方について「金魚と同じじゃん」と言う子どももいる。

(c)運動・器械体操(22活動):教師は10活動において,準備体操の屈伸などに合わせて数の掛け声をかけることを幼児に促した。教師は笛を吹き,幼児だけが笛に合わせて掛け声をかけることもあった。以下に典型例を示す。

(活動番号132-04:D幼稚園,年少,時期II)体操の時間になる。…M先生が「首ぐるぐる…はい反対…1からもう一度ポーズ…」などと指示をだし,M先生と子どもが「1,2,…8,2,2,3,4,…8」と一緒に掛け声をかけながら体操を続ける。

(d)出欠の確認(44活動):出欠の確認では数と算術の領域に関係した数的支援が見られた。教師は,幼児の名前を一人ずつ呼び出欠を確認した後,頻繁に欠席人数を質問した(32活動)。また,男女の欠席人数を個別に質問してから,その合計人数を幼児に質問する教師の行動も14活動でみられた。以下の例では,数と算術の両方が含まれた。

(活動番号150-05:O幼稚園,年少,時期IV)全員出席をとった後で,先生が「今日のお休みは男の子が?」と聞き,子どもが一斉に「2人!」と答える。続けて,「女の子は?」と聞くと「1人!」と答え,「合わせて?」と聞くと「3人!」と一斉に答える。先生は片手に指を2本,もう片手に1本立てて欠席している子どもの人数を表している。先生と一緒に指を立てている子も数人いる。「今日はお風邪の人がたくさんいて悲しいから3回やりましょう」と先生が言うと,子どもが一斉に「えーん,えーん,えーん」と3回泣きまねをする。

(e) 集合(25活動)：集合の活動では，数領域，空間幾何領域，測定領域のいずれかに関係する数的支援がみられた。最も頻繁に観察された教師の支援は，幼児の集合を急がせるためにカウントダウンすることであり，そのような教師の行動が10活動で観察された。集合していない幼児が少数の場合には，以下の例のように，すでに集まっている幼児にも一緒にカウントダウンするように促した。以下の例では，数領域の行動が促された。

(活動番号163-06：F幼稚園，年中，時期Ⅳ) 園庭で先生のところに集合する。まだ集まっていない子どもがいるため，先生が「誰が帰って来る(集合)の遅いかな。みんなで数えよう」と言う。すでに集まっている子ども達が，まだ来ていない子どもの方を向いて，先生と一緒に「5, 4, 3, 2, 1」とカウントする。

考　察

研究1の目的は，日本の幼稚園で行われている数的支援の実態について明らかにすることであった。教師主導の保育活動で行われている数的活動の頻度について検討したところ，日本の幼稚園では数的活動は頻繁に行われており，教師主導の活動の約40％にも及ぶことが示された。このような数的活動は，大多数が数的学習を目的としていない保育活動に数的支援が埋め込まれる形で行われており，数的学習に的を絞った数的活動は日本の幼稚園では殆ど行われていないことが確認された。また，活動の数的領域としては，数領域に関係したものが圧倒的に多く，パターン領域に関係した活動は殆ど行われていなかった。この結果は，1学期の保育活動について検討した榊原(2002)とも整合するものであり，日本の幼稚園教師の数的支援が特定の年間行事や季節に偏らず，1年間を通して行われていることが確認された。榊原・波多野(2004)は，研究1で観察されたクラス担任教師を含む幼稚園・保育所の保育者43名を対象に，保育活動における数的支援についてインタビューした。その結果，28名(65％)の保育者が，幼児の数的発達に対する支援を意図的にすることはなく，数量の要素は意識しなくても自然に生活に含まれると回答している。研究1では，幼稚園教師が意図していないにもかかわらず，実際の保育活動では，活動に「埋め込み型」の数的支援が頻繁に行われていることが示された。この結果は注目に値する。

さらに研究1では，数的行動が頻繁に生じた保育活動の種類と，そのような活動に埋め込まれた教師の数的支援の具体的な内容についても検討した。教師は保育活動を主導する時，歌詞に数的要素が含まれている歌を選択して歌う，製作の材料の数，大きさ，形を幼児と一緒に確認する，体操で幼児と一緒に数の掛け声をかける，出欠を確認する時に男女の欠席人数の合計を幼児に質問する，幼児の集合を急がせるためにカウントダウンする，などの方法で幼児に数的関与を促していることが明らかにされた。

研　究　2

研究2では，研究1で示されたような日本の幼稚園教師の支援が幼児の数的発達に及ぼす影響について検討する。日本の幼稚園のなかにも，例えば幼児の自由遊びを重視する園もあれば，教師主導の活動を多く取り入れる園もあり，その保育構成は一様ではない。研究2では，この点に注目し，幼稚園で与えられている数的支援の程度が異なる幼児の数的能力を比較検討する。

方　法

対象　研究1で観察対象となったクラスに在籍し，日米中の国際比較研究(Starkey, 2003)に参加した142名のうち，2001年度の初めと年度末の2回ともCMAを受けた幼児130名(年少61名，年中69名)を研究2の対象とした。本研究のデータ収集を行った日米中の国際比較研究では，複数回にわたる保護者の協力を必要としたため，対象児の人数は1クラスにつき3～13名(Me = 10)とばらつきがでたが，4クラスを除き(それぞれ3, 5, 6, 7名)，全てのクラスには9名以上の対象児が在籍していた。第1回CMA実施時の幼児の平均年齢は年少3.69歳(SD = 0.30)，年中4.65歳(SD = 0.26)で，男女はほぼ同数であった。

課題　CMA(Starkey, 2002)の日本語版を作成した(Sakakibara, Ando, & Hatano, 2002)。CMAは幼児の数的能力の総合的な評価を目的に作成され，5領域(数，算術，空間幾何，測定，パターン)17課題で構成された(資料参照)。CMA日本語版の作成にあたっては，助数詞の影響を考慮するなど，日本人の幼児に適した形に材料と手続きを修正した。

手続き　CMAは2001年5月～7月(第1回CMA)と2002年1月～3月(第2回CMA)に，幼児の通う幼稚園において各幼児個別に施行した。第1回CMAと第2回CMAでは同じ課題が用いられた。CMAは2セッションに分けて行われ，各セッションの所要時間は20分程度であった。2つのセッションを同日に実施する場合には，セッション間に最低30分の休憩時間を設けた。2セッションの提示順序はカウンターバランスした。

分析方法　CMAにおける幼児の回答を質問項目ごとに正誤判定した。直接測定，非標準単位の作成，非標準単位を用いた測定の3つの課題については，回答と特定の方略の使用の両方を用いて正誤判定をした。その後，各領域の成績および総合成績を各幼児個別に計算した。各領域の成績については，課題ごとの正答率を算出し，その平均値を計算した。総合成績は，各領域(数，算術，空間幾何，測定，パターン)の成績の平均値とした。

さらに，研究1で観察された教師主導の保育活動の

フィールドノートをもとに，幼児が通う14クラスそれぞれについて，1日あたりに行われた教師の数的支援の推定量を算出した。推定量については，幼児が数的活動に参加した回数だけでなく，数的活動に参加した時間についても独立した効果をもつと推測されたため，本研究ではこれらを掛け合わせて合成量をつくり，それを用いた。数的支援の推定量の具体的な計算方法は次の通りである。はじめに，367の数的活動それぞれについて，クラスの幼児1名あたりの活動への参加時間（活動に参加した幼児の人数×活動の持続時間/クラス人数）を算出し，クラス別に集計した。その後，この数値を各クラスで観察された教師主導の数的活動の回数と掛け合わせることで，クラス別の午前中（9:30-11:30）の数的支援の推定量を計算した。午後の教師主導の活動における数的支援については，数的支援が午前と午後で同一の割合で行われているものと仮定したうえで，事前のアンケートによって把握していた午後の教師主導の活動時間を用いて推定量を算出した。これらの推定量から1日あたりの数的支援の推定量を求めた結果，支援量に差がある3群（少，中，多）のクラスが見出された。1日あたりの数的支援の推定量は少支援群で100-305，中支援群で400-515，多支援群では840-970であった。各群の対象児の人数は，年少では少支援4クラス37名，中支援2クラス17名，多支援1クラス7名，年中では少支援3クラス34名，中支援3クラス26名，多支援1クラス9名であった。多支援クラスの2クラス（年少1，年中1）は，同じ園のクラスであった。

結　果

総合的な数的能力への影響　幼児のCMAにおける総合成績の平均値と標準偏差をCMAの実施回，幼児の年齢，幼稚園で与えられている数的支援の推定量（少，中，多）について個別に算出した。この結果をTable 4に示す。幼児の数的発達に対する教師の数的支援の効果について検討するため，第2回CMAでの総合成績について，教師の数的支援の推定量（少，中，多）を要因とする共分散分析を行った。共変量には年度始めに実施した第1回CMAの総合成績を用い，年少児と年中児については個別に計算した。その結果，総合成績に対する教師の数的支援の有意な効果は，年少児（$F(2, 57)=0.72$, *ns*）と年中児（$F(2, 65)=2.36$, *ns*）のどちらにおいても見られなかった。

数領域の能力への影響　数領域の能力は，幼児期に発達する最も典型的な数的能力と考えられる（e.g., Ginsburg, Klein, & Starkey, 1998）。そこで本研究では，総合的な数的能力だけでなく，幼児の数領域の発達に対する教師の数的支援の効果についても検討した。Table 5はCMA数課題での成績の平均値と標準偏差である。第2回CMA数課題での成績について，教師の数的支援の推定量（少，中，多）を要因とする共分散分析を行った。その際，第1回CMA数課題の成績を共変量として用い，年少児と年中児については個別に計算した。その結果，年少児と年中児の両方で教師の数的支援の有意な効果が認められた。年少児では，10％水準で有意傾向が見られた（$F(2, 57)=2.92$, $p=.062$）。年中児では，教師の数的支援の効果は1％水準で有意であった（$F(2, 65)=9.47$, $p<.001$）。多重比較の結果，少支援（$M=0.81$, $SD=0.15$）よりも多支援（$M=0.96$, $SD=0.07$），また中支援（$M=0.73$, $SD=0.16$）よりも多支援のクラスの幼児の方が数課題の成績が高かった。

考　察

研究2では，幼児の数的発達に対する教師の支援の効果について検討した。その結果，幼稚園で多くの数的支援を与えられている幼児は，数的支援が中程度や少ないクラスの幼児に比べて，数領域の能力が優れている傾向が示された。幼児の総合的な数的能力に対する教師の支援の効果は見られなかった。研究1では日本の幼稚園に

Table 4　*CMA総合成績の実施回別，年齢別，数的支援量群別の平均と標準偏差*

	n	CMA 1		CMA 2	
		M	*SD*	*M*	*SD*
年少（3歳）					
少支援群	37	0.35	0.15	0.53	0.17
中支援群	17	0.28	0.15	0.46	0.22
多支援群	7	0.35	0.12	0.59	0.11
年中（4歳）					
少支援群	34	0.58	0.16	0.71	0.14
中支援群	26	0.60	0.17	0.67	0.14
多支援群	9	0.73	0.15	0.80	0.09

注．総合成績は，下位5領域（数，算術，空間幾何，測定，パターン）の平均正答率。

Table 5　*CMA数課題成績の実施回別，年齢別，数的支援量群別の平均と標準偏差*

	n	CMA 1		CMA 2	
		M	*SD*	*M*	*SD*
年少（3歳）					
少支援群	37	0.48	0.22	0.62	0.23
中支援群	17	0.33	0.18	0.51	0.29
多支援群	7	0.42	0.14	0.75	0.09
年中（4歳）					
少支援群	34	0.73	0.17	0.81	0.15
中支援群	26	0.73	0.20	0.73	0.16
多支援群	9	0.77	0.21	0.96	0.07

注．数課題成績は，数課題（5課題）の平均正答率。

おいて特に数領域に関係した数的支援が頻繁に行われていることが明らかにされたが，そのような教師の数的支援が幼児の数領域の能力を効果的に促す役割を果たしていることが示された。

研究2では，幼稚園教師の支援の強い効果は示されなかったが，これが幼児の数的学習に対する幼稚園教師の支援の影響が小さいことを意味しているとは限らない。研究2では，日本国内で数的支援の程度が異なる幼稚園に通う幼児の数的能力を比較したが，日本の幼稚園では，保育構成の違いにより多少の差はあったとしても，全体として数的支援を頻繁に行う傾向がある可能性が考えられる。つまり，日本国内では教師の数的支援の量に大差はないのかもしれない。この点が正しいとすれば，日本の幼稚園における数的支援の効果は，異文化間比較においてより明確に示されるだろう。現在進行中の日米中の国際比較研究におけるデータの分析では，日本の幼稚園における数的支援が米国や中国に比べて保育活動に埋め込まれる形で行われる傾向にあることが見出されている。また，そのような日本の幼稚園の数的支援の効果が，数的学習に的を絞って行う傾向にある他国の数的指導に劣っているということもなさそうである（Starkey, 2003）。

総合考察

本研究の目的は，日本の幼稚園における数的支援の実態を探ること（研究1）と，幼児の数的発達に対する教師の数的支援の役割（研究2）について検討することであった。日本の幼稚園における教師の数的支援は，数的学習を目的としない教師主導の保育活動において頻繁に行われており，幼児の数能力の発達を効果的に促す役割を果たしていることが示された。これらの結果から，先行研究（e.g., 中沢,1981；山内,1994）で事例として数多く報告されてきた教師の数的支援が実際に日本の幼稚園において頻繁に行われていることが明確に示され，また指摘はされていたが実証的に検討されてこなかった幼稚園教師による数的支援の促進的役割（Hatano & Inagaki, 1999）についても，その影響が示唆された。さらに本研究では，数的要素を頻繁に含む傾向がある保育活動の種類と，そのような活動における具体的な支援の方法についても明らかにした。これらの結果は，日本の幼児の優れた数的能力を支えている幼稚園教師の支援の基本的な過程について重要な示唆を与えるものであると考えられる。

本研究では日本の幼稚園教師が保育活動において数的支援を頻繁に行っていることが示されたが，このような数的指導について，教師は意識的に行うことはないという（榊原・波多野, 2004）。では，なぜ日本の幼稚園教師は数的支援を頻繁に行っているのだろうか。

Guberman（2004）は，小学校1～3年生の韓国系アメリカ人とラテン系アメリカ人では学校外での算術やお金の使用が異なることを明らかにし，そのような学校外での特定の活動が学校での算数成績に対する親の満足感や期待などの文化的価値と結びついており，結果として算術課題における子どもの成績と深く関係していることを示した。この研究からも明らかなように，文化に共有されている算数をめぐる価値付けが，大人による子どもの数的活動の構造化のあり方を決定する重要な要因であることは間違いない。つまり，どのような種類の数的活動をどのような頻度で行うかは，文化の成員が数発達に対して共通して付与する価値づけや，それにもとづく信念を反映しているのである。

本研究で観察されたような日本の幼稚園における保育活動についても，数学習を重視する日本の文化的価値が無意識のうちに反映されたものである可能性が考えられる（Hatano & Inagaki, 1999）。つまり，日本の幼稚園における数的支援が保育活動に埋め込まれる形で頻繁に行われているのは，幼児の数的学習が保育活動における主要な目標としてではないにしても，二次的な目標として無意識のうちに設定されているためかもしれない。研究1では，幼稚園教師が自身の主導する活動に頻繁に数的要素を取り入れていることが明らかにされた。つまり，日本の幼稚園教師には保育を組み立てる手段として数的要素を用いる傾向があることが示された。「手段としての数的要素」は，例えば幼児の興味・関心を教師が意図した保育活動に惹き付けるために用いられていると考えられる。日本文化では，幼児の数的学習に高い価値を付与しているため，保育活動の手段として数的要素が優先的かつ頻繁に用いられ，その結果として数的要素が埋め込まれた手段のレパートリーが非常に豊富になった可能性がある。本研究が明らかにしたように，日本の幼稚園では図形，算術，測定，パターン，数など様々な数的領域のうち，特に数領域が重視される傾向がある。これについては日本文化が数領域を重視している可能性と，幼稚園においては多人数の子どもを対象とした活動が多く存在するため人数確認など数領域にかかわる数的活動が比較的多くみられるという可能性が考えられる。日本文化における数的活動の位置づけに関するこれらの可能性については，今後，検討する必要がある。

今後の課題としては，さらに次の2点が挙げられる。第1に，保育活動の異文化間研究を行う必要がある。これにより，幼稚園教師の支援の効果についてのより明確な理解が得られると考えられる。第2に，本研究では幼稚園教師に注目して検討したが，幼児は家庭においても多様な数的活動に参加している（Saxe, Guberman, & Gearhart, 1987）。そのため，家庭での親による数的支援についても検討する必要があるだろう。数領域以外の数的領域の

発達については，家庭の影響が大きい可能性も考えられる。

最後に，本研究の結果から得られた幼児教育への示唆について考えてみたい。本研究では，日本の幼稚園では数領域以外の数的領域に関わる活動はごく少数しか行われていないことが示された。幼稚園での幼児の自由遊びについて検討した研究では，米国や中国の幼児は数え上げよりもパターンや形に関わる活動に頻繁に自発的に関与していることが報告されている（Ginsuberg, Inoue, & Seo, 1999；Ginsbuerg, Lin, Ness, & Seo, 2003）。日本の幼児もこれらの子どもたちと同様に，数領域以外の数的活動に強い興味を自発的に持ち取り組んでいる可能性がある。そうであるとするならば，本研究で明らかにされたような日本の保育実践の文化的特性，より具体的に言えば，「埋め込み型」の支援が効果的に機能している実態と数領域以外は注目されにくいという傾向を教師が理解し，より多くの数的領域を保育活動に埋め込むことで，幼児の数的発達に対するより総合的な支援が可能になるだろう。

文　献

Antell, S. E., & Keating, D. P. (1983). Perception of numerical invariance in neonates. *Child Development,* **54** (3), 695-701.

Ginsburg, H. P., Choi, Y. E., Lopez, L. S., Netley, R., & Chi, C. Y. (1997). Happy birthday to you: The early mathematical thinking of Asian, South American, and U. S. children. In T. Nunes, & P. Bryant (Eds.), *Learning and teaching mathematics: An international perspective* (pp.1-45). East Sussex, England: Erlbaum/Taylor & Francis.

Ginsburg, H. P., Inoue, N., & Seo, K. H. (1999). Young children doing mathematics: Observations of everyday activities. In J. V. Copley (Ed.), *Mathematics in the early years* (pp.88-99). Washington: National Association for the Education of Young Children.

Ginsburg, H. P., Klein, A., & Starkey, P. (1998). The development of children's mathematical knowledge: Connecting research with practice. In I. E. Sigel, & K. A. Renninger (Eds.), *Handbood of child psychology* (5th ed., pp.401-476). New York: John Wiley & Sons.

Ginsburg, H. P., Lin, C., Ness, D., & Seo, K. H. (2003). Young American and Chinese children's everyday mathematical activity. *Mathematical Thinking and Learning,* **5** (4), 235-258.

Goodnow, J. J., Miller, P. J., & Kessel, F. (Eds.). (1995) *Cultural practices as contexts for development. New directions for child development (no.67).* San Francisco: Jossey-Bass/Pfeiffer.

Guberman, S. R. (2004). A comparative study of children's out-of-school activities and arithmetical achievements. *Journal for Research in Mathematics Education,* **35** (2), 117-150.

Hatano, G., & Inagaki, K. (1999). Early childhood mathematics in Japan. In J. V. Copley (Ed.), *Mathematics in the early years* (pp.219-226). Reston, VA: The National Council of Teachers of Mathematics.

文部省．(1999)．*幼稚園教育要領*．東京：フレーベル館．

中沢和子．(1981)．*幼児の数と量の教育*．東京：国土社．

Piaget, J., & Szeminska, A. (1962) *数の発達心理学*（遠山啓・銀林　浩・滝沢武久，訳）．東京：国土社．(Piaget, J., & Szeminska, A. (1952). *La genèse du nombre chez l'enfant.* Neuchatel, Suisse: Delachaux & Niestlè S. A.)

榊原知美．(2002)．保育活動における幼児の数量学習：幼稚園教師からの支援を通じて．*保育学研究*，**40** (2)，39-48.

Sakakibara, T., Ando, J., & Hatano, G. (2002). Early mathematics competence and math-related activities in Japanese young children with highly and less highly educated parents. In P. Starkey (Convenor), *Preschool children's mathematical development and learning environments in China, Japan, and the United States.* Symposium conducted at the XVII Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, Ottawa, Canada.

榊原知美・波多野誼余夫．(2004)．保育活動における数量指導：幼児の数量発達についての保育者の意識．*日本心理学会第68回大会発表論文集*，1033.

Sakakibara, T., Hatano, G., & Inagaki, K. (2001). The development of numerical competence among Japanese young children. *慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要第52号*，慶應義塾大学，東京，1-5.

Saxe, G. B. (1991). *Culture and cognitive development: Studies in mathematical understanding.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Saxe, G.B., Guberman, S.R., & Gearhart, M. (1987). Social processes in early number development. *Monographs of the Society for Research in Child Development,* **52** (2), 162.

曹　能秀・田中敏明．(2001)．中国における幼児数学教育の現状．*福岡教育大学紀要第50号第4分冊*，福岡教育大学，福岡，265-273.

Starkey, P. (2002). *Preschool children's mathematical development and learning environments in China, Japan, and the United States.* Symposium conducted at the XVII Biennial Meeting of the International Society for the Study of

Behavioural Development, Ottawa, Canada.

Starkey, P. (2003). *Young children's mathematical development and learning environments in China, Japan, and the United States.* Symposium conducted at the Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Florida, USA.

Stevenson, H. W., Lee, S.Y., & Stigler, J. W. (1986). Mathematics achievement of Chinese, Japanese, and American children. *Science,* **231** (4739), 693-699.

Wynn, K. (1990). Children's understanding of counting. *Cognition,* **36** (2), 155-193.

Wynn, K. (1992). Addition and subtraction by human infants. *Nature,* **358** (6389), 749-750.

山内昭道. (1994). *平成5年度文部省「教育方法の改善に関する調査研究」委託研究報告書：幼児期における数量的思考力の基礎となる能力の発達と幼稚園におけるその指導方法の開発に関する研究.* 東京：東京家政大学内・幼児教育方法研究会.

付記

調査にご協力いただいた幼稚園の園児の皆様，先生方に心より感謝いたします。また，研究にあたり故 波多野誼余夫先生に貴重なご指導，ご示唆を賜りました。厚く御礼申し上げるとともに，心よりご冥福をお祈りいたします。

なお，本研究の一部は米国の National Science Foundation（REC9979974, PI: Prentice Starkey & Alice Klein）および平成15-16年度文部科学研究費補助金（特別研究員奨励費：課題番号06423）の助成を受けて行われました。

Sakakibara, Tomomi (Japan Society for the Promotion of Science/ University of the Air). *The Role of Japanese Preschool Teachers' Support in Young Children's Mathematical Development.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2006, Vol.17, No.1, 50-61.

The present study investigated young Japanese children's mathematical development in relation to Japanese preschool teachers' support. In Study 1, types and frequency of mathematical activities, and the details of teachers' support of such activities, were examined by observing 14 preschool classrooms over a one year period. It was found that there were very few activities with the objective of teaching mathematics to the children. However, teachers' encouragement of mathematical development, especially with regard to numbers, was observed frequently in a variety of activities where the explicit goal was other than teaching mathematics (e.g., singing or taking attendance). In Study 2, the effect of the teachers' support was examined by comparing the mathematical competence of children in terms of the levels of mathematical support provided by teachers. The teachers' support was found to have an effect on children's competence with numbers. These findings suggest that Japanese preschool teachers facilitate young children's number development without relying on systematic teaching.

【Key Words】 Early childhood education, Mathematical development, Preschool teachers, Preschool activities, Naturalistic observation

2005. 1. 28 受稿, 2005. 11. 7 受理

資料　CMA日本版の課題

1. 数課題（Number Tasks）
   - 物の計数（Object Counting）：1列に並べられた物（3, 7, 10, 15, 30）を正確に数える能力を評定する。全5問。
   - 数詞系列の知識（Knowledge of Number Order）：特定の数（2, 7, 3, 6）の次もしくは前の数を質問し，数詞系列における数詞の順序についての知識を評定する。全4問。
   - 順序数（Ordinal Number）：1列に並べられた5つの物の順序位置を特定させることで，順序数に関する知識を評定する。全4問。
   - 数量比較用語（Quantitative Comparison Terms）：2つの人形が持っている玩具について質問し，「より多い」「同じ数」という用語に対する子どもの理解を評定する。全4問。
   - 等しい集合の構成（Construction of Equivalent Sets）：提示された1列の物と同数の集合を構成する能力を評定する。全2問。

2. 算術課題（Arithmetic Tasks）
   - 1集合の加算と減算，物を見せる（One-set Addition and Subtraction, Object Present）：提示された物について1集合の加算・減算をする能力を評定する。全4問。
   - 1集合の加算と減算，物を隠す（One-set Addition and Subtraction, Objects Hidden）：隠された物について1集合の加算・減算をする能力を評定する。全4問。
   - 1集合の加算と減算，物語問題（One-set Addition and Subtraction, Story Problems）：物なしで1集合の加算・減算をする能力を評定する。全4問。
   - 2集合の加算と減算（Two-set Addition and Subtraction）：（1）2つの不透明な容器に同時に1つずつ物を入れ，さらに片方に追加した後の2集合（n vs. n＋2）の比較，（2）その後，片方の集合に対して算術変換をした後の2集合（n＋1 vs. n＋2/ n vs. n＋2－1）の比較を1対1対応を用いて行う能力を評定する。

3. 空間幾何課題（Spatial and Geometric Tasks）
   - 形の命名（Shape Naming）：一般的な形について，名前を用いて特定する能力を評定する。全3問（日本では長方形を除外し，丸，三角形，四角形のみを使用）。
   - 形の識別（Shape Recognition）：一般的な形について，それぞれの幾何学的特徴に基づいて複数の典型例を識別する能力を評定する。全3問（日本では長方形を除外し，丸，三角形，四角形のみを使用）。
   - 幾何学的推論（Geometric Reasoning）：空間的に異なる向きに置かれている2つの三角形について，対応する辺を特定し，幾何学的な変換（平行移動，回転，反転）を推論する能力を評定する。全3問。

4. 測定課題（Measurement Tasks）
   - 直接測定（Direct Measurement）：大きさ，長さ，重さについて，2つのアイテムを直接的に比較する能力を評定する。全6問。
   - 非標準単位の作成（Creation of a Nonstandard Unit）：提示された物と同じ長さにリボンを切らせることで，測定の非標準的な単位を作る能力を評定する。全2問。
   - 非標準単位を用いた測定（Measurement with a Nonstandard Unit）：長さの異なる2つの物について，非標準的単位を使用して比較する能力を評定する。全1問。

5. パターン課題（Pattern Tasks）
   - 多様な材料によるパターンの複製（Pattern Duplication with Varying Source Sets）：与えられたパターンを多様な材料を用いて複製する能力を評定する。全4問。
   - パターンの延長（Pattern Extension）：与えられたパターンを延長する能力を評定する。全2問。

発達心理学研究
2006，第17巻，第1号，62-72

原　著

職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討

伊藤　裕子（聖徳大学人文学部）　相良　順子（聖徳大学人文学部）　池田　政子（山梨県立大学人間福祉学部）

本研究は，中年期夫婦を対象に，職業生活が夫婦関係満足度および主観的幸福感に及ぼす影響について，妻の就業形態により個人内と夫婦間で影響の仕方に差異がみられるかを検討した。妻フルタイム110組，妻パートタイム170組，妻無職106組の夫婦に，仕事へのコミットメント，夫婦関係満足度，主観的幸福感を質問紙により尋ねた。その結果，自身の仕事へのコミットメントが夫婦関係満足度に影響するのは妻のみで，夫では影響しない。しかし，夫の仕事へのコミットメントは妻の夫婦関係満足度および主観的幸福感にクロスオーバーな影響を及ぼし，夫の仕事へののめり込みの増大は妻の幸福感を低下させ，仕事満足感の増大は妻の夫婦関係満足度を高めていた。反対に，妻の仕事へのコミットメントが夫にクロスオーバーな影響をするのは妻がパートタイムの夫婦のみで，この場合，妻の仕事へののめり込みは夫の夫婦関係満足度を低下させ，仕事満足感の低さが夫の幸福感の低下を招くなど，夫は妻の仕事へのコミットメントの影響を受けやすい。妻の就業形態と収入，夫の分業観によって，職業生活が夫婦関係と心理的健康に及ぼすスピルオーバー/クロスオーバーな影響は異なっていた。

【キー・ワード】 クロスオーバー，夫婦関係満足度，職業生活，主観的幸福感，中年期夫婦

問　題

近年，働く既婚女性は増加し続け，専業主婦を上回って久しい（厚生労働省女性局，2003）。それに伴い，子どもを持って働く女性の多重役割の問題への関心が，子どもへの影響から，女性自身にも向けられるようになってきた。すなわち，女性にとっては家庭役割が軽減されないまま職業役割を持ち続けることになり，役割過重や役割間葛藤が抑うつや不安，身体的症候を生むことが問題として取り上げられるようになった。なかでも多重役割間の関係をとらえるとらえ方としてスピルオーバー（spill-over：流出）がある。スピルオーバーとは，仕事と家庭の一方の役割で生じた状況と意識が他方の役割の状況と意識に影響を及ぼすことをいい（Crouter，1984；小泉，1997），ネガティブな影響（例えば，仕事で嫌なことがあると，家庭でもイライラする）をネガティブ・スピルオーバー，ポジティブな影響（例えば，仕事が予想以上にうまく進むと，家庭でも気分がいい）をポジティブ・スピルオーバーという。

仕事上のストレスが増大すると心理的健康に悪影響を及ぼすことはこれまで広く研究されてきた。仕事役割から家庭役割へのスピルオーバーが増大すると心理的健康に負の影響を及ぼすことが多く報告されている。例えば，管理職・専門職として働く母親では，仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが増大すると抑うつや不安，苛立ちが増し（Beatty，1996），また，仕事と家庭の役割間葛藤が増大すると男女とも身体症状が増し，男性では不安が高くなる（Kinnunen & Mauno，1998）。我が国でも，幼児（福丸，2000）や学齢期（小泉・菅原・北村，2001）の子どもを持つ共働き夫婦を対象にした研究では，仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが増大すると妻・夫とも抑うつ傾向が高まるという。一方，仕事から家庭へのポジティブ・スピルオーバーの影響も多くはないが報告され，その増大は心理的健康を高める方向に作用している（Grzywacz，2000ほか）。そしてこれらの規定要因には一部でジェンダー差がみられ，ネガティブ・スピルオーバーは女性に，ポジティブ・スピルオーバーは男性に多く発生しやすいという（小泉，2004）。

これらの研究では，役割過負荷の点から多くは子育て期を対象とし，親役割・家事役割と仕事役割間の葛藤や過重が問題とされることが多い。多重役割の影響を考慮する場合，夫婦関係は重要な位置を占めるが，我が国ではもっぱら親役割に焦点が当てられ，配偶者役割が問題とされることは少なかったといえる。

では，仕事上のストレスやコミットメントの増大は夫婦関係にどのような影響を及ぼすであろうか。医療専門職として働く子を持つ女性では，仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが増大すると3カ月後の結婚満足度が低下する（Leiter & Durop，1996），ネガティブ・スピルオーバーの増大は夫婦の意見の一致を減少させ，配偶者への愛情を低下させるが，その影響は妻の側により大きい（小泉ほか，2001）という報告がある一方，仕事上のストレスが増大すると妻・夫とも精神的・身体的疲

弊を介して結婚満足度が低下する（Mauno & Kinnunen, 1999），あるいは職務上の役割の不明確さや職務満足の低さなど仕事上のネガティブな経験は，集中困難や抑うつを介して結婚満足度などの夫婦関係に影響する（Barling & MacEwen, 1992）という間接的な影響を報告するものもある。このように個人が経験する仕事上のストレスやネガティブ・スピルオーバーは必ずしも直接的に夫婦関係に影響するとは限らないが，影響する場合は概して女性の側に影響がみられる。

一方，夫婦関係が個人の心理的健康に影響を及ぼすことは数多く報告されている。なかでも配偶者からの情緒的サポートは夫婦関係満足度に関係し，心理的健康に大きな影響を及ぼす。妻の情緒的サポートは夫の疎外感を低減し（伊藤・池田・川浦, 1999），夫のそれは妻の夫婦関係満足度を高め（Erickson, 1993），妻の抑うつの低減にも直接作用していた（稲葉, 1999）。そして夫婦関係の良否は直接心理的健康を左右する。配偶者への愛情は抑うつを低減し（詫摩・八木下・菅原・小泉・菅原・北村, 1999），夫婦関係の良好さの認知は，自尊感情や健康度より主観的幸福感を大きく左右するものだった（遠藤, 1997）。

しかし，夫婦関係が心理的健康に及ぼす影響にはジェンダー差が認められる。稲葉（2002a）は，無作為抽出で得られた全国6000名近い成人男女の結婚上の地位（配偶者の有無）と心理的ディストレスとしての抑うつとの関係をみたが，男性では有配偶に比べ無配偶で抑うつ傾向が高く，結婚そのものの恩恵は男性に強く現れていた。また，数井（1998）は，結婚は男性にとっては精神的な健康を維持するために有益であっても，女性にとってはむしろ何らかの心身的不健康状態を作りやすいと指摘する。これだけでなくさらに，夫婦関係の認知にもジェンダー差がみられ，夫婦間の認知のズレが心理的健康に影響することを池田・川浦・伊藤（2002）は明らかにしている。そこでは夫婦ペアのデータについて，配偶者を情緒的サポート対象として相互に選択するか否かでクラスター分析しているが，抽出されたのは相互選択型，相互拒否型，夫一方選択型の3型で，妻一方選択型は抽出されなかったという。そしてそれら各型の夫婦の疎外感を比較したところ，夫一方選択型の夫は相互選択型の夫と同程度に疎外感が低かったが，その妻は相互拒否型の妻と同程度に疎外感が高かった。これらから妻は夫婦関係のあり方に影響されやすく，他方，夫は妻がどのように思っているかには関係なく，結婚生活が維持されている（=有配偶である）こと自体によって心理的健康の低下を免れているということができる。

これまでみてきたように，多重役割や役割間葛藤あるいは仕事と家庭役割間のスピルオーバーを取り上げる場合，そのほとんどは個人内の影響を問題にするものだった。しかし，配偶者役割を問題にしようとする場合，夫婦間の影響，すなわちクロスオーバー（cross-over：交差）を問題にしないわけにはいかない。クロスオーバーとは，夫婦の一方に生じた事象が他方に影響を及ぼすこと，つまり対人関係を媒介とした事象の影響過程をいう（稲葉, 2002b）。例えば，夫の仕事上の多忙さ，特に夜の付き合いの多さが妻との会話時間を減少させ，結果として妻の疎外感を高めるというように（伊藤ほか, 1999），配偶者の一方の役割過重が他方に影響を及ぼすことが考えられる。

しかし，仕事上のストレスやコミットメントが増大すると，配偶者の結婚満足度や心理的健康に影響するというクロスオーバーを扱った研究はスピルオーバーの研究に比べ非常に少ない。例えば，18歳以下の子どもを持つ共働き夫婦を対象にしたものでは，夫の仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが増加すると妻のストレスが増大する（Tingey, Kinger, & RiLey, 1996），夫の職場の望ましくない出来事（失業，降格，仕事上の失敗，同僚・上司との不和など）は妻の抑うつ傾向に影響を及ぼし，それは妻自身が経験する自分の職場での出来事と同じような規定力を持つ（Rook, Dooley, & Catalano, 1991），さらに，夫の職場での役割過重はその日の家庭での妻の役割過重を引き起こすが，妻の職場での役割過重は夫に影響しない（Bolger, Delongis, Kessler, & Wethington, 1989）など，夫の職場での出来事や仕事上のストレスが妻に影響を及ぼすことが報告されている。

一般に，女性の方が男性に比べストレッサーに対する脆弱性（vulnerability）が高いといわれるが（Simon, 1998），稲葉（2002b）によれば，女性は「他者の身に生じた出来事への共感性」（Kessler & McLeod, 1984）が高いゆえに，親しい者に発生した出来事に対して脆弱性が高いのだという。そのため夫に生じた出来事や仕事上のストレスが配偶者である妻に影響するのだと考えられる。

しかし，こうした夫婦間のクロスオーバーについて，実際にカップルでデータを取り，一方の他方への影響という形で行われた研究は少なく，多くは妻側の認知によっている。また，我が国で夫婦間のクロスオーバーを明確に扱った研究はないといわれる（稲葉, 2002b）。しかもこれら多重役割研究では，対象者の女性を共働きとして一括して扱う場合が大半で，女性の就業を統制する場合でも，職種（専門職，管理職など）を問題にすることが多い。しかし，我が国の場合，女性就業者は職種で待遇が決まるというより，常雇か臨時かで待遇は全く異なってくる。女性のネガティブ・スピルオーバーを生起させる要因として労働時間の長さがあげられており（小泉・菅原・前川・北村, 2003），妻の就業形態によって夫婦間のクロスオーバーによる影響の仕方が異なってく

ることが考えられる。

そこで本研究では，中年期夫婦を対象にカップルでデータを取り，仕事へのコミットメントが夫婦関係を介して心理的健康に及ぼす影響の過程を，特に夫婦間のクロスオーバーとジェンダーの視点から検討してみたい。その際，妻の就業形態によって影響の仕方が異なってくることが考えられるので，妻の就業形態ごとに夫婦間の検討を行う。

ここで対象を中年期としたのは，子育てを終えた女性にとって配偶者が情緒的サポート対象として比重が増大すること（伊藤・伊藤・池田・相良，2004），また，子育て期に比べ中年期の方が夫婦関係満足度が高まること（伊藤・相良・池田，2004）から，中年期には配偶者役割の重みが相対的に増し，同時にその個人差が大きくなるということに加え，本研究では就業形態に着目したため，中年期は既婚女性の就業割合が最も高まる時期（厚生労働省女性局，2003）でもあるからである。

なお，心理的健康の指標としてこれまでの研究ではそのほとんどが抑うつや不安，疎外感などネガティブな側面から捉えられてきたが，本研究では主観的幸福感（subjective well-being）というポジティブな側面から捉えることを試みる。主観的幸福感は，感情状態を含み，家族・仕事など特定の領域に対する満足や人生全般に対する満足を含む広範な概念であり（Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999），ある程度の時間的安定性と状況に対する一貫性を持つと考えられるため，ポジティブな側面からの成人の心理的健康を査定するのに適していると思われるからである。

方　　法

調査対象と方法

調査は中年期の夫婦を対象に行った。調査方法は，大学・短大での授業時間中に調査の意図を説明し，学生を通じてその親に協力を依頼し，調査票を配布した（780組）。回収は一部郵送を含め，主に学生を通じて回収した（回収率65.2％）。なお，夫婦間の回答の独立を保つため，回答後すぐ封の出来る別々の封筒に調査用紙を入れ，2通1組として配布した[1]。有効票は女性522名，男性483名，計1005名だった。調査時期は，2001年6～7月である[2]。

分析対象と属性

対象者のうち，妻と夫の回答が揃っている456組が分析対象の候補となった[3]。妻の就業形態でみると，フルタイム110組，パートタイム170組，自営・家族従業64組，無職106組，その他4組，不明2組で，このうち数が比較的揃っているフルタイム，パートタイム，無職の3つの就業形態，386組を分析対象とした。平均年齢は夫50.1歳（*SD* 4.2），妻47.4歳（*SD* 3.7），平均結婚年数は22.5年（*SD* 3.2）である。その他の属性は，Table 1にみるように，職種では，フルタイムの妻で公務員が最も多く，夫も他の就業形態ではみられないほど高率だった。パートタイムの妻は営業・販売・製造が最も多く4割を占める。パートおよび無職の妻の夫では職種に違いはみられず管理職が最も多いが，妻無職では公務員がいくぶん多い。収入（年収）は，本調査を含む調査全体が小学校を含め学校を通して行ったので，直接尋ねることができなかったため，夫婦の年収差および家計収入満足度によった。年収差は，妻フルタイムでは公務員が多いため「差はあまりない」という回答が多く，あっても夫との差が200万円以内が半数を占める。妻パートタイムでは夫との年収差が500万円以上が6割を占め，経済的な基盤は無職の妻と同様，夫に拠っているというのが実情であろう。家計収入満足度は，妻・夫とも，妻が無職の場合最も高く，妻がパートで最も低くなっている（妻：$F(2, 377) = 4.42, p < .05$，夫：$F(2, 378) = 5.85, p < .01$）。

測　度

分析に用いる測度は以下の通りである。それぞれの測度は，仕事へのコミットメントと夫婦関係満足度が主観的幸福感に対する説明変数，職場満足度とエネルギー投入度は，仕事へのコミットメントの尺度化に際して妥当性検討のために使用する外的指標，さらに，結果の解釈のための補助的変数として配偶者の仕事への満足の予測と性別役割分業観を取り上げた。なお，これらの測度は，既婚者の職業生活・結婚生活に関わる多岐にわたる調査の一部であることをおことわりしておく。

仕事へのコミットメント：職務態度を構成するのは職務満足と組織コミットメントといわれる（高橋，2002a）。そこで本研究では，企業に所属して働く者だけでなく，自営業や家族従業，パートなど就業形態のいかんにかかわらず，就業する者の仕事に対する態度を測定するため

1）調査にあたっては，対象者本人に回答してもらうよう依頼し，対象者が不在の場合は，片方の回答だけでもよいことを依頼文に記した。また，調査票を妻票と夫票で色分けし，間違いが生じないよう配慮した。さらに，夫婦で回答が得られた場合はペアごとに回答をチェックした。

2）調査は子育て期についても行われた。事前に小学校長名で調査依頼文を配布し，調査への協力を要請した。調査票は子どもを通じて各家庭に持ち帰ってもらい，回収は子育て期Ⅰは全て郵送（回収率28.1％），子育て期Ⅱは子どもを通じて（回収率58.6％）回収した。調査時期は，子育て期Ⅰは2002年6～7月，子育て期Ⅱは2003年2～3月で，調査が2期にわたったのはⅠ期の回収率が極端に低かったためである。有効票は女性525名，男性352名，計877名であった。

3）収集されたデータのうち，妻・夫ともに回答が得られた割合が高かった。それは対象者が子どもを大学・短大に進学させることができる程度の安定した生活基盤があり，かつ妻・夫とも多少の時間的ゆとりが生まれる年代であることが関係していると考えられる。また，夫婦のデータが揃ったということ自体，夫婦関係が比較的健全に維持されているということを意味しよう。

Table 1　*妻の就業形態別，職種，夫婦の年収差，家計収入満足度*

	フルタイム（110組）		パートタイム（170組）		無　職（106組）	
職　種	妻	夫	妻	夫	妻	夫
営業・販売・製造	16（14.5％）	13（11.8％）	67（39.4％）	28（16.5％）	0	12（11.3％）
事　務　職	23（20.9％）	9（8.2％）	37（21.8％）	14（8.2％）	0	9（8.5％）
公　務　員	41（37.3％）	35（31.8％）	6（3.5％）	14（8.2％）	0	19（17.9％）
専　門　職	23（20.9％）	20（18.2％）	27（15.9％）	36（21.2％）	0	19（17.9％）
管　理　職	2（1.8％）	17（15.5％）	0	54（31.8％）	0	32（30.2％）
自　営　業	0	6（5.5％）	15（8.8％）	17（10.0％）	1（0.9％）	9（8.5％）
そ　の　他	5（4.5％）	8（7.2％）	16（9.4％）	4（2.4％）	3（2.8％）	3（2.8％）
無　　答	0	2（1.8％）	2（1.2％）	3（1.8％）	0	3（2.8％）
年収差	妻	夫	妻	夫	妻	夫
妻＞夫（500万以上）	2（1.8％）	2（1.8％）	1（0.6％）	3（1.8％）	0	0
妻＞夫（200～500）	5（4.5％）	4（3.6％）	0	1（0.6％）	0	0
妻＞夫（～200万以内）	1（0.9％）	5（4.5％）	0	0	0	1（0.9％）
差はない（ほぼ同額）	29（26.4％）	27（24.5％）	0	1（0.6％）	0	1（0.9％）
妻＜夫（～200万以内）	27（24.5％）	26（23.6％）	6（3.5％）	5（2.9％）	2（1.9％）	2（1.9％）
妻＜夫（200～500万）	31（28.2％）	29（26.4％）	57（33.5％）	51（30.0％）	11（10.4％）	15（14.2％）
妻＜夫（500万以上）	12（10.9％）	12（10.9％）	103（60.6％）	105（61.8％）	86（81.1％）	75（70.8％）
無　　答	3（2.7％）	5（4.5％）	3（1.8％）	4（2.4％）	7（6.6％）	12（11.3％）
家計収入満足度	妻	夫	妻	夫	妻	夫
「満足」:4～「とても不満」:1	2.51	2.31	2.37	2.24	2.67	2.56

注1.　職種の自営業には，自由業および農業を含めた。
注2.　年収差は妻・夫それぞれの認知によった。なお，妻無職で職種（妻）および年収差（夫）に矛盾があるが，これを含め基本的には回答者の答えを生かしてそのまま分析した。

に，前者では働くことや仕事から得る満足や充実，後者では仕事・職場への強い関与・一体感の2側面を中心に，仕事へのコミットメントとして独自に16項目を作成した。評定は「あてはまる」～「全くあてはまらない」の4件法である。

夫婦関係満足度：結婚・夫婦関係を測定する尺度には，大別すると結婚・夫婦関係の諸側面を複合指標によって測定する尺度と，結婚・夫婦関係に対する総合的な評価を単一指標によって測定する尺度がある（柏木・平山，2003）。本研究では後者の結婚・夫婦関係に対する総合的な評価として，単一指標による夫婦関係満足度を尋ねた（「ご夫婦の関係について，現在の満足度を10点満点で評価して下さい」）。評定を10段階としたのは，単一指標のため測定の精度を高めるためである。なお，この尺度は，配偶者への自己開示（女性r=.57，男性r=.45），配偶者との会話時間（女性r=.50，男性r=.34），配偶者からの情緒的サポート（女性r=.69，男性r=.57）と高い関連があることが明らかにされている（伊藤・池田・相良，2003）。

主観的幸福感：心理的健康の測度にはWHOが開発した「心の健康自己評価質問紙」(Subjective Well-Being Inventory) 40項目をもとに，「結果としての心の健康感」を表す4領域（人生に対する前向きな気持ち，自信，達成感，人生に対する失望感のなさ）12項目より作成された主観的幸福感（伊藤・相良・池田・川浦，2003）を使用した。この尺度では構成概念妥当性が検討され，主観的幸福感の認知的側面では大学生活満足度とr=.51，感情的側面では根建・田上（1995）の主観的幸福感とr=.61の相関がみられた。また，信頼性を示すα係数は.86であり，高い信頼性・妥当性が確保されている（伊藤・相良・池田・川浦，2003）。評定は基本的に「非常に○○である」～「全く○○でない」の4件法で，回答の選択肢は質問ごとに異なっている。

職場満足度：主として職場の処遇・環境に対する満足度を尋ねるものである。これまでの研究で外在的職務満足としてあげられている領域（高橋，2002b）を参考に，「仕事内容」，「地位」，「賃金」，「人間関係」，「今後の昇進見通し」，「退職後の世話」の6項目よりなる。評定は「満足している」～「不満である」の4件法である。

エネルギー投入度：「仕事（職業）」，「家庭」，「それ以外の活動」に費やしているエネルギーや時間について，全体を10としたときのそれぞれに費やす割合を尋ねた。

配偶者の仕事への満足の予測：配偶者が今の仕事にどれくらい満足しているかを予測させた。評定は「満足し

ていると思う」～「不満であると思う」の4件法である。

性別役割分業観：「男は仕事，女は家庭」への賛否を問うた。評定は「賛成」～「反対」の4件法である。

属性：年齢，結婚年数，就業形態，職種，夫婦の年収差，家計収入満足度を尋ねた。

結果と考察

1. 仕事へのコミットメントの構造と他の変数との関連

仕事へのコミットメントの構造を明らかにするため因子分析を行った。分析対象は，就業している全対象者（1525名）[4]のうち，仕事へのコミットメント16項目に欠損値のない1411名である。分析にあたって，分布に偏りのみられた「仕事のない休日はひまで困る」を除き，15項目で因子分析（主因子解，バリマックス回転）を行った[5]。

結果は，Table2に示す通りである。因子の解釈は負荷量.35以上で行った。第1因子は，現在の仕事は自分に向いており，職場は居心地が良く，それゆえ働き続けたいと思えるもので，仕事を収入を得る手段以上に意味あるものだと考え，仕事に満足感・充実感を感じているという内容で，「仕事満足感」と命名した。第2因子は，仕事に深く関与するあまり，仕事関係以外の知人や服をあまりもたず，そのため仕事人間といわれ，私生活が多少犠牲になっても仕方がないと考えるような仕事や職場への強い関与を表す内容で，「仕事へののめり込み」と命名した。なお，両概念は，因子間相関（-.05）にみるようにほぼ独立した概念だといえる。

次に，各下位尺度のα係数を算出した。第1因子はα=.78，第2因子はα=.61で，十分高いとはいえないが尺度の信頼性はあるといえよう。そのため，以下では各下位尺度に含まれる項目の粗点を合計して尺度得点とした。

さらに，本分析対象者を用いて，仕事へのコミットメントの構成概念妥当性を，仕事満足感は職場満足度と，仕事へののめり込みは仕事へのエネルギー投入度との関連で検討した。仕事満足感は仕事や職場における内在的・主観的な職務満足を表し，一方，職場満足度[6]は職場の処遇や人的環境という所与の条件，すなわち外在的職務満足を表す。それゆえ職場満足度が高ければ仕事満足感も高いと考える。また，仕事へののめり込みの強さは，個人が仕事に投入するエネルギーや時間の多寡に反映すると考える。そして仕事満足感とエネルギー投入度，仕事へののめり込みと職場満足度とは相互に独立と考えられる。そこで仕事満足感・のめり込みと職場満足度，仕事へのエネルギー投入度[7]との関係をみたところ，Table3に示すように，仕事満足感は職場満足度と，のめり込みは仕事へのエネルギー投入度と高い相関がみられ，同時に，満足感はエネルギー投入度と，のめり込みは職場満足度と相関はみられなかった。ただし男性の場合，仕事満足感とエネルギー投入度には弱い相関がみられた。以上から，仕事へのコミットメントを構成する下位尺度には構成概念妥当性があると考える。

Table 2　*仕事へのコミットメント因子分析結果*

	F1	F2	h^2
＜因子1：仕事満足感＞			
いまの仕事に充実感を感じる	.77	.15	.62
いまの仕事は，私に向いている	.69	.15	.49
いまの仕事から学ぶことが多い	.66	.18	.46
いまの職場は居心地がいい	.56	.14	.34
いまの仕事は，収入を得るための手段にすぎない	-.59	.18	.38
働くことは，収入を得るための手段にすぎない	-.61	.24	.43
可能ならば，いまの職業を変えたい	-.68	.04	.46
＜因子2：仕事へののめり込み＞			
仕事人間といわれることがある	.06	.75	.57
会社（家業）のためなら私生活が犠牲になっても仕方がない	.15	.62	.41
仕事用以外の服はあまり持っていない	-.18	.62	.41
わたしがいないと，職場はたちゆかない	.24	.44	.25
働けなくなったら，さびしい	.20	.37	.18
職場以外での知り合いは多くない	-.21	.37	.18
＜残余項目＞			
働くことは，わたしの生きがいの重要な部分を占める	.47	.52	.48
今の職を失っても，自分を失うことはない	-.06	-.06	.01
二乗和	3.42	2.27	
寄与率（%）	22.80	15.11	

2. 妻の就業形態による測度の検討

ここでは3.の分析に用いる変数の基礎的資料として，仕事へのコミットメント，夫婦関係満足度，主観的幸福感について妻の就業形態による差を検討した。その際，夫にとっては本人の属性でなく妻の就業形態による分類であり，意味が異なるため妻/夫別に分析した。

4）子育て期の就業者655名，中年期の就業者870名と合わせ，1525名（女性704名，男性821名）を仕事へのコミットメントの検討対象とした。

5）本研究の分析で使用した統計ソフトはHALWIN（高木廣文・統計数理研究所）である。なお，斜交解（コバリミン法）でも行ったが結果は同様だった。因子間相関は-.05だった。

6）職場満足度6項目を尺度構成したところ，α=.84だった。

7）職場満足度は男性（M=15.94（SD=3.33））と女性（15.49（3.58））で差がみられなかったが（t(630)=1.62，*n.s.*），仕事へのエネルギー投入度では男性（5.97（1.42））が女性（4.37（1.58））に比べ非常に高かった（t(621)=13.23，p<.001）。

Table 3　*仕事へのコミットメントと職場満足度，仕事へのエネルギー投入度との相関*

		満足感	のめり込み
職場満足度	女性	.501***	-.044
	男性	.650***	-.031
仕事への	女性	.022	.349***
エネルギー投入度	男性	.138**	.270***

**p<.01, ***p<.001

まず，夫では，全ての変数で妻の就業形態では差がみられなかった（仕事満足感：F(2, 360)= 0.09，仕事へののめり込み：F(2, 360)= 0.12，夫婦関係満足度：F(2, 369)= 1.37，主観的幸福感：F(2, 381) = 0.10）。妻が働いているか否か，また働き方の違いによって，夫では仕事へのコミットメントはもちろんのこと，夫婦関係満足度や幸福感にも違いは生じてこない。このことから，夫は妻の就業形態そのものによっては影響を受けないといえる。

次に，妻では，就業形態の違いによりTable 4に示す結果が得られた。仕事満足感・のめり込みともフルタイムがパートより高い。パートでも仕事への満足感は中程度あるが（項目平均2.62，中位点は2.5，以下同様），のめり込みの程度は少ない（項目平均2.01）。夫婦関係満足度には就業形態による差はない。主観的幸福感は，無職がフルタイム，パートより高かった。

なお，これらの変数について男女で比較した結果をTable 4に併せて載せた。仕事へのコミットメントでは，満足感に差はないが，のめり込みでは男性の方が高い。これを女性のフルタイムと男性で比較してみても，男性の方が高い（t(469)= 2.75, p<.01）。夫婦関係満足度では男性の方が女性より高く，主観的幸福感に性差はみられなかった。

3. 仕事へのコミットメントが夫婦関係および主観的幸福感に及ぼす影響

ここではペア・データを用いて，妻と夫の仕事へのコミットメントが，配偶者および本人の夫婦関係満足度や主観的幸福感にどのように影響するか，特に夫婦間のクロスオーバーを中心に，妻の就業形態による影響の差異を明らかにする。分析は夫婦を1単位とし，まず，妻と夫の仕事へのコミットメント4変数を説明変数として各々の夫婦関係満足度を目的変数に，次に，これら6変数を説明変数として各々の主観的幸福感を目的変数に，変数一括投入後，ステップワイズ法による変数減少法（F<2.0）にて重回帰分析を行った。Table 5には，重回帰分析のもとになる変数間の相関関係を示した。結果は，Figure 1に示す通りだが，以下では，(1)クロスオーバーを中心とする夫婦間の影響，(2)スピルオーバーを含む妻・夫それぞれの場合の個人内の影響についてみていくことにする。

(1)夫婦間

夫から妻へ　第1に，夫の仕事満足感が妻の夫婦関係満足度にパスを出していた。このことは夫が仕事に充実感を感じ，職場で生き生きと満足して働いていることが，妻にとって夫婦関係を良好に保つ大きな源泉になっているといえる。ただし，それは妻がフルタイムと無職の場合で，妻パートではこの関係がみられなかった。妻パートでは，妻の予想する夫の仕事への満足が最も低く（フルタイム2.73，パートタイム2.64，無職2.88，F(2, 355) = 3.06, p<.05），また，Table 1でみたように，家計収入満足度が妻・夫とも最も低く，これら夫の仕事と収入に関する満足度の低さが，夫の仕事満足感が妻の夫婦関係満足度に結びつかなかった背景とも考えられる。

2点目として，夫の仕事へののめり込みが妻の主観的幸福感に負のパスを出していた。夫が仕事に時間やエネルギーを多く割き，コミットメントが高いと，夫婦関係満足度を経ず直接妻の幸福感に作用する。夫の仕事へののめり込みが高いと夫自身の幸福感が減ぜられるが（妻パートと妻無職），しかし，それ以上に妻の幸福感を低下させていた。このことは，中年期の場合，夫の仕事の

Table 4　*各変数の平均値（SD）と検定結果：左辺は妻の就業形態別（妻のみ），右辺は男女別*

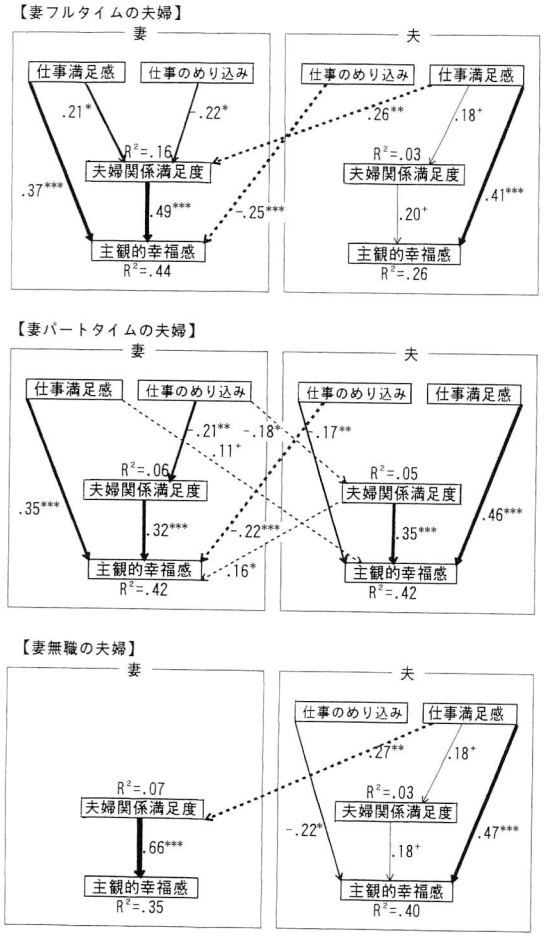
	フルタイム	パートタイム	無　職	t値/F値	女　性	男　性	t値
仕事へのコミットメント							
仕事満足感	20.04	18.37	—	t = 3.29***	19.03	18.87	t = 1.04
	(4.02)	(4.03)		df=260	(4.11)	(3.49)	df=623
仕事へののめり込み	13.87	12.04	—	t = 6.10***	12.77	14.24	t = 11.05***
	(2.56)	(2.31)		df = 266	(2.56)	(2.82)	df=629
夫婦関係満足度	6.79	7.12	7.16	F = 0.98	7.06	7.60	t = 3.64***
	(2.24)	(2.12)	(2.08)	df = 2,376	(2.15)	(1.90)	df = 730
主観的幸福感	34.37	34.64	35.89	F = 3.98*	34.89	35.18	t = 0.94
	(4.45)	(4.03)	(4.33)	df = 2,383	(4.31)	(4.47)	df = 764

*p<.05, ***p<.001

Table 5　*妻の就業形態別，各変数間の相関係数*

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
①妻：仕事満足感	—	.01	.27	-.04	.13	.09	.41	.27						
②妻：のめり込み	.19	—	-.11	.00	-.22	-.18	-.20	-.06						
③夫：仕事満足感	.18	.04	—	.23	.12	.14	.13	.50	—					
④夫：のめり込み	.01	.16	.11	—	-.08	-.02	-.26	-.08	.05	—				
⑤妻：夫婦関係満足度	.21	-.20	.29	.05	—	.40	.46	.25	.26	-.01	—			
⑥夫：夫婦関係満足度	.13	-.13	.18	-.09	.59	—	.34	.42	.19	.15	.52	—		
⑦妻：主観的幸福感	.42	-.18	.16	-.23	.48	.21	—	.44	.10	-.17	.58	.20	—	
⑧夫：主観的幸福感	.04	-.16	.44	-.03	.31	.29	.22	—	.54	-.00	.37	.32	.35	—

注．対角線左下（網掛け）は妻フルタイムの夫婦，中央（ゴシック）は妻パートタイムの夫婦，右下は妻無職の夫婦。



+.10<p<.05，*p<.05，**p<.01，***p<.001

Figure 1　*妻の就業形態別にみた仕事へのコミットメントが夫婦関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響*（数値は有意な標準偏回帰係数）

注．実線は個人内，破線は夫婦間のパスを表す。

多忙さが夫への不満につながるのではなく，妻の幸福感の低下を招来する可能性があることを示唆している。しかし，そう言えるのは妻が有職の場合であって，無職の妻にはその影響がみられない。その理由は，性別役割分業観の強さからだと考えられる。無職の妻では「男は仕事，女は家庭」という考えに賛成する傾向が高く（フルタイム1.85，パートタイム2.24，無職2.55，$F(2, 380)=20.64$，$p<.001$），こうした分業観の強さから，無職の妻では夫が仕事にエネルギーを注ぐのは当然と受け止めていると考えられる。妻無職の夫婦ではこうした分業システムにのっとって夫婦関係が営まれてきたので，夫ののめり込みの高さが一様に妻に作用するということはないと考えられる。

この他に，妻パートでみられた夫の夫婦関係満足度から妻の幸福感へのパスがある。妻パートでは，妻と夫の夫婦関係満足度の相関が他に比べて低く（パート$r=.40$，フルタイム$r=.59$，無職$r=.52$），一方，夫の夫婦関係満足度と妻の幸福感の相関は最も高かった（パート$r=.34$，フルタイム$r=.22$，無職$r=.20$）。そのためこのようなパスがみられたと思われるが，他方，他の就業形態に比べると強いパスが夫の夫婦関係満足度から夫の幸福感に入っており，妻パートの夫では良好な夫婦関係の認知が夫自身の幸福感を強く規定するのみでなく，妻の幸福感にも作用するといえよう。

妻から夫へ　妻から夫へのパスはパートでしかみられなかった。その1つは，妻の仕事へののめり込みから夫の夫婦関係満足度への負のパスである。すなわち，パートの妻が仕事に時間やエネルギーを多く取られ，コミットメントが高いと，夫の夫婦関係満足度が低下するといえる。妻パートの夫では分業観は無職の妻の夫と変わらず，「女性は家庭に」という考えに傾いている（妻フルタイム2.24，妻パートタイム2.73，妻無職2.85，$F(2, 383)=17.25$，$p<.001$）。妻が仕事を家庭に支障のない範囲でやっている分には不満はないが，そうでなくなると不満をもつようになると考えられる。これに対してフルタイ

ムの夫では妻の仕事へののめり込みからのパスはない。妻ののめり込みの程度はパートより大分高いが（Table4），夫の分業観が弱く，妻が働くことに反対でないため，妻がコミットメントが高く，仕事にエネルギーを多く割いても，夫婦関係には影響しないと考えられる。

2つ目は，妻の仕事満足感から夫の幸福感へのパスである。すなわち，パートの妻が仕事に満足（不満）を感じていると，夫の幸福感がそれに左右される。パートの仕事とは元々不安定な雇用であり，就業条件も良くない。中年期のパート職の場合，子育て後に参入することが多く，夫は妻が働くことに十分な態勢ができていないといえる。それゆえ妻の仕事上の満足・不満の影響をストレートに受けてしまうと考えられる。

(2)個人内

妻の場合

1）夫婦関係満足度：仕事へのコミットメントが夫婦関係満足度に及ぼす影響をみると，フルタイムでは，仕事満足感から正の，仕事へののめり込みから負のパスが出，仕事への充実感・満足感が高いと夫婦関係満足度も高くなり，のめり込みが強いと夫婦関係にネガティブな影響を及ぼすといえる。これに対してパートでは，仕事満足感からのパスはなく，のめり込みからの負のパスのみとなった。フルタイム就業では，前述の結果とあわせると，パートタイム就業に比べ，ポジティブにせよネガティブにせよ，妻の夫婦関係満足度は自身および夫の職業生活からの影響を受ける度合いが大きい。

2）主観的幸福感：まず，フルタイムでは，幸福感は夫婦関係満足度に強く規定され，また，仕事満足感にも大きく左右される。男性の場合と異なり，仕事へののめり込みがネガティブな影響を及ぼすということはない。パートタイムも，基本的にはフルタイムと影響を受ける要因の構造は変わらない。これに対して無職では，幸福感の源泉は職業生活がない分，夫婦関係の影響が大きくなっている。

主観的幸福感に影響を及ぼす夫婦関係と職業生活を考えたとき，パートであれフルタイムであれ，両者が主要な源泉であることに変わりはなかった。しかし，無職では，職業という代替がないので，夫婦のあり方がストレートに幸福感に影響するといえよう。

夫の場合

1）夫婦関係満足度：仕事満足感，のめり込みとも妻の就業形態により値に差はみられなかったように，職業生活が夫婦関係に及ぼす影響は基本的には妻の就業形態によって変わらない。すなわち仕事満足感が夫婦関係満足度に弱いパスを出すものの（妻パートの夫ではβ=.13, .20<p<.10），妻のように仕事へののめり込みはネガティブな影響を及ぼさず，男性の場合，自身の職業生活が夫婦関係に影響することは少ないといえる。

2）主観的幸福感：まず，妻無職の夫では，仕事満足感が幸福感の大きな源泉であり，仕事で充実感や満足感を得られるかが幸福感を左右する。一方で，仕事へののめり込みが高くなると幸福感を減ずるようになる。夫婦関係は夫の幸福感にパスは出しているが，妻とは対照的にその程度は弱い。次に，妻パートの夫では，基本的に妻無職の夫と影響を受ける要因の構造は変わらないが，他の群に比して夫婦関係から幸福感へのパスが非常に大きい。その理由は次のように考えられる。すでにみてきたように，妻の仕事へののめり込みの高さは夫の夫婦関係満足度を介してネガティブに影響し，他方，妻の仕事満足感は直接夫の幸福感に影響していた。先にみたように，妻パートの夫では妻無職の夫と変わらないくらい性別役割分業観を強く持つ。Simon（1995）によれば，妻の就労に否定的な夫は，妻の就労によって一家の稼ぎ手としての役割を果たしていないという不適応感を感じるというが，妻パートの夫では，「妻は家庭にいるもの」との考えの下で妻が働きに出るため，妻の職業生活のあり方が夫の夫婦関係満足度やそれを媒介して幸福感に強く影響してくるものと考えられる。これに対して妻フルタイムの夫では，仕事満足感が幸福感の大きな源泉であることに変わりはないが，他の群と比べて異なるのは，仕事へののめり込みから負のパスがないことである。他の群では主たる生計維持者は夫であるのに対して，妻フルタイムでは，年収差からみて夫婦がともに家計支持者であるため，家計責任が分散されると考えられる。そのため夫にとって生計維持という重圧の少なさが，仕事へののめり込みが一概に幸福感を減ずることにつながらなかったものと考えられる。なお，夫婦関係は，妻無職の夫の場合と同様，幸福感への影響は妻に比べると大きくはない。

全体的考察

本研究の目的は，中年期夫婦を対象に，仕事へのコミットメントが夫婦関係および心理的健康に及ぼす影響（個人内）と，それらが配偶者に及ぼす影響（夫婦間）について，ジェンダー差を中心に妻の就業形態による影響の仕方の差異を検討することであった。

その結果，まず第1に，妻の仕事へののめり込みの高さは自身の夫婦関係満足度に負の影響を及ぼすが，夫ではそれがみられなかった。すなわち，仕事役割から配偶者役割へのネガティブ・スピルオーバーは女性に顕著だといえる。就業女性では，夫の子育て関与や家事関与の低さが妻の夫婦関係満足度を低めており（伊藤・池田・相良，2003），仕事での多忙さや責任の重さに対して，家庭生活における夫からの道具的サポートが得られないと，妻の夫婦関係満足度は低下するものと思われる。そ

の点で男性は，仕事へののめり込みや関与の増大があっても，自身の夫婦関係には影響しない。

次に，夫婦関係が心理的健康に及ぼす影響について，女性では就業形態により影響の強さに違いはあってもその規定力は大きく，一方，男性では夫婦関係満足度の影響は相対的に小さかった。夫婦関係の心理的健康への影響について女性を就業形態で比較すると，主観的幸福感を規定するのはフルタイムもパートタイムも夫婦関係満足度と仕事満足感であるのに対して，無職女性では夫婦関係満足度のみとなり，仕事という緩衝要因のない専業主婦では，心理的健康が夫との関係の在り方に影響されやすいといえるかもしれない[8]。

一方，男性の主観的幸福感は，妻がどの就業形態であれ仕事満足感が最も大きな規定力を持ち，その心理的健康度を左右していた。しかし，それ以外の要因では妻の就業形態により違いがみられた。まず，仕事へののめり込みの高さが主観的幸福感を減ずる働きは妻フルタイムの夫ではみられなかった。妻も主要な稼ぎ手であるため，夫にとって生計維持という重圧の少なさが，仕事への高い関与が一概に幸福感を減ずることにつながらなかったものと考えられる。妻がフルタイムで働く夫婦では，妻にとって「個別化型の夫婦関係」（稲葉，1999)は，夫にとってもそうだといえる。しかし，同様に妻が働いていても，妻パートの夫では様相を異にする。妻パートの夫では他の就業形態ではみられない妻から夫へのクロスオーバーのパスがみられ，妻の仕事へののめり込みの高さは夫の夫婦関係満足度を低下させ，妻の仕事満足感の低さが夫の幸福感を減じ，そしてこのような妻との夫婦関係が，他のどの就業形態の夫にもまして主観的幸福感を左右していた。妻パートの夫は性別役割分業観は専業主婦の夫と同様伝統的で，基本的に妻の就業には賛成していない。共働き夫婦で妻の就業に否定的な夫では，家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向の高さと結びついており（福丸，2000)，これは夫が自身を稼ぎ手として不十分と感じている場合，夫婦関係の葛藤が強く，うつ傾向が高くなる（Crowley，1998）ことと関連していると考えられる。実際，本研究でも，妻パートの夫では収入満足度が最も低かった。すなわち，妻の就業に反対している夫では，妻が働きに出ることでまず稼ぎ手として不十分であることを自覚させられ，そこに妻から仕事上での不満や仕事による多忙さを訴えられることでさらに不全感が強化され，その結果，抑うつ傾向が高くなったり幸福感が低下するのだと考えられる。このように妻パートの夫では，「妻の就業」に対する考え方，すなわち性役割観が心理的健康に影響することが考えられよう。

最後に，夫の仕事へのコミットメントが妻に及ぼす影響について考えてみたい。結果は，夫の仕事へののめり込みの増大は妻の幸福感を減じ，また，夫の仕事満足感の高さが妻の夫婦関係満足度を高めるというように，夫の職業生活が妻に及ぼすクロスオーバーな影響がみられた。ただし，その影響は妻の就業形態によって異なっていた。夫の仕事へののめり込みの高さが妻の幸福感を減ずるのは妻が有職の場合であって，無職の妻ではその影響がみられなかった。専業主婦では，分業観の強さから，夫が仕事にエネルギーを注ぐのは当然と考えており，そのため夫ののめり込みの高さが影響しなかったものと考えられる。女性はケア役割ゆえに，夫に生じた出来事や仕事上のストレスに影響されやすい（稲葉，2002b）といわれるが，本研究の結果からは，出来事も一定以上の閾値を超えないと（例えば，解雇や失業，配置転換，転勤，転籍・出向，降格など)，むしろ専業主婦では，分業観の強さゆえ，互いの生活を棲み分けているという意味で影響を及ぼさないのかもしれない。しかし，他方，夫の仕事満足感はフルタイムの妻と同様，夫婦関係満足度に影響していた。夫が仕事に充実感を感じ，職場に満足して働いていることが，妻にとって夫婦関係を良好に保つ大きな源泉になっている。妻の夫への共感性という意味では，妻が有職であれ無職であれ，夫が職場で仕事に満足して働いていることが妻の夫婦関係満足度を高める必要条件といえるのかもしれない。

以上より，仕事へのコミットメントが夫婦関係と心理的健康に及ぼす影響を，クロスオーバーおよびスピルオーバーの点から妻の就業形態別に夫婦関係をみると，妻フルタイムの夫婦は「個別化型（自立型)」の，妻無職の夫婦は「棲み分け型」の，そして妻パートの夫婦は「共振型」の夫婦関係ということができよう。既婚女性の就業が増加し，その一方で性別分業観が根強い我が国では，夫婦，特に妻の就業（と収入）の現実とそれを受け止める夫の意識とのズレが，様々な側面で夫婦関係に影響を及ぼしていることが考えられる。

8）フルタイムとパートタイム女性について，本人の仕事へのコミットメントを投入せず，無職女性と同じモデルで重回帰分析を行ったところ，夫婦関係満足度から主観的幸福感への標準偏回帰係数は，フルタイム $\beta=.52$，パートタイム $\beta=.33$ で，やはり無職女性（$\beta=.66$）で高かった。

文　献

Barling, J., & MacEwen, K. E. (1992). Linking work experiences to facets of marital functioning. *Journal of Organizational Behavior*, **13**, 573-583.

Beatty, C. A. (1996). The stress of managerial and professional women: Is the price too high? *Journal of Organizational Behavior*, **17**, 233-251.

Bolger, N., Delongis, A., Kessler, R. C., & Wethington, E. (1989). The contagion of stress across multiple roles.

Journal of Marriage and the Family, **51**, 175-183.

Crouter, A. C. (1984). Spillover from family to work: The neglected side of the work-family interface. *Human Relations*, **37**, 425-441.

Crowley, M. S. (1998). Men's self-percieved adequacy as the family breadwinner: Implications for their psychological, marital, and work-family well-being. *Journal of Family and Economic Issues*, **19**, 7-23.

Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, **125**, 276-302.

遠藤由美. (1997). 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下. *心理学研究*, **68**, 387- 395.

Erickson, R. J. (1993). Reconceptualization family work: The effect of emotion work on perceptions of marital quality. *Journal of Marriage and the Family*, **55**, 888-900.

福丸由佳. (2000). 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連. *家族心理学研究*, **14**, 151-162.

Grzywacz, J. G. (2000). Work-family spillover and health during midlife: Is managing conflict everything? *American Journal of Health Promotion*, **14**, 236-243.

池田政子・川浦康至・伊藤裕子. (2002). 配偶者からのサポートにみる夫婦の関係とジェンダー差. *山梨県立女子短期大学紀要第35号*, 山梨県立女子短期大学, 山梨, 25-34.

稲葉昭英. (1999). 有配偶女性のディストレスの構造. 石原邦雄(編), *妻たちの生活ストレスとサポート関係：家族・職業・ネットワーク* (pp.87-119). 東京：東京都立大学都市研究所.

稲葉昭英. (2002a). 結婚とディストレス. *社会学評論*, **53**, 69-84.

稲葉昭英. (2002b). 家族と職業へのストレス論的アプローチ. 石原邦雄(編), *家族と職業：競合と調整* (pp.107-132). 京都：ミネルヴァ書房.

伊藤裕子・池田政子・川浦康至. (1999). 既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響. *心理学研究*, **70**, 17-23.

伊藤裕子・池田政子・相良順子. (2003). *職業生活と家庭生活が夫婦の心理的健康に及ぼす影響：ジェンダー・ギャップの視点から*. 平成13～14年度科学研究費補助金研究成果報告書.

伊藤裕子・伊藤あや子・池田政子・相良順子. (2004). ソーシャルサポートと夫婦の心理的健康：中年期と老年期の比較を通して. *聖徳大学研究紀要第15号*, 聖徳大学, 千葉, 47-53.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至. (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, **74**, 276-281.

伊藤裕子・相良順子・池田政子. (2004). 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響. *心理学研究*, **75**, 435-441.

柏木惠子・平山順子. (2003). 結婚の現実と夫婦関係満足度との関連性：妻はなぜ不満か. *心理学研究*, **74**, 122-130.

数井みゆき. (1998). 結婚・夫婦関係の心理学：その理論と実証的研究の展望. 柏木惠子(編), *結婚・家族の心理学：家族の発達・個人の発達* (pp.51-97). 京都：ミネルヴァ書房.

Kessler, R. C., & McLeod, J. D. (1984). Sex differences in vulnerability to undesirable life events. *American Sociological Review*, **47**, 216-227.

Kinnunen, U., & Mauno, S. (1998). Antecedents and outcomes of work-family conflict among employed women and men in Finland. *Human Relations*, **51**, 157-177.

小泉智恵. (1997). 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響：展望. *母子研究*, **18**, 42-59.

小泉智恵. (2004). 多重役割と精神的健康. 糸井尚子・渡辺千歳(編), *発達心理学エチュード* (pp.245-264). 東京：川島書店.

小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則. (2001). 児童を持つ共働き夫婦における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー：抑うつ, 夫婦関係, 子育てストレスに及ぼす影響. *精神保健研究*, **47**, 67-75.

小泉智恵・菅原ますみ・前川暁子・北村俊則. (2003). 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響. *発達心理学研究*, **14**, 272-283.

厚生労働省女性局 (編). (2003). *働く女性の実情*. 東京：財団法人21世紀職業財団.

Leiter, M. P., & Durup, M. J. (1996). Work, home, and in-between: A longitudinal study of spillover. *The Journal of Applied Behavioral Science*, **32**, 29-47.

Mauno, S., & Kinnunen, U. (1999). The effects of job stressors on marital satisfaction in Finnish dual-earner couples. *Journal of Organizational Behavior*, **20**, 879-895.

根建由美子・田上不二夫. (1995). ハピネストレーニングプログラムが主観的幸福感の変容に及ぼす効果. *教育心理学研究*, **43**, 177-184.

Rook,K., Dooley, D., & Catalano, R. (1991). Stress transmission: The effects of husbands' job stressor on the emotional health of their wives. *Journal of Marriage and the Family*, **53**, 165-177.

Simon, R. W. (1995). Gender, multiple roles, role meaning, and mental health. *Journal of Health and Social Behavior*,

36, 182-194.

Simon, R. W. (1998). Assessing sex differences in vulnerability among employed parents: The importance of marital status. *Journal of Health and Social Behavior*, **39**, 38-54.

高橋弘司. (2002a). 組織コミットメント. 宗方比佐子・渡辺直登(編), *キャリア発達の心理学：仕事・組織・生涯発達* (pp.55-79). 東京：川島書店.

高橋弘司. (2002b). 職務満足. 宗方比佐子・渡辺直登(編), *キャリア発達の心理学：仕事・組織・生涯発達* (pp.99-126). 東京：川島書店.

詫摩紀子・八木下暁子・菅原健介・小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則. (1999). 夫・妻の抑うつ状態に影響を及ぼす夫婦間の愛情関係について. *性格心理学研究*, **7**, 100-101.

Tingey, H., Kinger,G., & RiLey, P. J. (1996). Juggling multiple roles: Perceptions of working mothers. *The Social Science Journal*, **33**, 183-191.

付記

本研究は，平成13～14年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(C)(1)13837026, 研究代表者：伊藤裕子）の助成により行われた。なお，研究の一部は日本発達心理学会第13回大会（2002），日本教育心理学会第46回総会（2004）において発表された。

Ito, Yuko (Faculty of Humanities, Seitoku University), Sagara, Junko (Faculty of Humanities, Seitoku University) & Ikeda, Masako (Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University). *The Influence of Occupational Life on the Marital Satisfaction and Psychological Well-being of Middle-Aged Couples: Crossover Effects and Career Types.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2006, Vol.17, No.1, 62-72.

This study concerned on the influence of occupational life on marital satisfaction and psychological well-being of middle-aged couples. It examined spillover influences and crossover influences within couples, in relation to women's employment types. Commitment to work, degree of marital satisfaction, and subjective well-being were the focus of a questionnaire survey of 110 couples where women worked full-time, 170 couples where women worked part-time, and 106 couples where women were not employed. It was found that a woman's commitment to her work (but not the man's commitment to work) influenced the degree of woman's marital satisfaction. In addition, a man's commitment to work influenced a woman's marital satisfaction and subjective well-being in a crossover manner. Specifically, a man's devotion to work reduced the woman's subjective well-being, and an increase in his work satisfaction increased the woman's degree of marital satisfaction. The woman's commitment to her work influenced the man's subjective well-being in this crossover manner only when the woman was working part-time. Both spillover and/or crossover influences of occupational life on marital relationship and psychological well-being apparently differed according to variations in women's work and men's gender role attitudes.

【Key Words】 Crossover effect, Marital satisfaction, Occupational life, Psychological well-being, Middle-aged couples

2004. 6. 3 受稿, 2005. 11. 7 受理

発達心理学研究
2006，第17巻，第1号，73-83

原　著

指示詞コ・ソ・アの理解からみた自閉症児の語用論的機能の特徴

伊藤　恵子
（茨城キリスト教大学文学部児童教育学科）

田中　真理
（東北大学大学院教育学研究科）

指示詞コ・ソ・アの理解という点から，自閉症児の語用論的機能の特徴を検討した。具体的には，指示詞「こっち・そっち・あっち」に対して言語教示のみによる理解実験を行い，①一般的な指示詞使い分けとの一致率，②反応パターンの分析，③行動観察の三つの視点から分析を行った。その結果，以下の点が見出された。（1）定型発達児では，実験者（話者）と対象児（聞き手）が同じ側に並ぶ同側条件と，両者が向かい合う逆側条件で，指示詞コ・ソ・アの理解の標準反応一致数に差がなかった。しかし，自閉症児では逆側条件で，この標準反応一致数が同側条件に比べても，定型発達児の逆側条件に比べても有意に少なかった。（2）逆側条件の「そっち」に関しては，従来から他者視点の取得を特に要すると言われているが，逆側条件の「そっち」に関する自閉症児の成績は「こっち」と「あっち」の指示詞理解の成績と差がなかった。（3）逆側条件における自閉症児の反応は，視点固定型が定型発達児に比べ有意に多かった。この視点固定型とは，話者の視点変換を行わず，先に実施した条件での話者視点からの反応を繰り返す反応型である。（4）言語のみで指示対象を特定するといった状況で，曖昧情報を補うために実験者（話者）の顔の向きや視線を手がかりにすることも，指示対象特定に迷うことも，自閉症児は定型発達児に比べ少なかった。

【キー・ワード】 自閉症，語用論的機能，指示詞，理解実験

問　題

自閉症児の言語コミュニケーションの特徴は，その診断基準（DSM-Ⅳ：American Psychiatric Association, 1994）にも明記されているように中核的な症状の一つである。なかでも語用論的機能に関しては，言語の他機能の発達に比べ著しく遅れていることが見出されている（Wetherby & Prutting, 1984）。したがって語用論的機能に着目して自閉症児の言語コミュニケーションを理解していくことは重要と思われる。大井（2004）によれば，かれらの語用論的な問題は，多様で広範囲にわたる次のような語用論の研究領域すべてにおいて生じるものであるという。その範囲とは，発話交替，話題維持，聞き手注意確保，前方照応，適切性条件，字義的意味，間接発話，命題態度，丁寧さ，明確化技能，無応答，会話の含意，重要情報の位置，断言，結束，話題逆行，提供情報の適切性，相手の話題への反応，新旧情報の区別，質問による開始，指示詞，呼びかけ形式，人称，精神状態を表す語，前提，対人距離，視線の利用，音律の利用，身振りの利用等である。

これら語用論の領域のなかでも特に本稿では，日本語の指示詞コ・ソ・アをどのように理解しているかということに着目して，自閉症児の語用論的機能の特徴における一側面を理解していくこととする。なぜ，指示詞コ・ソ・アの理解を取り上げるかということに関しては以下の理由による。

言語の意味というものは，文だけではなく，その文が用いられた文脈や現場，文の話し手と聞き手など，認識とコミュニケーションにかかわるあらゆる環境を参照しなければならない。そのなかでも指示詞はとりわけ環境との関わりを鮮明に映し出すものの一つである（金水，1990）。指示詞を含む発話は，その発話だけから指示詞の指示対象を理解することはできない。指示詞を理解するために，聞き手は，話し手と聞き手に共有された基盤，すなわち共に聞いたことば，共に見たり経験したりしたこと，話し手と聞き手の属する共同体の誰もが知っているようなことを基にして推測する（Clark, Schreuder, & Buttrick, 1983；見澤，1986）。その際，話し手・聞き手・指示対象の三者間の物理的位置関係とその認知の仕方が，指示詞理解に影響を与える可能性も指摘されている（遠藤，1988）。このように，その指示対象が発話文脈に依存するという意味でダイクシス（deixis）と呼ばれる指示詞（Clark, 1976；Tanz, 1980）は，日本語の場合，これ，それ，あれのようにコ・ソ・アの3つの系を有しているため，複雑であり，発話場面，話し手と聞き手の関係，発話の文脈的手がかり等を理解しないと正しい理解ができない。よって，その理解過程を調べることにより，自閉症児の語用論的機能の特徴における一側面をと

らえる上で最適な素材と考えた。

指示詞には，現場指示，知覚指示，観念指示，文脈指示などの用法がある（堀口，1990）[1]。これらのうち，現場指示用法は，基本的には，対話や講演などのように話し手と聞き手が同一の空間に共存する場において，多くの場合，身振り手振りや表情などの表現行為を伴いつつ，話し手が現に知覚していて聞き手にも知覚されるはずだとする事物をコ・ソ・アでさす用法をいう（堀口，1990）。そのため，低年齢の子どもにおいても日常頻繁に使用される用法であると同時に，他の要因を統制した上で重要と思われる要因を操作することが比較的容易でもある。また，共同注意（joint attention）や社会的参照（social referencing）を必要とする前言語的コミュニケーションに明白な制約のある自閉症児たち（Hodapp, Burack, & Zigler, 1990）にとって，非言語的な表現行為を伴う現場指示用法の指示詞は，最もかれらの語用論的機能の特徴が表れるものと予測できる。さらに現場指示用法以外の用法は，必ずしも実在しない指示対象を指したり，特定の聞き手を想定しなかったりするため，対話者の共有知識を話し手がどう想定するか，指示対象が情報の焦点や話題の主題であるかなど，さまざまな要因が考えられ，これらの要因をすべて統制して検討することは方法論的にも困難である（遠藤，1988）。よって，本稿においては現場指示用法のみを対象とし，後述するような理解実験を通して，自閉症児の指示詞理解における特徴を検討することとした。

日本語の指示詞は前述したように，コ・ソ・アの三つの系を有しているが，自閉症児においては，特にどのような使い分けに特徴がみられるのであろうか。指示詞コ・ソ・アの使い分けに関しては，実証的な研究（高橋・鈴木，1982；Higashiyama & Ono, 1988；遠藤，1988ほか）や言語学の立場（柴田，1980；正保，1981ほか）から主張されている次のようなものが一般的である。それらによれば，話し手と聞き手が向かい合い，それぞれ対立した領域を形成する「対立型」では，話し手が自分の縄張りにあると認定した人や物には「コ」が，話し手が聞き手の縄張りに属するものとして認定した人や物には「ソ」が，話し手が自分の領域にも聞き手の領域にも属さないと考えたものには「ア」が用いられる。一方，話し手と聞き手が同側に位置し「我々領域」を形成する「融合型」においては，話し手と聞き手の関心の強いもので，近くにある人や物には「コ」が，「ア」で指すには近すぎるか，話し手と聞き手のいずれか一方あるいは両者の視野にないものには「ソ」が，話し手と聞き手にとって関心が強いもので遠くにあるものには「ア」が用いられる。

この指示詞コ・ソ・アの使い分けに関して，従来の研究の多くは，子どもの自己中心性によって「ソ」の獲得が遅れることを説明してきた。日本語における「ソ」は，「対立型」の場合，話し手とは対立する聞き手の観点からの表現であるため，話し手が聞き手の領域を認め，その領域が自分の指示詞使い分けに影響を与えるという「対立的視点」を取得してはじめて獲得されるものであるととらえている（岩淵，1968；田窪，1990）。この立場は，自己中心性から脱却して他者視点を取得することが指示詞使い分けを獲得する重要な要因であると捉えている。社会的経験の重要性は認識しつつも，その焦点を言語に関係の深い認知的（非社会的）知識の獲得過程に向けているといえる。しかし，筆者らが指示詞コ・ソ・アの理解実験を通して発達的変化を検討した研究（伊藤・田中・細川，2004）からは，次のような可能性も考えられた。その実験においては，視線や指さしといった非言語的手がかりを伴わない言語指示のみによって指示対象を特定することを要求した。その結果，低年齢の対象にではなく，7歳児や大学生といった年齢の高い対象児者のなかに視点の変換に失敗する反応がみられたとともに，大学生においても「ソ」と「ア」の使い分けに混同が多くみられた。このことは，日常での指示詞による指示対象の特定は，非言語的な手がかりを伴った他者との相互作用を通じて行っているため，言語指示のみで指示詞の指示対象を特定することに混乱をきたしたものと思われる。このことから，指示詞コ・ソ・アの理解には，自己中心性からの脱却による他者視点取得の要因より，話し手の視線やしぐさといった非言語的手がかりの要因のほうが指示対象を特定する上で深くかかわっているのではないかと考えられた。しかし，日本語の指示詞獲得に関する実証的研究は少なく，一致した見解は未だ得られていない。さらに，自閉症児を対象とした研究は筆者の知る限り見あたらない。自閉症児の場合，「心の理論」においても他者の視点取得に多くの問題がみられることが見出されている（Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985）ので，もし，指示詞コ・ソ・アの使い分けが，従来から言われているような他者視点取得の要因に関連が深いならば，かれらは特に他者の視点取得を要する「ソ」の使用に困難を示すはずである。だが，自閉症児の指示詞使い分けが他者視点取得の要因によってではなく，かれらの行動特徴である固執性や同一性保持と密接な関連があるのであれば，かれら独特の反応パターンを示す可能性

1）知覚指示用法は，他にその実態を示すことなく自分が知覚している事物を指す用法であり，特定の聞き手を想定した表現でないという点で現場指示用法とは異なる。この用法においては，内言や独白にみられるように，視覚に捉えている山を「あの山」，「この山」というような表現を使う。観念指示用法は，他にその実態を示すことなく自分の観念の中にある事物を指す用法である。それに対して，観念の中にある事物を指すという点では同じであるが，その実態が文脈に明示されているのが文脈指示用法である。たとえば，「あの件はどうなりましたか」などと言うように，話し手が観念に思い浮かべているものを「あの件」とさすような場合の指示詞の使い方が観念指示用法である。

が考えられる。さらに，日常において，話し手の視線やしぐさといった非言語的手がかりを含めた包括的な他者との相互作用から，指示対象を特定していないのであれば，そのような手がかりを得ようとする行動は観察されず，言語のみの教示に違和感を抱かない様子が観察されるはずである。

そこで本稿においては，伊藤ほか（2004）の理解実験に基づき，自閉症児の指示詞理解がどのような要因と関連が認められるのかを検討した。その際，話し手と聞き手が同側に位置するか，対面した逆側に位置するかによって，方向指示詞「こっち・そっち・あっち」は指示対象が異なる。指示詞使い分けに他者視点取得が大きく関与しているのであれば，逆側条件にその影響が顕著に表れるはずであり，固執性や同一性保持といった行動特徴が大きく関与しているのであれば，同側条件と逆側条件間での視点変換にその影響が顕著に表れるはずである。そのため，話し手と聞き手が同側に位置する同側条件と，対面した逆側に位置する逆側条件の二条件を設定した。

分析にあたっては，以下の三つの視点を設定した。①これまでの研究(高橋・鈴木，1982；Higashiyama & Ono, 1988；遠藤，1988；柴田，1980；正保，1981他）で一般的とされる指示詞使い分けとの一致率，②反応パターン分析，③行動観察である。伊藤ほか（2004）は，一般的指示詞使い分けと同一の反応パターンを標準反応型とし，話者の視点取得の程度によって，準標準反応型，未標準反応型，視点固定型，独自基準型，基準未獲得・不十分獲得型，絶対用法型といった反応パターンに分類し，使い分け基準の発達的変化をみている。よって，定型発達児（特記すべき発達上の問題を有しておらず，一般的にtypically developing childrenと呼ばれている子どもをさす）と自閉症児の指示詞使い分けの基準との違いをより明確にするため，本研究においても反応パターン分析を行うこととした。さらに，実験場面での対象児の態度を観察することによって，選択に迷いが見られたか，自信をもって選択を行ったかを確認することができ，言語のみで指示対象を特定するといった非日常的な状況で混乱を生じているか，また基準が分からなくなった場合，手がかりをどのようにして求めるかといったことも推測できる。よって反応パターンの分析と行動観察を行うことにより，標準反応との一致率だけでは分からない指示詞使い分けの基準やその基準の手がかりをどのようにして得ようとするかといった質的側面の検討も可能であり，各対象児の指示詞理解の特徴がより明確になるものと思われる。

前述の目的達成のために，以下の仮説を検証することによって，自閉症児の指示詞理解がどのような要因と関連が認められるのかを検討した。

仮説1：自閉症児の指示詞使い分けが，他者視点取得と密接な関連があるならば，他者の視点取得を要する逆側条件の指示詞理解が，定型発達児に比べて困難である。

仮説2：自閉症児の指示詞使い分けが，同じく，他者視点取得と密接な関連があるならば，とくに他者の視点取得を要する逆側条件の「そっち」の理解が，他の指示詞に比べて困難である。

仮説3：自閉症児の指示詞使い分けが，固執性や同一性保持といったかれらの行動特徴と関連があるならば，定型発達児に比べ，同側・逆側の二条件間で視点変換を行わない視点固定型や独自基準型といった特有の反応パターンを示す。

仮説4：自閉症児の日常での指示詞使い分けが，話し手の視線やしぐさといった非言語的手がかりを含めた包括的な他者との相互作用のなかで行われているのであるならば，その手がかりを得ようとする行動が実験場面においても観察されるはずであるが，言語のみに着目しているのであれば，そのような行動は観察されないであろう。

なお，前述の指示詞理解実験を実施した伊藤ほか（2004）の報告によると，5歳以上の対象児においては，大学生の反応と有意差が認められなくなったという。それと同時に，4歳以前でみられた，指示詞をダイクシス本来の対立語を意識して，指示対象によって使い分けをするといった次元的意味ではなく，単に方向を指す代名詞的な意味で使用する，指示詞の絶対用法はみられなくなったと報告している。これは，指示詞をダイクシス本来の次元的意味で使用しようとの質的な変化が生じたと考えられる。よって本稿においては，5歳以上の定型発達児と，同じく5歳以上の自閉症児を対象として実験を行うこととした。

方　法

1）対　象

特記すべき発達上の問題を有しておらず，一般的にtypically developing childrenと呼ばれている保育園児及び小学生（定型発達児）33名，自閉症児14名，合計47名で年齢及び性別の内訳は以下のとおりである。

定型発達児：5歳児13名（女児8名，男児5名），6歳児10名（女児5名，男児5名），7歳児10名（女児4名，男児6名），平均年齢5.91歳（*SD*：.84）。

自閉症児：性別，生活年齢，新版K式発達検査結果（FDQ：全領域発達指数，VDQ：言語・社会領域発達指数，PDQ：認知・適応領域発達指数），田中ビネー知能検査結果（FIQ），WISC-Ⅲ知能検査結果（FIQ：全検査知能指数，VIQ：言語性知能指数，PIQ：動作性知能指数）をTable 1に示した。なお，本稿においては，知的障害の要因を排除するために，FIQもしくはFDQの値が75

Table 1　*自閉群の性別，生活年齢，発達検査及び知能検査結果*

対象児	性別	CA	FIQ/FDQ	VIQ/VDQ	PIQ/PDQ	検査名
A1	男	5；7	91	123	75	新版K式
A2	女	5；9	102	—	—	田中ビネー
A3	男	6；1	116	128	101	WISC－Ⅲ
A4	男	6；2	100	—	—	田中ビネー
A5	女	6；3	96	103	90	WISC－Ⅲ
A6	男	8；0	107	109	103	WISC－Ⅲ
A7	男	8；2	96	99	94	WISC－Ⅲ
A8	男	8；8	102	89	117	WISC－Ⅲ
A9	男	9；1	77	61	100	WISC－Ⅲ
A10	男	10；0	107	125	86	WISC－Ⅲ
A11	男	10；1	81	87	78	WISC－Ⅲ
A12	男	10；5	102	101	103	WISC－Ⅲ
A13	女	10；9	88	79	100	WISC－Ⅲ
A14	男	12；11	85	81	92	WISC－Ⅲ

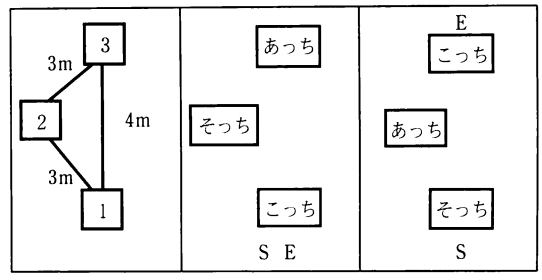
以上の者を対象児とした。平均年齢8.07歳（*SD*：2.20）。

2）手続き

斉藤・武井・荻野（1981）及び伊藤ほか（2004）を参考にした以下の手続きを実施した。対象児（S）が実験者（E）から12種類のミニチュア（ケーキ，スイカ，電話など）を渡され，以下の教示文に従い，店に見立てた3個の箱（Figure1．aの1，2，3：すべて同形同色）のどれかに入れた。教示文は，「これからお使いゲームを始めます。」「お皿の中にイチゴやケーキなどいろいろな物があります。これらの物を私が『あっちのお店に配達してちょうだい』とか『こっちのお店に配達してちょうだい』とか『そっちのお店に配達してちょうだい』とお使いを頼むので，3つのお店のどれかに配達してください。」と説明した後，たとえば，「ケーキをあっちのお店に配達してちょうだい」などと教示した。この教示は，実験者と対象児の位置により同側と逆側の条件ごとに，12教示文（3語×4回）があり，ランダムに施行した。同側と逆側の2条件も対象児ごとにランダムな順序で施行した。実験者は，視線や動作でヒントを与えないように注意した。所要時間は10分程度であった。

3）得点化の手続き

Figure1.bの同側条件の場合，箱1を「こっち」，箱2を「そっち」，箱3を「あっち」，Figure1.cの逆側条件の場合，箱1を「そっち」，箱2を「あっち」，箱3を「こっち」と指示する一般的な指示詞使い分けと同一の反応を標準反応とした。同側・逆側の条件ごとの各指示詞における標準反応との一致数は，4試行すべて標準反応と一致した場合を最高の4点とし，4試行とも標準反応と一致しなかった場合を最低の0点とした。



a　実験場面　　b　同側条件　　C　逆側条件

Figure 1　*各条件における箱・実験者（E）・対象児（S）の位置*

注1．a「実験場面における箱の配置」は，店に見立てた同形同色の3個の箱1，2，3の実験場面における位置を示した。

注2．b「同側条件における箱・対象児（S）・実験者（E）の位置」は，対象児（S）と実験者（E）が同じ側に立った同側の場合における箱1，2，3，対象児（S），実験者（E）の位置を示した。1を「こっち」，2を「そっち」，3を「あっち」とする反応が標準反応である。

注3．c「逆側条件における箱・対象児（S）・実験者（E）の位置」は，対象児（S）と実験者（E）が向かい合って立った逆側の場合における箱1，2，3，対象児（S），実験者（E）の位置を示した。1を「そっち」，2を「あっち」，3を「こっち」とする反応が標準反応である。

4）反応パターン分析の手続き

各対象児の反応を伊藤ほか（2004）の反応パターンを参考に以下の7パターンに分類（Table2）した。この反応パターン分類は，一般的な指示詞使い分けと同一の反応を標準反応型とし，この反応型を話者の視点を完全に取得したものと捉え，話者の視点取得の程度によって以下のような階層化を行った。話者の視点取得は，標準反応型と同一であるが「そっち」と「あっち」の使い分けのみが逆転している「準標準反応型」，同じく標準反応型と同一の話者視点は取得しているが，「そっち」と「あっち」の使い分けが未分化な「未標準反応型」，同側条件と逆側条件で視点の変換を行わない「視点固定型」，確固とした独自の基準に基づいた反応をする「独自基準型」，使い分けの基準となる話者の視点自体を獲得していない「基準未獲得もしくは不十分獲得型」，指示詞をダイクシス本来の対立語を意識して，指示対象によって使い分けをするのではなく，単に方向を指す代名詞的な意味（絶対用法）で捉えている「絶対用法型」を設定した。

各対象児の反応に対する反応パターン分類は，対象児の特定ができないように，反応結果のみを参照して，第一筆者と社会心理学専攻の大学4年次学生1名の計2名が，それぞれ独立に分類を行った。分類の一致率（＝反応パターンの一致数/94（47：定型発達児33名の反応

Table 2　*各反応パターンとカテゴリー*

カテゴリー	反応パターン	具体的な反応内容
① (標準反応型の話者視点と同一)	標準反応型	Figure 1. bの同側条件の場合，箱1を「こっち」，箱2を「そっち」，箱3を「あっち」，Figure 1. cの逆側条件の場合，箱1を「そっち」，箱2を「あっち」，箱3を「こっち」とさす一般的な指示詞使い分けと同一の反応型。
	準標準反応型	「こっち」のみが標準反応型と同一の反応だが，Figure 1. bの同側条件の場合，箱2を「あっち」，箱3を「そっち」とし，Figure 1. cの逆側条件の場合，箱1を「あっち」，箱2を「そっち」とする標準反応の「あっち」と「そっち」が逆転した反応型。
	未標準反応型	「こっち」のみが標準反応型と同一の反応だが，Figure 1. bの同側条件の場合，箱2と箱3に対して，「あっち」と応えたり「そっち」と応えたりする反応型。Figure 1. cの逆側条件の場合は，箱1と箱2に対して，「あっち」と応えたり「そっち」と応えたりする「あっち」と「そっち」が未分化な反応型。
② (独自の視点)	視点固定型	Figure 1. bの同側条件の場合，箱1を「そっち」，箱2を「あっち」，箱3を「こっち」と選択する逆側条件の標準反応型と同一の反応を示す反応型，もしくは，Figure 1. cの逆側条件の場合，箱1を「こっち」，箱2を「そっち」，箱3を「あっち」と選択する同側条件の標準反応型と同一の反応を示す反応型。
	独自基準型	話し手の視点からの使い分けではなく，確固とした独自の基準に基づいた反応をする反応型。
③ (話者視点なし)	基準未獲得・不十分獲得型	3つの指示詞の使い分けに規則性の見出されない不規則反応か，1つの指示詞のみ標準反応を示すが，一定の規則性の見出されない反応型。
	絶対用法型	「こっち」「そっち」「あっち」のすべての指示詞に対し，同一箱のみを選択する反応型。指示詞をダイクシス本来の対立語を意識して，指示対象によって使い分けをするといった次元的意味ではなく，単に方向を指す代名詞的な意味（絶対用法）でのみ使っている。

数＋自閉症児14名の反応数×2：同側条件・逆側条件））は，96.4％であった。なお，不一致に関しては，この2名で協議の上分類を決定した。

さらに，これらの反応パターンを話者視点取得の観点から次の3つのカテゴリーに分類した（Table 2）。

①標準反応型と同一の話者視点から指示詞を使い分けているもの。「標準反応型」，「準標準反応型」，「未標準反応型」

②標準反応型の話者視点とは異なる視点から指示詞を使い分けているもの。「視点固定型」，「独自基準型」

③指示詞を使い分ける話者視点自体を有しないもの。「基準未獲得・不十分獲得型」，「絶対用法型」

5）行動観察の観点

行動観察の観点は，以下の3点とした。

①選択の迷い：各指示詞の4試行中，Figure 1の同一の箱を選択しなかった回数を示すことによって，選択に迷いがみられるか否かを推測した。

②実験者に対する行動：実験者に対して，質問をしたり，視線を向けたりして指示対象特定の手がかりを求めようとする行動が観察されるかどうかによって，言語にのみ依存して指示対象を特定しているか，非言語的手がかりをも考慮して指示対象を特定しようとしているかを推測した。

③その他：指示対象特定時の特徴的な行動。

結果と考察

同側・逆側条件における自閉群と定型発達群との相違

一般的な指示詞使い分けと同一の反応を標準反応とし，この反応との一致数の平均をみたものがTable 3である。

対象児の標準反応との一致数について，2（障害の有無：定型発達群，自閉群）×2（発話者の視点：同側条件，逆側条件）の2要因の分散分析を行った。その結果，障害の有無（$F(1, 45) = 5.76$, $p < .05$）と発話者の視点（$F(1, 45) = 9.48$, $p < .01$）の主効果及び，障害の有無と発話者の視点に交互作用が認められた（$F(1, 45) = 13.18$, $p < .01$）。そのため，発話者の視点の処理水準ごとに，障害の有無の単純主効果を検定した。その結果，同側条件においては，障害の有無の効果はないが，逆側条件において障害の有無の主効果が存在した（$F(1, 45) = 9.02$, $p < .01$）。また，障害の有無の処理水準ごとに，発話者

Table 3　*理解実験結果における標準反応との平均一致数と標準偏差*

	定型発達群		自閉群	
	M	*SD*	*M*	*SD*
同側条件	8.39	3.3	9.21	3.21
逆側条件	8.79	2.79	4.43	3.59

の視点の単純主効果を検討したところ，自閉群において，発話者の視点に主効果がみられた（$F(1, 45) = 10.85$, $p < .01$）。Figure2からも明らかなように，定型発達群では，同側条件と逆側条件間で標準反応との一致数に有意差が見出されないが，自閉群では，逆側条件においてのほうが同側条件においてより，標準反応との一致数が有意に少なかった。よって，自閉群の指示詞理解は，発話者の視点といった要因との関連の可能性が示唆され，仮説1は支持された。

自閉群における逆側条件「そっち」の理解

つぎに，自閉群において，とくに他者の視点取得を要する逆側条件の「そっち」の理解が，他の指示詞に比べて困難であるかを検討するために，「こっち」「そっち」「あっち」の個々の指示詞の標準反応との平均一致数をTable4に示した。各指示詞によって標準反応との一致数にどのような差があるかについて，2（発話者の視点：同側条件，逆側条件）×3（各指示詞特定の困難さ：こっち・そっち・あっち）の被験者内2要因の分散分析を行った。その結果，発話者の視点の主効果が有意であった（$F(1, 13) = 8.98$, $p < .05$）。各指示詞特定の困難さの主効果及び交互作用は有意ではなかった。

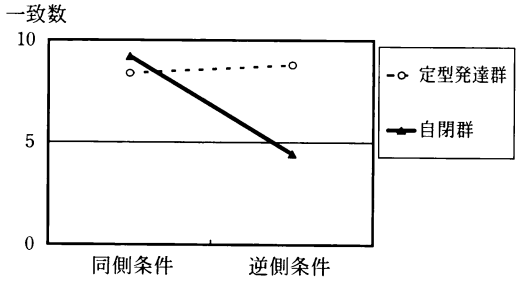


Figure 2 *自閉群と定型発達群における標準反応との平均一致数*

Table 4 *自閉群における標準反応との平均一致数と標準偏差*

	同側条件		逆側条件	
	M	*SD*	*M*	*SD*
こっち	3.00	1.24	1.86	1.83
そっち	3.21	1.31	1.57	1.60
あっち	3.00	1.30	1.00	1.52
合　計	9.21	3.21	4.43	3.59

これらのことから，自閉群の指示詞理解は，逆側条件のほうが同側条件より標準反応との一致数が有意に低かったが，逆側条件の「そっち」の特定が特に困難であるという仮説2は支持されなかった。

自閉群特有の指示詞使い分けパターン

自閉症児の指示詞理解において，他者視点の取得を要する逆側条件の理解が困難であるという仮説1が支持されたものの，とくに他者視点を要するといわれている逆側条件の「そっち」の理解が他の指示詞に比べて困難であるという仮説2は支持されなかった。そこでさらに，指示詞使い分けのパターンの分析を行い，定型発達児たちとの比較を通して，自閉症児たちがかれらの行動特徴に関連のある特有の反応パターンを示すかどうかを検討した。対象ごとに各反応パターンを示した人数とその割合（%）をTable5に示した。

Table5より，各群における反応パターンの特徴をみてみると，両群とも絶対用法型の反応パターンは観察されず，定型発達児同様，5歳以上の自閉症児においても指示詞を指示対象によって使い分けていることが分かった。定型発達群において最も多かった反応パターンは，同側条件，逆側条件を問わず標準反応型であり，その割合は39%（13名）と52%（17名）であった。この値を自

Table 5 *指示詞理解実験反応パターン（%）*

	同側条件		逆側条件	
	定型発達群 ($n = 33$)	自閉群 ($n = 14$)	定型発達群 ($n = 33$)	自閉群 ($n = 14$)
標準反応型	13 (39)	10 (71)	17 (52)	3 (21)
準標準反応型	2 (6)	−	−	2 (14)
未標準反応型	7 (21)	1 (7)	3 (9)	1 (7)
視点固定型	1 (3)	−	−	5 (36)
独自基準型	−	1 (7)	−	1 (7)
基準未獲得・不十分な獲得型	10 (30)	2 (14)	13 (39)	2 (14)
絶対用法型	−	−	−	−

注．−印は，観察されなかったことを表している。数字は，人数を表している。（　）内数字は，割合（%）を表している。

閉群のものと比較してみると，同側条件で標準反応型を示した者は，定型発達群より自閉群のほうが多い71％（10名）であった。しかし，逆側条件では定型発達群に比べ，自閉群で標準反応型を示した者はわずか21％（3名）にとどまり，視点固定型を示した者が最も多かった。また，自閉群では，同側条件においても逆側条件においても独自基準型を示した者が1名（7％）おり，同一対象児であった。定型発達群においても，視点固定型を示した者は同側条件で1名（3％）いたが，独自基準型を示した者は同側・逆側いずれの条件においても一人もいなかった。

さらに，話者視点取得の観点から両群の違いを検討するために，該当者のいなかった絶対用法型を除く6反応パターンを三つのカテゴリーに分類し，各カテゴリーの人数（％）を示したものがTable6である。定型発達群では，同側・逆側の両条件とも，ほぼ半数の子どもが，カテゴリー①（標準反応型の話者視点と同一）を示し，残りの子どもは指示詞使い分けの基準となる話者視点自体を取得していないカテゴリー③を示した。ただし，同側条件において1名だけが独自の視点（カテゴリー②）から指示詞を使い分ける視点固定型の反応をした。これに対して，自閉群は，同側条件では11名（78％）の子どもがカテゴリー①を示したが，逆側条件では，カテゴリー①とカテゴリー②を示した子どもがともに6名（43％）であった。カテゴリー③を示した子どもは，同側・逆側どちらの条件でも2名（14％）にとどまった。

つぎに，各カテゴリー（①②③）に分類された人数の分布が，自閉群と定型発達群で異なるかどうかについて分析を行った。その結果，同側条件においては両群間に有意差は見出されなかったが（$\chi^2(2)=1.58$, n. s.），逆側条件において1％水準で有意差がみられた（$\chi^2(2)=16.64$, $p<.001$）。すなわち，同側条件においては，定型発達群も自閉群も，話者の視点取得の程度にはほとんど差が見出されなかったのだが，逆側条件においては，両群間に有意差が見出された。そのため，残差分析を行ったところ，カテゴリー②（独自視点）においてのみ，両群間に有意差が存在し，定型発達群で低く，自閉群で高いという結果が得られた（$\chi^2(2)=16.64$, $p<.001$）。このことから，標準反応型の話者視点とは異なる視点から指示詞を使い分けている，「視点固定型」と「独自基準型」の反応パターンは，自閉群特有のものであり，仮説3の自閉症児特有の，視点固定型や独自基準型といった反応パターンが認められた。そこで，この自閉群特有の反応パターンが，かれらの固執性や同一性保持といった行動特徴から導き出されたと考えてよいかを検討するために，これらの反応パターンを示した子どもたちの行動特徴を検討した。

特徴的な反応パターンを示した自閉症児の行動特徴

Table7に自閉症児の実験場面における行動特徴と反応パターンを示した。選択の迷い（Table7）とは，各指示詞の4試行中，Figure1の同一の箱を選択しなかった回数が，全6回（=3（指示詞）×2（同側・逆側条件））のうち何回観察されたかを記すことによって，選択に迷いがあるか否かを推測した。

逆側条件で視点固定型を示した対象児は，A1，A5，A10，A11，A13であり，A5を除いた4名は，逆側条件における各指示詞の4試行中4回とも視点固定型の反応を繰り返した。ミニチュアを渡されると，すでに選択する箱を決めていたかのように，その箱に直行していた。自分の選択の正確さを確かめたり，同意を求めたりする様子で，実験者のほうを見るということもなかった。未標準反応型を示したA11を除いて，先行して実施した同側条件の実験では，かれらはすべて標準反応型を示した者たちであった（Table7）。

一方，逆側条件で標準反応型を示した3名は，A7，A9，A14（Table7）であり，同側条件では視点固定型を示さず，A7とA9は基準未獲得型を示し，A14は標準反応型を示した。この3名は，逆側条件においてはほとんど迷うことなく，標準反応型を示した。しかし，同側条件において，A7は最初に指示された「こっち」に対し，Figure1.bの箱3を選択した。さらに，「そっち」に対しても箱1を選択し，「あっち」に対しては箱2を選択した。A14は，同側条件における最初の試行で，「そっち」に対してFigure1.bの箱1を，「あっち」に対して箱2を選択したが，それ以降はすべて標準反応を示した。この2名（A7とA14）は，後に実施した同側条件の第一試

Table 6　*各カテゴリーの人数（％）*

カテゴリー	同側条件		逆側条件	
	定型発達群 ($n=33$)	自閉群 ($n=14$)	定型発達群 ($n=33$)	自閉群 ($n=14$)
①（標準反応型の話者視点と同一）	22 (66)	11 (78)	20 (61)	6 (43)
②（独自の視点）	1 (3)	1 (7)	－（－）	6 (43)
③（話者視点なし）	10 (30)	2 (14)	13 (39)	2 (14)

注．－印は，観察されなかったことを表している。

Table 7　*実験場面における自閉群の行動特徴と反応パターン*

対象	反応パターン 同側条件・逆側条件	選択の迷い	実験者への質問	実験者への視線	その他
A1	標準反応・視点固定	0	−	−	選択を迷わず，箱へ直行
A2	標準反応・基準未獲得	4	−	+	「こっち」などと実験者の指示を繰り返す
A3	標準反応・準標準反応	1	+	+	「お姉さんから見て？」と尋ねる
A4	標準反応・基準未獲得	3	−	−	同側条件では選択に迷いはなかった
A5	標準反応・視点固定	4	−	−	同側条件のあっちと逆側条件のそっちは1度も迷わなかった
A6	標準反応・準標準反応	0	−	−	選択を迷わず，箱へ直行
A7	基準未獲得・標準反応	3	−	−	同側条件の第1試行で逆側条件の標準反応を繰り返した
A8	標準反応・未標準反応	2	−	−	「俺かどうか分かんないな」と独り言
A9	基準未獲得・標準反応	4	−	−	逆側条件においては選択に迷いが1回しかなかった
A10	標準反応・視点固定	0	−	−	選択を迷わず，箱へ直行
A11	未標準反応・視点固定	4	−	−	逆側条件では選択を迷わず，箱へ直行
A12	独自基準・独自基準	0	−	−	選択を迷わず，箱へ直行
A13	標準反応・視点固定	1	−	−	逆側条件では選択を迷わず，箱へ直行
A14	標準反応・標準反応	2	−	−	同側条件の第1試行で逆側条件の標準反応を繰り返した

注1．選択の迷いとは，各指示詞の4試行中，Figure1の同一の箱を選択しなかった回数が，全6回（=3（指示詞）×2(同側・逆側条件)）のうち何回観察されたかを記した。

注2．＋印は，そのような行動が観察されたことを示し，－印は，観察されなかったことを示した。

行で，先に実施した逆側条件における話者の視点からの選択を行っていたことになる。それに対して，同側条件を先に実施したA9の同側条件における反応には，このような傾向は見られず，各指示詞に対し，さまざまな箱を選択し規則性は見出されなかった。

これらの行動観察から，自閉群の子どもたちが他者視点の取得に困難を示すというよりは，自らが最初に取った視点を変更することに困難を示しており，固執性や同一性保持といった自閉症の行動特徴が影響を与えている可能性が示唆された。

さらに，Table7より仮説4を検討してみると，同側条件で独自基準型を示した対象児はA12であり，後に実施した逆側条件でも独自基準型を示していた。Figure1.bの同側条件の場合，A12は，箱1を「そっち」，箱2を「こっち」，箱3を「あっち」と選択した。Figure1.cの逆側条件の場合，A12は，箱1を「あっち」，箱2を「こっち」，箱3を「そっち」と選択した。A12は，同側条件の時も逆側条件の時も，各指示詞の4試行中4回ともこの選択を行うと同時に，選択した箱に直行しており，選択に迷いがみられず，自らの基準に自信をもっているかのようであった（Table7）。A12と同様に24試行中1回も選択に迷いを示さなかった子どもは，A1，A6，A10であり，実験者に質問をしたり，実験者のほうを見たりということが1度も観察されず，選択した箱へ直行していた（Table7）。選択に迷いを示した子どもたちも，A2とA3を除いてひとりも実験者へ視線を向けることはなく，A3を除いて実験者に質問をするといった行動も観察されなかった。これに対して，定型発達児の行動特徴をTable8よりみてみると，選択に迷いを示さなかった子どもは，33名中わずか4名のみであった。さらに自閉群とは異なり，定型発達児全員が実験者に視線を向けていた。日常と異なる言語のみでの指示対象特定に戸惑いを示し，曖昧情報を補うため実験者に視線を向けていたものと解釈できる。このことは，定型発達児の日常での指示詞使い分けが，非言語的手がかりを含めた包括的な他者との相互作用のなかで行われている可能性を示唆している。

これらの結果から，仮説4の自閉症児の日常での指示詞使い分けが，話し手の視線やしぐさといった非言語的手がかりを含めた包括的な他者との相互作用のなかで行われているのであるならば，その手がかりを得ようとする行動が実験場面においても観察されるはずであるという部分は支持されず，言語のみに着目しているのであれば，そのような行動は観察されないということが支持された。

総合考察

本研究の目的は，自閉症児における語用論的機能の特徴の一側面を明らかにするために，指示詞をどのように理解しているかについて検討することであった。具体的

Table 8　*実験場面における定型発達群の行動特徴*

5歳児													
対象児	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8	T9	T10	T11	T12	T13
選択の迷い	5	3	1	3	6	5	4	4	1	2	0	0	1
実験者への視線	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
6歳児													
対象児	T14	T15	T16	T17	T18	T19	T20	T21	T22	T23			
選択の迷い	5	6	4	4	4	2	4	0	6	3			
実験者への視線	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
7歳児													
対象児	T24	T25	T26	T27	T28	T29	T30	T31	T32	T33			
選択の迷い	5	4	9	3	1	4	2	2	0	5			
実験者への視線	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			

注1.　選択の迷いとは，各指示詞の4試行中，Figure1の同一の箱を選択しなかった回数が，全6回（＝3(指示詞)×2(同側・逆側条件)）のうち何回観察されたかを記した。
注2.　＋印は，そのような行動が観察されたことを示した。

には，指示詞コ・ソ・アの理解実験を通して，まず，標準反応との一致数から自閉症児の指示詞理解に関する特徴について検討した。定型発達群では，標準反応との一致数が，同側条件と逆側条件で有意な差は見出されなかった。一方，自閉群では，逆側条件での標準反応との一致数が同側条件のそれに比べ有意に低く，また，定型発達群の逆側条件でのそれに比べても有意に低かった（Figure2）。この結果は，自閉症児の指示詞理解が，他者の視点取得の困難さの要因と関連している可能性を示唆した。しかし，他者の視点取得を特に要すると従来からいわれてきた逆側条件の「そっち」に関しては，標準反応との一致数が他の指示詞に比べ特に低いという結果は得られなかった。

そこで，反応パターンの分析と行動観察によって，今回の結果に表れた自閉症児の指示詞理解の特徴が，どのような要因と関連しているのかをさらに検討した。その結果，定型発達群では，同側条件においても逆側条件においても，ほぼ半数の子どもが標準反応型と同一の話者視点を取得しており，残りの子どもは同側条件で視点固定型を示した1名を除いてすべて，指示詞使い分けの基準となる話者視点自体を取得していなかった。それに対して自閉群では，同側条件においては定型発達群と差が見出されなかったが，逆側条件においては標準反応型の話者視点とは異なる独自の視点から指示詞を使い分けている子どもが有意に多いことが示された。この結果から，一般的な話者視点とは異なる視点から指示詞を使い分けるという行動は，定型的な発達過程で表れる現象というより，自閉症児特有のものと考えられた。このような自閉症児の指示詞理解の特徴を，実験場面におけるかれらの特徴的な行動から検討した。

すると，自閉群に特徴的にみられた反応パターンである視点固定型を示した者たちのほとんどは，先行して実施した同側条件の実験の反応を繰り返していた。さらに，逆側条件で標準反応型を示した者も，後に実施した同側条件の第一試行では，逆側条件における自らの反応を繰り返していた。実験場面における行動でも，かれらは各指示詞と特定の箱を結び付けているような行動が観察されており（Table7），自らが一度特定したことばの指示対象は，最初に特定した指示対象との結びつきが強く，容易に変更しない様子であった。これらの行動観察から，自閉症児の指示詞理解を特徴付けているものは，かれらの固執性や同一性保持といった行動特徴ではないかと考えることができる。

また，独自基準型という独自の基準に基づいた反応を示す者が自閉群にいたということも，定型発達群にはみられなかった自閉群特有のものであった。この独自基準型を示した対象児A12（Table7）は，後に実施した逆側条件でも独自基準型を示しており，本実験場面においても自らの基準に自信をもっているかのように，選択に迷いが見られなかった。このA12以外の行動観察からも，自閉群の約3割の子どもが選択に迷いを一度も見せず，選択に迷いを見せた子どもたちも実験者へ質問をしたり，視線を向けたりして指示対象特定の手がかりを得ようとする行動がほとんど観察されなかった。

このような行動特徴のために，自閉症児たちは比較的早い時期に指示詞コ・ソ・アの使い分けの基準を獲得する者が多いものの，その獲得の過程で自らの基準を他者のそれと比較し自己修正をするといったことが不十分なために，視点固定型や独自基準型といったかれら独自の基準を確立してしまう者がいる可能性が考えられた。その確立した基準が話し手の視点からの基準の場合もあれば，聞き手の視点からの基準の場合もあり，その視点を

状況によって変換することが困難なために，かれら特有の指示詞理解をするのではなかろうか。

今回の実験は，視線や動作でヒントを与えないといった，日常場面での指示詞の使用とは異なった条件下で指示詞の理解をみたものであった。通常指示詞を発する場合は，視線や指さし，動作などを伴い，聞き手が対象を特定しやすくするような配慮が行われている。結果に示したように，そのような手がかりを積極的に得ようとする行動が自閉症児には観察されなかった。このことが，自己の基準を修正することを妨げ，自らが獲得した基準を状況に応じて変換することを困難にしているのではないであろうか。これに対して，定型発達児たちは，日常と異なる視線や指さしを交えない言語のみによる指示詞の使い方に対して，指示対象特定に多くの迷いを示すと同時に，実験者に必ず視線を向けることによって，曖昧情報を補うための手がかりを得ようとしている様子がうかがえた（Table 8）。定型発達児たちの日常的な指示詞理解は，言語のみではなく，非言語的な手がかりを含めた包括的な相互作用のなかで行われ，そのつど自己の基準を修正しながら他者と共通の基準を獲得していくのではないかと考えられる。

今回の指示詞理解にみられた自閉症児の語用論的特徴に関連して，Dennis, Lazenby, & Lockyer (2001) は，次のような報告をしている。自閉症児は，両義的にとれる曖昧なことばに多彩な定義を加えることはできたが，隠喩を文脈に沿って解釈することは困難であった。このことから，自閉症児の語用論的言語解釈の困難さは，ことばには多彩な意味が含まれているという事実より，むしろ話し手の発話の意図を読む能力の欠如に由来している可能性があるという。話し手の発話意図を読むためには，話し手の視線や声の調子，表情，しぐさといったことに着目することが不可欠である。しかし，今回の結果からも明らかなように，自閉症児たちは，話し手の非言語的な手がかりにはほとんど着目していない様子であった。Kleinman, Marciano, & Ault (2001) も，一次の心の理論課題を通過した自閉症者でも，目や声から心的状態を推理することが困難であったと報告をしている。この報告は，定型発達児たちが生後24ヶ月の時点で，言語にたよらずとも，他の人の興味，関心，感情，意図などがどこに焦点をおいているかを察知することができるという Tomasello ら（Tomasello & Barton, 1994; Tomasello, 1995; Tomasello & Akhtar, 1995; Akhtar & Tomasello, 1996）の一連の研究とは対照的である。この Kleinman らの研究から，Ingerith & Skye (2004) は，心的状態の推理の困難さは，社会的・情緒的手がかりの知覚に関連した領域固有の障害の可能性があり，この社会的・情緒的手がかりを適切に使用しないということは，語用論的言語手段の解釈にとって致命的ではないかと述べている。

今回の指示詞理解実験において，自閉症児たちが言語教示のみによる指示詞の使用に対して，非言語的な手がかりを積極的に得ようとはしなかった。今後は，さらに視線や指さしといった非言語的手がかりを読み取る能力と，今回明らかとなった自閉症児の指示詞理解の特徴との関連を，検討していくことが必要といえよう。

文　献

Akhtar, N., & Tomasello, M. (1996). Twenty-four months old children learn words for absent objects and actions. *British Journal of Developmental Psychology*, **14**, 79-93.

American Psychiatric Association. (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorder* (4th ed.) (DSM-IV). Author, Washington, DC.

Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a 'theory of mind'? *Cognition*, **21**, 37-46.

Clark, E.V. (1976). From gesture to word: On the natural history of deixis in language acquisition. In J. S. Bruner, & A. Garton (Eds.), *Human growth and development* (pp.1-38). Wolfson College Lecture, Oxford: Oxford University Press.

Clark, H., Schreuder, R., & Buttrick, S. (1983). Common ground and the understanding of demonstrative reference. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **22**, 245-258.

Dennis, M., Lazenby, A. L., & Lockyer, L. (2001). Inferential language in high-function children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **31** (1), 47-54.

遠藤めぐみ．(1988)．日本語の指示詞コ・ソ・アの使い分けに関する言語心理学的研究．*東京大学教育学部紀要第28号*，東京大学，東京，285-294.

Higashiyama, A., & Ono, H. (1988). "Koko", "soko", "asoko" ("here" and "there") as verbal dividers of space. *Japanese Psychological Research*, **30** (1), 18-24.

Hodapp, R. M., Burack, J. A., & Zigler, E. (1990). *Issues in the developmental approach to mental retardation*. Cambridge: Cambridge University Press.

堀口和吉．(1990)．指示詞コ・ソ・アの表現．*日本語学*，**9**，59-70．東京：明治書院．

Ingerith, M., & Skye, M. (2004). An exploration of causes of non-literal language problems in individuals with Asperger syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **34** (3), 311-328.

伊藤恵子・田中真理・細川　徹．(2004)．指示詞コ・ソ・アの理解における発達的変化．*東北大学大学院教育学研究科研究年報第52集*，東北大学，仙台，223-236.

岩淵悦太郎．(1968)．*ことばの誕生* ── うぶ声から5歳まで．東京：日本放送出版協会．

金水　敏．(1990)．指示詞と談話の構造．*言語*，**19** (4)，60-67．東京：大修館書店．

Kleinman, J., Marciano, P. L., & Ault, R. L. (2001). Advanced theory of mind in high-functioning adults with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **31** (1), 29-36.

見澤めぐみ．(1986)．幼児におけるあいまい指示詞の解釈．*東京大学教育学部紀要第26号*，東京大学，東京，245-250.

大井　学．(2004)．高機能広汎性発達障害をもつ人のコミュニケーション支援．*障害者問題研究*，**32** (2)，22-30.

斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子ほか．(1981)．2・3歳児における指示代名詞の理解．*日本教育心理学会第23回総会発表論文集*，258-259.

柴田　武．(1980)．ことばにおける構造とは何か．柴田　武 (編)，*言語の構造* (pp.5-41)．東京：大修館書店．

正保　勇．(1981)．コ・ソ・アの体系．国立国語研究所 (編)，*日本語教育指導参考書 8 日本語の指示詞* (pp.1-122)．東京：国立国語研究所．

高橋太郎・鈴木美都代．(1982)．コ・ソ・アの指示領域について．*国立国語研究所報告集第71号*，国立国語研究所，東京，1-44.

田窪行則．(1990)．談話管理の理論 ── 対話における聞き手の知識領域の役割．*言語*，**19** (4)，52-58．東京：大修館書店．

Tanz, C. (1980). *Study on the acquisition of deictic terms*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tomasello, M. (1995). Joint attention as social cognition. In C. Moore, & P. Dunham (Eds), *Joint attention: Its origins and role in development* (pp.103-130). NJ: Lawrence Erlbaum Association.

Tomasello, M., & Akhtar, N. (1995). Two-year-olds use pragmatic cues to differentiate reference to objects and actions. *Cognitive Development*, **10**, 201-224.

Tomasello, M., & Barton, M. (1994). Learning words in non-ostensive contexts. *Developmental Psychology*, **30**, 639-650.

Wetherby, A. M., & Prutting, C. A. (1984). Profiles of communicative and cognitive-social abilities in Autistic children. *Journal of Speech and Hearing Research*, **27**, 364-377.

付記

データ収集にご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げるとともに，健やかな発達を心より祈念いたします。また，本論文作成に際しましては，東北大学大学院の細川 徹先生，川住隆一先生，McGill大学の大嶋百合子先生，茨城キリスト教大学の田原節子先生から貴重なご助言ならびにご指導をいただきました。皆様に心から感謝申し上げます。

Ito, Keiko (Department of Child Education, Faculty of Literature, Ibaraki Christian University) & Tanaka, Mari (Graduate School of Education, Tohoku University). *Pragmatic Language in Children with Autism : Comprehension of Japanese Demonstratives ko/so/a.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2006, Vol.17, No.1, 73-83.

This paper reported on an experiment about the comprehension of Japanese directional demonstratives, "kocchi" "socchi" and "acchi" among 14 autistic children (CA：5-7) and 33 typically developing children (CA：5-12). Comprehension of this type is one characteristic of pragmatic language. The results revealed that when a subject (listener) stood facing opposite of an experimenter (speaker), children with autism performed significantly less well with general use of demonstratives than did typically developing children. In the case of typically developing children, there was no difference according to position (opposite vs. along side). In contrast, autistic children had particular difficulty with directional demonstratives when they stood opposite the experimenter. Overall, children with autism showed persistent responses and lacked in the ability to use nonverbal clues during this experiment.

【Key Words】 Children with autism, Pragmatic language, Japanese demonstratives, Comprehension experiment

2004. 12. 28 受稿，2005. 11. 18 受理

発達心理学研究
2006，第17巻，第1号，84-93

原　著

中高年期における主観的老いの経験[1)]

若本　純子
（お茶の水女子大学大学院[2)]）

無藤　隆
（白梅学園大学）

本研究は，30-75歳の成人2026名を対象に質問紙調査を実施し，「身体の不調」「心理社会面の減退」「志向の転換」「余裕と成熟」の4領域からなる主観的老いの経験について検討した。まず，非線形正準相関分析を用い，内的・外的要因と老いとの関連から老いの性質を検討した。第1次元では老いのポジティブ面と加齢との関連，第2次元では衰えと心理面・経済面のネガティブな状態との関連，第3次元では「志向の転換」と心理的要因との関連が示され，老いの各領域は独立した構造と過程を有することが示唆された。中でも第3次元において，男性では情緒不安定性，女性では自尊感情との関連が示され，心理過程の違いが注目された。続いて，主観的老いの経験の年齢差を検討した。老い4領域を従属変数とする分析結果（MANOVA）からは，老いが40代以降に顕著な発達的経験であること，「志向の転換」を除く老いは概ね加齢に伴い増すが，領域ごとに異なる年齢差の様相をもつことが明らかになった。加えて，老い4領域間の関連が年齢によって異なるかを効果量の検定によって検討した。その結果，「志向の転換」を含む相関において，中年後期と他の時期との間に有意差が見出された。また，中年後期は，老いのポジティブ面に伴う自己変容が生じる時期として位置づけられた。

【キー・ワード】 中高年期，主観的老いの経験，「志向の転換」，中年後期，成人発達

問　題

人生後半とはどのような時期か。この問いに多くの人は「老いの時期である」と答えるだろう。老いはすべての人に共通して経験される不可避的現象である。発達がその時期に特徴的な様相との相互作用によって生じるとするBaltes（1987）の見解に依拠すれば，老いは中高年期を特徴づける固有の発達的現象であると同時に，発達を促す契機であり，人生後半の発達研究において必備の要素と言える。従来，老いは，主に老年学において，予防医学的・疫学的関心に基づき学際的に研究されてきた。そこでの心理学的知見は，知覚・認知能力の変化，高齢者特有のパーソナリティ傾向，加齢によるストレス・不安・抑うつなどの予防・緩和要因など多岐にわたる（e.g., Baltes & Brim, 1978-1984；下仲, 1999）。しかし，サクセスフルエイジングが強調される研究文脈では，高齢者のwell-being維持という目的の下，老化への対処と予防，その媒介因に関する議論ばかりが優先される一面をも招いた。その中で，老いはこの時期特有の困難を提供する脅威刺激として概括されるに留まり，誰もが共通して経験する老いが成人発達においてどのような機能と意義をもつか，という発達的観点による実証的検討は不十分なままである（Carstensen & Freund, 1994も同様の指摘）。一方で，これまで蓄積されてきた数多くの知見には，老いを発達的見地から捉え直すための有用な視点が含まれている。それは，老いがもつ，中高年期内の連続性，多面性，主観性，そして相互性である。

中高年期における老いの連続性　老いは老年期に限定された経験ではないことが中年期研究において指摘されている。たとえば，Whitbourne（2001）は，身体的・心理的な老化が始まるのは40代の中年期であるとし，その心理的影響は端緒である中年期に顕著であると主張する。一方，75歳までの老年前期は，仕事や家族に対する責任から比較的自由であり，健康・経済面に恵まれ余暇も十分に楽しめる時期と言われ（下仲, 1999），昨今の長寿化の中，日常生活において健康上の制約を感じる者は2割に満たないと報告されている（男性17.8％，女性18.3％；内閣府, 2004）。下仲（1999）の，真に老年期的課題に直面するのは老年後期であるとの示唆とも併せ，老年前期は“ポスト中年期”とも捉えうる成人期の延長との見方が可能であろう。また，Heckhausen（2001）が指摘するように，従来の成人発達研究は中年期内の変化および中年期から老年期への移行を含んだ検討が十分とは言えない。したがって，40前後から70代半ばに至る期間すなわち中高年期を，深刻なダメージを与えない程度の比較的軽微な老いを伴うという発達上の連続性をも

1）加齢現象についての語用は統一されていない。本研究では，後藤（1999）の概観を踏まえ，「加齢」：受精から死に至るまでの全過程で時間が経過していくこと，すなわち年齢の増加とし，老化（加齢に伴う諸側面の機能低下）と同義には用いない。また，「老い」：老化のみに限らない，加齢に伴って身体生理・心理社会・生活経済面などに生じる変化および状態と定義し用いる。

2）現所属：白梅学園大学

つ時期と捉えること，そして，その中核的要素と目される老いを年齢を指標として検討することは，妥当かつ必要であると考えられる。

多面性　老いは2つの意味から多面性をもつ。ひとつは，老いなどの成人期の発達的変化は身体生理面・心理社会面・生活面など領域個別的に展開するとの知見（Baltes, 1987）から示唆される展開領域の多面性，もうひとつは性質の多面性である。老いの主たる徴候は衰えや機能低下であるがそれのみではない。加齢に伴いポジティブな情緒が多く表出され安定性も増すとの縦断研究の結果（e.g., Carstensen, Pasupathi, Mayr, & Nesselroade, 2000）からは，人格と感情の成熟が読み取れる。また，老年期になって獲得される認知能力として英知wisdomが示されている（Baltes & Baltes, 1990）。これら老いのポジティブ面は単独での検討も少ない上に，衰えと独立に検討される傾向にある。そのため，老いをポジティブ面・ネガティブ面双方をもつ多面的なものとして包括的に扱う研究はほとんど見られない。

主観性　成人発達研究では主観的側面が重視される傾向にある（Bauer & McAdams, 2004；Heckhausen, 2001）。加齢に伴ってある側面の機能が低下したとき，それを老いと捉えるか，脅威と感じるかには個人差があり，その差は個人の主観的過程によって構成される（佐藤，1999）。実際的な老いよりも主観的に経験される老いのほうが心理的・生物学的インパクトを持つとの言及（Palmore, 1982）は，同様の背景をもつ知見と言え，老いの検討においても主観的過程への注目は重要となろう。他方，老いが機能低下を主とし，不可避であることを踏まえたとき，物理的な対処はいずれ困難となる。その点でも，老いに対する認知的・情緒的反応と適応への方略を含む主観的過程は発達的検討の主眼と言える。

相互性　老いの様相が大きな個人差をもつことは再三にわたり指摘されてきたが，その形成機序において，性別，年齢，パーソナリティ特性などの内的・生物学的・心理的要因と，職業や婚姻，家族形態，教育機会などの外的・環境的・社会文化的要因の2つが大きな役割を担うと示唆されている（e.g., Helson, 1997；Lachman & Bertrand, 2001；Whitbourne, 2001）。そこから，Baltes & Baltes（1990）は，老いの検討には個人と環境双方の文脈を考慮した生態学的アプローチが有効であると主張する。同様の着想は，成人のパーソナリティ発達に多大な知見を提供しているMcCrae & Costa（1999）にも見られる。さらに，従来の成人発達研究は，方法論という点で生態学的妥当性が不十分と批判される（e.g., Mroczek & Kolarz, 1998）。研究のほとんどが，単一またはごく少数の変数を従属変数とし，性，年齢などの人口学的属性や社会文化的状況を要因とする差の分析に留まり，要因および変数間の相互性に配慮した検討が行われていない。この困難を打開するには，諸要因間の相互性はもちろんのこと，老いが多面的であるがゆえ生じうる下位領域相互の関連性にも注目する必要がある。たとえば身体が衰えたことで外出が億劫になり，他者との交流が減るという経験的な例に示されるように，身体面の衰えと心理社会面の変化といった老いの各下位領域は相互に関連しあうと考えられる。よって，複数次元の関連性を取り扱うことが可能な測定および解析方法の適用が求められる。

本研究の目的　本研究は，中高年期の老いの検討にあたり以下の2つの目的を設定する。第1の目的は，発達的現象としての老いを，個人内・環境双方の指標を取り入れ包括的に検討し，その性質を同定することである。まず，中高年成人の誰もが経験する比較的軽微な老いを，身体面や心理社会面の衰えに加え，加齢に伴う自己変容，ポジティブ面という4側面からなる多面的・主観的経験として捉える（若本，2003）。老いの様相を規定する内的要因としては年齢と心理的変数を取り上げる。年齢については，中年前期（40代），中年後期（50～65歳），ポスト中年期としての老年前期（66～75歳），そしてプレ中年期（30代）の4期と設定する（下仲，1999；若本・無藤，2004）。心理的変数としては自尊感情と情緒不安定性を用いる。自尊感情は全体的自己に対する肯定的評価感情であるが，比較的安定した特性的・肯定的指標と考えられている（伊藤，1998）。また，情緒不安定性はBig Fiveの1因子であるが，最も広汎かつ安定的な影響力を持ち，老いに対するネガティブな態度において強い規定力が示されている（e.g., Harris & Dollinger, 2003）。一方，外的要因としては，先行研究（Helson, 1997；Lachman & Bertrand, 2001；直井，1999；下仲，1999；Whitbourne, 2001）を参考に，職業，経済的不安，教育歴，婚姻歴，子どもの有無，居住状況を取り上げる。内的要因と外的要因のいずれも主観的老いの経験に一定の規定力をもつと思われるが，老いの持つ多面性を背景に，身体面・心理面の衰えには年齢や情緒不安定性との，また老いのポジティブ面には自尊感情や経済的安定との関連が予測される。

第2の目的は，主観的な老いの経験における年齢差を検討することである。老いは加齢との強い関連が想定されるため，年齢差の検討を加えることによって，目的1で明らかにされた老いの性質をより詳細に捉えることが可能になると思われる。最初に，主観的老いの経験4領域（「身体の不調」「心理社会面の減退」「志向の転換」「余裕と成熟」，若本，2003）を従属変数とする差の検討を行う。本検討では，年齢が高い群のほうが低い群に比べ，高水準の老いの経験を報告するであろう。続いて，従来注目されることのなかった，老いの下位領域間の関連が年齢によって異なるかについて検討を行う。

最後に，第1，第2の目的で得られた知見を総合的に

吟味することにより，中高年期において主観的老いの経験がもつ発達的意義について考察する。

方　法

3回にわたり質問紙調査を実施した。

調査対象と時期および回収[3]　調査1　対象：筆者の知人・友人およびその紹介者30歳～65歳男女1800名。時期：2001年6～7月。回収：1020名（回収率56.7％）。調査2　時期：2003年2月。対象：N県A高校の卒業者66歳～75歳男女1200名。いずれも在宅の老年前期成人である。回収：722名（回収率60.2％）。調査3　S県B高校卒業者37～60歳男女1500名。時期：2003年6～7月。回収：347名（回収率23.1％）。

調査手続　対象者のプライバシーに配慮し，郵送にて個別依頼・個別回収した。

調査内容　①主観的老いの経験26項目（若本，2003）。この数ヶ月に自覚された程度を問うた。5段階評定。②Rosenberg自尊感情尺度（星野，1970）10項目5段階評定。③情緒不安定性。高齢者の負担に配慮し，平易な文章から構成された主要5因子性格検査（村上・村上，1997）のうち，因子分析結果の上位7項目を選択して実施した。5段階評定。④フェイス項目。年齢，性別，職業（無職，専業主婦，有職），経済的不安の有無，教育歴（中卒，高卒，専門・短大卒，大卒，大学院卒），婚姻歴（未婚，有配偶者，死別，離別），子の有無，居住状況（独居，夫婦のみ，親または子との2世代，拡大家族）の8項目。

分析対象者　回答を得られた2089名のうち，不完全回答者を除外した2026名（内訳：男性プレ中年期148名，中年前期187名，中年後期202名，老年前期378名，女性プレ234名，前期263名，後期278名，老前336名；平均年齢55.10）[4]。

統計パッケージ　SPSS 11.5およびAmos 4.0を使用した。

結　果

予備分析

確認的因子分析　若本（2003）は，主観的老いの経験が中年期と老年期で異なる因子構造をもつことを指摘し，老年期における4因子のほうがより明確な老いの意味づけを反映すると評価している。この4因子が中年期から老年前期を通しての検討において妥当かを検証するために確認的因子分析を実施した。適合度指標の値は，GFI=.94，AGFI=.92，RMSEA=.05であり適合と見なしうるものであった（豊田，1998）。よって，加齢に伴う身体的な衰えを表す「身体の不調」，心理機能の低下と社会的なずれの経験を表す「心理社会面の減退」，考え方，好み，立場などの変化を表す「志向の転換」，老いに伴う心理面，生活面のポジティブな経験を表す「余裕と成熟」の4因子を同定した（Table 1）。

合成変数の内的整合性　各因子の素点を合計し項目数で除したものを合成変数の得点としα係数を算出した。主観的老いの経験：身体の不調（.77），心理社会面の減退（.74），志向の転換（.70），余裕と成熟（.66），自尊感情（.81），情緒不安定性（.88）であった。「余裕と成熟」はα係数の経験的基準値.70を下回ったが，項目数の少なさ，および本研究における老いのポジティブ面の重要性を鑑み，変数として用いることとした。

3）サンプリングについて説明を加える。A高校は工業が主産業である地方都市（人口約24万人）の公立高校である。調査対象者が在学の頃に戦後の学制改革によって5校が統合し設立された。一方，B高校は首都圏のベッドタウン（人口約7万人）の公立高校である。創立50年弱と比較的歴史の浅い高校であり，今回の調査対象者の一部は創立時の在学生である。ところで，調査1，2に比較し，調査3は低い回収率に留まった点については考慮が必要である。本研究の調査は大学院生による個人調査として実施されたため，3割程度の回収は，経験的にはありうる事態である。しかし，3つの調査間に差が生じたのには手続き上の，またサンプル特性の影響があったものと思われる。調査1は，筆者の知人・友人・その紹介者を対象としたため，個人的に連絡をとり了承を願うことが直接的・間接的に可能であった。それに対して，調査2，3は名簿から選ばれた未知の方々への文書での調査協力依頼であった。さらに，調査2が高齢者に向けて地方都市で実施されたのに対して，調査3が中年期成人に向けて首都圏で実施されたという点は，前者は定住傾向が高いのに対して後者は転居・異動が多く調査票の到着状況が異なる，個人のプライバシーに対する感受性や考え方が前者は比較的寛容だが後者は鋭敏である，などの要因から，回収率の差を生んだものと思われる。このような状況から3つの調査対象者の同質性が問題となろう。中年期を対象にした第1回と第3回調査は，フェイス項目において有意差が見られず，同質性の問題はないものと考えられる。一方で，老年前期を対象とした第2回調査は，多くのフェイス項目において中年期群との間に有意差が見られた。しかし，これがコホートの差異を反映したものか，サンプルの非同質性によるものかの判断はつきかねる。よって，本研究は，調査対象者の同質性において限界を有していることを明記する必要があろう。

4）分析対象者の主な属性は以下のとおりである。男性プレ中年期（職業：事務・技術・管理職48.3％，販売・サービス職18.9％，公務員・団体職員9.5％；婚姻：未婚69.6％，有配偶者29.1％；子ども：無45.9％，有51.4％），中年前期（職業：事務・技術・管理職45.5％，販売・サービス職16.0％，公務員・団体職員11.2％；婚姻：未婚11.8％，有配偶者88.2％；子ども：無21.9％，有78.1％），中年後期（職業：事務・技術・管理職35.1％，販売・サービス職18.8％，教職・専門職14.4％；婚姻：有配偶者95.5％；子ども：有93.1％），老年前期（職業：無職65.3％，事務・技術・管理職10.1％，販売・サービス職6.6％；婚姻：有配偶者91.0％；子ども：有98.9％）；女性プレ中年期（事務・技術・管理職29.9％，専業主婦28.6％，教職・専門職16.7％；婚姻：未婚30.8％，有配偶者69.2％；子ども：無50.0％，有49.6％），中年前期（専業主婦25.5％，事務・技術・管理職20.5％，教職・専門職20.5％；婚姻：未婚13.3％，有配偶者80.7％；子ども：無16.0％，有84.0％），中年後期（専業主婦32.7％，事務・技術・管理職21.2％，販売・サービス職13.7％；婚姻：未婚16.2％，有配偶者83.8％；子ども：無10.8％，有89.2％），老年前期（専業主婦および無職82.1％，サービス・販売職5.4％；婚姻：未婚13.3％，有配偶者62.2％；子ども：無22.3％，有77.7％）また，教育歴の平均年数は男性14.8年，女性13.7年である。

Table 1　*主観的老いの経験の確認的因子分析結果*

F1　身体の不調	
疲れやすくなった	.70
運動能力が低下した	.64
肩こりや腰痛がひどくなった	.57
容貌が変わった	.50
風邪や二日酔いが治りにくくなった	.50
目，耳などが悪くなった	.49
体型が変わった	.48
自分の死が身近になった	.45
F2　心理社会面の減退	
今の流行にうとくなった	.75
記憶力，理解力が低下した	.71
若い人とのずれを感じるようになった	.58
集中力，気力が低下した	.53
性的能力，魅力が低下した	.40
F3　志向の転換	
健康への関心が増した	.56
テレビ番組や服装の好みが変わった	.53
自分らしさについて考えるようになった	.56
自分や夫の定年後について考えるようになった	.45
社会的立場が変わった	.44
食事・酒の量や好みが変わった	.39
仕事に対する考え方や取り組みが変わった	.35
F4　余裕と成熟	
楽に生きられるようになった	.65
経済的に余裕ができた	.57
人間として円熟した	.53
旅行や趣味に使う時間が増えた	.51

注．数値は影響指標値。探索的因子分析における因子負荷量に相当する。モデル修正過程において，いずれの因子にもほとんど負荷を示さなかった2項目を削除したため，ここでは最終的に用いた24項目を表示した。

使用変数における性差　成人発達では，性分業やライフコース，社会文化的要求に随伴する経験，資源の違いから，発達経路そのものが異なるとの見解（Gilligan, 1982/1986；Helson, 1997；難波，2000）が提出されており，性差への配慮が必要である。そこで，目的の検討に先立ち使用変数の性差を確認したところ，自尊感情を除く全変数に性差が存在した（「身体の不調」：$t(1963)=6.24$, $p<.001$, M=男(3.12)<女(3.32)；「心理社会面の減退」：$t(1985)=2.71$, $p<.01$, M=男(3.41)<女(3.50)；「志向の転換」：$t(1958)=4.35$, $p<.001$, M=男(2.96)<女(3.09)；「余裕と成熟」：$t(2024)=5.13$, $p<.001$, M=男(2.78)<女(3.09)；「自尊感情」：$t(1977)=1.10$, *n.s.*；「情緒不安定性」：$t(1972)=2.32$, $p<.05$, M=男(2.74)<女(2.83))。ここから，本研究では双方を独立に検討する操作が適切であると判断し，以下，男女別に分析を行い，男性と女性の発達経路を個別に論じることとする。

主観的老いの経験の性質：内的・外的要因との関連から

本検討では非線形正準相関分析を実施した。質的変数は，年齢と経済的不安を順序尺度として，子の有無，職業，教育歴，婚姻歴，居住状況を名義尺度として数量化を行った。尚，結果の解釈にあたってはDiehl, Coyle, & Labouvie-Vief（1996）に依拠して|.35|をカットオフポイントとし，それより高い値の場合を有意味な相関を示したと捉える。分析の結果，男女ともに3次元が抽出された（Table2）。第1次元は年齢の上昇，すなわち加齢と老いおよび社会文化的要因の関連を反映する次元であった。男性では，加齢，「余裕と成熟」，職業，子どもの有無，居住形態が有意な寄与を示していた。その内容は，加齢に伴い，「余裕と成熟」が増加し，無職，子があること，夫婦2人暮らしが増加するというものであった。女性では，加齢，「余裕と成熟」に加え「身体の不調」が，社会文化的要因における子の有無，婚姻歴，教育歴，居住形態が変数セット間の関連に有意に寄与していた。その内容は，加齢に伴い，「余裕と成熟」「身体の不調」が増加し，子があることと夫婦2人暮らしが増加し，低学歴また中年前期・後期に有配偶者が増加，老年前期に配偶者との死別経験者が増加するというものであった。第2次元は，心理的・社会的なネガティブな状態と，衰えなど老いのネガティブな側面との関連を示す次元であった。老い変数セットのうち「身体の不調」「心理社会面の減退」「志向の転換」が高い場合，心理的要因のうち自尊感情は低く，逆に情緒不安定性は高い，また社会文化的要因のうち経済的不安が高いという関連が見られた。女性も男性とほぼ同じ結果であったが，老いのうち寄与したのは衰え2側面（「身体の不調」「心理社会面の減退」）のみであった。第3次元は，「志向の転換」をめぐる心理的様相を表す次元であった。男女とも「志向の転換」が心理的要因との関連に寄与したが，「志向の転換」が高い場合，男性では情緒不安定性が高く，女性では自尊感情が高いという関連が抽出された。

主観的老いの経験の年齢差

老い4領域の年齢差　本検討では，多面性に配慮し，老いの4領域を従属変数とする多変量分散分析を行ったところ，いずれも有意な結果が得られた（多変量検定結果：男 Wilks's $\Lambda=.81$, $F(12, 2403)=16.35$, $p<.001$, 女 Wilks's $\Lambda=.80$, $F(12, 2921)=21.55$, $p<.001$)。post hoc検定(Table3)からは，全般として，30代であるプレ中年期は他の3期に比べて有意に老いが経験されにくいことが見出された。老いの領域のうち，「身体の不調」は男女同傾向で加齢とともに高まっていた。男性では「心理社会面の減退」は老年前期で有意に高かった。「余裕と成熟」は中年後期で有意に高く，その後の老年前期とは有意差がなかった。一方，女性では，「心理社会面の減退」「余裕と

Table 2 *主観的老いの経験，年齢，心理的・社会文化的要因による非線形正準相関分析結果*

	男			女		
	次元1	次元2	次元3	次元1	次元2	次元3
主観的老いの経験						
身体の不調	.29	-.49	-.31	.37	.59	.28
心理社会面の減退	.29	-.63	-.01	.29	.61	-.22
志向の転換	.06	-.44	-.64	.15	.35	.45
余裕と成熟	.62	.25	-.31	.65	-.29	.11
年齢	.89	-.23	.00	.88	.20	.01
心理的要因						
自尊感情	.19	.66	-.28	.23	-.65	.43
情緒不安定性	-.30	-.53	-.45	-.21	.62	.30
社会文化的要因						
職業	-.70	.28	-.07	-.30	-.20	.25
婚姻歴	.22	-.07	-.30	.36	.09	-.17
子の有無	.43	-.23	-.02	.45	.22	.09
教育歴	-.28	.24	-.20	-.64	-.32	.10
居住形態	-.50	-.10	.30	-.36	.10	-.08
経済的不安	-.35	-.44	-.04	-.33	.47	.22

注．成分負荷を表示。成分負荷は変数セット間の関連におけるその変数の重要性を示すもので，数量化された変数とオブジェクトスコア（対象者ごとの単一カテゴリ座標の合計を標準化した得点）によるピアソンの相関係数に該当する（石村，2001）。Diehl et al.（1996）に倣い｜.35｜をカットオフポイントとし下線を付した。

Table 3 *主観的老いの経験を従属変数とする多変量分散分析結果*

		男				女			
		身体の不調	心理社会面	志向の転換	余裕と成熟	身体の不調	心理社会面	志向の転換	余裕と成熟
F		13.76***	20.45***	3.88**	41.95***	34.35***	26.80***	11.41***	55.48***
post hoc		①<②③④，②<④	①<②③④，②③<④	①<③	①②<③④	①<②③④，②<④	①<②<③④	①<②③④	①<②<③④
M(*SD*)	①	2.84(.67)	3.09(.68)	2.83(.66)	2.43(.66)	2.95(.65)	3.19(.73)	2.87(.72)	2.53(.69)
	②	3.09(.68)	3.34(.65)	2.92(.64)	2.48(.65)	3.29(.67)	3.40(.75)	3.10(.64)	2.77(.75)
	③	3.11(.68)	3.39(.69)	3.06(.70)	2.87(.71)	3.42(.65)	3.64(.66)	3.18(.59)	3.16(.71)
	④	3.26(.70)	3.59(.68)	2.98(.68)	3.01(.67)	3.52(.75)	3.67(.71)	3.17(.72)	3.21(.71)

注．post hoc検定はTUKEY法にて実施（$p<.05$）。①プレ中年期，②中年前期，③中年後期，④老年前期。
$^{***}p<.001$, $^{**}p<.01$

成熟」ともに中年期内は段階的に高まり，その後老年前期とは有意差がなかった。「志向の転換」は，男女ともにプレ中年期を除き加齢による有意差が見られなかった。

老い4領域間の関連における年齢差　本検討では，まず，老い4領域の関連性を調べるために，2変数の相関分析を6パターン（：r_1-r_6, Figure 1）実施した。相関係数行列（Table 4）を概観すると，衰えの2側面「身体の不調」と「心理社会面の減退」間（r_1），および「身体の不調」と「志向の転換」間（r_4）の全相関がカットオフポイントを超える中程度～やや強い相関を示し，「心理社会面の減退」と「志向の転換」間（r_2）では大半に中程度の相関が見られた。その他，男性では相関係数の最大値を中年後期が示す例が多く，「余裕と成熟」をめぐる相関には男女ともにこの傾向が看取された。中でも「余裕と成熟」と「志向の転換」間（r_3）の相関では，中年後期のみで有意味な相関が示された。続いて，老い4領域間の相関における年齢差を明らかにするために，t値を指標とする効果量の差の検定（服部，2002）を実施した。男性では「志向の転換」と「心理社会面の減退」との相関（r_2）において，中年後期とプレ中年期との間（$t=2.42$, $p<.05$），中年後期と中年前期との間（$t=2.57$, $p<.05$）に有意差が見られた。また「志向の転換」と「余裕と成熟」との相関（r_3）において，中年後期と中年前期との

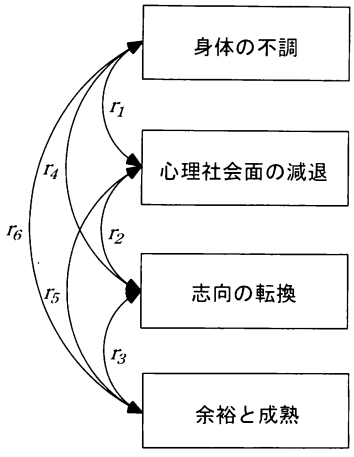


Figure 1　*主観的老い4領域間の関連（r_1-r_6）*

Table 4　*主観的老いの経験4変数の相関分析結果*

	①	②	③	④
①身体の不調	-	.56**	.55**	.04
	-	.65**	.55**	.16**
	-	.60**	.44**	.17**
	-	.61**	.53**	.06
②心理社会面の減退	.61**	-	.34**	-.02
	.56**	-	.42**	.07
	.64**	-	.40**	.21**
	.61**	-	.45**	.11**
③志向の転換	.45**	.30**	-	.26**
	.50**	.32**	-	.27**
	.59**	.55**	-	.42**
	.49**	.45**	-	.23**
④余裕と成熟	.27**	.06	.32**	-
	.18**	.07	.28**	-
	.21**	.21**	.44**	-
	.04	.02	.22**	-

注．左側は男性，右側は女性。それぞれ，1段目：プレ中年期，2段目：中年前期，3段目：中年後期，4段目：老年前期の相関係数を配置した。また，先の分析に倣い，$r > |.35|$ の値に下線を付した。
**p<.01

間（t = 2.08, p<.05），中年後期と老年前期との間（t = 2.59, p<.01）に有意差が見られた。女性では，「志向の転換」と「身体の不調」との相関（r_4）において，中年後期とプレ中年期との間に有意差が見られ（t = 2.04, p<.05），いずれも中年後期の「志向の転換」との相関における有意差であった。

考　　察

主観的老いの経験の性質：内的・外的要因との関連から

本検討において，3次元が抽出され，第1次元では加齢，「余裕と成熟」および社会文化的要因，第2次元では心理，経済のネガティブ面と衰えの2側面「身体の不調」「心理社会面の減退」，第3次元では「志向の転換」と心理的要因との関連が示された。この結果から，多面的に構成される老いのポジティブ面，衰え，「志向の転換」は異なる次元を構成するに相応の独立性を有すると示唆される。第1次元を解釈すると，人は加齢の中で，老いのポジティブ面を享受していくとの内容である。成人発達研究では，高年齢の人々がより高いwell-beingを有することが報告されてきた（e.g., Mroczek & Kolarz, 1998）。制約や衰えが顕著なこの時期に高well-beingが見出される機序についてはいまだ議論の途上にあるが，本研究で得られた老いのポジティブ面と加齢との関連性はその一端と理解される。女性の場合，「身体の不調」も加齢に伴い経験されやすくなる。これは更年期から閉経という顕著な身体変化が，年齢と身体双方への注目を促すためであろう（Whitbourne, 2001）。加えて，第1次元では社会文化的要因の有意味な影響が見出された。だが，夫婦のみの世帯構成や無職であることなどは，高年齢の群における子の自立や定年退職を示すと考えられる。よって，コホートの特徴が明確化され，社会文化的要因と年齢との関連が示唆されたとの理解が適当であろう。一方，社会文化的要因の老いに対する影響は見出されなかった。

第2次元は，衰えと，心理面・経済面のネガティブな状態との関連が示された。年を重ねることで老いのポジティブ面は享受されうるという第1次元の結果とは対照的に，老いのネガティブ面すなわち衰えを自覚する程度は，内的・外的要因のネガティブな様相との関連から規定されると言える。多くの研究でその効果が指摘されてきた経済状況（e.g., Lachman & Bertrand, 2001；直井，1999）の影響力は，本研究においては，経済状態の“悪さ”が“衰えというネガティブ面”に対してもつ影響力として示された。加えて，衰えとネガティブな心理状態との関連が示された。女性は低自尊感情と高情緒不安定性との関連の中で身体面・心理社会面の衰えを経験するのに対し，男性は衰えのみならず「志向の転換」をも経験するとの結果であった。McCrae & Costa（1999）は，Big Fiveなどのパーソナリティ特性は生理的基盤に則った個人の基本傾向とする。その見解に依拠すると，情緒不安定性は老いの経験を規定すると見なしうる。一方，自尊感情は老いた自己に対する評価感情と言える。ならば，上述した結果は，高い情緒不安定性を持つ女性は身体・心理社会面の衰えを自覚しやすく，衰えた自己に

よって自己評価を低下させると捉えられる。他方，男性では高い情緒不安定性を持つ場合に，衰えのみならず「志向の転換」を経験し，それらの経験によって自己評価を低下させると捉えられる。ここから，男性における「志向の転換」の経験は，衰えと関連して“余儀なくされる”“強いられる”という形態を持つ，ある種の挫折として経験する自己変容と想像される。

「志向の転換」と心理的要因の関連をより明確化するのが第3次元の結果であった。男性では「志向の転換」の経験は情緒不安定性の上昇と関連するのに対して，女性では自尊感情の上昇と関連していた。男性の第3次元の結果は第2次元とほぼ同様だが，女性の場合，「志向の転換」は衰えとは独立して経験され，その経験が自己評価を上げることにつながると示唆された。中高年期成人の自己概念に関して，上瀬（1999）も非常に類似した性差を見出している。彼女によると，中高年期の男性は自己に関心を向けにくく，関心が喚起されるのは不適応状態にある場合に限定されやすい。本研究も同様の結果と読み取れる。しかし，この様相を単に男性の心理的特徴とせず，社会文化的背景も考慮する必要があると思われる。現代日本において，成人男性の役割に対する社会規範はまだまだ強い。男性が一旦職に就き，結婚し，家計を担い始めて後，自己の状況を大幅に変えることは難しい。また，そのような大きな転換が生じうるケースとしてはリストラや離婚などが考えられる。ならば，男性が中高年期の自己変容をネガティブな状態と関連して捉えがちなのはありうることだろう。女性においても，上瀬（1999）の知見は本研究の結果 —— 老いに伴う自己変容によって自尊感情を高める —— と呼応するものである。彼女によると，女性は自己を可変的なものと捉え，中年期以降もポジティブな変化を志向する自己探索を続けていく。ここから，中高年期の女性には，老いを含むさまざまな経験を自己との関連から捉え，ポジティブに意味づけていく心理過程が存在すると示唆される。

以上のように，主観的老いの経験がその領域によって異なる要因と関連することが見出される中，先行研究で効果が指摘されてきた社会文化的要因（経済面を除く）は老いに対して意味ある寄与を示さなかった。その最たる理由は分析上の操作であろう。本研究では，予め社会規範や資源の差の影響を受けやすい性（Helson, 1997）を統制した上で，従来は分散分析の水準とされることが多かった社会文化的要因を数量化し，量的変数と同列に扱った。加えて年齢を1順序変数として投入した。この一連の操作により，社会文化的要因の効果は年齢に吸収されたものと考えられる。この想定は，社会文化的要因が有意味な指標をもちえたのが，年齢を中心とする関連から構成された第1次元であったこと，その内容が年齢コホートの差異を記述するものであったことから首肯されるのみならず，Bauer & McAdams（2004）の，成人発達において，年齢は他の要素を内包して発達と関連するとの示唆によっても支持されよう。今後，年齢を単純な内的要因として不用意に扱うことは避け，社会文化的要因の影響を考慮しつつ使用・解釈すべきと思われる。他方，概念上の限界として，老いが主観的な経験として概念化されているために，その類似性から心理的要因の影響が拡大された可能性は否定できない[5)]。対して，中高年成人の誰しもが経験する軽微で多面的な老いは，その普遍的性質ゆえに社会的状況や教育歴などによる影響を受けにくかったという仮定も成立しうるであろう。ここから，主観的老いの経験は，その主観的性質から心理的要因の影響を受けやすいという限界を有しつつも，中高年期の発達における普遍的側面を代表する変数として研究上の有用性が期待される。むろん，これらは本研究の検討結果のみで断じられるべきではない。同定に向けての今後の精査が求められる。

主観的老いの経験の年齢差

老い4領域における年齢差　本検討の最初の知見は，老いが40代以降顕著になる経験である点が確認されたことであろう（Whitbourne, 2001も同様の指摘）。また，領域ごとに年齢差の様相は異なっていた。「身体の不調」は，唯一男女で同じ差の傾向を示し，経験の程度差はあるが，身体の衰えをめぐる発達的プロセスは男女で類似していると推測された。同じ衰えでも「心理社会面の減退」は男女で異なる差の様相を示した。女性の「心理社会面の減退」は，中年期内では漸進的に増加し老年前期は横ばいであった。男性は，40代から50代すなわち中年前期から後期にかけての最も社会的責任が重く多忙な時期には，心理社会面の衰えの経験は比較的不変であり，老年前期に至る際にそれ以前よりも強く経験すると示唆された。この相違は双方の“社会的時計”（Helson, 1997）の様相に由来すると思われる。すなわち，男性が職業に関するライフイベントのみに「社会的時計」が規定される傾向をもつ（廣田，2003）のに対し，女性では子育ての始まりと終わり，孫の誕生（祖母となること），老親の介護など，家庭内の，また家族を介しての家庭外の役割や関係性の変化が複層的に体験されていく（難波，2000）ことが背景として考えられる。より具体的な関係性に焦点化すると，男性は老年前期に至り，退職後数年を経る中で“引退者”として世間や若い世代とのずれを経験すると解釈される。一方，女性は，中年後期に子の独立という転換点を迎える。それを機に，時間的・

5）フォローアップで行われた心理的要因を投入しない（年齢・社会文化的要因と老い）同分析では，先行研究に類似する社会文化的要因の有意味な効果が確認されている。よって，老いが社会文化的要因の影響を受けないというよりは，心理的要因が社会文化的要因を超える影響力をもっていたとの理解が妥当であろうと考えられる。

経済的余裕の増加と並行して関係性を再構築し，老年前期ではそれを継続しているものと理解される。老いのポジティブ面である「余裕と成熟」は，50代の坂を越えたところで大きく上昇するという点が男女に共通していた。経済的余裕の増加，子どもを独立させたことや退職を前にしての時間的余裕，またその充実感などが，50代以降に経験されることを示す内容である。「志向の転換」は，30代以降に上昇するという点では他の老いと同様であるが，その後の年齢群間の得点差がほとんどなかった。よって，加齢よりも個人の内的要因との関連を示す（目的1の結果・考察も同様）老いの領域と考えられる。

以上のように，30代であるプレ中年期はそれ以降と異なる発達的な段階である一方，“ポスト中年期”と想定した老年前期は，概ね中年前期・後期との連続性を有することが示唆された。したがって，主観的な老いの経験は，40代から70代後半に至る中高年期の発達的特徴を顕す生涯的過程と見なすことができよう。

老い4領域間の関連における年齢差　老いの下位領域間の相関係数を概観したところ，衰え2側面間の関連，および衰えと「志向の転換」との有意味な関連が見出された。佐藤（1999）は，エイジングプロセスとは機能的な低下があるからこその発達と言う。英知（Baltes & Baltes, 1990）も認知機能の低下という制約を補償するものとして出現する。本研究の結果もこれらの知見と軌を一にして，「志向の転換」という自己変容が，衰えという制約との関連の中で生じることを明らかにした。ここから，中高年期における衰えはネガティブな脅威刺激としての面に加え，補償的な自己変容を促す発達的機能をもちうると言えよう。

老い4領域間の関連における年齢差の検討からは，中年後期と「志向の転換」をめぐる有意差が見出された。衰えについては，男性では心理社会面，女性では身体面と「志向の転換」との関連において，中年後期と他の時期との有意差が生じた。男性では，中年後期はそれ以前の2期よりも有意に高い相関を示していた。退職に伴い，職業中心であった社会的場の構造を改めていくにあたっての端緒である中年後期が，自己変容を迫られる時期として焦点化されたものと思われる。一方，女性では，中年後期はプレ中年期，老年前期よりも有意に低い相関を示した。これは，中年期的変化への慣れが生じる50～60代前半（Heckhausen, 2001）に比して，30代および70代前後という時期は，加齢による身体の変調に伴って自己変容を経験しがちであるためと理解される。プレ中年期と老年前期は異なるタイプの衰え ── 30代は皺，体型など外見上の変調，70代前半は運動・身体機能の不調の深刻化 ── の端緒にある。その顕著な心理的影響の下（Whitbourne, 2001），老いの様相に見合う新たな自己のあり方についての模索が喚起されていると思われる。

注目すべきは，「志向の転換」と「余裕と成熟」との間には，男女とも中年後期のみにカットオフポイントを超える相関が示された点である。「志向の転換」それ自身は加齢に伴う自己変容というニュートラルな経験である。それが「余裕と成熟」という老いのポジティブ面との関連の中で経験される場合，そこでの自己変容は肯定的なものとして意味づけられるであろう。具体的には，退職を前にしての，また，子を育て上げての充実感や達成感（難波，2000；清水，2004；若本，2004）とともに加齢に伴う自己変容を自覚することを指すと思われる。これは，先行研究における中年後期は中年前期と比べ比較的平穏な時期であるとの知見（e.g., Heckhausen, 2001；若本・無藤，2004）とも通じるもので，中年後期が，中高年期発達において独自の意義をもつことを示唆する。さらに，男性の場合，中年前期および老年前期における「余裕と成熟」と「志向の転換」との相関は，中年後期に比べ有意に低い。元来，男性は，「志向の転換」を情緒不安定性との関連の中で経験しやすいことも示されている。ならば，加齢に伴う自己変容をポジティブな意味づけの中で経験できるのは，退職をめぐるこの機会に限られるかもしれない。したがって，男性にとって，中年後期は，中高年期およびその後の発達と適応を規定しうる時期と位置づけられよう。

総合的考察

本研究では，成人誰もが経験する軽微な老いの発達的特徴を検討してきた。内的・外的要因との関連による老いの性質の検討においては，老いのポジティブ面は加齢と，衰えは内的・外的要因のネガティブな状況と関連を示すなど，多面的な老いの領域は各々独立した性質を有し，異なる構造と過程をもつことが示唆された。老いの年齢差の検討からは，老いが中高年期を通しての生涯的な発達過程であること，男女では各々の社会文化的状況に対応して異なる発達過程をもつことが示唆された。

老いの4領域のうち，「志向の転換」は老いをめぐる新たな知見を提出した。「志向の転換」は“方向転換reversal”という対処方略と類似している。制約を機に見方を変えるこの方略は，老化などの不可避であり受け入れざるを得ない状況において有効とされている（Diehl et al., 1996）。よって，「志向の転換」に見られる，老いていく中高年期の心身の状態に見合う認知や行動様式を獲得していく自己変容の過程は，中高年期の発達の中核を担うと考えられる。また，「志向の転換」が老いのポジティブ面との関連の中で経験されるのは，男性の場合，中年後期のみであった。ここから，中年後期は，とくに男性の中高年期の発達において重要な時期と示唆された。40代すなわち中年前期は危機crisisの萌芽がもつリスクが特徴とされる時期である（e.g., Levinson,

1978)。それに対し，50～65歳の中年後期は，老いのポジティブ面の経験を鍵とする自己変容が発達の焦点になると考えられる。中年前期と後期の違いに関する研究は乏しい。中高年期を通しての発達をより明確化していくために，継続的な知見の蓄積が求められる。

さらに，「志向の転換」は，老いをめぐる心理過程への注目を促した。男性では，社会文化的要請を背景に，情緒の不安定さによって老いに伴う自己変容を経験するのに対して，女性では，身体面の衰えなどが同時に経験されながらも，自己変容を機にポジティブな自己評価が導かれていた。この男女の相違は，女性が中高年期を通して自己へ関心を払い続けるのに対して，男性は自己に対する関心が低いという点に由来するものと思われる。それゆえ，老いによる変化と向き合い，「折り合う」(直井，1999) 過程が自己評価を高めうるにもかかわらず，男性ではこの心理過程が機能しにくいのではないかと推測される。「志向の転換」の中高年期の発達における重要性を鑑みるに，その機能が不全な場合は発達的リスクが想定される。これらの仮説と課題に対しては，老いをめぐる心理過程についての体系的なモデルを作成し検証する必要がある。とくに，本研究の知見は横断モデルによる限界をもつため，縦断モデルを適用しての追加検討が必須である。

文　献

Baltes, P. B. (1987). Theoretical proposition of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, **23**, 611-626.

Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (Eds.) (1990). *Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences*. New York: Cambridge University Press.

Baltes, P. B., & Brim, O. G. Jr. (Eds.) (1978-1984). *Life-Span Development and Behavior* (Vols. 1-6). New York: Academic Press.

Bauer, J. J., & McAdams, D. P. (2004). Growth goals, maturity, and well-being. *Developmental Psychology*, **40**, 114-127.

Carstensen, L. L., & Freund, A. M. (1994). Commentary: The resilience of the aging self. *Developmental Review*, **14**, 81-92.

Carstensen, L. L., Pasupathi, M., Mayr, U., & Nesselroade, J. R. (2000). Emotional experience in everyday life across the adult life span. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 644-655.

Diehl, M., Coyle, N., & Labouvie-Vief, G. (1996). Age and sex differences in strategies of coping and defense across the life-span. *Psychology and Aging*, **11**, 127-139.

Gilligan, C. (1986). もうひとつの声（岩男寿美子，監訳）．東京：川島書店．(Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Boston: Harvard University Press.)

後藤佐多良．(1999)．老化制御研究の現状と展望．折茂　肇（編），*新老年学（第2版）*（pp.267-277）．東京：東京大学出版会．

Harris, L. A., & Dollinger, S. M. C. (2003). Individual differences in personality traits and anxiety about aging. *Personality and Individual Differences*, **34**, 187-194.

服部　環．(2002)．仮説をモデル化し検討する：構造方程式モデリング．渡部　洋（編），*心理統計の技法*（pp.151-166）．東京：福村出版．

Heckhausen, J. (2001). Adaptation and resilience in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development* (pp.345-394). New York: John Wiley & Sons, Inc.

Helson, R. (1997). The self in middle age. In M. E. Lachman, & J. B. James (Eds.), *Multiple paths of midlife development* (pp. 21-43). Chicago: The University of Chicago Press.

廣田靖子．(2003)．中年期男性の自己の捉えなおしの様相：年代とデモグラフィック要因に着目して．*日本教育心理学会第45回総会発表論文集*，10.

星野　命．(1970)．感情と心理と教育(1, 2)．*児童心理*，**24**，1264-1283，1445-1477．東京：金子書房．

石村貞夫．(2001)．*SPSSによるカテゴリカルデータ分析の手順*．東京：東京図書．

伊藤忠弘．(1998)．特性自尊心と自己防衛・高揚行動．*心理学評論*，**41**，57-72．

上瀬由美子．(1999)．中高年期における自己認識欲求．*心理学研究*，**70**，195-202．

Lachman, M. E., & Bertrand, R. M. (2001). Personality and the self in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development* (pp.279-309). New York: John Wiley & Sons, Inc.

Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. New York: The Sterling Lord Agency, Inc.

McCrae, R. R., & Costa, P. T. Jr. (1999). A five-factor theory of personality. In L. Pervin, & O. P. John (Eds.), *Handbook of personality* (2nd ed.)(pp.139-153). New York: Guilford Press.

Mroczek, D. K., & Kolarz, C. M. (1998). The effect of age on positive and negative affect: A developmental perspective on happiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1333-1349.

村上宣寛・村上千恵子．(1997)．主要5因子性格検査の尺度構成．*性格心理学研究*，**6**，29-39．

内閣府（編）．(2004)．*高齢社会白書平成16年版：暮らしと社会シリーズ*．東京：ぎょうせい．

難波淳子．(2000)．中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察：語られたライフヒストリーの分析から．*社会心理学研究*，**15**，164-177．

直井道子．(1999)．老化の社会学的アプローチ．折茂肇（編），*新老年学（第2版）*（pp.1315-1324）．東京：東京大学出版会．

Palmore, E. B. (1982). Predictors of the longevity difference: A 25-year follow up. *The Gerontologist*, **22**, 513-518.

佐藤眞一．(1999)．高齢期の知覚・認知機能．東　清和（編），*シリーズ高齢社会とエイジング：6　エイジングの心理学*（pp.1-30）．東京：早稲田大学出版部．

清水紀子．(2004)．中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ．*発達心理学研究*，**15**，52-64．

下仲順子．(1999)．老化の心理学的アプローチ．折茂肇（編），*新老年学（第2版）*（pp.1325-1340）．東京：東京大学出版会．

豊田秀樹．(1998)．*共分散構造分析（入門編）：構造方程式モデリング*．東京：朝倉書店．

若本純子．(2003)．老年前期における心理的適応と規定因：主観的老いの経験，主観的年齢，多次元的自己に注目して．*お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」平成14年度公募研究成果論文集*，お茶の水女子大学，東京，237-248．

若本純子．(2004)．TATプロトコルから見る中年後期男性の発達的様相：中年後期的テーマの体験のあり方と意味づけに注目して．*日本心理学会第68回大会発表論文集*，1113．

若本純子・無藤　隆．(2004)．中年期の多次元的自己概念における発達的特徴：自己に対する関心と評価の交互作用という観点から．*教育心理学研究*，**52**，382-391．

Whitbourne, S. K. (2001). The physical aging process in midlife: Interactions with psychological and sociocultual factors. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development* (pp.109-155). New York : John Wiley & Sons, Inc.

付記

本研究は，お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」平成14年度公募研究助成（調査2），および平成14年度ユニベール財団研究助成（調査3）を得て実施された。

本研究の実施に至る貴重な示唆をいただいた愛媛大学の橋本巌先生，調査2における共同研究者であるお茶の水女子大学大学院（現所属：東京都世田谷区教育委員会教育相談室）の矢吹真理氏のご助力に感謝いたします。また，多忙な中，調査にご協力いただいた皆さまに心よりお礼申し上げます。

Wakamoto, Junko (Ochanomizu University, Graduate School of Human Culture) & Muto, Takashi (Shiraume Gakuen College). *Subjective Experiences of Aging in Middle and Late Adulthood.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2006, Vol.17, No.1, 84-93.

This research examined the subjective experiences of 4 domains of aging, which consisted of physical and socio-psychological decline, "conversion of orientedness", and "leeway and maturation," with 2026 adults aged 30-75. Categorical canonical analysis revealed three interrelated dismensions: 1) aging and "leeway and maturation," 2) physical and socio-psychological decline along with negative psychological and economic states, and 3) "conversion of orientedness" and psychological factors. It was notable that Conversion of orientedness was related to an increase in emotional instability in men and an increase of self-esteem in women. The results of a MANOVA showed that aging as a developmental experience becomes recognizable from one's 40's. In addition, the four domains of aging were found to have independent psychological structures and processes. Relations between the four domains in the latter part of middle adulthood also differed from that found at other life stages in terms of correlations between Conversion of orientedness and other domains. Therefore, later-middle age appeared to have a developmental characteristic whereby Conversion of orientedness was significantly correlated with positive aspects of aging.

【Key Words】 Middle and late adulthood, Subjective experience of aging, Conversion of orientedness, Later middle-age, Adult development

2004. 12. 15 受稿，2005. 11. 14 受理